

首里城跡

—京の内跡発掘調査報告書(V)—

平成6年度調査の遺物編(2)

平成26(2014)年 3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

首里城跡は、500 余年に亘って琉球王国の王城として、沖縄の歴史・文化の中心的な核となって、個性豊かな沖縄の歴史と文化の礎を築き上げてきたグスクであると同時に沖縄独自の建築技術や石積みなどの土木技術の粹を集めて完成された県内最大規模のグスクでありましたが、昭和 20 年の太平洋戦争末期に起きた沖縄戦による戦没で旧国宝(昭和 8 年 1 月 23 日指定)であった首里城正殿、歓会門、瑞泉門、白銀門などの多くの建造物や城壁の石積みはことごとく破壊され、消失しました。戦災で灰燼に帰した首里城跡には、琉球大学が昭和 25 年に創設されますが、当時の琉球政府文化財保護委員会によって昭和 30 年 11 月 29 日付で首里城跡は、史跡に指定されます。その後、本土復帰の昭和 47 年 5 月 15 日に国指定の史跡として指定されています。

県民の首里城復元に対する熱い期待と要請により昭和 60 年度から沖縄開発庁(現:内閣府)、建設省(現:国土交通省)、文部省(現:文部科学省)の三機関からの助言や補助を得ながら、沖縄県によって首里城跡の復元整備事業が開始され古都首里城の歴史的風土にふさわしい区域として位置付け、今日まで継続的に内閣府沖縄総合事務局沖縄記念公園事務所からの受託による遺構確認調査が進められています。

首里城跡の復元整備の中で、平成 4 年度には首里城正殿の復元と北殿、南殿、奉神門などの施設が再建され、在りし日の姿(1712 年に再建された首里城)を現在に写し出す形で首里城公園として一部公開されています。その後、平成 11 年に白銀門、平成 12 年が系図座・用物座及び二階御殿、平成 15 年には京の内、平成 19 年が書院・鎖之間などの新たな建造物群が復元されました。特に書院・鎖之間については、平成 21 年 7 月 23 日付で国の名勝として指定されています。その間、平成 12 年 12 月 2 日には首里城跡を含む 9 資産がユネスコ世界遺産条約に基づき「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として、「世界遺産」(文化遺産)に登録されています。

本書に収録された首里城の「京の内」と称された区域は、正殿、北殿、南殿、奉神門の存在する政治的建造物空間が集中する区域とは離れた内郭の南北地域にあります。京の内には、文献や伝承に拠ると首里城築城以前に古いグスクがあつた場所としても考えられています。琉球王国時代は、聖域的空间として国王即位の儀式をはじめ琉球王国の重要な儀式や祭祀がおこなわれた空間として位置付けられています。

このような中で、「京の内」跡の復元整備事業に必要となる京の内の位置確認と規模、そして、遺構の変遷などを解明する目的で平成 6 年度から平成 9 年度まで継続的に発掘調査が沖縄県教育委員会によって実施されました。特に平成 6 年度の調査では、1459 年の火災で消失した倉庫跡が発見され、当時の琉球王国の海外交易によって将来された中国をはじめとする東南アジア(タイ、ベトナム)、本土を含めた各地域の陶磁器 1,162 個体と、多くの金属製品やガラス製品が確認されました。これらの陶磁器類は、平成 12 年 6 月 27 日付で国の重要文化財(考古資料の部)「沖縄県首里城の内跡出土陶磁器 518 点」として戦前・戦後をとおして、沖縄県ではじめて指定されました。

さて、今回の報告書に掲載した内容は、平成 22 年度に報告した平成 6 年度調査の遺構編に続くものであります。平成 6 年度の調査で検出された各種の遺構に伴って出土した陶磁器などから遺構の構築された時期を時期毎に整理し、第Ⅰ期(14 世紀前半~14 世紀後半)から第Ⅵ期(19 世紀終末~昭和 58 年)までの 6 時期に時間軸を設定して報告をおこないます。平成 23 年度は、第Ⅰ期から第Ⅲ期(15 世紀中頃)までの遺構に伴う出土品について報告をおこないました。平成 25 年度は第Ⅳ期(15 世紀後半~16 世紀初頭)~第Ⅴ期(16 世紀前半~19 世紀後半)までの二時期について報告をします。陶磁器などの出土品は、構築された遺構の時代を相対的に決定する事のできる重要な資料であると同時に祭祀空間であった京の内の性格を理解する上で欠くことのできない中国華南彩釉陶器や青磁茶托などが出土しています。本書が首里城跡の城郭研究や考古学、民俗学、歴史の各研究分野に寄与することができれば幸いに存じます。

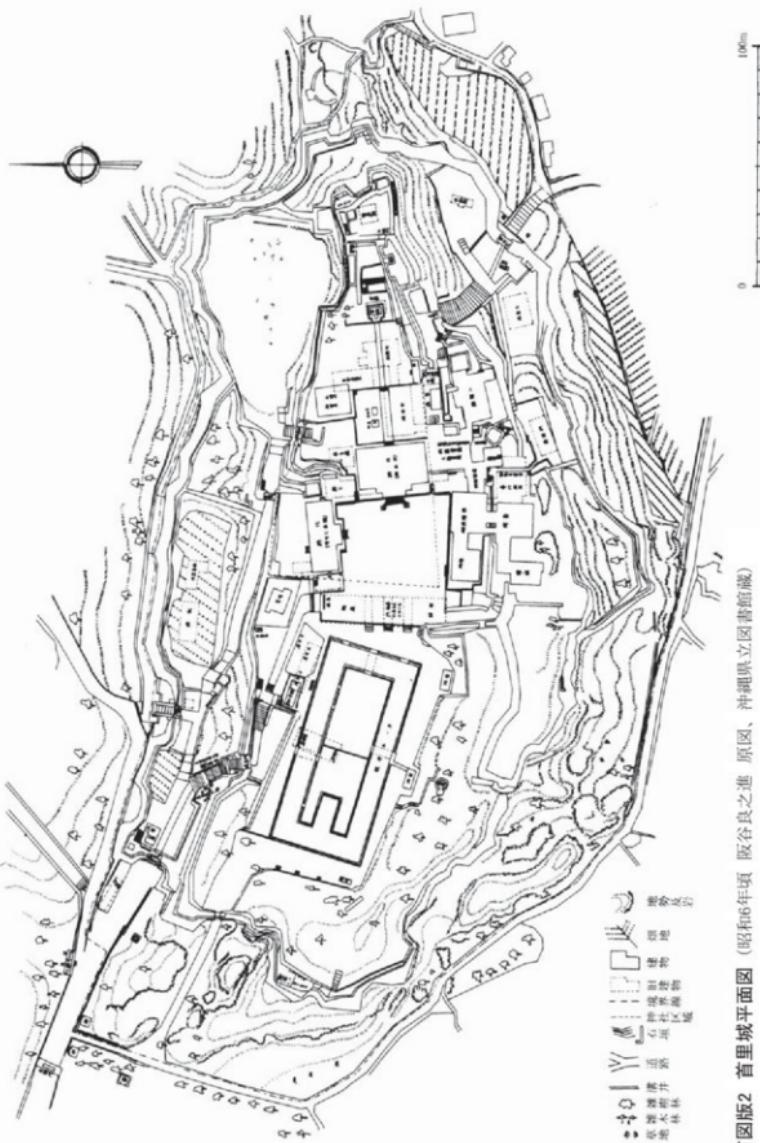
末尾ながら内閣府沖縄総合事務局沖縄記念公園事務所首里出張所をはじめとする関係機関、並びに発掘調査や遺構の解釈および出土品の分析指導にご協力をいただきました関係各位には、深く敬意を表すとともに心より厚く御礼申し上げます。

平成 26 年 3 月

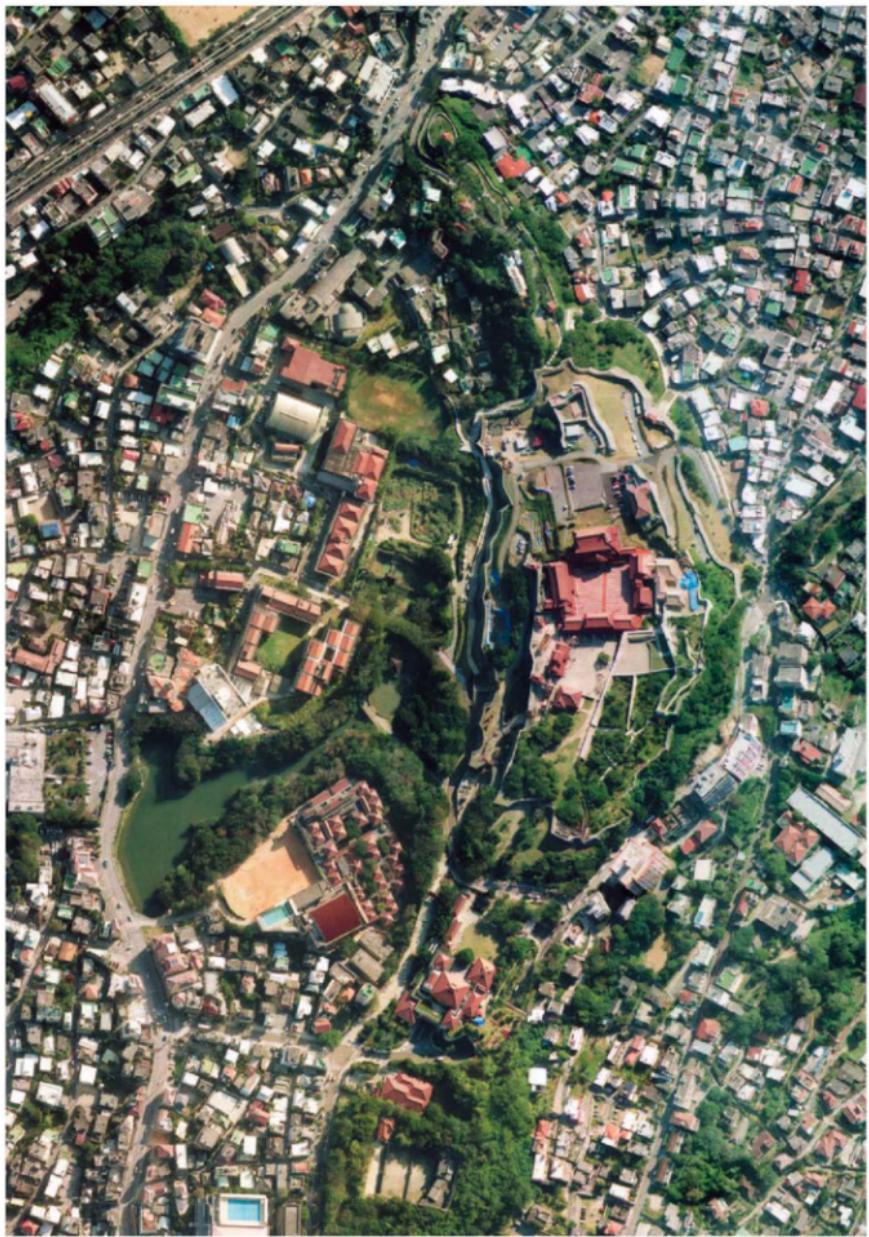
沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 下地 英輝



卷首図版1 1945年4月2日 米軍撮影（CV20-103-63）の首里城周辺
(沖縄県教育委員会 文化財課 史料編集班 所蔵)

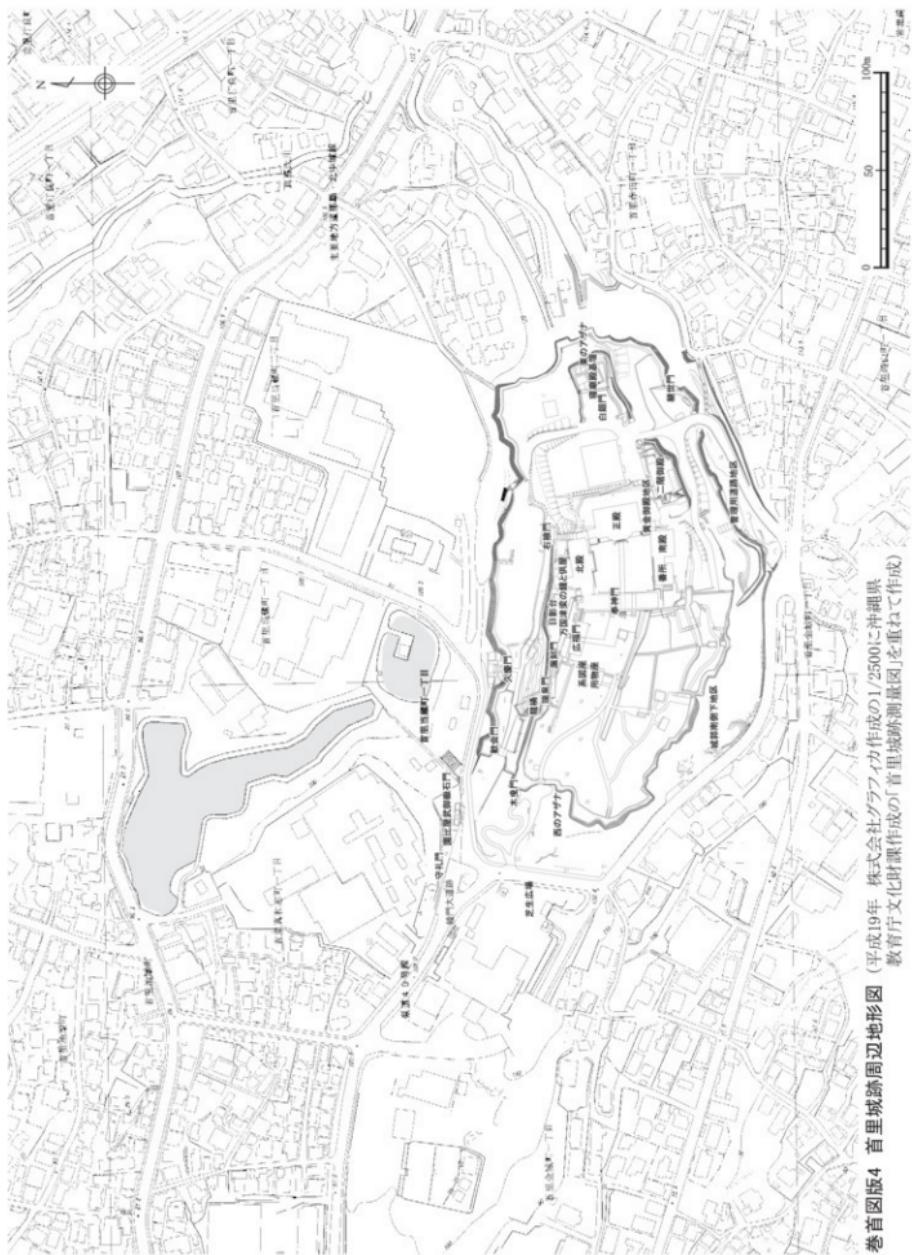


卷首圖版2 首里城平面圖 (昭和6年頃 佐谷良之進 原図、沖縄県立図書館蔵)



卷首図版3 2009年 首里城跡の航空写真
（「首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(III)－」2011年3月より複写掲載）

卷首図版4 首里城跡周辺地形図
(平成19年 株式会社グラフィカ作成の「首里城跡測量図」を重ねて作成)
教育厅文化財課作成の1/2500に沖縄県





巻首図版5 上段左：石積みSA04出土の青磁雷文帯碗

上段右：石積みSA14出土の茶托（上）・石積みSA04出土の茶托（下）

下段左：石積みSA27出土の「顧氏」名入り青磁皿、下段右：石敷きSS03-B出土の凝灰岩製砥石



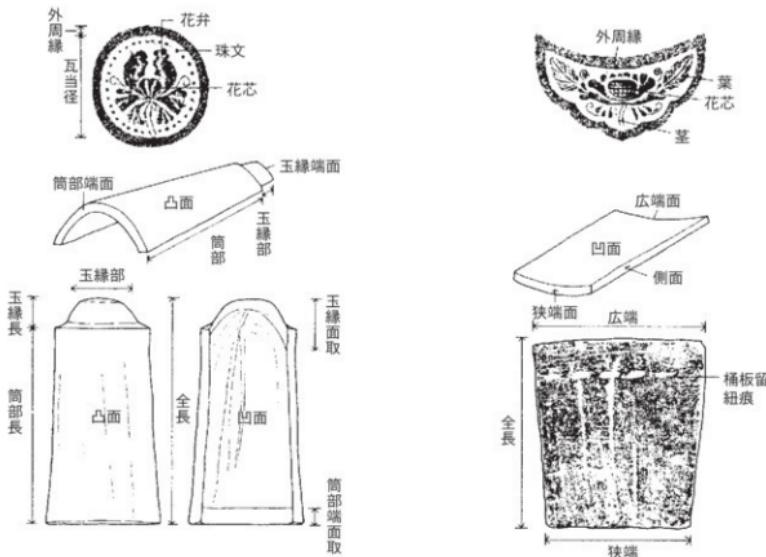
卷首図版6 上段左：石積みSA14出土の骨鏃、上段右：石積みSA27出土の青銅製切羽
中 段：石敷きSS03-B出土の「皇宋通寶」の鋳型の陰陽反転(左：反転前、右：反転後)
下 段：石積みSA27出土の二次的火熱を受けて溶解した鉄の塊

例　　言

- 1 本事業は、国営首里城公園整備事業に伴うもので内閣府　沖縄総合事務局　国営沖縄記念公園事務所からの委託（受託）を受けて沖縄県教育委員会が実施したものである。なお、発掘調査事業の総括及び業務調整等は所管課の沖縄県教育庁文化財課が行い、発掘調査及び資料整理等については沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 2 本報告書は、平成 6 年度に実施した国営首里城公園（約 4 ha）の京の内北側地区（調査面積約 2,000 m²）で検出された遺構を整理して、平成 22 年度に「首里城跡 - 京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）－ 平成 6 年度調査の遺構編」を、平成 23 年度には「首里城跡 - 京の内跡発掘調査報告書（Ⅳ）－ 平成 6 年度調査の遺物編（1）」を刊行した。今回の報告は、平成 22 年度報告の遺構編で記した第 I 期から第 VI 期までの 6 時期の内、平成 23 年度報告（第 I 期～第 III 期までの出土品）に続く第 IV 期から第 V 期までの出土品について報告をおこなっている。なお、報告した出土品と遺構との時代関係について整合性は譲っていない。従って今後の出土品の報告によっては、遺構の時代観において変更もあり得る。
- 3 本報告書で掲載した航空写真は、白黒写真が沖縄県教育委員会文化財課史料編集室所蔵の 1945 年 4 月 2 日米軍撮影（CV20-103-63）の航空写真を掲載した。カラー写真は、株式会社グラフィカの 2009 年撮影の航空写真を掲載した。また、本書に掲載した地図は、那霸市都市計画部都市計画課発行の 1/10,000 の地形図を使用した。首里城周辺地形図については、平成 19 年 株式会社グラフィカ作成の 1/2500 に、平成 16 年度沖縄県教育庁文化課作成の「首里城跡測量図」と沖縄県企画部情報政策課委託作成の地形図を重ねて作成した。
- 4 報告書抄録に掲載した座標系は、地形測量及び写真測量業務で委託した成果をインターネットで公開（<http://Vldb.gsi.jp/sokuchi/tky2jgd/>）されている Web 版 TKY2JGD を利用した。日本測地系から世界測地系に変換した。入力方法を例示すると、入力値は平面直角座標を選択し、日本測地系「15 系」を選択後に「X 座標 : 23598.267m、Y 座標 : 21971.191m」を入力後に変換方法を「世界測地系→日本測地系」を選択した。計算結果は「北緯 : 26° 12' 32.15599''、東経 : 127° 43' 18.24229''」が求められたものを記した。
- 5 本報告書は、金城亀信を中心に、瑞慶覧尚美・伊藤恵美利・赤嶺雅子ほかの協力を得て、編集を行った。なお、発掘調査・資料整理などの調査体制については、第 I 章の第 3 節に記してある。
- 6 本報告書の原稿は、すべて金城亀信が執筆し、出土遺物の観察には 25 倍のルーペを使用した。その他、実測図および文様表現等の修正点検も金城がおこなった。
- 7 本報告書に掲載された出土遺物の撮影及び現像・焼付けは矢舟章浩・伊佐えりな・島袋久美子が担当した。また、軟 X 線写真撮影と現像は、知念隆博主任専門員がおこなった。
- 8 出土品の名称及び計測部位などは、凡例に記したとおりであるが表現上、やむを得ない場合は別の名称や表現を使用した。
- 9 発掘調査で出土した遺物及び実測図、写真等の記録は、すべて沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

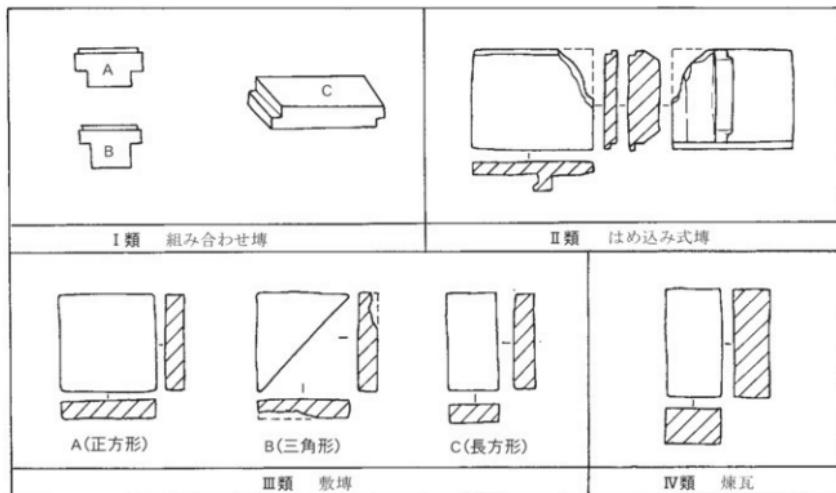
凡 例

- 1 屋瓦の名称は、『渡地村跡－臨海道路那覇 1 号線整備に伴う緊急発掘調査報告書－』（沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第46集 平成19年7月発行）より複写して掲載した。その他、埠瓦の分類に際しては、『湧田古窯跡（I）－県庁舎行政棟建設に係る発掘調査－』（沖縄県教育委員会 文化財調査報告書 第111集 平成5年3月発行）より分類の基準となった実測図を複写して掲載した。
- 2 黒釉天目茶碗の分類に際しては、森本朝子の「博多遺跡群出土の天目」『唐物天目－福建省建窑出土天目と日本伝世の天目－』（茶道資料館 1994年）より城間 肇が作成した『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（I）－』（沖縄県教育委員会 文化財調査報告書 第132集 平成10年3月発行）を複写し、分類のI類～IX類までの年代観は金城亀信が追記した。
- 3 金属製品の分類、名称、計測箇所については、下記の文献より引用並びに参考にして図面を作成した。
 - ① 金属製品の分類は、小川 望の「工具類1 大工道具」、「工具類2 接合具」、「工具類3 その他」『図説 江戸考古学研究事典』（江戸遺跡研究会 柏書房株式会社 2001年4月発行）を参考にして、分類基準表を金城亀信が作成し、『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（II）－』（沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第49集 平成21年3月）に掲載した表を利用した。
 - ② 札の各部の名称は、上原 静氏が作成した『勝連城跡－北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査－』（勝連町教育委員会 勝連町の文化財 第11集 1990年3月発行）より複写して掲載した。
 - ③ 銭貨の各部計測点は、永井久美男編『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』（兵庫埋蔵銭調査会 株式会社ぎょううせい 関西支店 1994年10月発行）を参考にして、『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（II）－』（沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第49集 平成21年3月）収録の「永樂通寶（中国明朝：初鋤造年 1408年）」を掲載し、これに計測部位を表示した。
 - ④ 銭貨の各部名称については、上記した③の「永樂通寶」に陸原 保 編集『東洋古銭価格図譜例言（和漢泉集）』『改訂版 東洋古銭価格図譜』（1975年5月発行）掲載の例言より使用頻度の高い用語のみを掲載し使用した。
 - ⑤ 兜および立物の各部名称と大鎧の各部名称については、金城亀信が作図した『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（II）－』（沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第49集 平成21年3月）を再度掲載した。
 - ⑥ 脣の名称と計測部位は、西銘 章・片桐千亞紀・青山奈緒ほかの『与那国島 嘉田地区古墓群－嘉田地区園場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－』（沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第21集 平成16年3月発行）に掲載して使用した。
 - ⑦ 煙管の部位名称は、西銘 章の『ヤッチのガマ カンジン原古墓群－県営かんがい排水事業（カンジン地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』（沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第6集 平成13年3月発行）に掲載の図を加筆、修正して使用した。名称については、たばこと塩の博物館『キセル』（1988年発行）を参考にした。
- 4 ガラス玉の分類概念および計測は、『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（II）－』（沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第49集 平成21年3月）に掲載したものを使用した。
- 5 陶磁器の碗の部位名称は、京の内跡出土品の中から「青磁雷文帶碗（14世紀後半～15世紀前半頃）」を図化して、名称を当て嵌めた。
- 6 図化を省略した青磁碗と盤の高台資料については、本報告書に掲載した実測図を使用して模式図を作成し、青磁碗は高台の横断面の形状から a～hまでの8種類に分けて集計をおこなった。同様に青磁盤（大皿）についても高台形状から a・b の二種類に大別して集計をおこなった。
- 7 タイ産土器（半練）の蓋の分類については、『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（I）－』（沖縄県教育委員会 文化財調査報告書 第132集 平成10年3月発行）のP64 第11表に掲載した I類～VIII類までの8分類に準じて、今回確認された7種類（I類～VII類）のみの模式図を作成して掲載した。
- 8 明代華南三彩鶴型水注のカラー写真は、平成元（1989）年に金城亀信撮影のカラープリントより複写した。

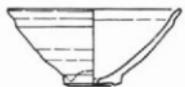
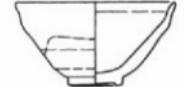
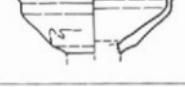
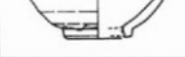


1-a 屋瓦の各部名称

『波地村跡—臨海道路那覇1号線整備に伴う緊急発掘調査報告書一』(沖縄県立埋蔵文化財センター 平成19年7月)より複写掲載。



1-b 埴の分類: 埴瓦の厚さは、a (厚さ: 2.5~3.9cm)、b (厚さ: 4.0~6.0cm) の2種類に分けて分類した。
『勝田古窯跡(1)—県庁舎行政棟建設に係る発掘調査一』(沖縄県教育委員会 平成5年3月)より分類のため、実測図を複写掲載。

分類	器 型	特 徴	実測図（縮小1／3）
I類	断面逆三角形の平茶碗 (推定期12c前半)	底から口に向かってほぼ直線的に大きく開く平茶碗である。大きく次の三つに分けられる。I-① 胎土は黒灰色に白砂を含み、黒色の厚い釉。I-② 胎土は灰白色、釉は黒褐色を呈す。I-③ 底径は大きく、白覆輪である。	
II類	外反口縁の碗 (推定期12c前半)	I類同様、底から口に向かってほぼ直線的に開くが、全体はより深目の器形で、口だけ外反して開く。	
III類	断面逆三角形の深碗 (推定期12c前半)	口縁は外反するが、一度口縁下で押さえ、目立たない程の浅いくぼみを作るいわゆる建盞なりの天目茶碗に特有のひねった口縁の萌芽と言える。口径と器高の比が3：2前後、5：2前後のものとでIII-①、②に分けられる。	
IV類	いわゆる「建盞」なりの茶碗 (推定期12c後半～13c前半)	高台脇を深く斜めに削り、そこから角度を変えて直線的に開き、口縁下でもう一度角度を変えて立ち上がる。いわゆる「建盞」なりの形と言えよう。タイプ的に建盞に近いものIV-①、やや違うものIV-②とに大別した。	
V類	誇張的に表現された天目茶碗 (推定期13c)	身は大きく開き、口縁下で角度を変えて立ち上がる。内底をくぼめ、内面が曲線的に複雑になる。これは典型的な建盞の各部を誇張的に表現した天目茶碗である。小ぶりのものと、大ぶりのものとでV-①、②に分けられる。	
VI類	口縁のくびれの強い茶碗 (推定期13c)	V類より、口縁のくびれが強く誇張されたタイプの天目茶碗である。浅い碗とやや深めの碗とでVI-①、②に分けられる。	
VII類	口の内湾する平茶碗 (推定期13c後半～14c初)	体は大きく開き、半ばで曲線的に立ち上がり内湾気味に終わる。比較的浅い碗である。底部は上げ底であるが、輪高台らしく作るものもある。	
VIII類	高台脇を水平に削る深目の碗 (推定期14c終末～15c)	高台脇を水平に切る茶碗は広い底からほぼ直線的に開き、口縁で軽く角度を変えて立つ。口縁のくびれは弱い。外底は浅く上げ底風に削る。	
IX類	丸碗 (推定期14c後半～15c)	底部から口縁に丸みをもって立ち上がり、そのまま直口で終わる。	

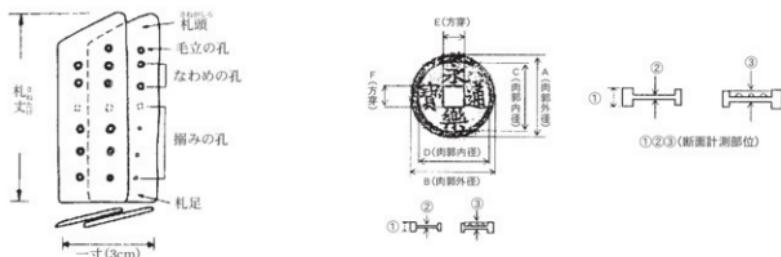
2 黒釉天目茶碗の分類

『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(1)－』(沖縄県教育委員会平成10年3月発行)より複写掲載。



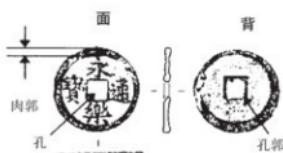
3-① 金属製品の分類基準表

〔図説 江戸考古学研究事典〕(江戸遺跡研究会 柏書房株式会社 2001年4月発行)を参考にして、分類基準表を作成した。
当該表は「首里城跡一京の内跡発掘調査報告書(II)-」(沖縄県立埋蔵文化財センター 平成21年3月)に掲載。



3-② 札の各部の名称

『勝連城跡一北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査』(勝連町教育委員会 1990年3月発行)上原 静氏作成の原図を複写掲載。



3-③ 銭貨の各部計測点(左:平面、右:断面拡大図)

『中世の出土銭・出土銭の調査と分類』(兵庫埋蔵文化財調査会 株式会社ぎょうせい 1994年10月発行)を参考にして、「首里城跡一京の内跡発掘調査報告書(II)-」(沖縄県立埋蔵文化財センター 平成21年3月)収録の「永楽通寶(中国明朝:初鋳造年1408年)」の拓影図に計測部位を表示。

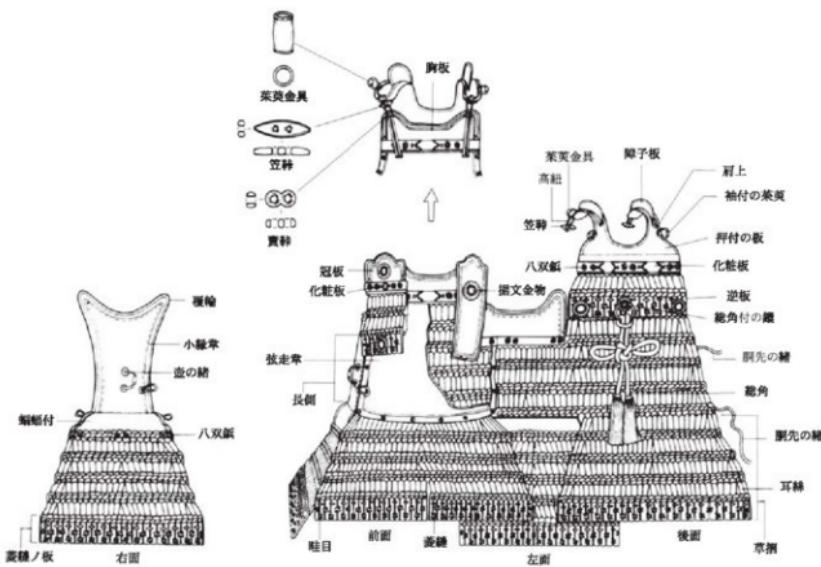
面	裏
孔	穴のこと。穿、好とも言う。四角い穴は「方穿」とも言う。
肉郭	穴の縁のこと。内郭、周郭とも言う。
背	ナカガタ。外の縁、輪郭、周郭とも言う。外縁の縁幅が細いものを「細縁」とい、
孔郭	逆に縁の幅のないものを「調縁」と言う。
	郭に肉(四角の穴の縁)がないものを「無輪郭」と言う。

3-④ 銭貨の各部名称

『首里城跡一京の内跡発掘調査報告書(II)-』(沖縄県立埋蔵文化財センター 平成21年3月)掲載の「永楽通寶(明:初鋳造年1408年)」の拓影図に「東洋古銭価格図譜例言(和漢泉鏡)」(改訂版 東洋古銭価格図譜)(1975年5月発行)例言より銭貨の用語を掲載。

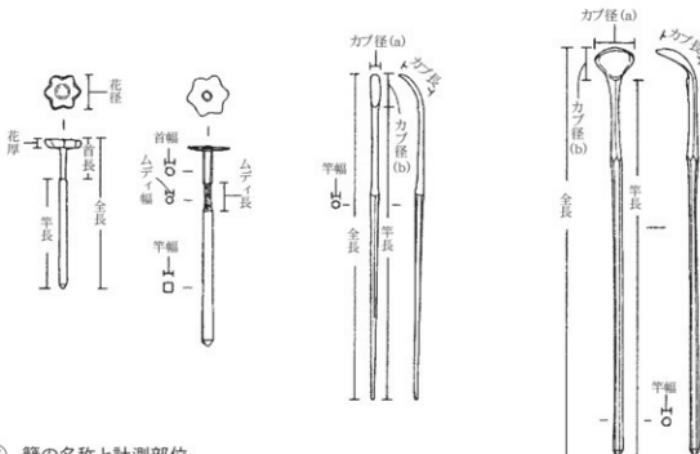


3-⑤a 兜および立物の各部名称



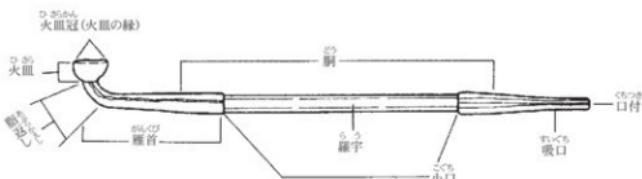
3-⑤b 大鎧の各部名称

3-⑤a 兜および立物の各部名称、3-⑤b 大鎧の各部名称については、『首里城跡-京の内跡発掘調査報告書(II)-』
(沖縄県立埋蔵文化財センター 平成21年3月)の掲載図を複写掲載。



3-⑥ 筆の名称と計測部位

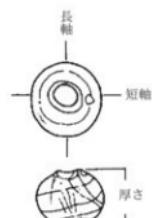
『与那国島 嘉田地区古墓群-嘉田地区は場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書-』
(沖縄県立埋蔵文化財センター 平成16年3月)の掲載図を複写掲載。



3-⑦ 煙管の部位名称

『ヤッチのガマ カンジン原古墓群-臥堂かんがい排水事業(カンジン地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-』
(沖縄県立埋蔵文化財センター 平成13年3月)の掲載図に加筆修正をおこなって作成した。名称については、たばこと塩の博物館「キセル」(1988年発行)を参考にした。

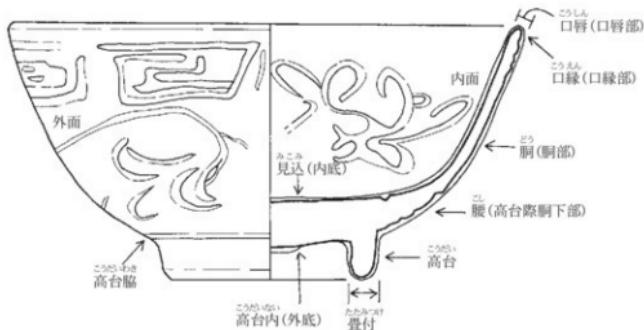
種類	形狀	特徴など
I 類	○	側面観が正円、若しくは円形となるもの
II 類	□	側面観が正方形となるもの若しくは扁橢円形のもの
III 類	△	側面観が隅丸三角形、若しくはこれに近似するもの
IV 類	■	側面観が成形時に崩れて歪な形状となるもの
V 類	—	火熱を受け崩壊・溶解したガラス玉の塊で不定形となるもの



4-a ガラス玉の分類概念

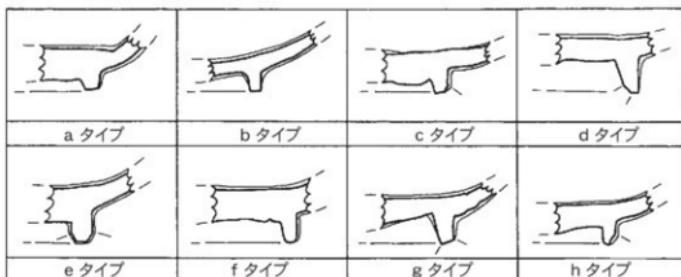
4-a ガラス玉の分類概念・4-b ガラス玉の計測は、『首里城跡-京の内跡
発掘調査報告書(11)-』(沖縄県立埋蔵文化財センター平成21年3月)に掲載
された分類概念表と図を使用。

4-b ガラス玉の計測



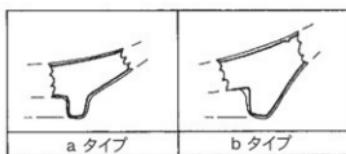
5 碗の部位名称

京の内跡出土品の中から「青磁雷文帶碗(14世紀後半～15世紀前半頃)」を図化して、名称を当て嵌めた。
『首里城跡-京の内跡発掘調査報告書(IV)-』(沖縄県立埋蔵文化財センター 平成24年3月)の掲載図を複写掲載。



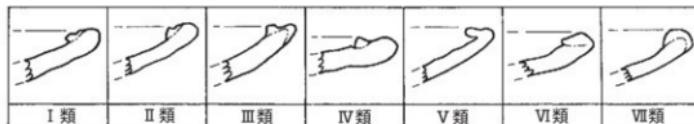
6-a 青磁碗の高台分類

主に京の内跡出土品の中から高台資料を抜き出して模式図を作成した。
『首里城跡-京の内跡発掘調査報告書(IV)-』(沖縄県立埋蔵文化財センター 平成24年3月)の掲載図を複写掲載。



6-b 青磁盤の高台分類

主に京の内跡出土品の中から高台資料を抜き出して模式図を作成した。
『首里城跡-京の内跡発掘調査報告書(IV)-』(沖縄県立埋蔵文化財センター 平成24年3月)の掲載図を複写掲載。



7 タイ産土器(半練)の蓋縁分類

『首里城跡-京の内跡発掘調査報告書(1)-』(沖縄県教育委員会 平成10年3月発行)より複写し、再編集して掲載。



8-a 明代華南三彩鶴形水注（参考資料：金城亀信撮影）

金城亀信「豊見城村内確認の明代三彩鶴形水注」『文化課紀要』第6号 1990年3月掲載に向けて1989年に撮影したカラー写真を複写して編集した。



8-b 明代華南三彩鶴形水注（参考資料）

金城亀信「豊見城村内確認の明代三彩鶴形水注」『文化課紀要』第6号1990年3月掲載した実測図に首里城跡木曳門地区出土の鶴形水注の頭部（県立埋蔵文化財センター調査報告書 第3集2001年3月発行）を参考にして実測図を修正した。

目 次

序

巻首図版

例言

凡例

第Ⅰ章 調査の概要 1

 第1節 調査区の設定 1

 第2節 事業の体制 2

 第3節 調査の経緯 3

第Ⅱ章 遺構 6

 第1節 遺構の概要 6

第Ⅲ章 遺物 19

イ. 第IV期（15世紀後半～16世紀初頭） 19

 (1) 石積み SA04 の出土遺物 22

 (2) 石積み SA35 の出土遺物 41

 (3) 石積み SA05-B の出土遺物 42

 (4) 石積み SA07 の出土遺物 51

 (5) 石積み SA11 の出土遺物 55

 (6) 石積み SA12 の出土遺物 55

 (7) 石積み SA14 の出土遺物 60

 (8) 石積み SA27 の出土遺物 100

 (9) 石積み SA30 の出土遺物 124

 (10) 石積み SA27・30 の出土遺物 127

 (11) 石敷き SS01 の出土遺物 130

 (12) 石敷き SS03-B の出土遺物 164

 (13) 石敷き SS02 の出土遺物 170

 (14) 石敷き SS04-A の出土遺物 173

 (15) 石敷き SS04-B の出土遺物 183

報告書抄録 193

挿図目次

図目次

第 1 図 発掘調査地図	4
第 2 図 「京の内」跡遺構配置図およびグリッド設定	5
第 3 図 遺構全体図	11
第 4 図 京の内北地区第IV期(15世紀後半~16世紀初頭)遺構の推定復元	15
第 5 図 石積み SA04 出土品① 瓦類 屋瓦:1~3、 埠瓦:4	23
第 6 図 石積み SA04 出土品② 青磁:1~10	26
第 7 図 石積み SA04 出土品③ 青磁:11~14、 青花:15~19、中国産褐釉陶器:20~22	28
第 8 図 石積み SA04 出土品④ タイ産土器(半練):1、 タイ産炻器:2、タイ産褐釉陶器:3~6	30
第 9 図 石積み SA04 出土品⑤ 本土産磁器:1、 沖縄産施釉陶器:2~3、沖縄産無釉陶器:4~5、 金属製品:6~7	33
第 10 図 石積み SA04 出土品⑥ 銭貨:1~7、 ガラス製品:8	35
第 11 国 石積み SA35 出土品 銭貨:1	41
第 12 国 石積み SA05-B 出土品① 埠瓦:1、青磁:2~3、 青花:4~5、彩釉陶器:6~7、石器:8、 石造製品:9	44
第 13 国 石積み SA05-B 出土品② 銭貨:1~8	47
第 14 国 石積み SA05-B 出土品③ 銭貨:9~11	48
第 15 国 石積み SA07 出土品 青磁:1~2、本土産陶器: 3~6、石貨:4~5	52
第 16 国 石積み SA12 出土品 陶質土器:1~2、瓦質 土器:3、青磁:4~5、彩釉陶器:6、中国産褐 釉陶器:7、沖縄産施釉陶器:8~9、沖縄産無釉 陶器:10、金属製品:11	58
第 17 国 石積み SA14 出土品① 土器:1~2、瓦質土器: 3~4、屋瓦:5~6	62
第 18 国 石積み SA14 出土品② 青磁:1~10	68
第 19 国 石積み SA14 出土品③ 青磁:11~19	70
第 20 国 石積み SA14 出土品④ 青磁:20~26	72
第 21 国 石積み SA14 出土品⑤ 白磁:1、青花:2、 彩釉陶器:3~4	74
第 22 国 石積み SA14 出土品⑥ 中国産褐釉陶器: 1~10	76
第 23 国 石積み SA14 出土品⑦ 中国産褐釉陶器 11~15	78
第 24 国 石積み SA14 出土品⑧ タイ産土器(半練): 1~2、タイ産炻器:3、タイ産褐釉陶器:4~5、 高麗青磁:6~7	80
第 25 国 石積み SA14 出土品⑨ 本土産陶器:1~2、 沖縄産施釉陶器:3、沖縄産無釉陶器:4~5	82
第 26 国 石積み SA14 出土品⑩ 貝製品:1~3、骨 製品:4~5、石製品:6、円盤状製品:7~8	84
第 27 国 石積み SA14 出土品⑪ 金属製品:1~11	87
第 28 国 石積み SA14 出土品⑫ 銭貨:1~9、ガラス 玉:10、鐵治関連 鉄洋:11、おはじき:12	90
第 29 国 石積み SA27 出土品① 土器:1、瓦質土器: 2~4	101
第 30 国 石積み SA27 出土品② 青磁:1~12	104
第 31 国 石積み SA27 出土品③ 青磁:13~21	106
第 32 国 石積み SA27 出土品④ 白磁:1~3、青花:4~5 黒釉陶器:6	108
第 33 国 石積み SA27 出土品⑤ 中国産褐釉陶器: 1~5	110
第 34 国 石積み SA27 出土品⑥ タイ産土器(半練): 1~2、タイ産褐釉陶器:3、中世陶器:4、沖縄產 施釉陶器:5、円盤状製品:6~7	112
第 35 国 石積み SA27 出土品⑦ 金属製品:1~5	114
第 36 国 石積み SA27 出土品⑧ 銭貨:1~7~8	116
第 37 国 石積み SA27 出土品⑨ 溶解銭貨の塊:8、 ガラス玉:9~11、溶解したガラスの塊:12~13	117
第 38 国 石積み SA23 出土品 青磁:1~2、白磁:3~4、 骨製品:5、金属製品:6~7、ガラス玉:8~11	126
第 39 国 石積み SA27-30 出土品 青磁:1~2、ガラス玉: 3~4	129
第 40 国 石敷き SS01 出土品① 陶質土器:1~4	131
第 41 国 石敷き SS01 出土品② 瓦質土器:1~6~7	132
第 42 国 石敷き SS01 出土品③ 瓦類 屋瓦:1~3、 埠瓦:4、煉瓦:5~6	135
第 43 国 石敷き SS01 出土品④ 青磁:1~11	138
第 44 国 石敷き SS01 出土の資料の重ね図	140
第 45 国 石敷き SS01 出土品⑤ 青花:1~5、彩釉陶器: 6~7、中国産褐釉陶器:8~9、タイ産土器 (半練):10	141
第 46 国 石敷き SS01 出土品⑥ 本土産磁器:1~5、 本土産陶器:6~7	143
第 47 国 石敷き SS01 出土品⑦ 沖縄産施釉陶器: 1~13	146
第 48 国 石敷き SS01 出土品⑧ 沖縄産無釉陶器: 1~3	147
第 49 国 石敷き SS01 出土品⑨ 貝製品:1、石製品: 2~4、円盤状製品:5~6	149
第 50 国 石敷き SS01 出土品⑩ 金属製品:1~8	151
第 51 国 石敷き SS01 出土品⑪ 銭貨:1~8	154
第 52 国 石敷き SS01 出土品⑫ 銭貨:9~12、ガラス 製品:13~14	156
第 53 国 皇宋通宝の銭形(第 54 国 8)の拓影を陰影から 陽影に変換	165
第 54 国 石敷き SS03-B 出土品 青磁:1、沖縄産無釉 陶器:2、貝製品:3、石器:4、金属製品:5、銭貨: 6~8	167
第 55 国 石敷き SS02 出土品 青磁:1、白磁:2、 金属製品:3~5、銭貨 6~8	172
第 56 国 石敷き SS04-A 出土品① タイ産土器(半練): 1、タイ産褐釉陶器:2、円盤状製品:3~4	173
第 57 国 石敷き SS04-A 出土品② 銭貨:1~8~9	177
第 58 国 石敷き SS04-A 出土品③ 銭貨:9~17	179
第 59 国 石敷き SS04-B 出土品① 青磁:1、中国産 褐釉陶器:2~3、タイ産土器(半練):4~5	184
第 60 国 石敷き SS04-B 出土品② 銭貨:1~8~9	188
第 61 国 石敷き SS04-B 出土品③ 銭貨 9~16	190

表目次

第 1 表 平成6(1994)年度「京の内」跡検出遺構件数 の新旧関係	3
第 2 表 切り石積み(区画石積み・御嶽)の外観と内面 の関係	9
第 3 表 平成6年度 京の内地区検出遺構と構造の 時期	10
第 4 表 第IV期出土遺物状況	21
第 5 表 石積み SA04 屋瓦・埠瓦出土状況	22
第 6 表 石積み SA04 屋瓦・埠瓦観察一覧	24
第 7 表① 石積み SA04 青磁出土状況	24
第 7 表② 石積み SA04 青花・中国産褐釉陶器 出土状況	25
第 8 表① 石積み SA04 青磁観察一覧	25
第 8 表② 石積み SA04 青磁・青花・中国産褐釉陶器 観察一覧	27

第 9 表 石積み SA04 タイ産土器(半練)・タイ産炻器・ タイ産褐釉陶器出土状況	29
第 10 表① 石積み SA04 タイ産土器(半練)・タイ産 炻器・タイ産褐釉陶器観察一覧	29
第 10 表② 石積み SA04 タイ産褐釉陶器観察一覧	30
第 11 表 石積み SA04 本土産炻器・沖縄産施釉陶器・ 沖縄産無釉陶器・金屬製品出土状況	31
第 12 表① 石積み SA04 本土産炻器・沖縄産施釉 陶器・沖縄産無釉陶器観察一覧	32
第 12 表② 石積み SA04 金屬製品観察一覧	32
第 13 表① 石積み SA04 二次の火熱溶解錢貨	33
第 13 表② 石積み SA04 ガラス製品出土状況	33
第 14 表① 石積み SA04 銀貨観察一覧	34
第 14 表② 石積み SA04 ガラス製品観察一覧	34
第 15 表 石積み SA04 出土遺物状況(図版外)	36
第 16 表 石積み SA35 二次の火熱溶解錢貨	41
第 17 表 石積み SA35 出土遺物状況(図版外)	41
第 18 表 石積み SA35 銀貨観察一覧	41
第 19 表 石積み SA05-B 塙瓦・青磁・青花・彩釉陶器・ 石器・石製品・石材出土状況	42
第 20 表 石積み SA05-B 塙瓦・青磁・青花・彩釉陶器・ 石器・石製品観察一覧	43
第 21 表 石積み SA05-B 二次の火熱溶解錢貨	45
第 22 表 石積み SA05-B 銀貨観察一覧	46
第 23 表 石積み SA05-B 出土遺物状況(図版外)	48
第 24 表① 石積み SA07 青磁・本土産陶器出土状況	51
第 24 表② 石積み SA07 二次の火熱溶解錢貨	51
第 25 表① 石積み SA07 青磁・本土産陶器 観察一覧	51
第 25 表② 石積み SA07 銀貨観察一覧	52
第 26 表 石積み SA07 出土遺物状況(図版外)	53
第 27 表 石積み SA11 出土遺物状況	55
第 28 表 石積み SA12 出土遺物状況	56
第 29 表① 石積み SA12 陶磁器類観察一覧	57
第 29 表② 石積み SA12 金屬製品観察一覧	58
第 30 表① 石積み SA14 屋瓦出土状況	60
第 30 表② 石積み SA14 土器・瓦質土器・塙瓦 出土状況	61
第 31 表 石積み SA14 土器・瓦質土器・屋瓦 観察一覧	61
第 32 表 石積み SA14 青磁出土状況	63
第 33 表 石積み SA14 青磁観察一覧	67
第 34 表 石積み SA14 白磁・青花・彩釉陶器出土状況	73
第 35 表 石積み SA14 白磁・青花・彩釉陶器 観察一覧	73
第 36 表 石積み SA14 中国産褐釉陶器出土状況	74
第 37 表 石積み SA14 中国産施釉陶器観察一覧	75
第 38 表 石積み SA14 タイ産土器(半練)・タイ産炻器・ タイ産褐釉陶器・高麗青磁出土状況	79
第 39 表① 石積み SA14 タイ産土器(半練)・タイ產 炻器・タイ産褐釉陶器観察一覧	79
第 39 表② 石積み SA14 タイ産褐釉陶器・高麗青磁 観察一覧	80
第 40 表 石積み SA14 本土産陶器・沖縄産施釉陶器・ 沖縄産無釉陶器出土状況	81
第 41 表 石積み SA14 本土産陶器・沖縄産施釉陶器・ 沖縄産無釉陶器観察一覧	81
第 42 表 石積み SA14 貝製品・骨製品・石器・石製品・ 円盤状製品出土状況	83
第 43 表 石積み SA14 貝製品・骨製品・石器・石製品・ 円盤状製品観察一覧	83
第 44 表 石積み SA14 金属製品出土状況	85
第 45 表 石積み SA14 金属製品観察一覧	86
第 46 表 石積み SA14 二次の火熱溶解錢貨	88
第 47 表 石積み SA14 錫鉄関連・ガラス玉・ガラス製品 出土状況	88
第 48 表① 石積み SA14 ガラス玉観察一覧	88
第 48 表② 石積み SA14 錫鉄関連・おはじき観察一覧	88
第 49 表 石積み SA14 銀貨観察一覧	89
第 50 表 石積み SA14 出土遺物状況(図版外)	91
第 51 表 石積み SA27 土器・瓦質土器出土状況	100
第 52 表 石積み SA27 青磁出土状況	101
第 53 表 石積み SA27 青磁観察一覧	103
第 54 表 石積み SA27 白磁・青花・黒釉陶器 出土状況	107
第 55 表 石積み SA27 白磁・青花・黒釉陶器 観察一覧	107
第 56 表 石積み SA27 中国産褐釉陶器出土状況	108
第 57 表 石積み SA27 中国産褐釉陶器観察一覧	109
第 58 表 石積み SA27 タイ産土器(半練)・タイ産褐釉 陶器・中世陶器・沖縄産施釉陶器・円盤状 製品出土状況	111
第 59 表 石積み SA27 タイ産土器(半練)・タイ産褐釉 陶器・中世陶器・沖縄産施釉陶器・円盤状 製品観察一覧	111
第 60 表 石積み SA27 金属製品出土状況	113
第 61 表 石積み SA27 金属製品観察一覧	113
第 62 表 石積み SA27 二次の火熱溶解錢貨	114
第 63 表 石積み SA27 ガラス玉・ガラス製品出土状況	115
第 64 表① 石積み SA27 銀貨観察一覧	115
第 64 表② 石積み SA27 ガラス製品(玉・溶解したガラス の塊)観察一覧	117
第 65 表 石積み SA27 出土遺物状況(図版外)	118
第 66 表① 石積み SA30 出土遺物状況	124
第 66 表② 石積み SA30 二次の火熱溶解錢貨	125
第 67 表 石積み SA30 青磁・白磁・骨製品・金属製品・ ガラス玉観察一覧	125
第 68 表 石積み SA27-30 青磁・ガラス玉観察一覧	127
第 69 表 石積み SA27-30 出土遺物状況	128
第 70 表 石敷き SS01 陶質土器・瓦質土器出土状況	130
第 71 表 石敷き SS01 陶質土器観察一覧	130
第 72 表 石敷き SS01 瓦質土器観察一覧	131
第 73 表 石敷き SS01 屋瓦・塙瓦出土状況	133
第 74 表 石敷き SS01 屋瓦・塙瓦・煉瓦・觀察一覧	134
第 75 表 石敷き SS01 青磁・青花・彩釉陶器・中国産 褐釉陶器・タイ産土器(半練)出土状況	136
第 76 表 石敷き SS01 青磁観察一覧	137
第 77 表 石敷き SS01 青花・彩釉陶器・中国産褐釉 陶器・タイ産土器(半練)観察一覧	139
第 78 表 石敷き SS01 本土産陶器出土状況	142
第 79 表 石敷き SS01 本土産陶磁器観察一覧	142
第 80 表 石敷き SS01 沖縄産陶器出土状況	144
第 81 表 石敷き SS01 沖縄産施釉陶器観察一覧	144
第 82 表 石敷き SS01 沖縄産無釉陶器観察一覧	147
第 83 表 石敷き SS01 貝製品・石製品・石材・円盤状 製品出土状況	148
第 84 表 石敷き SS01 貝製品・石製品・円盤状製品 観察一覧	148
第 85 表 石敷き SS01 金属製品観察一覧	150
第 86 表 石敷き SS01 金属製品出土状況	151
第 87 表 石敷き SS01 二次の火熱溶解錢貨	152
第 88 表 石敷き SS01 ガラス製品出土状況	153
第 89 表①・② 石敷き SS01 銀貨観察一覧	153
第 89 表③ 石敷き SS01 ガラス製品観察一覧	155
第 90 表 石敷き SS01 出土遺物状況(図版外)	156
第 91 表① 石敷き SS03-B 青磁・沖縄産無釉陶器・ 貝製品・石器・石製品・石材・金属製品 出土状況	164
第 91 表② 石敷き SS03-B 二次の火熱溶解錢貨	165
第 92 表 石敷き SS03-B 青磁・沖縄産無釉陶器・貝製 品・石製品・金属製品・銀貨観察一覧	166
第 93 表 石敷き SS03-B 出土遺物状況(図版外)	168
第 94 表① 石敷き SS02 出土遺物状況	170
第 94 表② 石敷き SS02 二次の火熱溶解錢貨	171
第 95 表① 石敷き SS02 青磁・白磁・金属製品 観察一覧	171

第 95 表② 石敷き SS02 錢貨観察一覧	171
第 96 表 石敷き SS04-A タイ産土器(半練)・タイ産褐釉陶器・円盤状製品観察一覧	173
第 97 表 石敷き SS04-A 二次の火熱溶解錢貨	174
第 98 表 石敷き SS04-A 錢貨観察一覧	176
第 99 表 石敷き SS04-A 出土遺物状況	180
第 100 表 石敷き SS04-B 青磁・中国産褐釉陶器・タイ産土器(半練)出土状況	183
第 101 表 石敷き SS04-B 青磁・中国産褐釉陶器・タイ産土器(半練)観察一覧	184
第 102 表 石敷き SS04-B 二次の火熱溶解錢貨	185
第 103 表 石敷き SS04-B 錢貨観察一覧	187
第 104 表 石敷き SS04-B 出土遺物状況(図版外)	191

図版目次

卷首図版 1 1945年4月2日 米軍撮影(CV20-103-63) の首里城周辺	
卷首図版 2 首里城平面図	
卷首図版 3 2009年 首里城跡の航空写真	
卷首図版 4 首里城跡周辺地形図	
卷首図版 5 上段左:石積み SA04 出土の青磁雷文帯碗 上段右:石積み SA14 出土の茶托(上) 石積み SA04 出土の茶托(下) 下段左:石積み SA27 出土の「彌氏」銘入青磁皿 下段右:石敷き SS03-B 出土の凝灰岩製 砾石	
卷首図版 6 上段左:石積み SA14 出土の骨鑑 上段右:石積み SA27 出土の青銅製切羽 中段:石敷き SS03-B 出土の「皇宋通寶」の 鉄型の陰陽反転 下段:石積み SA27 出土の二次の火熱を 受けて溶解した錢の塊	
図版 1 石積み SA04 出土品① 瓦類:屋瓦 1~3、 埠瓦:4~6	37
図版 2 石積み SA04 出土品② 青磁:1~10	38
図版 3 石積み SA04 出土品③ 青花:11~14、青花: 15~19、中国産褐釉陶器:20~22	39
図版 4 石積み SA04 出土品④ タイ産土器(半練): 1.タイ産炻器:2,タイ産褐釉陶器:3~6	39
図版 5 石積み SA04 出土品⑤ 本土産磁器:1、沖縄 産施釉陶器:2~3、沖縄産無釉陶器:4~5、 金属製品:6~7	40
図版 6 石積み SA04 出土品⑥ 錢貨:1~7、ガラス 製品:8~10	40
図版 7 石積み SA35 出土品 錢貨:1	41
図版 8 石積み SA05-B 出土品① 埠瓦:1、青磁:2~3、 青花:4~5、彩釉陶器:6~7、石器:8、 石造製品:9	49
図版 9 石積み SA05-B 出土品②・③ 錢貨:1~11	50
図版 10 石積み SA07 出土品 青磁:1~2、本土産陶器: 3、錢貨:4~5	54
図版 11 石積み SA12 出土品 陶質土器:1~2、瓦質土 器:3、青磁:4~5、彩釉陶器:6、中国産褐釉陶 器:7、沖縄産施釉陶器:8~9、沖縄産無釉陶器: 10、金属製品:11	59
図版 12 石積み SA14 出土品① 土器:1~2、瓦質土器: 3~4、屋瓦:5~6	92
図版 13 石積み SA14 出土品② 青磁:1~10	92
図版 14 石積み SA14 出土品③ 青磁:11~19	93
図版 15 石積み SA14 出土品④ 青磁:20~26	94
図版 16 石積み SA14 出土品⑤ 白磁:1、青花:2、彩釉 陶器:3~4	94
図版 17 石積み SA14 出土品⑥・⑦ 中国産褐釉陶器: 1~15	95
図版 18 石積み SA14 出土品⑧ タイ産土器(半練):1~2、 タイ産炻器:3、タイ産褐釉陶器:4~5、高麗青磁:6	96
図版 19 石積み SA14 出土品⑨ 本土産陶器:1~2、 沖縄産施釉陶器:3、沖縄産無釉陶器:4~5	96

図版 20 石積み SA14 出土品⑩ 貝製品:1~3、骨製品: 4~5、石製品:6、円盤状製品:7~8	97
図版 21 石積み SA14 出土品⑪ 金属製品:1~11	98
図版 22 石積み SA14 出土品⑫ 錢貨:1~9、ガラス 玉:10、ガラス質鉄滓:11、おはじき:12	99
図版 23 石積み SA27 出土品① 土器:1、瓦質土器: 2~4	119
図版 24 石積み SA27 出土品② 青磁:1~12	119
図版 25 石積み SA27 出土品③ 青磁:13~21	120
図版 26 石積み SA27 出土品④ 黑磁:1~3、青花: 4~5、黒釉陶器:6	120
図版 27 石積み SA27 出土品⑤ 中国産褐釉陶器: 1~5	121
図版 28 石積み SA27 出土品⑥ タイ産土器(半練): 1~2、タイ産褐釉陶器:3、中世陶器:4、沖縄產 施釉陶器:5、円盤状製品:6	121
図版 29 石積み SA27 出土品⑦ 金属製品:1~5	122
図版 30 石積み SA27 出土品⑧・⑨ 錢貨:1~7、溶解 錢貨の塊:8、ガラス玉:9~11、溶解したガラス の塊:12	123
図版 31 石積み SA30 出土品 青磁:1~2、白磁:3~4、 骨製品:5、金属製品:6~7、ガラス玉:8~11	126
図版 32 石積み SA27-30 出土品 青磁:1~2、ガラス玉: 3~4	129
図版 33 石敷き SS01 出土品① 陶質土器:1~4	157
図版 34 石敷き SS01 出土品② 瓦質土器:1~6	157
図版 35 石敷き SS01 出土品③ 瓦類 屋瓦:1~3、 埠瓦:4、陳瓦:5	158
図版 36 石敷き SS01 出土品④ 青磁:1~11	158
図版 37 石敷き SS01 出土品⑤ 青花:1~5、彩釉陶器: 6~7、中国産褐釉陶器:8~9、タイ産土器 (半練):10	159
図版 38 石敷き SS01 出土品⑥ 本土産磁器:1~5、 本土産陶器:6~7	159
図版 39 石敷き SS01 出土品⑦ 沖縄産施釉陶器: 1~13	160
図版 40 石敷き SS01 出土品⑧ 沖縄産無釉陶器: 1~3	160
図版 41 石敷き SS01 出土品⑨ 貝製品:1、石製品: 2~4、円盤状製品:5~6	161
図版 42 石敷き SS01 出土品⑩ 金属製品:1~8	162
図版 43 石敷き SS01 出土品⑪・⑫ 錢貨:1~12、 ガラス製品:13~14	163
図版 44 石敷き SS03-B 出土品 青磁:1、沖縄産無釉 陶器:2、貝製品:3、石器:4、金属製品:5、 錢貨:6~8	169
図版 45 石敷き SS02 出土品 青磁:1、白磁:2、金属 製品:3~5、錢貨:6~8	172
図版 46 石敷き SS04-A 出土品① タイ産土器(半練): 1、タイ産褐釉陶器:2、円盤状製品:3	181
図版 47 石敷き SS04-A 出土品② 錢貨:1~8	181
図版 48 石敷き SS04-A 出土品③ 錢貨:9~17	182
図版 49 石敷き SS04-B 出土品① 青磁:1、中国産 褐釉陶器:2~3、タイ産土器(半練):4	191
図版 50 石敷き SS04-B 出土品②・③ 錢貨:1~16	192

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査区の設定

調査区の設定に関する詳細については『首里城跡一京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）－平成6年度調査の遺構編』〔沖縄県立埋蔵文化財センター平成23（2011）年3月〕に掲載を参照（註1）されたい。併せて調査区の設定の概略については『首里城跡一京の内跡発掘調査報告書（Ⅳ）－平成6年度調査の遺物編（1）』〔沖縄県立埋蔵文化財センター平成24（2012）年3月〕（註2）を参照されたい。

本節では、平成23年度報告書の調査区の設定を再度掲載した。

平成6年度の京の内跡の発掘調査地区は、第1図と第2図にあるように京の内北地区2,000m²が発掘調査の対象となった。首里城およびその周辺の地下には、昭和20（1945）年のアジア・太平洋戦争末期に起きた沖縄戦の際に第32軍司令部壕が昭和19（1944）年に構築されたことにより米軍の集中砲火を受けている事から事前に調査区内に不発弾等の有無確認を目的とした磁気探査を実施し、磁気異常箇所の有無を確認後に本格的な発掘調査を平成6（1994）年11月21日から開始して、平成7（1995）年の3月28日までの約5ヶ月間実施した。

発掘調査で検出された遺構のプランを基に京の内の復元整備の計画がなされるため遺構保護を目的として、調査地区内全域に保護砂の白砂を厚さ10cm～15cmを敷きならした後に廃土で埋め戻した。

埋め戻しによって遺構の位置関係が直接的に把握できなくなるので、調査地区及びその周辺に基準点測量の三点（基-1、基-2、基-3）を測量業務に委託した。基準点の成果は下記のとおりである。

X=23622.856	X=23594.909	X=23606.382
基-1 Y=21998.541	基-2 Y=21985.276	基-3 Y=22047.613
H=125.009m	H=126.486m	H=125.054m

グリッドの設定（第2図）は、1グリッドの規模が10m×10mを単位とした。基準となった杭は、下之御庭の南側にあった東西に延びるコンクリート製側溝の南側縁より50cmの地点に基準杭A-11を設定した。以下、側溝と平行させながら東西方向に10m間隔でA-12からA-17の杭を設定した。南北方向には基準杭A-11からA-17を規準し、これを軸線としてA-17からW90° 0' 00"Sに振って10m間隔でB-11・C-11・D-11の杭を設置し、グリッド番号は東から西へ10・11・12…と数字を冠した。グリッドの番号はアルファベットを採用し、北から南へA・B・C…とした。グリッド名は記号と番号を組み合わせてA-10・B-10…と標記した。なお、グリッド名はグリッド内の東南隅の杭に冠して、将来の調査に使用できるように設定した。

基準杭A-11とA-17を結ぶ軸線（南北基準座標軸N° 19' 00" Wに偏る座標軸）からW180° 0' 00"Eへ振って、A-11から東側へ170cmの箇所にある奉神門基壇と丁度かち合うように基準杭A-11を設定した。

調査地区的A-11（北東）、A-17（北西）、D-10（南東）、D-18（南西）の4点のX座標とY座標については、写真測量図の読み取りから下記の結果が得られた（第2図）。

A-11 (X=23604.474 Y=22047.078) A-17 (X=23623.565 Y=21990.239)

D-10 (X=23572.885 Y=22047.018) D-18 (X=23598.267 Y=21971.191)

その他、A-11から東側にある奉神門基壇とかち合う接点（170cm）から奉神門南側階段がとり付けられた基壇（階段南側縁と基壇との接点）までの直線距離は6mと判読した。

註文献

註1. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第56集『首里城跡一京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）－平成6年度調査の遺構編』沖縄県立埋蔵文化財センター平成23（2011）年3月。

註2. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第62集『首里城跡一京の内跡発掘調査報告書（Ⅳ）－平成6年度調査の遺物編（1）』沖縄県立埋蔵文化財センター平成24（2012）年3月。

第2節 事業の体制

京の内跡発掘調査は、平成6（1994）年度～平成8（1996）年度までの三ヵ年実施した。資料整理については今回の報告書刊行に係った平成25（2013）年度に限定して、下記のような体制で実施した。

◎ 平成25（2013）年度 組織（「京の内跡発掘調査報告書（V）」報告書刊行年度）

- 事業主体 沖縄県教育委員会 教育長 諸見里 明
 同上 教育管理統括監 島田 勉
 同上 教育指導統括監 浜口 茂樹
- 事業総括 沖縄県教育庁文化財課 課長 新垣 悅男
- 事業事務 沖縄県教育庁文化課 管理班班長 仲宗根 英之
 同上 // 主査 渡邊 利恵子
 同上 // 主任 比嘉 瞳
 同上 // 主任 上原 明香
- 事業事務 沖縄県教育庁文化課 記念物班班長 盛本 熱
 同上 // 指導主事 田場直樹
 同上 // 主任専門員 山本正昭
- 事業実施 沖縄県立埋蔵文化財センター 所長 下地 英輝
 同上 副参事 島袋 洋
 同上 総務班班長 新垣 勝弘
 同上 // 主査 西島 康二
 同上 // 主任 平良 広海
 同上 // 再任用主査 次呂久 長英
 同上 // 事務補助員 安里綾子・砂川美樹・下地 麻利恵
 同上 調査班班長 金城 亀信（資料整理・報告書作成担当）
 同上 // 主任 新垣 力（発掘調査担当）
 同上 // 専門員 山城 勝（臨任）

○ 資料整理指導（平成25年度）

佐賀県立九州陶磁文化館 館長 大橋 康二（陶磁器）

○ 資料整理作業及び協力者（平成25年度）

沖縄県立埋蔵文化財センター 調査班主任 知念隆博（金属製品：軟X線写真撮影）

文化財調査嘱託員 天久瑞香・玉城 純

埋蔵文化財資料整理嘱託員 赤嶺雅子・池原直美・伊佐えりな・石嶺敏子・伊藤恵美利・上原美穂子・
大村由美子・小渡直子・久保田有美・後田多昌代・島袋久美子・瑞慶覧尚美・
野村知子・又吉志麻子・宮里絵里・仲里由利・高良三千代・玉寄智恵子・
宮城初枝・屋我尚子・矢舟章浩・吉村綾子

第3節 調査の経緯

平成6（1994）年度の調査の経緯についての詳細は、『首里城跡一京の内跡発掘調査報告書（III）－』〔沖縄県立埋蔵文化財センター 平成23（2011）年3月〕（註1）を、調査の経緯についての概要は『首里城跡一京の内跡発掘調査報告書（IV）－』〔沖縄県立埋蔵文化財センター 平成24（2012）年3月〕（註2）を併せて参照されたい。本節では、前記報告書（IV）から調査の経緯を再度掲載した。

平成6（1994）年度に実施した首里城京の内跡の発掘調査は、同年11月21日から着手し、翌年の3月28日までの約5ヶ月間にわたって実施した（第1図）。

調査地区的発掘前の状況は、平成4（1992）年の首里城正殿、北殿、南殿、奉神門、廣福門などの復元整備が完了し、首里城公園として一部が開園した。開園に伴って京の内地域は、北側の下之御庭から南側の斜面地まで客土がなされ、全面に芝張りで暫定的な仮整備が行われていた。客土は琉球大学の基礎跡より上位に実施されていて、調査は仮整備の芝の除去から始まり、次に客土の除去をバックホウでおこない琉球大学の旧地表面まで剥ぎ取った後に磁気探査をおこなった。磁気探査の結果、琉球王国時代の遺物や沖縄戦で使用された不発弾等は検出されなかつた。

この時点での磁気探査を終了したが、琉球大学の旧地表面を東側から西側へバックホウで慎重に旧表土を削平しながら掘り下げたところ手榴弾4発、砲弾2発が検出された為、関係機関に連絡を入れて処理を依頼した。その後、遺構内の崩れた栗石を手作業による除去をおこなっていた調査員が持ち上げた石の下から完形の信管付の不発弾が見つかり、警察署とおして自衛隊へ不発弾の処理を依頼した。

このような状況で琉球王国当時の地表面と首里第一尋常高等小学校（明治45年～昭和20年：1912年～1945年）当時の地盤までバックホウや手掘りで掘り下げたが、調査地区的南側半分は琉球大学校舎（短大管理棟、理科実験室、教育校舎及び同ビル別館、法文校舎及び同ビル別館Bなど）建築の際の造成により琉球石灰岩の掘削や削平がなされ、遺構の残り具合は悪かった。逆に北側は琉球大学校舎地盤のレベルより低い地域は、道路、中庭、各校舎への通路と利用されたことと校舎などの構築物が建設される事がなかった事が幸いして、旧表土レベルでの軽微な擾乱を受けている程度で、全体的に遺構の保存状態は良好であった。遺構検出に際しては、遺構直上までバックホウで慎重に削平しながら遺構の確認と掘り下げを行った。この辺はオペレーターの技術と経験が生かされ5cm前後の誤差で剥ぎ取りが可能となり、調査がスムーズに進行していった。遺構直上より下部の発掘調査は、人力による手作業で遺構を露出させながら掘り下げていった。

遺構の検出に際しては確認され次第、第2図のように遺構の形状などから記号と番号を検出順に冠していった。また、遺構の性格や時期を具体的に把握する目的で、遺構沿いにトレントを入れながら発掘調査を実施させた。結果として検出された遺構は51基（調査終了時点での遺構番号に重複が発生）を数えた（註3）。その後、遺構の整理（途切れた石積み遺構同士が繋がり一つの遺構として整理、SA19・SA20・SA28が土壤SK01の倉庫跡となるなど）と検討をすすめたところ平成12（2000）年度の段階で39基（註4）となった（第1表）。

第1表 平成6(1994)年度「京の内」跡検出遺構件数の新旧関係

NO.	種類	遺構の記号と番号	旧件数（1994年時点）	新件数（2000年時点）
1.	石積み	SA01～SA27・SA29～SA34	33基	17基
2.	石列	SR01・SR02	2基	2基
3.	石敷き・埴敷き	SS01～SS03	3基	6基
4.	溝	SD01～SD07	7基	10基
5.	土壤	SK01～SK03	3基	3基
6.	建物	SB01・SB02	2基	1基
7.	階段	SA28	1基	0基
遺構合計			51基	39基

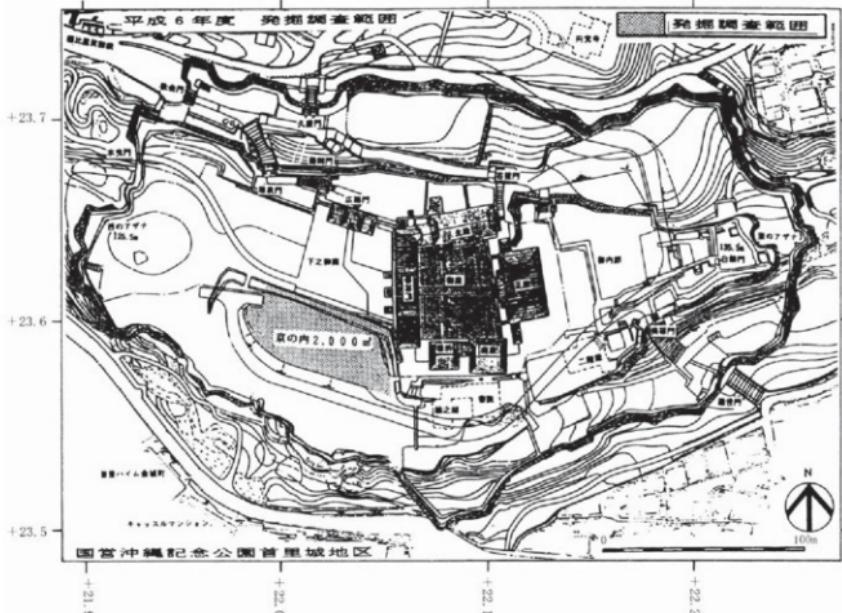
平成6（1994）年に実施した京の内北地区（約2,000m²）の埋め戻しは、平成8（1996）年2月29日に遺構や往時の面を保護するために白砂を15cm前後の厚さで岩盤の石灰岩を含む調査区2,000m²敷いて、その上に残土を50～70cmの厚さで盛って埋め戻した。この埋め戻しに際しては、重機（バックホウ、タイヤショベル、ローラー）を使用するため、埋め戻しの方法について協議しながら行った。遺構面については調査員立ち会いのもとで人力による埋め戻しを実施した。

註文献

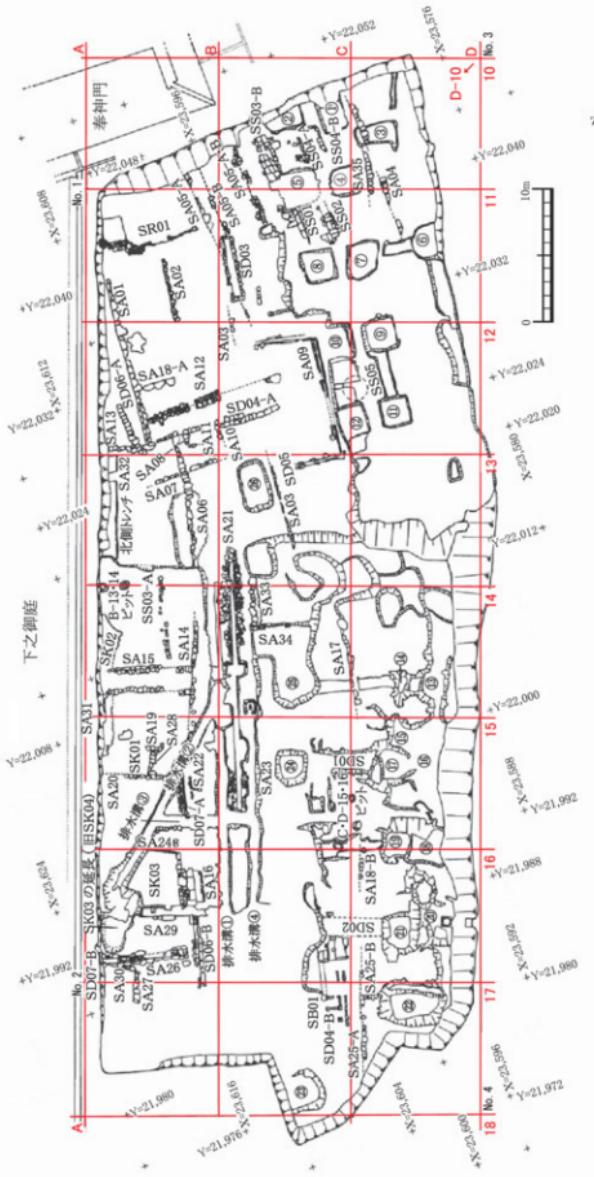
- 註1. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第56集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（III）－平成6年度調査の遺構編』沖縄県立埋蔵文化財センター 平成23（2011）年3月。
- 註2. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第62集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（IV）－平成6年度調査の遺物編（1）』沖縄県立埋蔵文化財センター 平成24（2012）年3月。
- 註3. 沖縄県文化財調査報告書第132集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（I）－』沖縄県教育委員会 平成10（1998）年3月。
- 註4. 金城亀信『首里城「京の内」跡の発掘調査概要』重要文化財指定記念 特別企画展『首里城京の内展－貿易陶磁からみた大交渉時代－』沖縄県立埋蔵文化財センター 平成13（2001）年3月。

引用及び参考文献

1. 財団法人 海洋博覧会記念公園管理財団『国営沖縄記念公園首里城地区整備計画』平成7（1995）年3月。
2. 金城亀信『首里城跡「京の内」跡出土の輸入陶器－紅釉水注を中心に－』『特集 琉球考古学最新情報』考古学ジャーナル NO.437 1998年。
3. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第49集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（II）－』沖縄県立埋蔵文化財センター 平成21（2009）年3月。



第1図 発掘調査地域



平成6年(1994)度の京の内郭から発出土された遺構については下記のとおりに記号化した。
石積み (SA) SA01 ~ SA05-A・B, SA06 ~ SA18-A・B, SA19 ~ SA25-A・B, SA26 ~ SA35(38) (65)
土塹 (SK) SK01 ~ SK03, SK03 の底長 (旧SK04) (1基)
築構 (SD) SD01 ~ SD04-A・B, SD05, SD06-A・B, SD07-A・B(10基)

建物 (SB) SB01(1基)
柵検出遺構の合計 (61基)
※記号は必ずしもそのものの性格を示したものではない。将来において遺構番号等の追加がある。

No.1	A-11	X=23,604,474 Y=22,047,078
No.2	A-17	X=23,623,065 Y=21,990,239
No.3	D-10	X=22,047,618 Y=22,598,267
No.4	D-18	X=23,597,1191 Y=21,971,191

※坂跡大学の建設基礎跡は、検出順に①～⑩迄を冠す。
※遺構の配置は真跡測図上縦横ライン等を示したものである。

第2図 「京の内」跡遺構配置図およびクリッド設定

第Ⅱ章 遺構

第1節 遺構の概要

A. 遺構の種類と概略

平成6年度の京の内地区の発掘調査で遺構と共に出土した陶磁器類などを理解する上で、欠くことのできない遺構についても『首里城跡一京の内跡発掘調査報告書（Ⅲ）－平成6年度調査の遺構編』〔沖縄県立埋蔵文化財センター平成23（2011）年3月〕（註1）の表現等を修正後に『首里城跡一京の内跡発掘調査報告書（Ⅳ）－平成6年度調査の遺物編（1）』〔沖縄県立埋蔵文化財センター平成25（2013）年3月〕（註2）に掲載したものと本節では再度掲載して使用した。

平成6年度の首里城京の内跡発掘調査で検出された遺構には石積み（階段を含む）、石敷き（埠敷きを含む）、土壌、溝、建物、石列などがある。検出された遺構のほとんどは真北に対し、やや西に振れるものと西よりに振れるものが存在した（第2図・第3図）。

各種の遺構は発掘直前に推定された遺構の種類や性格によって記号化し、検出された順に番号を冠した。

具体的には、建物と付属する溝、石敷き、石積みの外面や内面にも個別に記号と番号を付した。また、個別の遺構として取り扱っていたものが完掘後に一連の遺構となり、種類や性格も明らかとなつた遺構もある。これについては古い記号と番号を尊重しながら新しい記号と番号を付して、新旧の番号と記号を併用した。基本的に同一遺構であっても調査時点に冠した記号や番号の改正などは実施しなかつた。これは記号や番号の改正などによつて図面整理や資料整理（ナンバーリングの変更など）で時間を費やし、資料整理の進捗に支障を来すことが予想されたからであった。遺構の記号は以下のとおりであるが必ずしも遺構の種類と性格を示すものではないことを付する。なお、今回の報告で新たに遺構が3基確認されたことは、大きな成果であった。

遺構の種類は石積み（S A）、石敷き・埠敷き（S S）、土壌（S K）、溝（S D）、建物（S B）、石列（S R）の6種類である。以下、遺構別に性格などを略記する。

石積み（S A）

石積みの大部分はその上部を欠くため上部の構造は判っていない。石積みは外面と内面を並行に南北方向や東西方向に配置する区画石積みが主であった。古絵図にみられた区画石積みに空けられた通用門は戦後の造成（岩盤の削平と掘り下げ）で破壊され確認されていない。他に基壇状の建物の縁石や倉庫の壁石などのように外面のみが検出されたものもある。これは石積みの位置変更や幾度となる造成による嵩上げ等による内面の破壊や石積みの際に直接岩盤上に積み上げた事に起因するようである。その他に完掘の結果、階段や階段の脇石積みとして判明した石積みもある。石積みも大半が根石のみが存在する状況にあった。根石は粗加工の切り石や野面石に粗い加工を加えたものを用いて造成土盤（遺物包含層を二次的に使用）や削平した岩盤上に直接的に配置し、その上から切り石を積み上げているものが主であった。石積みの外面と内面において、外面は切り石で、内面が野面積みを用いたものがある。内面に野面積みを用いた理由として、内面側の土盤の仕上げ高が高い位置にあつたため、野面石を基礎石として積み上げ途中から設定された土盤近くから切石に変更がなされたからであろう。この方法を用いた例は二例のみ確認されている。他にも例外的ではあるが野面積みを積み上げ途中から裏込目石の代りに礫混りの土砂を投入する特殊な例があった。発掘調査の結果、明確な石積み（区画石積み・御嶽・倉庫・琉大の石積み）となったものと今回の整理で新たに確認された2基（S A05-Bの内・外）を加えると、切り石積みでは東西方向に延びる石積みが15基（S A03、S A04、S A05-Bの内・外、S A06、S A08、S A10、S A14、S A17、S A18-B、S A25-A、S A27、S A31、S A33、S A35）で、南北方向に延びるものは12基（S A07、S A11～S A13、S A15、S A18-A、S A19、S A20、S A25-B、S A30、S A32、S A34）が確認されている。これらの切り石積みの対比・相関関係については、第2表で整理した。野面積みは1基（S A24）のみで南北方向に延びていたようである。その他に建物の基壇の縁石や建物の縁石が4基（S A01、S A01背面、S A02、S A09）、階段およびその脇石積み3基（S A16、S A19、S A28）、側溝の縁石2基（S A

26、S A29）、石積みの裏込目石の集石が2基（S A21、S A23）があった。以上の38基が石積み（S A）として取り扱ったものである。

なお、資料整理をとおして、平成9（1997）年2月20日～3月21日迄の期間で実施された下之御庭の首里森御嶽復元整備に係る遺構確認のための発掘調査（註3）で、下之御庭の首里森御嶽下部石積みが京の内の石積み（SD04-AとSA18-A）と繋がっていく事を改めて確認[調査期間中に下之御庭の首里森御嶽下部石積みが京の内を南北に横断して最高位にある首里森御嶽へ繋がっていく事を現地で確認した。下之御庭の首里森御嶽は京の内にある首里森御嶽（本体）への遙拝所であることが石積み遺構からも推定できた]した。

註文献

註1. 沖縄県立埋蔵文化財センター 調査報告書 第56集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（III）－平成6年度調査の遺構編』平成23（2011）年3月。

註2. 沖縄県立埋蔵文化財センター 調査報告書 第47集『首里城跡－下之御庭首里森御嶽地区発掘調査報告書一』平成20（2008）年3月。

註3. 沖縄県立埋蔵文化財センター 調査報告書 第62集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（IV）－平成6年度調査の遺物編（1）』平成24（2012）年3月。

参考文献

1. 金城亀信 首里城「京の内」跡の発掘調査概要 重要文化財指定記念 特別企画展『首里城京の内展－貿易陶磁からみた大交易時代－』沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年3月。

2. 金城亀信 「首里城京の内跡検出遺構について－平成6年度の遺構を中心に－」第50回文化講座『聖城へのアプローチ～考古学から何が見えてきたのか～』 沖縄県立埋蔵文化財センター 平成24年2月13日。

石敷き・埠敷き（SS）

石敷きは細粒砂岩製（俗称・ニービヌフニ）と琉球石灰岩製の二種類が存在し、板状に薄く仕上げたものである。主に細粒砂岩製のものが主流であった。石敷きの方向は東西方向に途切れながら検出されている。これは後代の造成で破壊されたためである。埠敷きとしたものは埠瓦が敷かれた状態で検出されたのではなく、埠敷きが破壊されたままの状態で検出されたものである。

石敷きの細粒砂岩製のものは建物の縁石と礎石を伴うものであり、建物に付属する取り付けの回廊・踊り場などの施設であったものとして推察されるところである。石灰岩製の石敷きは側溝の底板であった。

石敷きの細粒砂岩製のものは5基（SS01、SS02、SS03-B、SS04-A・B）が存在し、小規模な構築物を囲む回廊様な構造とみられ、当該構造は切り合っている事から新旧、二時期が存在するようである。石敷きの石灰岩製のものは1基（SS03-A）のみであったが、後述する首里第一尋常高等小学校の排水溝と関係し、一連のものとみられる。埠敷きは1基（SS05）のみで、戦災やその後の造成で破壊された状態で検出されている。以上の6基を石敷き・埠敷き（SS）とした。

土壌（SK）

人為的な堀り込みや自然地形の部分的な落ち込みなどを総称して土壌とした。土壌は北西側に集中する傾向が窺え、検出直後に他の構造と同レベルで確認されたもの、掘り下げの途中から確認されたもの、完掘後に確認されたものの3種類があった。これらの土壌は3基（SK01～SK03）が確認されている。SA19、SA20、SA28は完掘後に最終段階で倉庫内部であることが判明し、SK01と名称を付けたものもある。

SK02は岩盤の産みなどを利用し、造成土（遺物包含層を二次的に使用）で埋めたものである。造成土（SK02）直上にSA15、SA31の石積みがなされている。

SK03はSA24の石積みと同レベルで検出されたものであるが、SA24の西側を一帯の産地を埋めた造成土（遺物包含層を埋土に用いる）である。SK03を発掘した結果、SA24の外縁の石積みが検出された。以上の3基を土壌（SK）として処理した。その他、SK03と同時期の土砂が北西側にもある程度の広がりを持って分布していたことなどから“SK03の延長（旧名称：SK04）”として取り扱った。

溝（SD）

建物や石積みに付属する溝と最終的に便所となったものなどをSDと記号で表記した。建物に付属する排水溝で東西方向に延びるものは3基（SD06-A・B、SD07-A）が存在する。南北方向に延びるものも3基（SD04-A、SD05、SD07-B）が確認された。他に岩盤を溝状に掘り込んだ琉大の建物基礎（布堀り基礎跡）2基（SD01、SD02）や近代～現代の便所跡2基（SD03、SD04-B）が存在していた。以上の10基を溝とした。

建物（SB）

首里第一尋常高等小学校の頃の便所に伴う施設（基礎石、縁石、踊り場など）がセットで検出されたものを建物とした。1基（SB01）のみであった。SB01の建物の中にはSD04-Bの便所跡が伴っている。

石列（SR）

擁壁跡の裏込目石や建物の縁石が列状に検出されたものを石列とした。擁壁の裏込目石は北東隅から南北方向に弧状に曲がりながら延びていたものであり、1基（SR01）が確認されている。建物の縁石は石敷き構造（SS01、SS02、SS03-B、SS04-A・B）の東南隅から検出された。京の内跡発掘調査報告書（I）で、東西方向に延びたものが1基（SR02）と報告したが検討の結果、前述した石敷き構造（SS01ほか3基）と関連する一連のものと判断されたことから当該構造はSR01の1基となった。

以上の58基の構造は一連のものもあるが個別の機能を尊重したため重複するものなども含まれている。大雑把に大別すると以下のa～dまでの4種類に分類と整理ができるようである。

a. 石積み（31基）

イ. 切り石積み（SA03、SA04、SA05-B内・外縁、SA06～SA08、SA10～SA15、SA17、SA18-A・B、SA19、SA20、SA25-A・B、SA27、SA30～SA35）…27基。

- ロ、野面石積み（S A24）…1基。
- ハ、排水施設を伴う切り石積みと関連する遺構（S D04-A、S D06-A）…2基。
- ニ、押所の一部となる切り石積みと関連する遺構（S A25-A・B）…2基。
- b. 建物および付属遺構（9棟）
- イ、基壇を有する建物の面石（S A01・S A01背面）…1棟。
- ロ、排水溝や階段に取り付けられた建物2棟。1棟目（S A09、S D05）、2棟目（S A26、S D07-B、S D06-B、S A16、S A22、S D07-A、S S03-A）…2棟。
- ハ、便所を伴う建物遺構は3棟が存在する。1棟目（S A02、S D03）、2棟目（S D03、S D03関連施設）、3棟目（S B01、S D04-B）…3棟。
- ニ、石敷き・縁石・礎石を伴う遺構（S S01、S S02、S S03-B、S S04-A・B）…2棟。
- ホ、倉庫遺構（取り付け階段を含む）（S A19・S A20、S A28）…1棟。
- c. 土壙（3基）
- イ、倉庫遺構と重複するSK01（S A19、S A20、S A28）…1基。
- ロ、土壙直上に遺構が存在するSK02（S A15、S A31）…1基。
- ハ、石積みを埋めたSK03（S A24）…1基。
- d. その他（6基）
- イ、埴敷き遺構（S S05）…1基。
- ロ、石積みの裏込目石の集石遺構（S A21、S A23）…2基。
- ハ、擁壁の裏込目石の集石遺構（S R01）…1基。
- ニ、建物の基礎（布堀り基礎）跡。溝（S D01、S D02）…2基。
- 以上のように大別すると49基が遺構として整理ができる。
- 次に切り石積みの外面と内面の対応関係について第2表で整理した場合、上記a.イの切り石積み27基の内、倉庫跡の石積みS A19・20の2基、琉大の石積みS A03の1基の合計3基を除外して、新たに確認されたS A05-B（内・外側）の2基を追加すると26基となるが、切り石積みの対比・相関関係について検討したところ第2表のような結果が得られた。

第2表 切り石積み(区画石積み・御嶽)の外面と内面の関係

南北軸方向		東西軸方向			
NO.	外面(外側)	内面(内側)	NO.	外面(外側)	内面(内側)
①	SD04-AとSA32か	SA18-A	①	SA04	未確認
②	SA07	SA12	②	SA05-A(外面)	SA05-A(内面)
③	既に破壊され消失	SA11	③	SA05-B(外面)	SA05-B(内面)
④	既に破壊され消失	SA13	④	SA06	SA10か
⑤	SA15(西側)	SA15(東側)	⑤	SA08	SA10か
⑥	消失	SA25-B(御嶽)	⑥	SA14	既に破壊か。SA21・23か
⑦	SA30	未確認	⑦	SA21(既に破壊か)	SA33
⑧	未検出	SA31	⑧	SA17・SA18-B・SA25-A(御嶽)	既に破壊
⑨	既に破壊され消失	SA32	⑨	SA27	未確認
⑩	既に消失	SA34	⑩	SA31	未確認
			⑪	SA35	既に破壊
合計 10基			合計 11基		

B. 各時期別の遺構

発掘調査時点で出土した陶磁器を基本に各時期別に遺構に時間軸を設けて整理すると、第Ⅰ期～第VI期（第3図）までの6時期に大別されるようであるが各遺構のトレンチ内から出土した陶磁器類を主とする遺物の整理が終了しないと正式な時期を絞り込むことができないので暫定なものとして考慮されたい（第3図）。

- イ. 第Ⅰ期（14世紀前半～14世紀後半）……（『首里城跡 - 京の内跡発掘調査報告書（IV） - 平成6年度調査の遺物編（1）』収録の第7図参照。）
- ロ. 第Ⅱ期（14世紀終末～15世紀前半）……（『首里城跡 - 京の内跡発掘調査報告書（IV） - 平成6年度調査の遺物編（1）』収録の第38図参照。）
- ハ. 第Ⅲ期（15世紀中頃）……………（『首里城跡 - 京の内跡発掘調査報告書（IV） - 平成6年度調査の遺物編（1）』収録の第69図参照。）
- ニ. 第Ⅳ期（15世紀後半～16世紀初頭）……（第3図）
- ホ. 第Ⅴ期（16世紀前半～19世紀後半）
- ヘ. 第VI期（19世紀終末～昭和58年）
 - a. 同期前半（19世紀終末～昭和20年）
 - b. 同期後半（昭和24年～昭和58年）

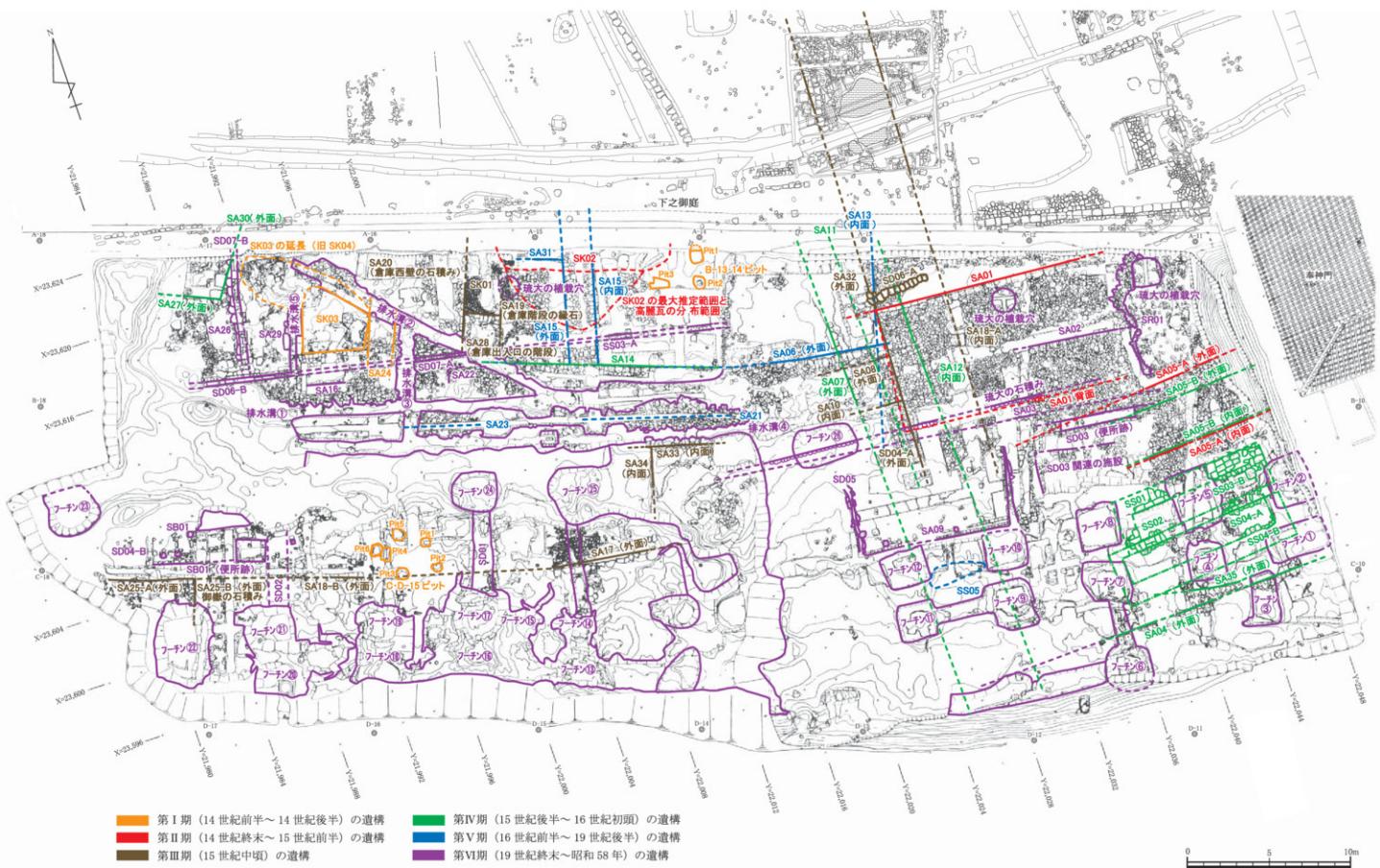
第3表 平成6年度 京の内地区検出遺構と遺構の時期

第Ⅰ期 (14世紀前半～ 14世紀後半)	第Ⅱ期 (14世紀終末～ 15世紀前半)	第Ⅲ期 (15世紀中頃)	第Ⅳ期 (15世紀後半～ 16世紀初頭)	第Ⅴ期 (16世紀前半～ 19世紀後半)	第VI期前半 (19世紀終末～ 昭和20年)	第VI期後半 (昭和24年～ 昭和58年)
SA24	SA01	SA08,SA10	SA04,SA35	SA06	SA26,SD07-B	SA03
SK03	SA05-A	SA17	SA05-B	SA13	SA29、排水溝⑤	排水溝①～④
SK03の延長 (旧SK04)	SK02	SA18-B	SA07,SA11,SA12	SA15	SA16,SD06-B	SD01,SD02、 SR01
B-13・14ピット	SA25-A,SA25-B	SA14	SA21,SA23	SA22,SD07-A	フーチン	
C・D-15ピット	SA33,SA34	SA27,SA30	SA31	SS03-A		
	SA18-A,SA32、 SD04-A	SS01,SS02,SS03-B SS04-A,SS04-B	SS05	SA02		
	SD06-A		B-12・13 北側トレンチ	SD03		
	SK01			SA09,SD05		
				SB01,SD04-B		

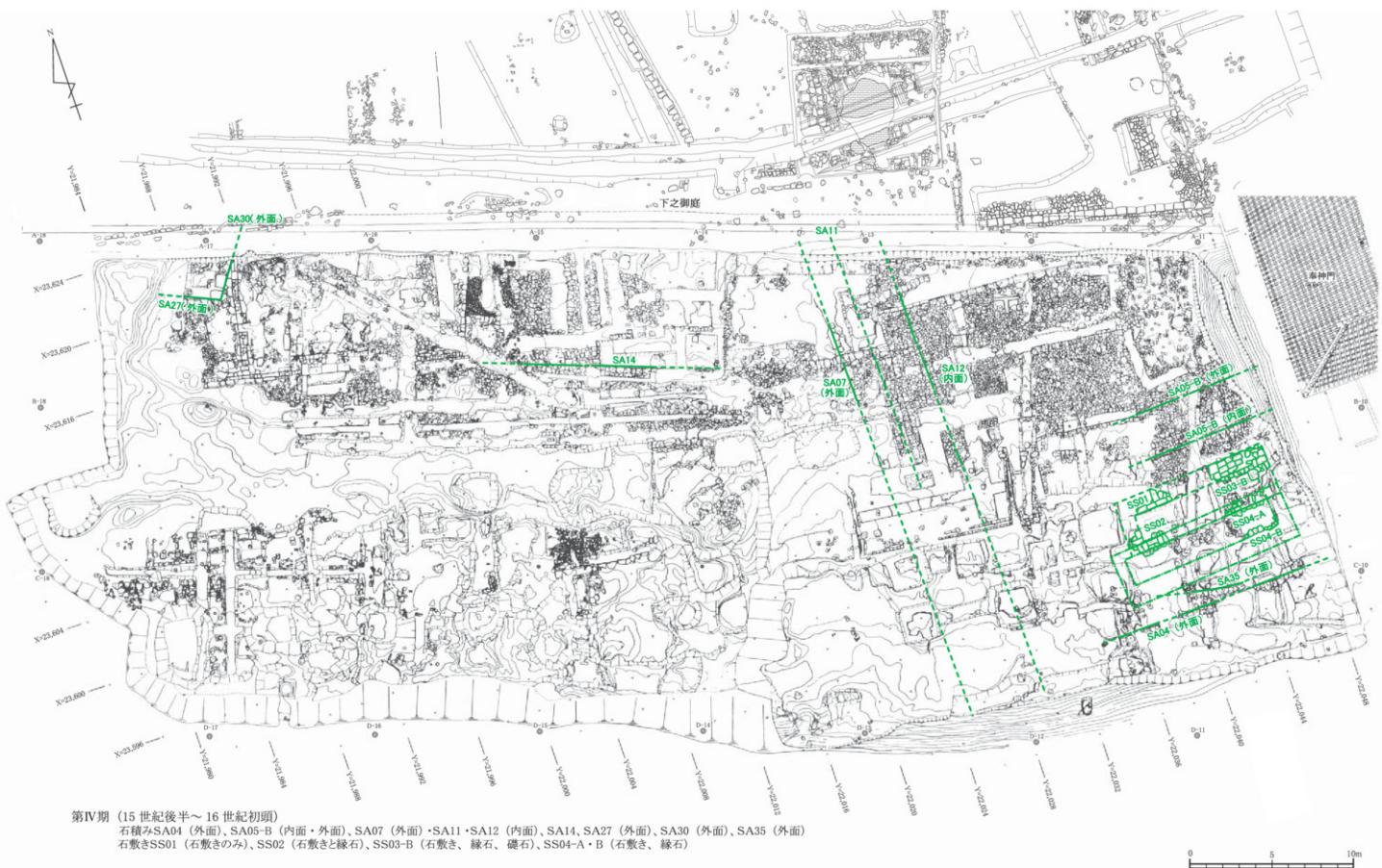
以下、第Ⅳ期の各遺構周辺に設定した試掘トレンチ及び試掘坑内や遺構に伴う出土遺物や、遺構と関連する遺物について報告する。

遺構検出の目的で、遺構周辺に設定した試掘トレンチ及び試掘坑から出土した遺物が直接的に遺構の時代と特定することはできないが、遺構の構築時期や造成時期を出土した陶磁器類などから相対年代として、ある程度は推定する事ができる。

首里城内の他の地区と同様に京の内地区内の遺構についても、遺構周辺に設定した試掘トレンチ及び試掘坑内からも造成層（造成土盤や埋土を含む）や擾乱層（沖縄戦の砲弾着弾及び炸裂による再堆積を含む）などが、複数枚の堆積層となつて確認されている。これらの遺物を含む造成層や擾乱層から出土した遺物からも遺構の履歴（構築の時期から遺構の廃棄時期）を知る上で、貴重な遺物である事から当該層より出土した遺物も掲載した。なお、第Ⅴ期以降は、次回の報告に委ねることとする。



第3図 遺構全体図



第4図 京の内北地区第IV期（15世紀後半～16世紀初頭）遺構の推定復元

第三章 遺物

イ. 第IV期（15世紀後半～16世紀初頭）・（第4図～第61図）

当該期の遺構として、SA04、SA35、SA05-B、SA07、SA11、SA12、SA14、SA27、SA30、SS01、SS02、SS03-B、SS04-A、SS04-Bの14基の遺構がある。出土した遺物の取り扱いについては、重複遺構の切り合い関係を把握する目的で設定した試掘トレンチや試掘坑より出土した遺物の中で、單一遺構に帰属すると判断された遺物は、該当する遺構に取り込んである。その為、遺構はあるが遺物が出土していない遺構もあるのでこれに留意されたい。

以上、これらの遺構出土の遺物で当該遺構の時期に比定できる資料や特徴的な遺物を抽出して以下に記述する。

石積み SA04 からは、当該遺構の遺物として青磁茶托（第7図14）、青花外反口縁碗（同図15）、中国産褐釉陶器壺（同図20～22）、タイ産（土器・炻器・褐釉陶器。第8図1～6）などが出土している。その中で、青磁茶托については、首里城跡黄金御殿地区（註1）や那覇市の渡地村跡（註2）などから出土しているが、復元資料が皆無であった。今後の類似資料の発見や資料の増加を期待して、参考までに青磁茶托の図上復元を試みた。その他に注目される資料として、第5図4の埠瓦に団扇形（軍配形）の刻印を施して器面に赤茶色の塗料を施したもののが確認されている。同様の団扇形（軍配形）の窯印が湧田古窯跡（註3）から出土している。

石積み SA35 の時期を明確に特定できる資料は得られていない。

石積み SA05-B の時期に比定できる遺物として、青花皿（第12図5）と華南彩釉陶器（同図6・7）などが出土している。石積み SA05-B は、東西方向に一部は削平された岩盤の上から野面石積みを二列に積み上げた時期（14世紀後半～15世紀前半）と第IV期（15世紀後半～16世紀初頭）の二時期に渡って利用（註4）したようである。なお、第12図4の青花碗口縁破片は岩盤直上の褐色土層から出土となっているが、石積み SA05-B を検出するため、周辺の栗石除去作業中か調査時の降雨などで流れ込んできたようである。

石積み SA07 の遺構の時期を特定できる資料は得られていない。

石積み SA11 の時期を示す資料として、華南彩釉陶器とタイ産土器（半練）が得られているが、細片資料の為、図化を省略して第27表に示した。

石積み SA12 の時期に比定できる資料として、青磁碗及び皿（第16図4・5）、華南彩釉陶器（同図6）などが得られている。

石積み SA14 の時期として比定した資料は、青磁酒会壺（第20図21～24）及び青磁茶托（同図26）、白磁杯（第21図1）、華南彩釉陶器（同図3・4）、タイ産（土器・炻器・褐釉陶器。第24図1～5）などが得られている。その他に当該遺構の時期から外れるが、第17図2のグスク系土器の底部に薺筵の圧痕がみられる資料や高麗青磁の皿か碗（第24図6）が得られている。

石積み SA27 の時期に比定できた資料は、青磁直口口縁皿（第30図10・11）、青花碗（第32図4）及び同壺（同図5）、中国産褐釉陶器壺（第33図4・5）、タイ産（土器・褐釉陶器。第34図1～3）などがある。当該遺構の時期から外れる資料で特徴的な資料として、青磁皿の見込みに「顧氏」（註5）の銘が陽刻で施された資料が得られている。その他に二次的な火熱で溶解した錢貨の塊（第37図8）が得られている。この錢貨の塊を「洪武通寶（明、1368年初年鑄造）」一枚の重量を4.5gを基準にして、錢貨の塊の重さ1246.84gを4.5gで割ると、洪武通寶277枚相当分の重量であることが確認できた。錢貨の塊の中には洪武通寶が2・3枚確認できる。錢の重なり具合から錢の孔に繩などの紐を通して袋や容器に保管されたものとみられる。二次的な火熱を受けて溶解したガラス小玉の塊（第37図12）も出土している。

石積み SA30 と上記の石積み SA27 と直角に切り合いの関係にある。その為、両遺構から出土した遺物を可能な限り堆積層の層序を検討して分別を行ったが、分別ができない資料については、「石積み SA27・SA30」と項目を追加して両者を整理して報告する。

石積み SA30 の時期に比定できる資料は得られていないが、当該時期から外れた資料の中には、青磁大合子の身部口縁破片（第38図2）や骨製賽子の未製品（同図5）などが出土している。

前記したように切り合い関係にある石積み SA27・SA30 から分別ができなかつた資料で、両遺構に時期に比定された遺物は確認できなかつたが、当該遺構の時期から外れた資料の中から比較的に大きな破片資料や特徴的な資料として、青磁雷文帶碗と大鉢（第 39 図 1・2）を図化した。その他にガラス小玉 2 点（同図 3・4）を図示した。

石敷き SS01、SS02、SS03-B、SS04-A、SS04-B の五つの遺構は、重複した形で遺構が利用されている。その為、石敷き I 期と石敷き II 期に分けられている（註 6）。石敷き I 期は SS01・SS03-B、SS02・SS04-A の四つ遺構で、石敷き II 期が SS02・SS04-A、SS04-B の三つの遺構で構成され、石敷き I 期と II 期の二つの時期において共通して利用された石敷きは SS02・SS04-A の二つの遺構である。これらの石敷き SS01、SS02、SS03-B、SS04-A、SS04-B の遺構から出土した遺物は、時代幅が大きく遺構の時期を 15 世紀末～18 世紀と幅を持たせてある。これらの石敷き遺構で最も古い時期と思慮された資料を基にして第 IV 期（15 世紀後半～16 世紀初頭）に設定した。以下、石敷き SS01、SS02、SS03-B、SS04-A、SS04-B の五つの遺構については、石敷き I 期と石敷き II 期に分けて記載する。

石敷き SS01（石敷き I 期）の時期に比定できる主な資料として、青花碗及び小碗（第 45 図 3・4）、華南彩釉陶器（同図 6・7）などがある。次に石敷き SS03-B（石敷き I 期）の時期を示す資料は確認されていないが、注目される資料が出土している。これは第 52 図 12 の「洪武通寶（明、1368 年初鋤造）」の背面に重なって出土した「皇宋通寶（北宋、1038 年初鋤造）」の銭鑄型の原型（原本）である。銭鋤造の際の銭形の基となる資料で、完全に「宋」・「通」・「寶」の字款の左右が反転して陰影の字款となっている。そこで当該資料の拓影を陰影と陽影を反転（白を黒に変換）し、『日本出土銭總覽 1996 年版（永井久美男編集 兵庫埋蔵銭調査会 1996 年 6 月 10 日第 2 刷発行）』で照合を実施したところ「皇宋通寶」の銭鑄型であることが確認できた。

この発見により首里城内で渡来銭である中国の公鋤銭（官鋤銭、或いは正規銭）を鋤写した模鋤銭（島銭）でもって新たに鋤造（複製の銭を鋤造）を行ったことを示す重要な資料である。

石敷き SS02（石敷き I 期と II 期の時期で重複）の時期に比定される資料として、白磁直口縁皿（第 55 図 2）のみが出土している。石敷き SS04-A（石敷き I 期と II 期の時期で重複）の時期に比定される遺物として、タイ産土器（第 56 図 1）・タイ産褐釉陶器壺（同図 2）が掲げられる。石敷き SS04-B（石敷き II 期）に比定できる資料として、中国産褐釉陶器（第 59 図 2・3）とタイ産土器（同図 4）が得られている。

註文献

- 註 1. 仲座久宜・羽方 誠・小橋川 剛『首里城跡－黄金御殿地区発掘調査報告書』沖縄県立埋蔵文化財センター 平成 19（2007）年 3 月。
- 註 2. 中山 晋・片桐千重紀ほか『渡地村跡－臨港道路那 1 号線整備に伴う緊急発掘調査報告』沖縄県立埋蔵文化財センター 平成 19（2007）年 3 月。
- 註 3. 大城 慧・島袋 洋・金城亀信ほか『湧田古窯跡（I）－県庁舍行政棟建設に係る発掘調査－』沖縄県教育委員会 1993 年 3 月。
- 註 4. 金城亀信『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（III）－平成 6 年度調査の遺構編』沖縄県立埋蔵文化財センター 平成 23（2011）年 3 月。
- 註 5-a. 亀井明徳「日本出土の明代青磁碗の変遷」『鏡山先生古希記念古文化論叢』1980 年発行によると亀井氏は、「顧氏」銘の落款をもつ碗については、15 世紀後半を遡らないことを指摘している。
- 註 5-b. 沈 岳明・小林 仁ほか『国際交流企画展 碧緑の華・明代龍泉窯青磁－大窯楓洞岩窯址発掘成果展』大阪市立東洋陶磁美術館 2011 年 9 月刊行に、小林 仁氏の作品解説で青磁刻花蓮草文“顧氏”銘碗の解説で「・・・顧氏といえば、『乾隆龍泉志』に記載のある正統年間（1435～49 年）に龍泉で青磁生産を行った顧仕成が想起されます。楓洞岩窯址の主に明代早期の地層から「顧氏」あるいは「顧」銘の資料が少なからず出土しており、顧氏一族は龍泉において早くから力のある窯主であった・・・」と記している。
- 註 6. 註 4 と同じ。

参考文献

- 永井久美男編 1. 中世の民間鋤造銭「島銭」と「線刻銭」第 3 章 中世の出土銭をめぐる考察『中世の出土銭 補遺 I』兵庫埋蔵銭調査会 1996 年 4 月 5 日発行。

第4表 第Ⅳ期 出土遺物状況

出土地 遺物名	SA04	SA35	SA05-B	SA07	SA11	SA12	SA14	SA27	SA30	SA27-30	SS01	SS03-B	SS02	SS04-A	SS04-B	合計	割合
沖 縄 産	土器	4		8		3	22	25	5	2	4	3				3	79 1.20%
	陶質土器	1		1			10	4	1		8					25 0.38%	
	瓦質土器	2					1	7	16	1	9	2	1			39 0.59%	
	屋瓦	100		24	11	3	32	624	238	2	23	574	29	6	5	56 1727 26.34%	
	埠瓦	6		2			3	13	5		1	78	2	1		6 117 1.78%	
	漆喰			1	1											2 0.03%	
中 国 產	焼土							2								2 0.03%	
	青磁	59	2	3	9	3	8	169	191	8	12	47	5	5	3	3 527 8.04%	
	白磁	2			1			10	7	6		1	1	1		29 0.44%	
	青花	12		2	1		1	12	10			10	1			49 0.75%	
	彩釉陶器	1		2	1	1	1	4			6					16 0.24%	
	瑠璃釉										1					1 0.02%	
	黒釉陶器	3						1	4		1					9 0.14%	
	中国産 梶輪陶器	173		15	30		36	433	637	18	27	410	40	20	89	201 2129 32.47%	
	タイ産土器 (半縫)	3				1		5	2		2			1	1	15 0.23%	
タ イ 産 ・ 朝 鮮 産	タイ産 炻器	2						2								4 0.06%	
	タイ産 梶輪陶器	63		6	10	10	6	50	127	2	4	71	6	9	4	8 376 5.73%	
	高麗青磁							1								1 0.02%	
	須恵器							2								2 0.03%	
本 土 産	中世陶器								2							2 0.03%	
	本土産磁器	9						2	5	2		43	1			1 63 0.96%	
	本土産陶器	1		1	1		3	5			6	2				1 20 0.31%	
沖 縄 産	沖縄産 施釉陶器	8					11	5	10			42	1	1		1 79 1.20%	
	沖縄産 無釉陶器	20		4	3	3	13	4		1	27	1				76 1.16%	
貝 製 品							3				1	1				5 0.08%	
	骨製品						2	1	1							4 0.06%	
石・ 器・ 石 製 品	石・ 器・ 石 製 品	8		12	3	1	1	32	43	2		68	19	22	1	7 219 3.34%	
	円盤状製品							8	1		3	3				16 0.24%	
金 屬 製 品	金属製品	63		2	4	3	2	104	89	12	6	81	3	12	1	13 395 6.02%	
	錢貨	15	1	99	3			12	9	4		52	23	10	132	111 471 7.18%	
鍛 冶 関 連							1				1					2 0.03%	
	ガラス玉						3	3	9	3						18 0.27%	
ガ ラ ス 製 品	ガラス製品	7		2			7	3			6	6	1	1		33 0.50%	
	近・現 代	2										1				3 0.05%	
炭 化 した 木 片											2					2 0.03%	
	合 計	564	3	172	87	25	123	1561	1430	70	82	1554	147	89	238	412 6557	100%
割 合		8.60%	0.05%	2.62%	1.33%	0.38%	1.88%	23.81%	21.81%	1.07%	1.25%	23.70%	2.24%	1.36%	3.63%	6.28%	

第IV期（15世紀後半～16世紀初頭）・（第5図～第61図）

(1) 石積みSA04の出土遺物（第5図～第10図、第5表～第15表、図版1～図版6）

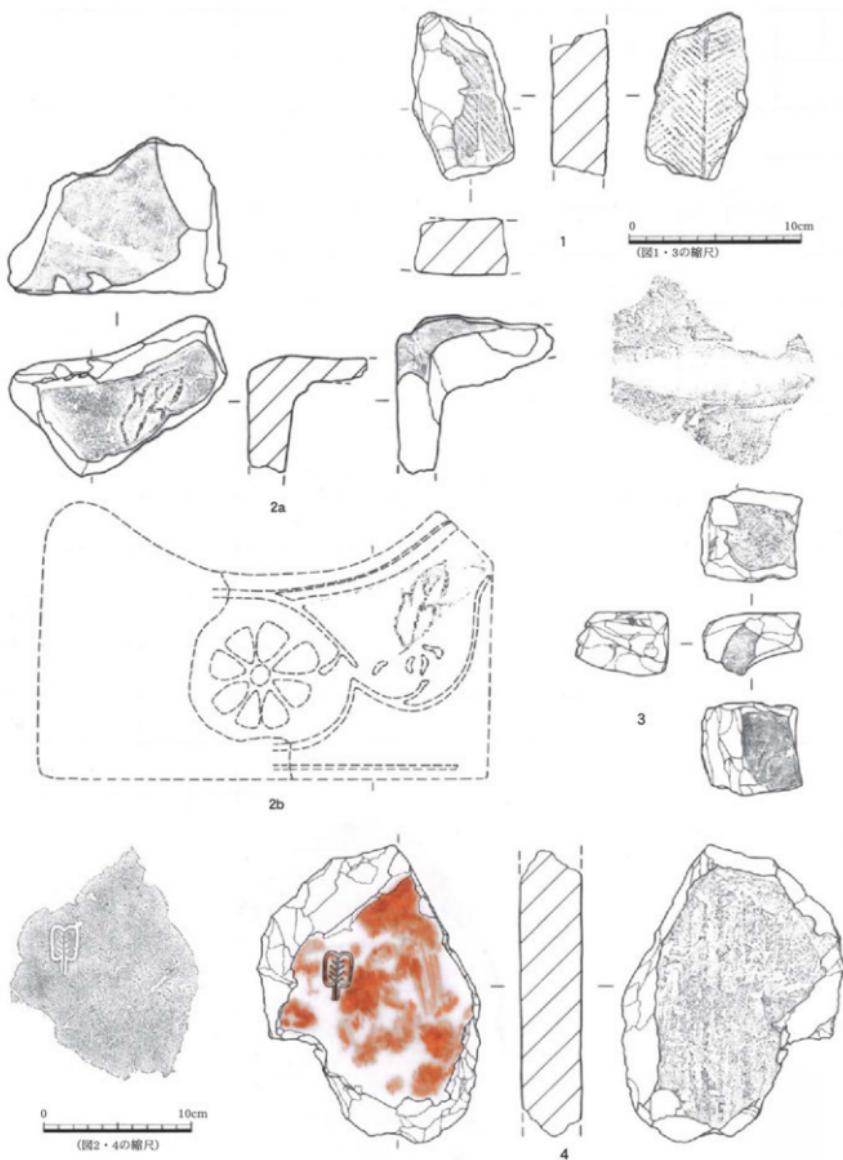
石積みSA04から出土した遺物の種類は、第4表に示したように総計で564点（≈100%）が得られている。出土遺物の内訳は、土器4点（0.71%）、瓦類（屋瓦・埠瓦）106点（18.79%）、青磁59点（10.46%）、白磁2点（0.35%）、青花12点（2.13%）、黒釉陶器3点（0.53%）、中国産褐釉陶器173点（30.67%）、タイ産（土器・炻器・褐釉陶器）67点（11.88%）、本土産磁器9点（1.60%）、沖縄産施釉陶器8点（1.42%）、沖縄産無釉陶器20点（3.55%）、金属製品63点（11.17%）、ガラス製品7点（1.24%）の24種類（第4表）が確認されている。輸入陶磁器（中国産、タイ産）の占める割合は、56.38%であった。

当該遺構の時期に伴う遺物として示すことができる資料は、青磁茶托（第7図14）と青花外反口縁碗（同図15）、中国産褐釉陶器壺（第7図20～22）、タイ産（土器・炻器・褐釉陶器）第8図1～6）などがある。

なお、出土遺物の大半は細片化した資料が多く、その中から比較的に大きな破片資料や特徴的な資料を図示（第5図～第10図）した。

第5表 石積みSA04 屋瓦・埠瓦出土状況

層序				C-D-10,D-11 SA04					合計	
種類・分類	高麗系	第1層 覆土	琉大の送水管内 第1層客土 (淡黄茶色 混疊土層)	第2層 石積み 外側 暗褐色 土層		内側東南部 第2層 黒色土層		裏込め 石内 第3層		
				軒平	丸瓦	平瓦 (整形処理)	平瓦	平瓦	合計	
屋瓦	高麗系	灰色	漆喰無し	1					3	
							1	1	2	
								1	1	
				1			2		3	
	大和(古)	灰色	漆喰無し	4				3	1	8
								1	1	
	大和	灰色	漆喰有り(両面)							
	大和 (近代のもの)	丸瓦	漆喰有り(片面)							
明朝系	丸瓦	軒平	赤色	漆喰有り(片面)					1	1
		灰色	漆喰有り(片面)				1		3	4
								3	5	
		褐色	漆喰無し			1	1		2	4
				1						
	平瓦	赤色	漆喰有り(片面)			1		1	2	
								1	2	
		灰色	漆喰無し							
				1	5	1		30	37	
埠瓦	III類	褐色	漆喰無し					1	1	
				2					2	
	形状不明a	赤色	漆喰有り(片面)			4	1		5	
		灰色	漆喰無し	4	7				11	
合計				12	24	7	3	54	100	
埠瓦	III類	Ab	灰色	漆喰無し					1	1
		形状不明a	灰色	漆喰無し					1	1
		赤色			1				1	2
		形状不明b	灰色	漆喰無し					1	1
合計				0	2	0	0	4	6	



第5図 石積み SA04出土品① 瓦類 屋瓦：1~3、埠瓦：4

*屋瓦2bは、上原静「沖縄諸島出土の高麗系瓦について」

『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第26号2002年3月刊行などを参考にして作成した。

第6表 石積みSA04 屋瓦・埠瓦観察一覧

押因番号 図版番号 遺物番号	名称、 仮称	観察事項	出土地点 出土層
第5図 図版1 1	屋瓦、 高麗系、 軒平瓦	軒平瓦の凸面に有軸羽状文を施す。羽状文が部分的に交差して格子目状となる。羽状文のうえに指印痕が一部観察される。凹面には系切痕と布目压痕がみられる。素地:灰色の細粒子で、微細な石英を多量に含む。種:茶褐色の物質を含む。色調:表面が灰褐色で、裏面は灰色を主体とするが部分的に灰褐色を帯びている。焼成:堅緻。	SA04 裏込め 石内 第3層
# # 2	屋瓦、 高麗系、 軒平瓦	幅広瓦当型。瓦当面の上縁に沿うように平瓦が取り付けられている。瓦当面中央に見る蓮華文を欠いているが、瓦当面右側に型引で起こした葉を上向方に施している。上原静分類の幅広弧形状瓦当(Ⅰ型)蓮華文4種(註1)である。瓦当内面は擁削りを施し部分的に指印痕がみられる。平瓦の凹面部分には布目压痕を複数部に分けて施している。瓦当との接合部分は擁削りで形成する。平瓦右側面は瓦当側面と同様に平坦に擁削り取って瓦当と一緒に化させている。素地:灰色の細粒子で、微細な石英を少量含む。粗い石英と茶褐色の物質を僅かに含む。色調:外側は淡茶色で、内面が淡茶褐色を帯びる。焼成:良好で堅い。	C-D-10 SA04 第1層 覆土
# # 3	" "	" "。瓦当面右側上面のみが僅かに我存。上原静分類の幅広弧形状瓦当(Ⅰ型)の範疇にある。瓦当上面は擁削りで調整。瓦平の凹面部分および瓦当接合部分は擁削りで形成する。平瓦右側面と瓦当側面部分は平坦に擁削り取っている。瓦平凸面部分は擁削り以外に部分的な指印痕がみられる。素地:灰褐色の細粒子で、微細な石英を少量含む。稀に粗い茶褐色の物質を含む。色調:外側は灰褐色で、内面が暗褐色を帯びる。焼成:良好で堅い。	SA04 裏込め 石内 第3層
# # 4	埠瓦 皿類 Ab	方埠(正方形)の平敷式の埠瓦とみられる。表面は平坦な滑面となる。表面には朱色を意識した赤茶色のきめの繩かい粘土を薄く塗布するが大半が剥落する。团扇形(軍配形)の刻印(註2)を施す。裏面は複数の成形で指印痕を主体とし部分的に麗ナデや指印痕がみられる。素地:明灰色の細粒子で、粗い灰黒色の物質を多く含む。微細な石英を少量含む。僅かに粗い雲母片が混入する。色調:表面は暗灰色、裏面が灰褐色を帯びる。焼成:良好で堅い。	SA04 裏込め 石内 第3層

註文献

註1. 上原 静『沖縄諸島出土の高麗系瓦について』『読谷村立歴史民俗資料館紀要』

註2-a. 团扇形瓦質製品が湧古店窯跡から出土している。『湧古店窯跡(1) - 県立舍行政棟建設に係る発掘調査 -』沖縄県教育委員会 1993年3月。同様の团扇形瓦質製品が壇に印して刻印されたようである。

註2-b. 上原 静『琉球の埠と焼瓦』『南島考古』第30号 沖縄考古学会 2011年5月。

第7表① 石積みSA04 青磁出土状況

器種・部位	層序	C-D-10,D-11 SA04						合 計
		第1層 覆土	琉大の送水管内 第1層客土(淡黄 茶系混土層)	第2層石積 内側外側褐色 土層	内側東南 部第2層 黒色土層	裏込め 石内 第3層	間層(灰黒色混 土層)第3層 bの直下	
青磁	口縁部～底部	直口	重文 片切り彫り cタイプ	有文			1	1
		外反	無文	1	2	5		8
			雷文 片切り彫り		1	1		2
			不明			1		1
		直口	外面:雷文・片切り彫り 内面:刻花文・片切り彫り			1		1
			無文	1				1
			文様不明					1
		玉縁	蓮弁 片切り彫り			1		1
			蓮弁・繩			1		1
		脚部	外面:蓮弁・繩彫り、内面:有文 有文			1		1
			有文不明			3		3
			無文			1		1
	底部	aタイプ	無文			1		1
		cタイプ	有文			1		1
		eタイプ	有文	1				1
		fタイプ	無文			1		1
		hタイプ	有文			1		1
			文様不明			1		1
黒	口縁部	口折	外面:蓮弁・不明、内面:無文			1		1
		外反	外面:蓮弁・片切り彫り 内面:菊文・丸彫り			1		1
	脚部		外面:無文、内面:有文不明			1		1
			無文			2		2
			双魚文			1		1
	底部		有文不明			1		1
			無文			3		3
盤	口縁部	棱花	外面:無文、内面:文様不明	1				1
	脚部		外面:茶文、内面:蓮弁・丸彫			3		3
			外面:文様不明、内面:蓮弁・丸彫			1		1
	大鉢	口縁部	直口	外面:蓮弁・片切り彫り 内面:刻花文・片切り彫り		1		1
おどし蓋?	-		無文		1			1
	茶托	口縁部	刻花文・片切り彫り			1		1
合 計				6	1	8	0	43
								59

第7表② 石積みSA04 青花・中国産褐釉陶器出土状況

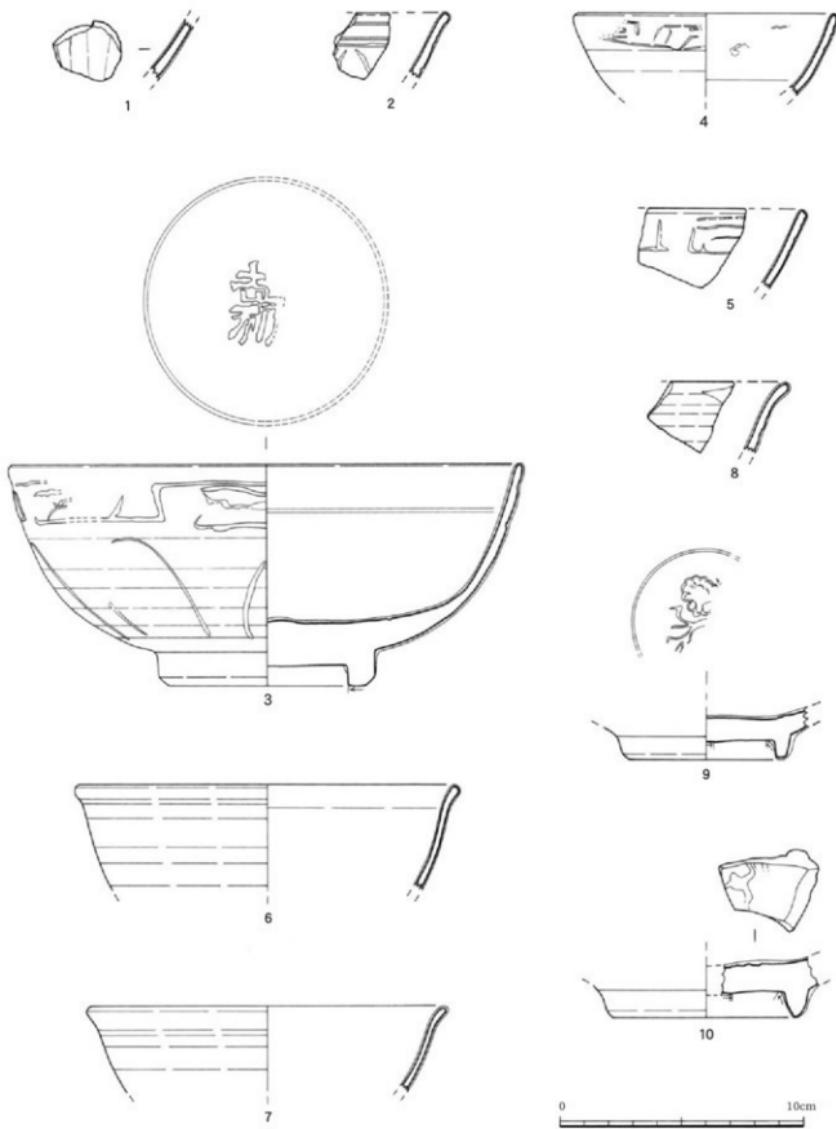
種類・器種・部位		層序	C-D-10.D-11 SA04					合計
			第1層 覆土	疏大の送水管内第1層客土(淡黄茶色混土層)	第2層石積み外 側暗褐色土層	内側東南部第2 層黒色土層	裏込め石内 第3層	
			口縁部	外反		1		
青花	碗	直口					2	
					1		3	
		胸部					2	
		底部					2	
		皿				1	1	
		合子	畫or器台	1			1	
合計			1	1	1	0	9	12
中国産 褐釉陶器	壺	方形 「ク」の字状	1				1	
			1				1	
		頸部					2	
		胴部	44		2	18	1	101
		脚部	有文	1				1
		底部			1			1
合計			47	2	19	1	104	173

第8表① 石積みSA04 青磁観察一覧

単位:cm

持因番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 高さ 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・輪色等)			出土地点 出土層
第6図 図版2 1	錦 蓮弁文	胴部	— — —	器形:逆「ハ」の字状に開く錦蓮弁文。文様:簾彰りで錦蓮弁文を描く。素地:光沢のある淡灰白色の微粒子で微細な気泡痕が多くみられる。輪色:淡黄緑色で、買入はない。龍泉系。13c後半～14c前半。			SA04 裏込め石内 第3層
〃 〃 2	無 錦 蓮弁文	口縁部	— — —	器形:口縁部が僅かに玉縁状に肥厚する無錦蓮弁文碗。文様:口縁部の肥厚帯直下に幅広の箇(4mm幅)削りを加えて肥厚を強調する。当該箇削りの直下に片切彫りで二条の界線で区画し、その直下に片切彫りの蓮弁文を描く。素地:淡灰白色の微粒子で微細な気泡痕が多くみられる。輪色:淡黄緑色で、買入はない。龍泉系。14c中頃～15c前半。			SA04 裏込め石内 第3層
〃 〃 3	雷 文 帶 碗	口縁部 ～底部	21.2 9.1 9.0	器形:高台分類:タイ。内湾直口縁の雷文帶碗。文様:高台脇から片切彫りで弁先のあたる蓮弁文を描き、蓮弁文の直上に片切彫りの雷文を描く。雷文は雑で反時計回りと時計回りに描いている。雷文の中重心部の文様も雑で漢数字の歪な「一」の字状に描く。見込みに圓線と「嘉」、若しくは「吉」・「利」とも判読できる文字を印刻する。素地:淡灰色の微粒子で、微細な黒色鉱物や気泡が僅かにみられる。輪色:淡黄緑色で、買入はない。輪は盤付まで施している。龍泉系の地方窯。14c後半～15c前半。			SA04 裏込め石内 第3層
〃 〃 4			10.8	器形:内湾気味の雷文帶碗。文様:口縁部に片切彫りで複数の雷文を反時計回りと時計回りに描いている。内面には片切彫りで刻花文を描く。素地:光沢のある淡灰色の微粒子で、微細な黒色鉱物や気泡が僅かにみられる。輪色:明黄緑色で、買入はない。龍泉系。14c後半～15c中頃。			SA04 裏込め石内 第3層
〃 〃 5			—	器形:直口口縁の雷文帶碗。文様:口縁部に片切彫りで複数の雷文を描いている。素地:灰褐色の細粒子で、微細な黒色鉱物や気泡が多くみられる。輪色:明黄緑色で、細かい買入がみられる。中国南部の窯。14c終末～15c中頃。			SA04 第2層 石積み外側 暗褐色土層
〃 〃 6	無 文 外 反 口 縁 碗	口縁部	15.8	器形:無文外反口縁碗で、口縁部は小さな玉縁状の肥厚をつくる。文様:なし。素地:灰褐色の細粒子で、微細な黒色鉱物や気泡が多くみられる。輪色:明黄緑色で、細かい買入がみられる。中国南部の窯。14c終末～15c中頃。			SA04 第2層 石積み外側 暗褐色土層
〃 〃 7			14.8	器形:無文外反口縁碗。文様:なし。素地:灰褐色の細粒子で、微細な黒色鉱物や気泡が多くみられる。輪色:淡青緑色で、細かい買入がみられる。中国南部の窯。14c終末～15c中頃。			SA04 第1層 覆土
〃 〃 8		底部	— —	器形:無文外反口縁碗。文様:なし。素地:灰褐色の細粒子で、微細な黒色鉱物や気泡が多くみられる。輪色:淡青緑色で、細かい買入がみられる。中国南部の窯。14世紀終末～15世紀中頃。			SA04 裏込め石内 第3層
〃 〃 9			7.0	器形:高台分類:タイ。蓮弁文、若しくは雷文帶碗の底部とみられる。文様:見込みに陽圓線と菊花花文を施す。素地:光沢のある淡灰白色の微粒子、輪色:濃緑色を外底面まで施釉後に輪軸に搔き取って蛇の目状とする。買入はない。龍泉窯。14c中頃～15c中頃。			SA04 裏込め石内 第3層
〃 〃 10	碗	底部	— — 8.2	器形:高台分類:タイ。蓮弁文、若しくは雷文帶碗の底部とみられる。文様:見込みに花文を施す。素地:淡灰白色の細粒子で、微細な気泡痕が多くみられる。輪色:淡緑色を外底面まで施釉後に輪軸に搔き取って蛇の目状とする。細かい買入がみられる。龍泉窯。14c後半～15c中頃。			SA04 第1層 覆土

注「-」:計測不可、「+」:接合の意



第6図 石積みSA04出土品② 青磁：1～10

第8表② 石積みSA04 青磁・青花・中国産褐釉陶器観察一覧

単位:cm

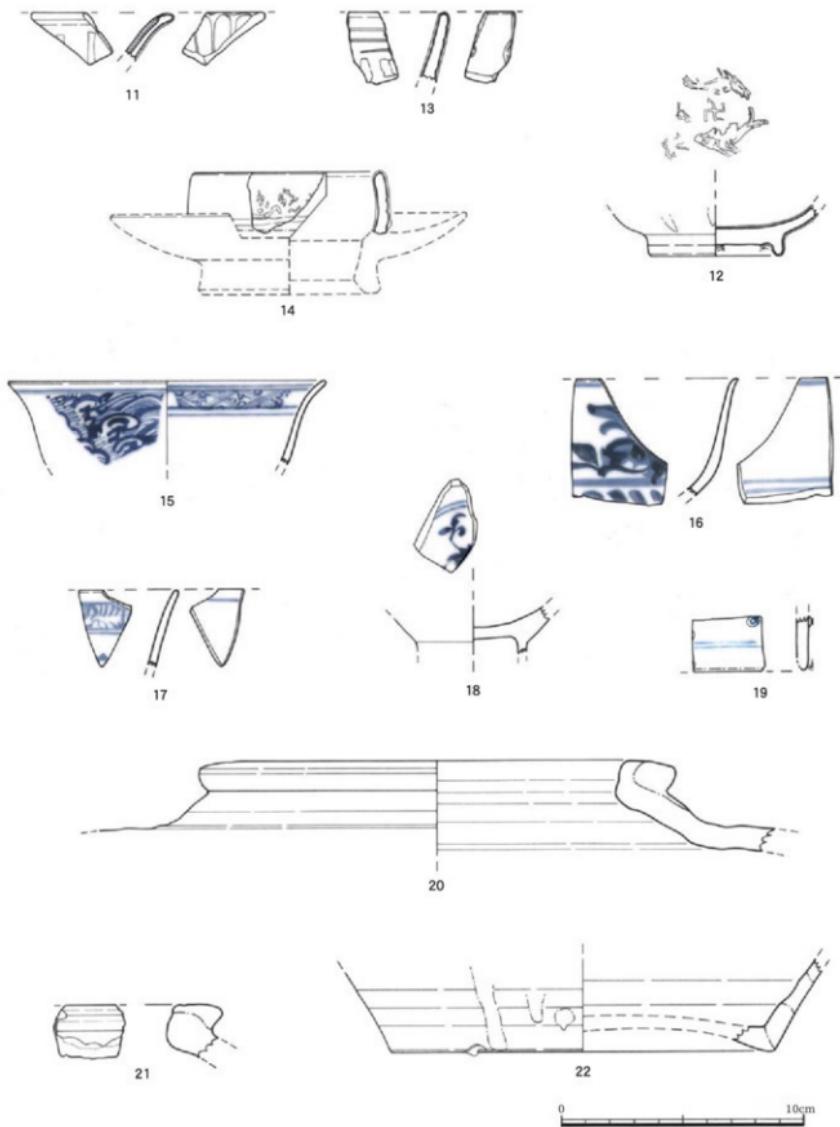
捕団番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第7図 図版3 11	蓮弁文皿	口縁部	—	器形:外反口縁皿。文様:外面は片切彫りで弁先のあいた蓮弁文を雜に描く。内面には深い丸彫りの菊花文と片切彫りの弁先を描ぐが難である。素地:淡白色の微粒子で、微細な気泡痕が僅かにみられる。釉色:濃緑色で、貫入はない。龍泉窯系。14c後半~15c前半。	SA04 裏込め石内 第3層
			—	器形:外反口縁皿の底部。文様:外面は片切彫りで高台際から蓮弁文を描く。内面の見込みには「卍文」を中心配置し、その周辺に「双魚文」や「水草」を展開させた印刻を施す。素地:光沢のある淡灰白色の微粒子。釉色:淡緑色で、貫入はない。龍泉窯系。14c中頃~15c中頃。	
			5.6	器形:直口口縁の大鉢。文様:口縁直下に片切彫りで三条の界線で区画し、その直下に片切彫りの蓮弁文を描く。内面にも片切彫りで刻花文を描く。素地:淡灰白色の微粒子で、微細な気泡痕が僅かにみられる。釉色:淡緑色で、貫入はない。龍泉窯系。14c中頃~15c前半。	
青磁 12	無錫 大鉢 蓮弁文	口縁部	—	器形:直口口縁の大鉢。文様:口縁直下に片切彫りで三条の界線で区画し、その直下に片切彫りの蓮弁文を描く。内面にも片切彫りで刻花文を描く。素地:淡灰白色の微粒子で、微細な気泡痕が僅かにみられる。釉色:淡緑色で、貫入はない。龍泉窯系。14c中頃~15c前半。	SA04 裏込め石内 第3層
			—	器形:茶托の口縁部分。類例は黄金御殿跡(註1)や渡地村跡(註2)などから出土している。文様:外面は片切彫りで刻花文とみられる文様を描く。素地:淡灰橙色の細粒子で、微細な黒色鉱物が少量含まれる。釉色:淡緑青色で、細かい貫入がみられる。龍泉窯系。15c終末~16c。	
			7.8	器形:茶托の口縁部分。類例は黄金御殿跡(註1)や渡地村跡(註2)などから出土している。文様:外面は片切彫りで刻花文とみられる文様を描く。素地:淡灰橙色の細粒子で、微細な黒色鉱物が少量含まれる。釉色:淡緑青色で、細かい貫入がみられる。龍泉窯系。15c終末~16c。	
15	外反口 縁碗	口縁部	13.0	器形:外反口縁碗。文様:外面の口縁直下に真須で二条の界線を施し、その直下に波瀾文を描く、内面の口縁には二条の界線の間に四方津文を描く。素地:淡灰白色の細粒子。釉色:淡灰白色で、細かい貫入がみられる。景德鎮窯系。15c後半~16c前半。	SS02南側 第2層+ SA04第2層 石積み外側 暗褐色土層
			—	器形:外反口縁碗。文様:外面の口縁直下に真須で一条の界線を施し、その直下に主文となる草花文を描いている。主文直下に二条の界線と蓮弁文を描く。内面は界線を口縁端部(一条)と腰部(二条)を描く。素地:光沢のある淡灰白色の微粒子。釉色:淡灰白色で、貫入はない。福建・広東系。14c頃。	
			—	器形:直口口縁碗。文様:外面の口縁に波瀾文と界線を施し、胴部にアラベスク文の花文の一部を描く。内面の口縁部に幅広の界線を一条描く。素地:淡灰白色の細粒子。釉色:淡灰白色で、貫入はない。景德鎮窯系。15c末~16c中頃。	
17	青花	直 口 縁	口縁部	—	SA04 裏込め石内 第3層
			—	器形:外反口縁碗の底部。二次的な火熱を受けて劈開面が全体的に煤けていて釉上に釉が溶けたことを示す微細な気泡が部分的にみられる。文様:見込みにのみ文様が残存し、二重圓線と草花文を描いている。素地:淡灰白色の細粒子。釉色:淡灰白色で、貫入はない。景德鎮窯系。15c中頃。	
			—	器形:外反口縁碗の底部。二次的な火熱を受けて劈開面が全体的に煤けていて釉上に釉が溶けたことを示す微細な気泡が部分的にみられる。文様:見込みにのみ文様が残存し、二重圓線と草花文を描いている。素地:淡灰白色の細粒子。釉色:淡灰白色で、貫入はない。景德鎮窯系。15c中頃。	
19	合子 或 器台	蓋 or 器台	—	器形:合子の蓋、若しくは器台。二次的な火熱を受けて劈開面が全体的に煤けている。全体的に釉が溶けたことを示す微細な気泡がみられる。文様:外面に二条の界線と小さな丸文(文様は直径4.7mmの円形凹彫り付ける突起に描かれている)。素地:淡灰色の粗粒子で、微細な気泡が多くみられる。釉色:火熱を受けて黄灰色となる。細かい貫入がみられる。釉は外面から内面まで施釉後に下位及び内外下端部の釉を掻き取って露胎とする。景德鎮窯系。15c後半~16c。	SA04 第1層覆土
			—	器形:口縁部の肥厚は、断面が歪な「ク」の字状を呈する怒り肩の壺。文様:なし。素地:灰褐色の粗粒子で、粗細な石英や粗い茶褐色の物質を多く含む。釉色:茶褐色の釉を内外面に施した後に口唇部の釉を刷毛状の工具で雜に掻き取って露胎とする。中国南部の窯。15c~16c。	
			—	器形:口縁部の肥厚は、断面が歪な「ク」の字状を呈する怒り肩の壺。文様:なし。素地:灰褐色の粗粒子で、粗細な石英や粗い茶褐色の物質を多く含む。釉色:茶褐色の釉を内外面に施した後に口唇部の釉を刷毛状の工具で雜に掻き取って露胎とする。中国南部の窯。15c~16c。	
20	中国産 褐釉陶器	口縁部	19.6	器形:口縁部の肥厚は、断面が歪な「ク」の字状を呈する怒り肩の壺。文様:なし。素地:灰褐色の粗粒子で、粗細な石英や粗い茶褐色の物質を多く含む。釉色:茶褐色の釉を内外面に施した後に口唇部の釉を刷毛状の工具で雜に掻き取って露胎とする。中国南部の窯。15c~16c。	SA04 第1層覆土
			—	器形:口縁部の肥厚は、断面が歪な「ク」の字状を呈する怒り肩の壺。文様:なし。素地:灰褐色の粗粒子で、粗細な石英や粗い茶褐色の物質を多く含む。釉色:茶褐色の釉を内外面に施した後に口唇部の釉を刷毛状の工具で雜に掻き取って露胎とする。中国南部の窯。15c~16c。	
			—	器形:薄手のナデ肩の壺の底部。文様:なし。素地:淡灰色の粗粒子で、粗細な石英を多く含む。釉色:黄緑色の釉が二次的な火熱を受けて釉が白濁する部分がみられる。釉は外面にのみ残存し、外面の底部近くまで垂れている。外底面と内面の一部には鉄分や鉄片が付着し錆びている。中国南部の窯。15c~16c。	
22		壺	15.8	器形:薄手のナデ肩の壺の底部。文様:なし。素地:淡灰色の粗粒子で、粗細な石英を多く含む。釉色:黄緑色の釉が二次的な火熱を受けて釉が白濁する部分がみられる。釉は外面にのみ残存し、外面の底部近くまで垂れている。外底面と内面の一部には鉄分や鉄片が付着し錆びている。中国南部の窯。15c~16c。	SA04 第2層 石積み外側 暗褐色土層

注「-」:計測不可

註文献

註1.『首里城跡－黄金御殿地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター 2007年3月。天目台で報告。

註2.『渡地村跡－臨港道路那覇1号線整備に伴う緊急発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター 2007年3月。茶たく茶受けで報告。



第7図 石積みSA04出土品③ 青磁：11～14、青花：15～19、中国産褐釉陶器：20～22

第9表 石積みSA04 タイ産土器(半練)・タイ産炻器・タイ産褐釉陶器出土状況

種類・器種・部位			層序 C-D-10,D-11 SA04				合計
	第1層 覆土	第2層 石積み外側 暗褐色土層	裏込め石内 第3層	間層 (灰黒色混貝土層) 第3層bの直下			
タイ産土器 (半練)	蓋	蓋端部 I類		1		1	2
		胸部			1		1
	合計		0	1	1	1	3
タイ産炻器	壺	口縁部	1				1
		胸部	1				1
	合計		2	0	0	0	2
タイ産 褐釉陶器	壺	口縁部			1		1
		頸部	1				1
		胸部	2	12	44		58
		底部			3		3
	合計		3	12	48	0	63

第10表① 石積みSA04 タイ産土器(半練)・タイ産炻器・タイ産褐釉陶器観察一覧

単位:cm

捕団番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	部位	口径 高さ 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第8図 図版4 1	タイ (半練) 土器	蓋	端部 13.4 高さ (4.2)	器形:落し蓋。蓋縁分類のI類。内面の縁沿いに貼り付けによる肥厚帯を造る。肥厚帯端部は微弱に擴み出して歪な隅丸形状に成形成する。器面調整:外表面は雑な窓ナデで調整する。縁沿い及び縁辺部には丁寧な指圧による面取り成形で仕上げている。素地:淡灰色の粗粒子で、粗い石英を主体とする。稀に粗い茶褐色の物質を含む。色調:両面とも淡橙白色を帯びる。焼成:良好で堅い。15c~16c。	SA04 第2層 石積み外側 暗褐色土層
〃 2	タイ 産 炻 器	壺	口縁部 — — —	器形:外反口縁の炻器壺。口縁が大きく外側に反り返る。口唇部が剥落する。頸部は断面が三角形状となる陽界線を一条圍繞。器面調整:外側の器面は大部分が剥落し、口縁部に僅かに窓ナデの痕跡がみられる。内面は丁寧な窓ナデで仕上げている。素地:淡灰白色の細粒子で、微細な石英を少量含む。稀に粗い茶褐色の物質が混入される。色調:両面とも淡灰白色を帯びる。焼成:良好で堅い。バンブー村窯産。15c後半~16c。	SA04 第1層 覆土
〃 3	タイ 産 褐 釉 陶 器	壺	頸部 — — —	器形:外反口縁の壺。口縁部が欠落する。頸下部には断面が三角形状となる凸帯(陽界線)を一条圍繞。素地:茶紫色の細粒子で、粗細な石英を多量に含む。釉色:薄い茶紫色の釉を薄く塗布した後に黒褐色の釉を外側から内面の頸部まで施すが、内面の釉掛けは雑で流し込んだ状態にあり、釉の垂れや釉の掛からないところが多くみられる。焼成:堅敏。シーサッチャナライ窯。15c後半~16c前半。	SA04 第1層 覆土
〃 4	タイ 産 褐 釉 陶 器	壺	胴部 — — —	器形:外反口縁の壺の胴部。肩部に陶土を紐状にして貼り付けた把手(把手幅74.6mm、把手中央の縦長15.4mm、厚み12.0mm)が良好な状態で残存する。素地:茶紫色の細粒子で、粗細な石英を多量に含む。釉色:黒褐色の釉が外側に施釉するが、把手の部分のみ所々に薄い茶紫色の釉が露呈している。内面は露胎であるが胴上部に僅かに黒褐色の釉と下地に塗布された茶紫色の化粧釉がみられる。焼成:堅敏。シーサッチャナライ窯。15c後半~16c前半。	SA04 第1層 覆土

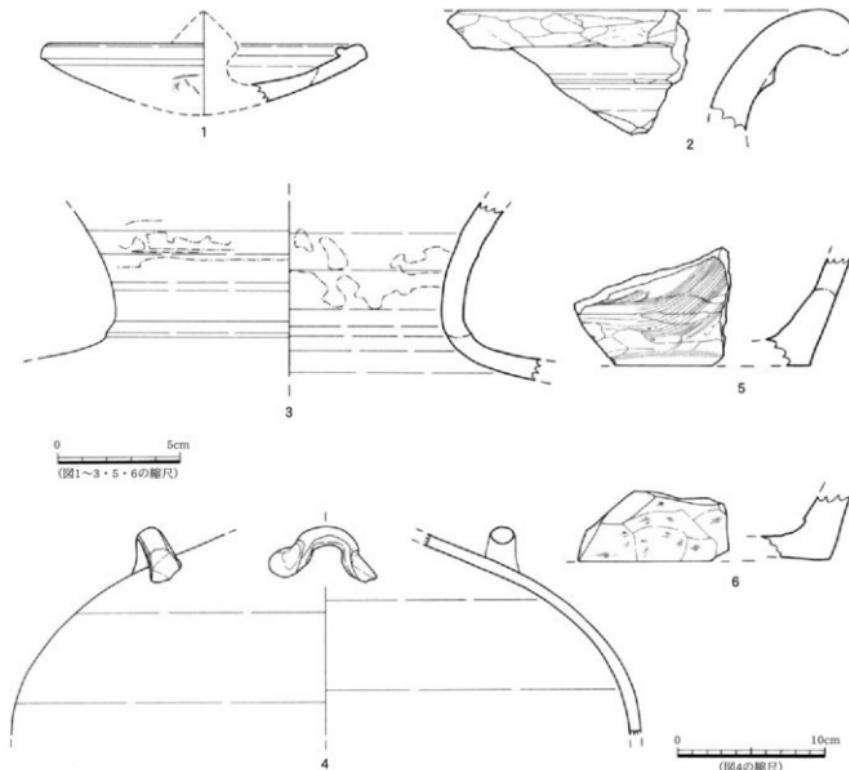
注「-」:計測不可、():推定

第10表② タイ産褐釉陶器観察一覧

単位: cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第8図 図版4 5	タイ 産 褐 釉 陶 器	壺	底部	器形: 外反口縁の壺の底部。素地: 茶紫色の細粒子で、粗細な石英を多量に含む。釉色: 外面は無釉であるが、内面には薄く茶紫色の釉が塗布されている。器面調整: 外面は複数の輪積みの積み痕をナデ消す。内面は回転籠削りを施す。外底面は平坦面であるが器面の保持が悪くアバタ状となる。焼成: 壓緻。シーサッチャナライ窯。15c後半~16c前半。	SA04 裏込め石内 第3層
〃 〃 6				器形: 外反口縁の壺の底部。素地: 茶紫色の細粒子で、粗細な石英を多量に含む。細かい茶褐色の氷柱が僅かに混入する。釉色: 両面とも無釉。器面調整: 外面は丁寧なナデ仕上げ。内面は複数の回転籠削りで、部分的に削りによって陶土が起こされて浮き立っている。外底面は平坦面であるが器面の保持が悪くアバタ状となる。焼成: 壓緻。シーサッチャナライ窯。15c後半~16c前半。	SA04 裏込め石内 第3層

注 「-」: 計測不可



第8図 石積みSA04出土品④ タイ産土器(半練) : 1、タイ産炻器 : 2、タイ産褐釉陶器 : 3 ~ 6

第11表 石積みSA04 本土産磁器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・金属製品出土状況

種類・器種・部位			層序					C-D-10,D-11 SA04				合計
			第1層 覆土	琉大の送水管内 第1層客土(淡黄 茶色混練土層)	第2層 石積み外側 暗褐色土層	内側東南部 第2層 黒色土層	裏込め 石内 第3層					
本土産磁器	印判染付 ・ 印判	碗	胴部	e. 1						b. 1	1	
		小碗								e. 1	2	
		皿								a.1	1	
	ヘロ藍 タロム青磁	器種不明	胴部							1	1	
		筒型茶碗								1	1	
		近現								1	1	
	小碗 皿 壺	口縁部～底部		1						1	1	
		胴部								1	1	
		底部								1	1	
合 計				1	1	0	0		7	9		
沖縄産施釉陶器	碗	底部								1	1	
	鉢	底部								1	1	
	鍋	胴部								1	1	
	急須	胴部								2	2	
		蓋								1	1	
	酒器	胴部								1	1	
		底部								1	1	
合 計				0	0	0	0		8	8		
沖縄産無釉陶器	碗	口縁部								1	1	
	鉢	口縁部								2	2	
		底部								1	1	
	擂鉢	胴部								1	1	
	壺	胴部								4	4	
器種不明			胴部					2	9	11		
合 計				0	0	2	0		18	20		
金属製品	丸釘	完形	中	鉄		1					1	
		先端部欠損								1	1	
		頭部欠損				1					1	
	角釘	完形	中	鉄	9		2			1	12	
		小			1		1				2	
		先端部欠損	中	鉄	2						2	
		小					5				5	
		頭部欠損	中	鉄	2		2				4	
		先端+ 頭部欠損	中	鉄	1		9				10	
		不明					2				2	
	ノミの先端			鉄						1	1	
	武具	札	鉄							5	5	
	武器	薬莢	青銅							1	1	
	近現	針金	鉄		1						1	
	分類不明	用途不明	鉄	2	1	5	4	2	10	14		
			青銅				1				1	
合 計				17	4	27	5	10	63			

注 本土産磁器:印判染付・印判〔a:印判染付、b:型紙捺り、e:銅版転写〕

釘のサイズは、大:5寸半以上(15.75cm以上)、中:1寸半~5寸まで(3.75cm~15.75cm未満)、小:1寸まで(3.75cm未満)

第12表① 石積みSA04 本土産磁器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称 仮称	部位	口径 器高 底径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層	
第9図 図版5 1	磁器 本土産	小碗	口縁部 ～底部	7.9 4.6 3.6	器形:腰丸直口の小碗。文様:胴部に金彩で文様を施すが金彩が剥落して構図不詳となる。高台脇にも金彩で二条の界線を施すが大半が剥落する。疊付は、焼成時の設置面となった為、釉がアバタ状となる。素地:光沢のある白色の微粒子。产地不明の近現代の本土産磁器。	SA04 裏込め 石内 第3層
〃 〃 2	沖縄産 施釉陶器	碗	底部	— — 6.4	器形:腰部が直行する碗。文様:なし。疊付と内外面高台下端に煤が付着する。外底面の中央は円形状に煤、若いくは墨汁とみられるものがみられる。素地:黄白色の細粒子で、粗細な気泡痕がみられる。釉色:黄灰色で、微細な貫入がみられる。釉は高台脇に施されている、壺屋燒。	SA04 裏込め 石内 第3層
〃 〃 3	沖縄産 施釉陶器	酒器	底部	— — 7.0	器形:側面觀が権柄圓形となる酒器(俗称:カラカラ)の底部。高台内側りが斜目に入る蛇の目状の高台。疊付の部分が尖り氣味となる。文様:胴部に呉須と黄緑色の釉薬で、文様を描くが構図は不詳である。素地:黄白色の細粒子で、粗細な気泡痕がみられる。釉色:淡灰白色の釉を高台脇まで施釉。淡灰白色の釉の大半が黄白色の失透釉となり白濁する。微細な貫入がみられる。壺屋燒。	SA04 裏込め 石内 第3層
〃 〃 4	沖縄産 無釉陶器	碗	口縁部	12.4 — —	器形:初期沖縄産無釉陶器で、直口ロコ碗。両面に回転擦痕跡がみられる。文様:なし。素地:灰褐色の細粒子で、粗細な石英を多く含む。劈開面に白色の陶土が縞状に入っている。器色:外面は暗茶色で、内面が暗褐色を呈している。湧田燒。	SA04 裏込め 石内 第3層
〃 〃 5	沖縄産 無釉陶器	鉢	口縁部	— — —	器形:水鉢、若しくは植木鉢の口縁部。口縁部の側面觀が逆「L」状に肥厚する。口唇部を幅広く成形するが途中から欠落する。器面調整:外面は粗い擦痕とナデがみられる。口唇部は籠ナデで仕上げる。文様:外面肥厚に丸彫り(幅2.5mm)の界線を二条施した後に下端界線部を指圧で所々押しつぶして肥厚下端を波状突帯とする。素地:茶褐色の細粒子で、微細な石英を多く含む。劈開面に粗細な気泡痕が僅かにみられる。器色:外面は黄茶色で、口唇部が暗褐色を呈している。	SA04 裏込め 石内 第3層

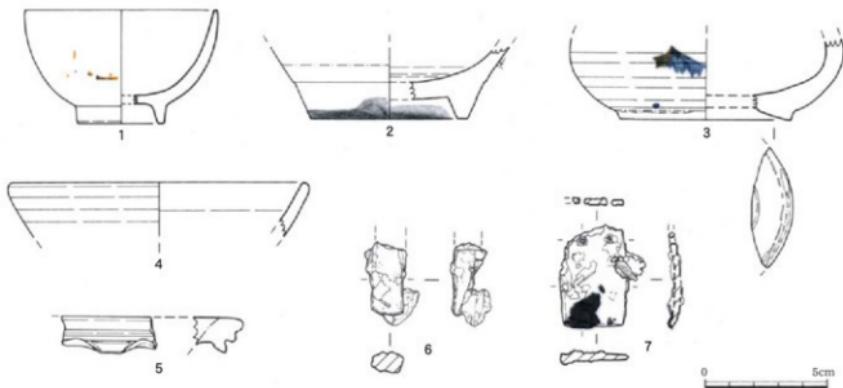
注「—」:計測不可

第12表② 石積みSA04 金属製品観察一覧

単位:mm/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	分類	名称 仮称	素材	残存長(縦) 残存幅(横)	残存最大厚 残存最小厚 残存重量	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第9図 図版5 6	生工具 産用類具	ノミの先端	鉄 製品	34.0 22.0	8.81 2.30 9.3	鉄製の先端部分とみられる。刃部は直刀であるが、左刃縁が使用により斜位に偏っている。刃の幅は13.1mmを測る。盤の断面は胴下部が権円形で、刃部へ移行する部分で長方形状となる。表面裏面及び両側面には錆汁の発生により錆痕がみられる。裏面には大きな錆瘤がみられ破裂している。表面にはサカナの棘が錆により取り込まれている。	SA04 裏込め 石内 第3層
〃 〃 7	武具	札		42.0 28.0	2.16 1.44 9.2	札頭が欠落した資料。札足近くが外側に湾曲して反っている。表面の札足付近には、錆止めの黒漆が錆で持ち上がりついている。紐繩をとおす孔は三孔(残存する孔で良好なものは孔のサイズが1.3mmを測る)のみ開いている。他の孔は錆で塞がついている。裏面には錆汁や微細な錆瘤がみられ、細片となつた木片が付着し錆汁により置換され鉄化している。	SA04 裏込め 石内 第3層

注「—」:計測不可



第9図 石積みSA04出土品⑤ 本土産磁器：1、沖縄産施釉陶器：2・3、沖縄産無釉陶器：4・5
金属製品：6・7

第13表① 石積みSA04 二次的火熱溶解錢貨

銘名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
開元通寶(唐621年初鋤) or (唐845年初鋤)	1片	1.46	「開」・「通」の二字が残存	C-D-10-11, D-11 SA04第1層覆土
淳化元寶(北宋990年初鋤)	1片	1.74	「淳」・「寶」の二字が残存	C-D-10-11, D-11 SA04第1層覆土
咸平元寶(北宋998年初鋤)	1片	1.58	「咸」・「平」の二字が残存	C-D-10-11, D-11 SA04第1層覆土
景德元寶(北宋1004年初鋤)	1片	1.30	「德」の一字が残存	C-D-10-11, D-11 SA04第1層覆土
大觀通寶(北宋1107年初鋤)	1枚	2.76	完形	C-D-10-11, D-11 SA04第1層覆土
元祐通寶？(北宋1086年初鋤)	1片	0.96	「通」の一字が残存	C-D-10-11, D-11 SA04第1層覆土
大中通寶(明1361年初鋤)	1片	1.23	「大」・「通」の二字が残存	SA04裏込め石内第3層
洪武通寶(明1368年初鋤)	1片	1.17	「武」・「通」の二字が残存	C-D-10-11, D-11 SA04第1層覆土
不明錢貨	1片	1.21	判読不可	
	1片	1.81	「寶」の一字が残存	
	1片	1.24	「通」・「寶」の二字が残存	
	1片	1.20	「元」・「寶」の二字が残存	C-D-10-11, D-11 SA04第1層覆土
	1片	1.47	「寶」の一字が残存	
	1片	1.81	「元」・「寶」の二字が残存	
	1片	0.69	「通」の一字が残存	
合計	15			

第13表② 石積みSA04 ガラス製品出土状況

層序	C-D-10, D-11			合計
	SA04			
器種・部位	琉大の送水管内第1層 客土(淡黄茶色混雜土層)	第2層石積み 外側暗褐色土層	裏込め石内 第3層	
瓶	口縁部		1	1
	底部	1		1 2
蓋				1
板ガラス	2	1		3
合計	3	2	2	7

第14表① 石積みSA04 錢貨觀察一覧

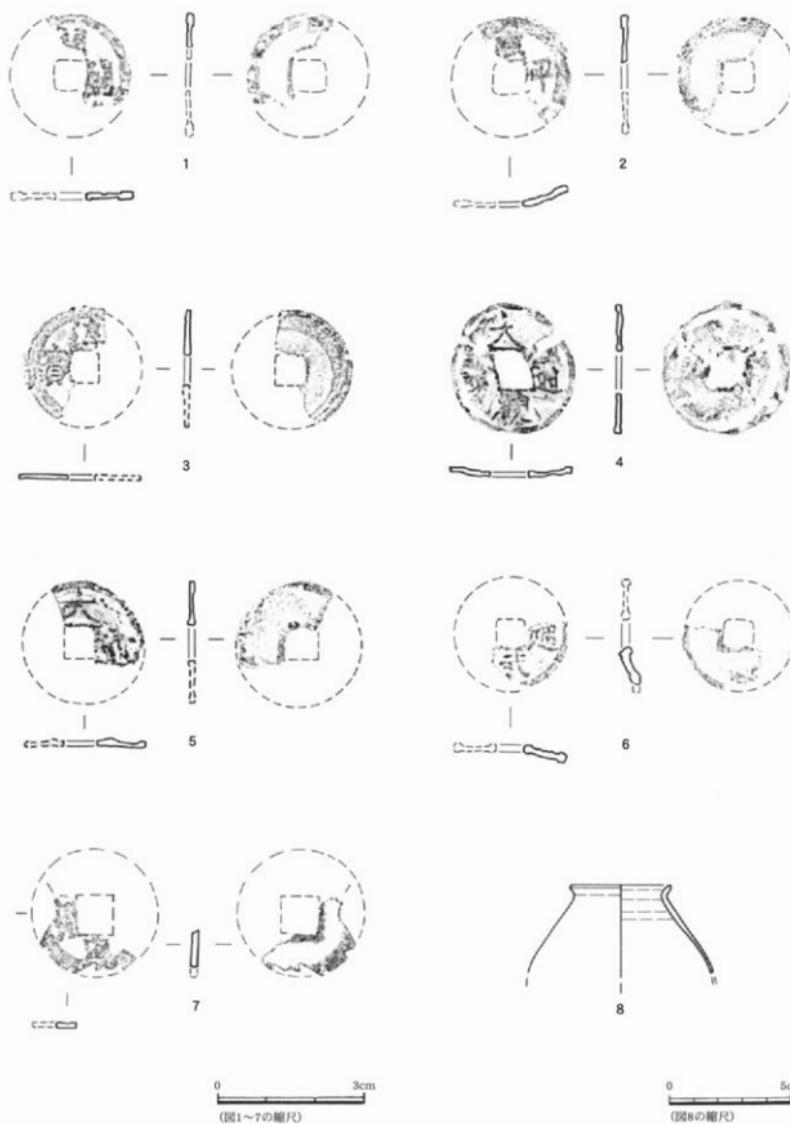
単位:mm/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	銭種類	鋳造年	初鋳年	素材	読み方	状態	書体	肉郭外径 A B	肉郭内径 C D	方穿 E F	断面計測部位			重量	観察事項	出土地点 出土層
											①	②	③			
第10回 図版6 1	開元通寶 公鑄銭	唐621年	845年	銅錢	対読	破損	篆書	—	—	—	1.63	1.02	1.59	1.46	2/3程度が残存。字款は「開」、「通」の二字が確認できるが、「開」の字款が半分程度欠損。面の肉郭の幅は2.25~2.56mmを測る。背の肉郭の幅は面よりも幅広であり、2.62mmを測る。両面に緑青がみられ、特に背の肉郭部分で多くみられ、鋒で彫れています。	SA04 第1層 覆土
〃 〃 2	咸平通寶 公鑄銭	北宋	998年	銅錢	回読	破損	真書	—	—	—	1.52	1.02	1.52	1.58	1/2弱が残存、字款は「成」・「平」の二字が確認できる。面の肉郭の幅は2.80~3.38mmと幅広である。背の肉郭の幅は2.54mmを測るが、肉郭が不鮮明である。二次的な火熱を受けて変形する。火熱の影響で面や背で微細なアバタ状となる。背の一部はクロイド状となる。破断面や縫合部に緑青がみられる。	SA04 第1層 覆土
〃 〃 3	淳化元寶 公鑄銭	北宋	990年	銅錢	回読	破損	行書	—	—	—	1.26	0.50	1.17	1.74	面の右側が1/2強欠落し、「淳」・「寶」の字款のみが残存。背の肉郭の最大幅は4.7mmを測る。両面に緑青がみられる。	SA04 第1層 覆土
〃 〃 4	大觀通寶 不明	北宋	1107年	銅錢	対読	破損	行書	26.47 25.9	23.87 23.0	7.54 7.88	1.63	0.51	0.94	2.76	面に変形し、面及び背が微弱な凹凸がみられる鏡である。背の肉郭がズレて肉郭沿いが深い溝状となる。面と背の肉郭一部には金缺や鑄による使用で溝状に陥んでいる。両面に緑青がみられる。	SA04 第1層 覆土
〃 〃 5	大中通寶 不明	明	1361年	銅錢	対読	破損	不明	—	—	—	1.41	0.71	1.10	1.23	面の1/2以上が欠落した鏡で、「大」・「通」の二字が残存。両面に緑青による浸食で微細なアバタ状となる。	SA04 裏込め 石内 第3層
〃 〃 6	洪武通寶 公鑄銭	明	1368年	銅錢	対読	破損	行書	—	—	—	1.84	0.94	1.40	1.17	1/4弱が残存。字款は「武」・「通」の二字が残存。両面に緑青による浸食で微細なアバタ状となる。破断面に緑青がみられる。外周縁は緑青により微細な剥離がみられる。	SA04 第1層 覆土
〃 〃 7	不明 不明	不明	銅錢	回読	破損	行書	—	—	—	1.14	0.79	1.15	1.24	「通」・「寶」が残存。銭の縁沿いを削歯状に歪に加工された軸用製品とみられるが用途は不明である。	SA04 第1層 覆土	

注「—」:計測不可

第14表② 石積みSA04 ガラス製品觀察一覧

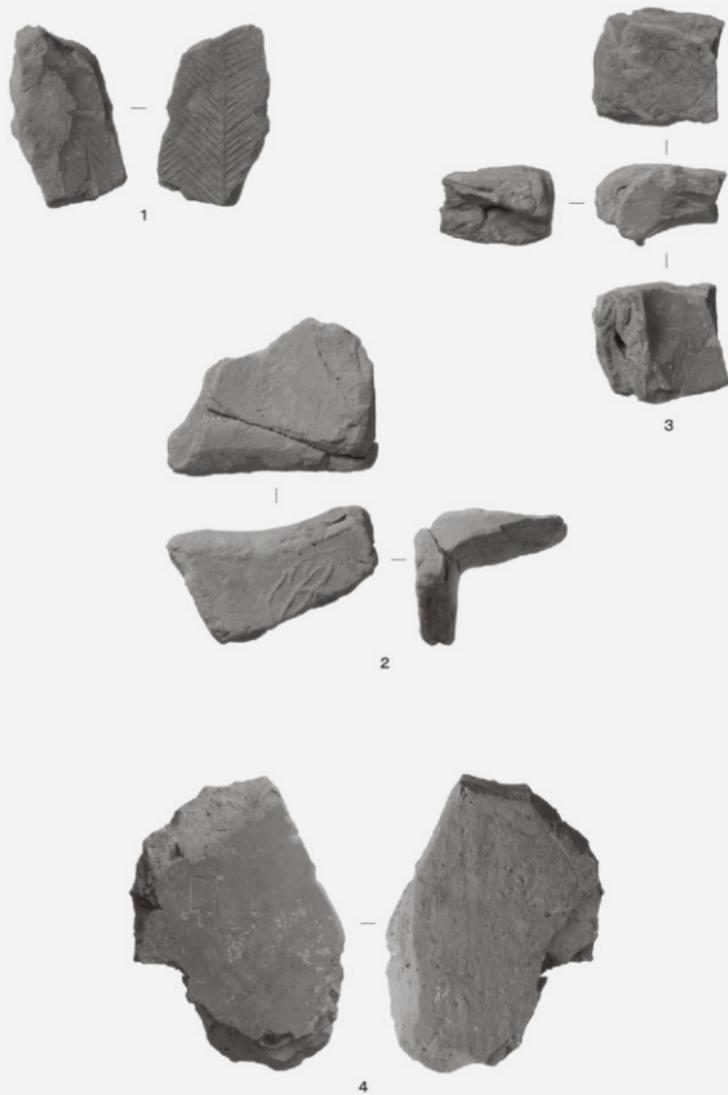
挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	観察事項等								出土地点 出土層
第10回 図版6 8	ガラス 製品	内傾する透明ガラスの瓶で、口縁部が強く外反する。内外面に擦痕がみられることから型物成形ではない。口径4.2cm。近現代。								SA04 第2層 石積み外側 暗褐色土層



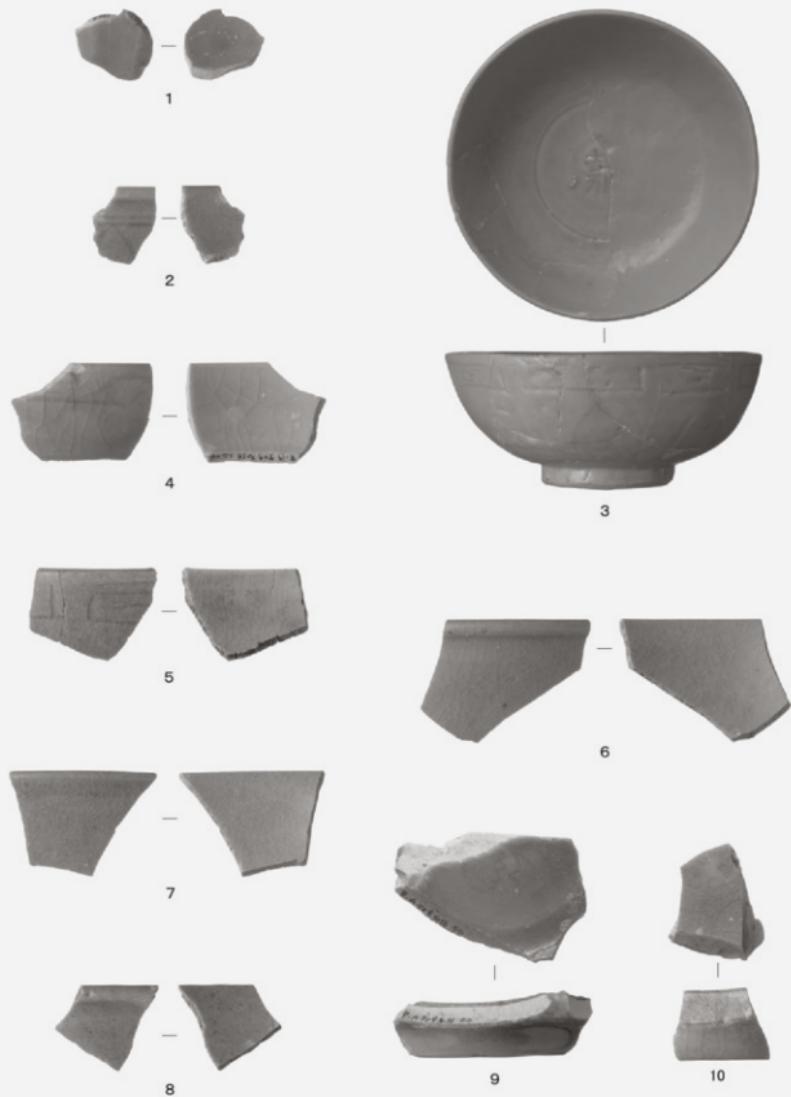
第10図 石積みSA04出土品⑥ 銭貨：1～7、ガラス製品：8

第15表 石積みSA04 出土遺物状況(図版外)

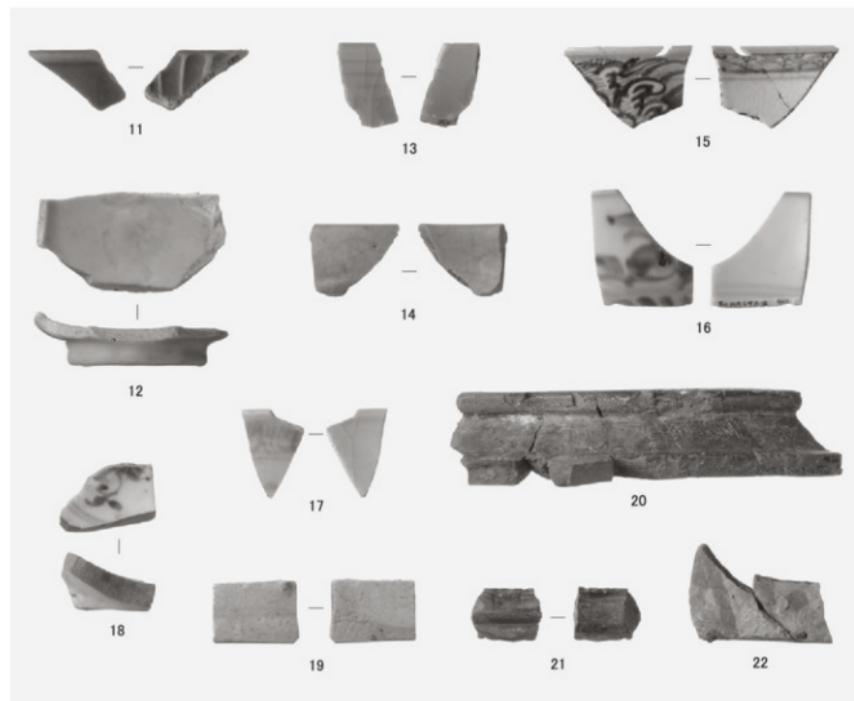
種類・器種・部位			C・D-10, D-11					合 計
			SA04					
第1層 覆土	硫大の 送水管内 第1層 客土 (淡黄茶色 混疊土層)	第2層	第2層 石積み 外側 暗褐色 土層	裏込め 石内 第3層	間層 (灰黒色 混貝土層) 第3層b の直下			
土器	器種不明	胴部		1		3		4
	合 計		0	0	1	0	3	0
陶質土器	器種不明	部位不明				1		1
	合 計		0	0	0	1	0	0
瓦質土器	鉢	胴部				1		1
	器種不明					1		1
	合 計		0	0	0	1	1	0
白磁	碗	胴部				1	1	2
	合 計		0	0	0	0	1	1
彩釉陶器	瓶	胴部				1		1
	合 計		0	0	0	0	1	0
黒釉陶器	碗	胴部				1	2	3
	合 計		0	0	0	1	2	0
本土産 陶器	皿	口縁部				1		1
	合 計		0	0	0	0	1	0
石材片	角閃安山岩		1					1
	溶結凝灰岩 (鹿児島産)					1		1
	細粒砂岩(ニーハ)		2	1		3		6
	合 計		2	2	0	0	4	0
近現代	タイル			1			1	2
	合 計		0	1	0	0	1	0



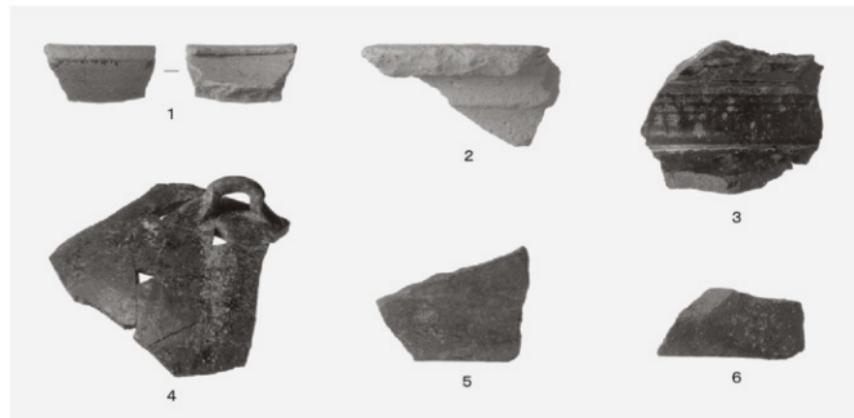
図版1 石積みSA04出土品① 瓦類：屋瓦1～3、埠瓦：4



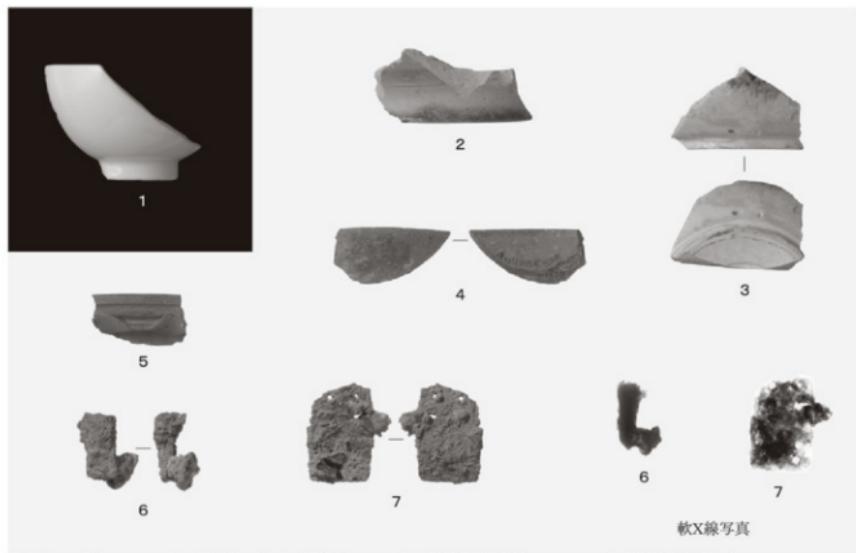
図版2 石積みSA04出土品② 青磁 : 1 ~ 10



図版3 石積みSA04出土品③ 青磁：11～14、青花：15～19、中国產褐釉陶器：20～22

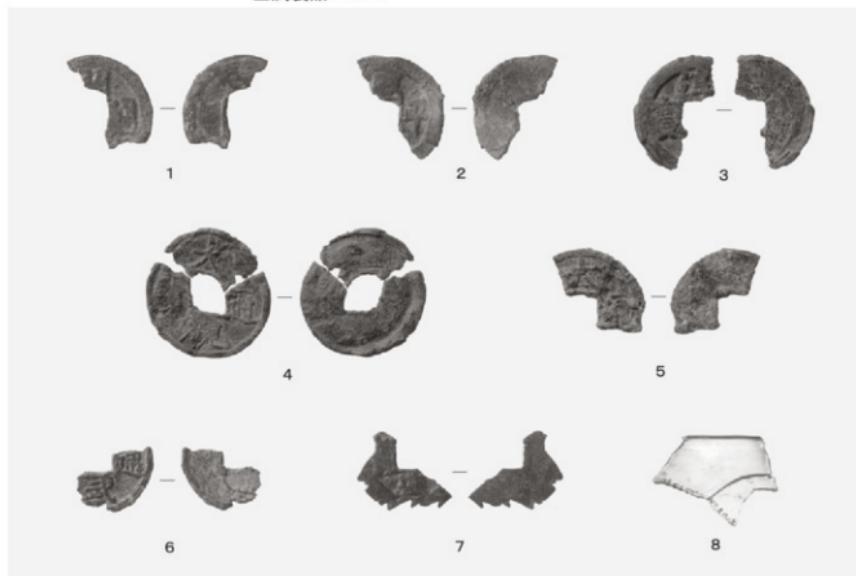


図版4 石積みSA04出土品④ タイ産土器(半練)：1、タイ産炻器：2、タイ産褐釉陶器：3～6



軟X線写真

図版5 石積みSA04出土品⑤ 本土産磁器：1、沖縄産施釉陶器：2・3、沖縄産無釉陶器：4・5、
金属製品：6・7



図版6 石積みSA04出土品⑥ 銭貨：1～7、ガラス製品：8

(2) 石積みSA35の出土遺物(第11図、第16表～第18表、図版7)

石積みSA35から出土した遺物の種類は、第4表に示したように総計で3点が得られている。出土遺物の内訳は、青磁2点と銭貨1点の2種類が確認されている。

当該遺構の時期を明確に示す資料はない。細片資料が多く、特徴的な資料として無文銭(第11図)を図示した。

第16表 石積みSA35 二次的火熱溶解銭貨

銭名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
無文銭	1片	0.33	-	D-10・11 SA35第1層覆土

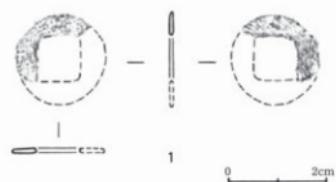
第17表 石積みSA35 出土遺物状況(図版外)

種類・器種・部位	層序				合計	
	D-10・11 SA35					
	第1層 覆土	栗石内 第3層				
青磁	碗 口縁部	外反	無文	1	1	
	酒会壺 脊部	有文不明			1	
合計				1	2	

第18表 石積みSA35 銭貨観察一覧

挿版番号 図版番号 遺物番号	銭種 鑄造種類	初 鋳年	材 素	読 み 方	状 態	肉郭 外径	肉郭 内径	方穿	断面計測部位	重量	観察事項			出土地点 出土層	
											A B	C D	E F		
第11図 図版7 1	無文 銭 模 銅 錢	中世 不明	銅 錢	-	破 損	-	-	-	0.60	-	-	-	-	0.33	無文銭で1/2以上が欠落する。肉郭や孔郭のない平坦な薄手の銭。残存する孔の対角線上の長さは11.1mmと大き い。 SA35 第1層 覆土

注「-」:計測不可



第11図 石積みSA35出土品 銭貨：1

図版7 石積みSA35出土品
銭貨：1

(3) 石積み SA05-B の出土遺物 (第12図～第14図、第19表～第23表、図版8・9)

石積み SA05-B から出土した遺物の種類は、第4表に呈示したように総計で172点 (≈100%) が得られている。

出土遺物の内訳は、瓦類 26点 (15.11%)、青磁 3点 (1.74%)、中国産褐釉陶器 15点 (8.72%)、タイ産褐釉陶器 6点 (3.49%)、ガラス製品 2点 (1.16%)、銭貨 99点 (57.56%)などの14種類 (第4表) が確認されている。輸入陶器 (タイ産、中国産) の占める割合は、16.28%であった。

当該遺構の時期に伴う遺物として呈示ができる資料は、青花皿 (第12図5) と華南彩釉陶器 (同図6・7)、などがある。なお、出土遺物の大半は細片化した資料が多く、その中から比較的に大きな破片資料や特徴的な資料を図示 (第12図～第14図) した。

第19表 石積みSA05-B 塚瓦・青磁・青花・彩釉陶器・石器・石製品・石材・自然石出土状況

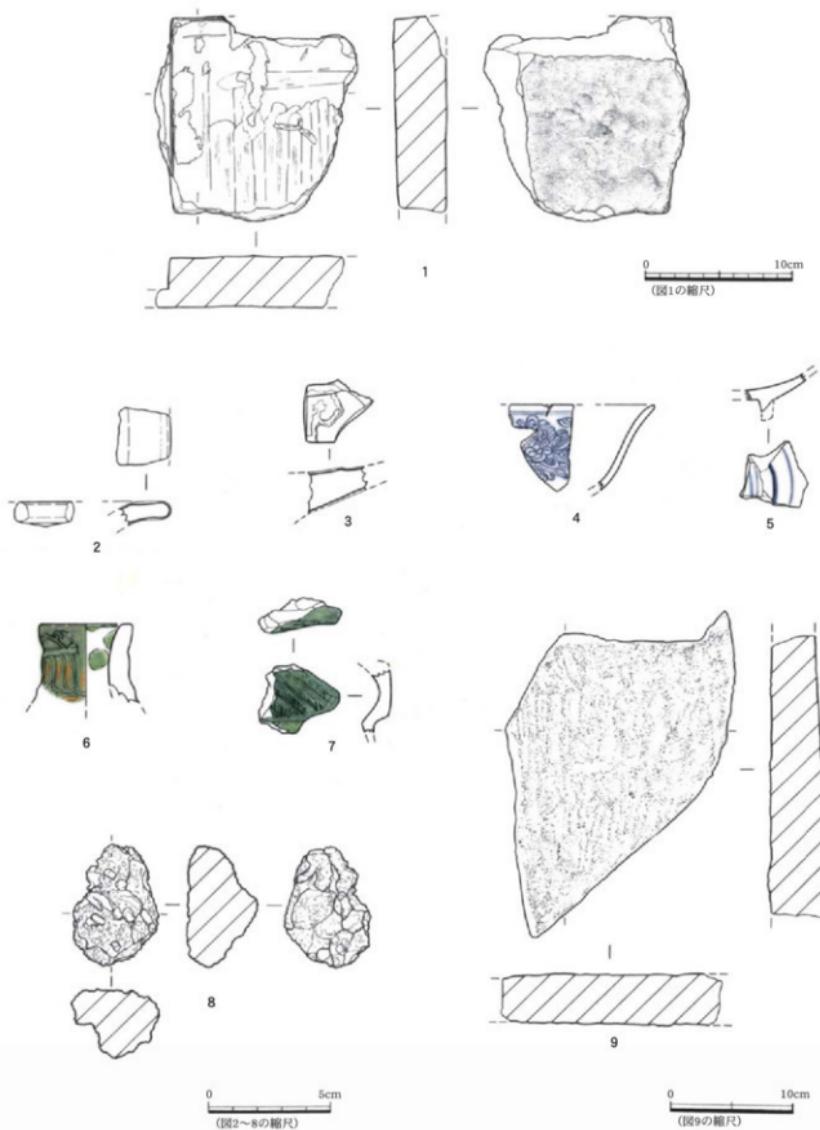
層序				B-C-10-11	合計		
				SA05-B			
種類・器種・部位		造成土3	造成土4 (明褐色混土 疊層)	地山(岩盤) 直上の 褐色土層			
塚瓦	II類	-	灰色	漆喰有り(片面)	1		
	III類	Db	赤色	漆喰無し	1		
合計				2 0 0	2		
青磁	碗	胴部	無文		1		
	盤	口縁部	鷲縁	有文不明	1		
		胴部	有文(ハルマト様)		1		
合計				2 1 0	3		
青花	碗	口縁部	外反		1		
	皿	底部		1	1		
合計				1 0 1	2		
彩釉陶器	型物水注 (鶴か鴨)	口縁部		1	1		
		胴部		1	1		
合計				2 0 0	2		
石器・ 石製品	砥石	軽石		1	1		
	石造製品(敷石)	細粒砂岩(ニーピ')		1	1		
合計				2 0 0	2		
石材	緑色岩			1	1		
	細粒砂岩(ニーピ')			4 4	8		
自然石	河原石			1	1		
合計				6 4 0	10		

第20表 石積みSA05-B 塚瓦・青磁・青花・彩釉陶器・石器・石製品観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第12図 図版8 1	塚瓦		— — —	左側面の上段途中から段差を設けた塚瓦。漆喰が表面(縦位に二条並列)と上面(一部)に漆喰が付着する。表面は丁寧なナデ仕上げで、裏面は雑な箝削りで調整する。左側面は外面左上の調整よりも雑なナデ調整である。胎土:泥質で細かい。混入物:粗粒な石英を主体に微細な黒色や雲母片を含む。稀に茶褐色の物質(焼土片)がみられる。色調:表面とも灰褐色を帯びるが、裏面が部分的に淡灰色となる。	B-11 SA05-B 造成土3
# # 2	青磁	口縁盤	— — —	器形: 鋼上面が浅く窪む盤。文様: 弱開面から外面の頸部に片切彫りで文様を施すが、釉が厚く施釉されて不明である。素地: 光沢のある灰白色の細粒子で、粗細な気泡痕が少量みられる。釉色: 両面に青緑色の釉を施釉。貫入: なし。龍泉窯系。14c後半~15c前半。	B-10 SA05-B 造成土3
# # 3		盤	— — —	器形: 盤の底部近くの破片。文様: 見込みに浮き文のパルメット様の文様を貼り付ける。素地: 光沢のある灰白色の細粒子で、微細な気泡痕が少量みられる。釉色: 両面に青緑色の釉を厚く施釉。貫入: ない。龍泉窯系。14c後半~15c中頃。	SA05-B 造成土4 (明褐色 混土疊層)
# # 4	青花	碗	口縁部	器形: 外反口縁碗。文様: 口縁に二条の界線を描き、界線直下から花文の輪郭のみを鮮明に描く。素地: 光沢のある灰白色的細粒子。釉色: 淡灰白色の釉を施釉。貫入: なし。景德鎮窯。18c後半~19c前半。	B-10 SA05-B 地山(岩盤)直 上の褐色土層
# # 5		皿	底部	器形: 豊付けが欠落した皿で、高台脇から微弱に丸味を持って外側に開く。文様: 高台脇と高台脇に各一条の界線を施す。外底面にも界線を一条施している。素地: 光沢のある白色の微粒子。釉色: 両面に淡灰白色の釉を施釉。貫入: なし。景德鎮窯系。15c後半~16c後半。	B-10 SA05-B 造成土3
# # 6	彩釉陶器	水注	口縁部 3.8	器形: 鶴型の型物水注の口縁。文様: 口縁部の上位に間弁のある二重描きの蓮弁文、その下位に二条の團練と逆さ蓮弁文を型で起こしている。裏面はナデを主体に雑な指圧痕がみられる。型合わせの接合面から外れている。素地: 淡黄褐色の細粒子で、少量ながら茶褐色や黒色鉱物などがみられる。稀に粗い石英(2.1~3.7mm)が含まれている。釉色: 緑色の釉が内面口縁から外面まで施釉され、部分的に外面に黄褐色の釉が施釉されている。貫入: 微細な貫入がみられる。中国南部(福建・広東)の窯。15c後半~16c。	SA05-B 造成土3
# # 7			胴部	器形: 型物水注で、鶴型か鶴型の羽の先端と尾の破片。文様: 羽(沈線文と短沈線文を組み合わせて表現)を型で起こしている。裏面は箠ナデとナデがみられる。型合わせの接合面から外れている。素地: 灰色の細粒子で、粗細な黒色鉱物と粗い石英がみられる。釉色: 外面にのみ緑色の釉が施釉。貫入: 微細な貫入がみられる。中国南部(福建・広東)の窯。15c後半~16c。	SA05-B 造成土3
# # 8	石器・ 砥石	—	—	金属製品の銷落としと磨きを目的とした砥石とみられる。手頃な軽石を砥石として使用した為、利用面が一面に限定されて平坦面となっている。長軸49.6mm、短軸35.0mm、厚さ28.0mm、重量22.5g。	B-11 SA05-B 造成土3
# # 9	石造製品	—	—	平坦に成形された敷石とみられる破片資料。表面を鑿(刃幅21.8mm)で面を調整し、平坦に仕上げている。鑿による器面調整は、主に左から右方向に実施されている。裏面は節理面を利用して剥離がなされたようであるが、半分程度は破損面となっている。長軸26.8cm、短軸17.9cm、厚さ4.25~4.8cm、重量2.84kg。細粒砂岩製。	B-11 SA05-B 造成土3

注「-」:計測不可



第12図 石積みSA05-B出土品① 塚瓦：1、青磁：2・3、青花：4・5、彩釉陶器：6・7、石器：8、石造製品：9

第21表 石積みSA05-B 二次的火熱溶解銭貨

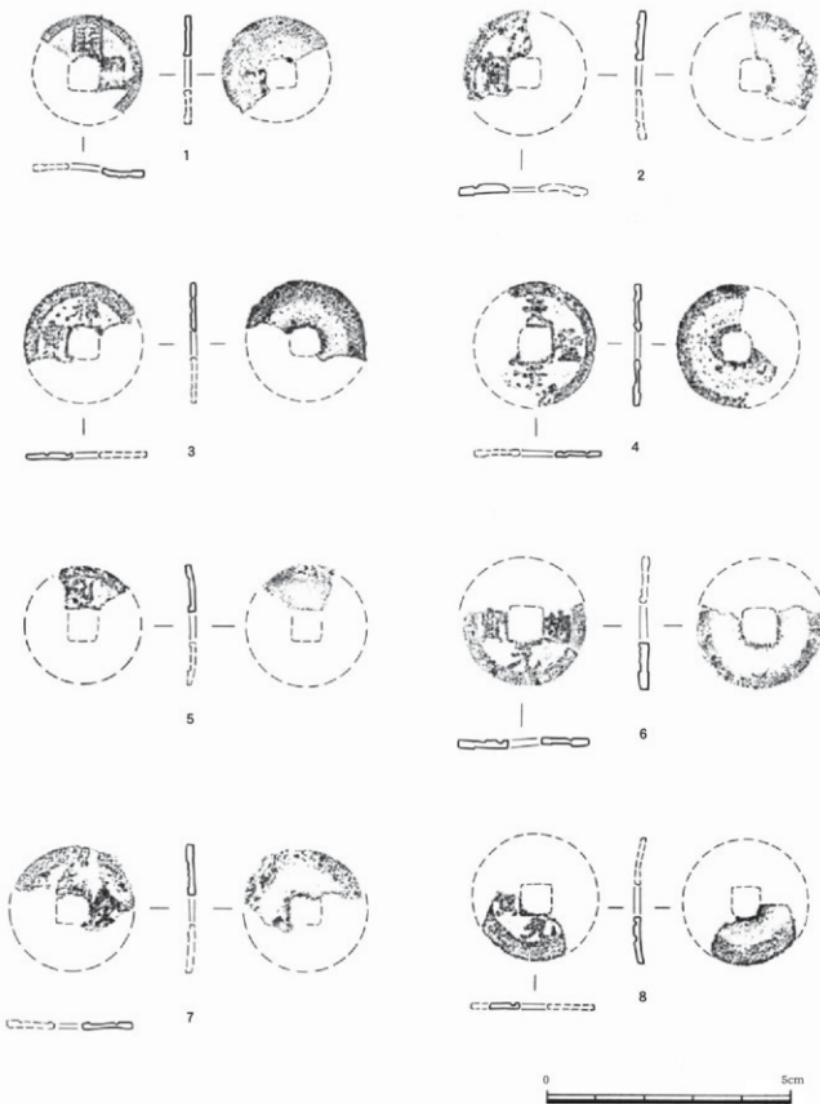
銭名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
開元通寶(唐621年初鋤) or (唐845年初鋤) or (南唐960年初鋤)	1片	1.53	「開」・「通」の二字が残存	B-C-10-11造成土3
宋通元寶(北宋960年初鋤)	1片	0.82	「宋」の一字が残存	B-C-10-11造成土3
宋通元寶(北宋960年初鋤)	1片	0.72	「宋」の一字が残存	B-C-10-11造成土3
淳化元寶(北宋990年初鋤) or 淳熙元寶(南宋1174年初鋤) or 淳祐元寶(南宋1241年初鋤)	1片	1.01	「淳」の三水部分と「寶」の二字が残存	B-C-10-11造成土3
祥符元寶(北宋1009年初鋤) or 祥符通寶(北宋1009年初鋤)	1片	1.57	「祥」・「寶」の二字が残存	B-C-10-11造成土3
天聖元寶(北宋1023年初鋤)	1片	2.40	「天」・「聖」・「元」の三字が残存	B-C-10-11造成土3
天聖元寶(北宋1023年初鋤)	1片	0.90	「天」の一宇が残存	B-C-10-11造成土3
至和元寶(北宋1054年初鋤)	1片	0.78	「至」の一宇が残存	B-C-10-11造成土3
治平元寶(北宋1064年初鋤)	1片	0.77	「平」の一宇が残存	B-C-10-11造成土3
治平通寶(北宋1064年初鋤)	1片	0.64	「平」の一宇が残存	B-C-10-11造成土3
熙寧元寶(北宋1068年初鋤) or 祥符元寶(北宋1009年初鋤)	1片	1.95	「寧」・「元」・「寶」の三字が残存するが不鮮明	B-C-10-11造成土3
元祐通寶(北宋1086年初鋤)	1片	1.07	「祐」の一宇が残存	B-C-10-11造成土3
紹聖元寶(北宋1094年初鋤)	1片	1.06	「紹」の一宇が残存	B-C-10-11造成土3
紹聖元寶(北宋1094年初鋤) or 紹興元寶(南宋1131年初鋤)	1片	0.88	「紹」の一宇が残存	B-C-10-11造成土3
元符通寶(北宋1098年初鋤)	1片	1.58	「元」・「符」の二字が残存	B-C-10-11造成土3
聖宋元寶(北宋1101年初鋤)	1片	0.9	「宋」の一宇が残存	B-C-10-11造成土3
聖宋元寶(北宋1101年初鋤)	1片	1.03	「元」・「寶」の二字が残存	
洪武通寶(明1368年初鋤)	1片	2.25	「洪」・「寶」の二字が残存	
洪武通寶(明1368年初鋤)	1片	1.42	「洪」・「寶」の二字が残存	
洪武通寶(明1368年初鋤)	1片	0.55	「武」の一宇が残存	B-C-10-11造成土3
洪武通寶(明1368年初鋤)	1片	1.82	「武」・「寶」の二字が残存	
洪武通寶(明1368年初鋤)	1片	1.01	「武」・「通」の二字が残存	
永樂通寶(明1408年初鋤)	1片	0.69	「樂」の一宇が残存	
永樂通寶(明1408年初鋤)	1片	0.87	「樂」の一宇が残存	B-C-10-11造成土3
永樂通寶(明1408年初鋤)	1片	1.36	「樂」の一宇が残存	
不明銭貨	1片	1.48	「元」・「寶」の二字が残存	
不明銭貨	1片	1.43	「元」・「寶」の二字が残存	
不明銭貨	1片	1.20	「元」の一宇が残存	
不明銭貨	1片	0.80	「寶」の一宇が残存	
不明銭貨	1片	1.12	「寶」の一宇が残存	
不明銭貨	1片	0.77	「寶」の一宇が残存	
不明銭貨	1片	1.60	「寶」の一宇が残存	
不明銭貨	1片	1.34	「寶」の一宇が残存	
不明銭貨	1片	0.98	「寶」の一宇が残存	
不明銭貨	1片	0.73	「寶」の一宇が残存	
不明銭貨	1片	0.97	「寶」の一宇が残存	B-C-10-11造成土3
不明銭貨	1片	0.77	「通」の一宇が残存	
不明銭貨	1片	0.88	「通」の一宇が残存	
不明銭貨	1片	1.00	「通」の一宇が残存	
不明銭貨	1片	0.69	「通」の一宇が残存	
不明銭貨	1片	0.80	「通」の一宇が残存	
不明銭貨	1片	0.88	「通」の一宇が残存	
不明銭貨	1片	1.22	「通」の一宇が残存	
不明銭貨	1片	1.12	不明文字の一宇が残存	
44片+X	41.15		一片は鉄釘の残片が溶着	
11片+X	14.45		-	
	-	1.25	-	
合計	99+X	※「X」:片数不明		

第22表 石積みSA05-B 錢貨観察一覧

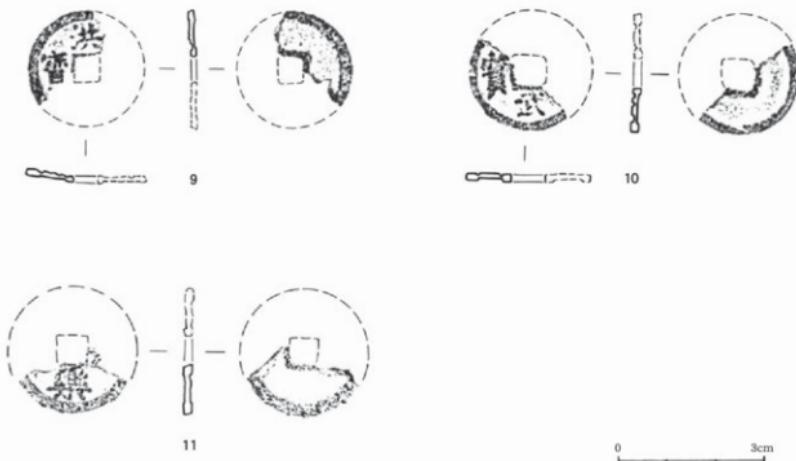
単位:mm/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	銅種 鍛造種類	初鋳年	素材	読み方	状態	書体	肉郭外径	肉郭内径	方穿	断面計測部位			重量	観察事項	出土点 出土層				
										A B	C D	E F	①	②	③				
第13図 図版9 1	開元通寶 不明	唐 621年 ・ 845年 南唐 960年	銅 銅錢	回読 対読	破損	楷書	—	—	—	—	—	—	1.18	0.79	1.10	1.53	1/2程度が欠損する。字款は「開」・「通」の二字が残存し、「通」の文字を横断する沈線(長6.7mm、幅6.6mm)様の工具痕が面の肉郭内縁近くから駆までみられる。工具によって内側に強く僅んでいて、背まで微弱に盛り上がりしている。面の外縁の一筋は人為的に「V」字状に抉られている。背の内郭は、幅広(幅3.89mm)で所謂濃縁である。二次的な火熱を受けて微弱な溶解がみられる。緑青が面・背で部分的にみられる。	B-10 SA05-B 造成土3	
〃 2	①淳化元寶 ②淳熙元寶 ③淳祐元寶	①北宋 990年 ②南宋 1174年 ③南宋 1241年	銅 銅錢	回読 対読	破損	草書	—	—	—	—	—	—	1.30	0.90	1.69	1.01	2/3程度が欠落する。字款は「淳」のさんずい部分と「寶」の二字が残存。面の肉郭の幅は3.2mmを測る。背は全体的に摩滅し肉郭の境目が潰れて不鮮明となる。背は面よりも緑青が多く観察できる。破損部分は緑青による地金の浸食で脆くなっている。	B-11 SA05-B 造成土3	
〃 3	祥符元寶 or 祥符通寶	北宋 1009年	銅 銅錢	回読 対読	破損	真書	—	—	—	—	—	—	4.92	1.06	0.60	0.89	1.57	1/2程度が欠落する。字款は「祥」・「寶」の二字が残存。面の肉郭の幅は2.59mmを測るが、背は全体的に摩滅し肉郭の境目が潰れて不鮮明となる。二次的な火熱を受けて部分的に溶解する。背には鱗割れや緑青が面よりも多く観察できる。	B-11 SA05-B 造成土3
〃 4	天聖元寶	公 銅 銅錢	北宋 1023年	銅 銅錢	回読 対読	破損	真書	—	—	—	7.18	1.26	0.61	1.03	2.40	面の左側が欠落する。字款は「天」・「聖」・「元」の三字が残存。二次的な火熱を受けて部分的な溶解や緑青による微弱な溶解がみられる。背の孔の左下から解剖れがみられる。	B-11 SA05-B 造成土3		
〃 5	至和元寶	模 銅 銅錢	北宋 1054年	銅 銅錢	回読 対読	破損	篆書	—	—	—	—	—	1.44	0.94	1.36	0.78	2/3以上が欠落する。字款は「至」の一文字が残存。面の肉郭の縁幅は2.5mmを測る。背は全体的に摩滅し肉郭の境目がルーズで不鮮明となる。面よりも背は緑青による浸食で灰白色に変色する。	B-11 SA05-B 造成土3	
〃 6	景德元寶	公 銅 銅錢	北宋 1004年	銅 銅錢	回読 対読	破損	真書	—	—	6.49	1.63	0.97	1.55	1.95	面の上面が欠落する。字款は「德」・「元」・「寶」の三字が残存するが字款は緑青などの影響を受けて潰れて不鮮明である。面の肉郭は濃縁(縁幅:3.0mm)を測る。背の肉郭は面よりもやや不鮮明であるが肉郭の幅が3.1mmと若干幅広となる。折損部分は緑青による地金の浸食を受けている。	B-11 SA05-B 造成土3			
〃 7	元符通寶	公 銅 銅錢	北宋 1098年	銅 銅錢	回読 対読	破損	行書	—	—	—	5.22	1.30	0.98	1.34	1.58	面の2/3が欠落する。字款は「元」・「符」の二字が残存する。面の肉郭は濃縁(縁幅:3.4mm)を測る。背の肉郭は平坦で不鮮明である。背は緑青による鱗割れがみられ、一部の鱗からみ出している。	B-11 SA05-B 造成土3		
〃 8	聖宋元寶	不 明	北宋 1101年	銅 銅錢	回読 対読	破損	行書	—	—	—	1.18	0.50	0.89	1.03	1.48	1/4弱が残存。字款は「元」・「寶」の二字が確認できる。面・背ともに内郭が濃縁(面の縁幅:3.5mm、背の縁幅:3.6mm)である。背の肉郭は内側の境目が不鮮明である。両面とも緑青の一部が剥離する。	B-10 SA05-B 造成土3		
第14図 図版9 9	洪武通寶	模 銅 銅錢	明 1368年	銅 銅錢	回読 対読	破損	楷書	—	—	—	1.43	0.76	1.31	1.42	1.31	1/3強が残存。字款は「洪」・「寶」の二字が残存。両面に亀裂がみられる。面背とも緑青による腐食が著しい。	B-11 SA05-B 造成土3		
〃 10	洪武通寶	公 銅 銅錢	明 1368年	銅 銅錢	回読 対読	破損	楷書	—	—	—	1.80	0.79	1.41	1.82	1.41	#。字款は「武」・「寶」の二字が残存。両面とも緑青による腐食がみられる。その他、縁の一部が剥離する。	B-11 SA05-B 造成土3		
〃 11	永樂通寶	公 銅 銅錢	明 1408年	銅 銅錢	回読 対読	破損	楷書	—	—	—	1.58	0.86	1.47	1.36	1.36	面の2/3が欠落する。字款は「樂」の一文字が残存する。字款の戻形は深く鉄造され鮮明である。面の肉郭の幅は2.1mmを測る。背の肉郭の幅は2.4mmを測り、面よりも幅広である。背は緑青による器面が微細なバタ状となり細かい砂粒や石英、鉄さびなどが付着する。	B-11 SA05-B 造成土3		

注「-」:計測不可



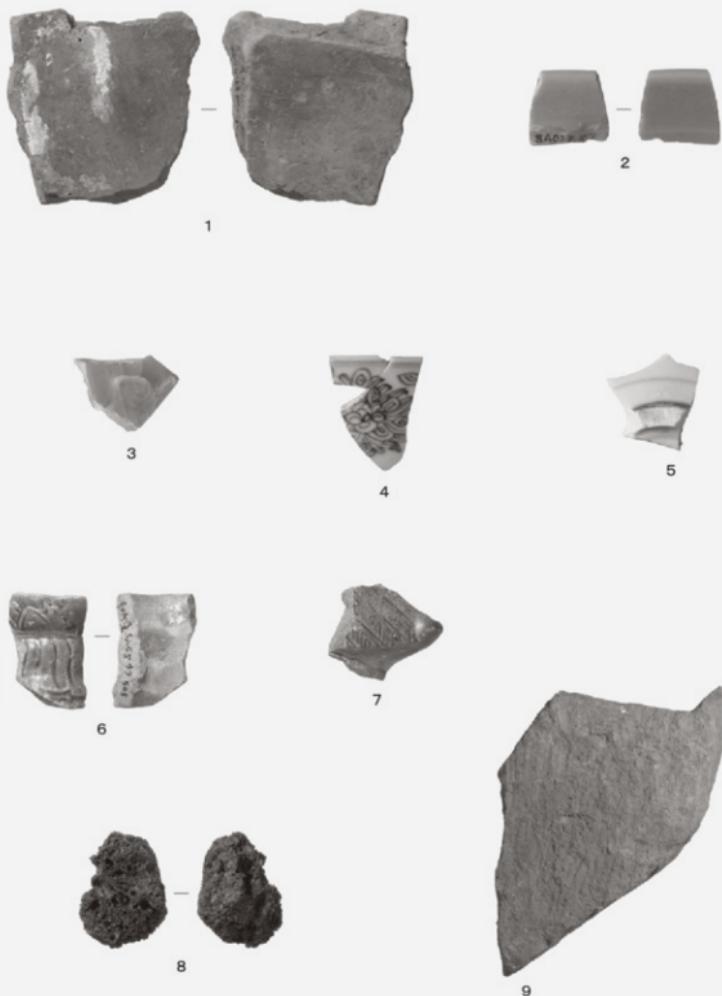
第13図 石積みSA05-B出土品② 銭貨：1～8



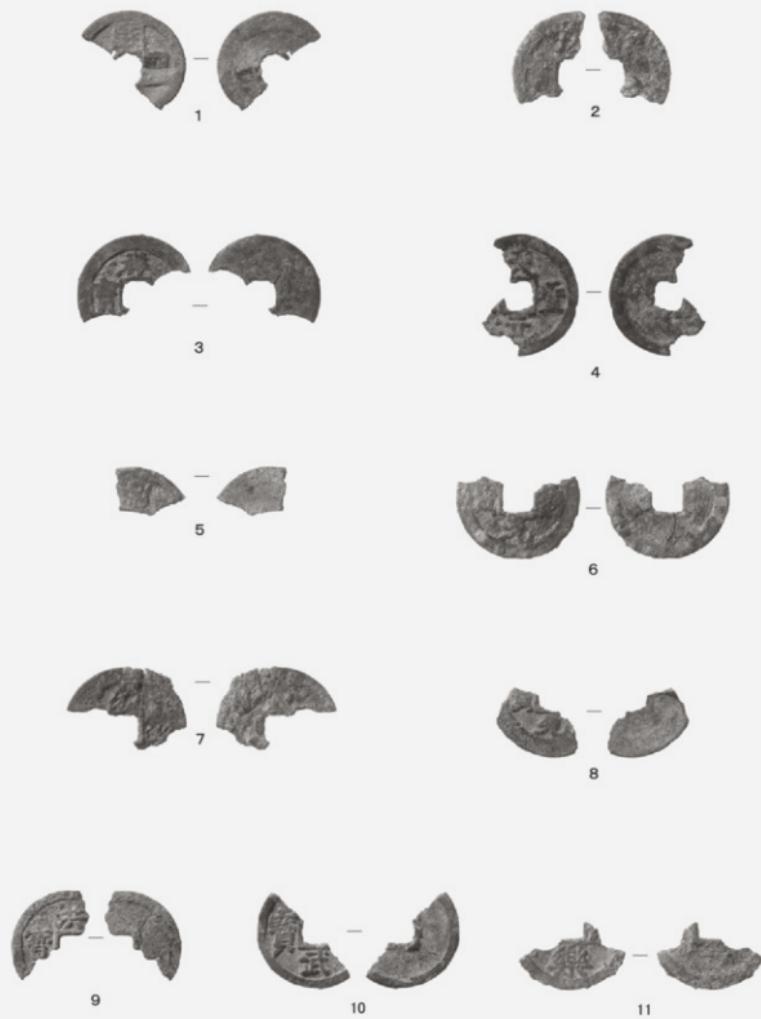
第14図 石積みSA05-B出土品③ 錢貨：9～11

第23表 石積みSA05-B 出土遺物状況(図版外)

種類・器種・分類	陶質土器	器種不明	胴部	B-C-10-11			合計	
				SA05-B				
				造成土3	造成土4 (明褐色混土疊層)	地山(岩盤)直上 の褐色土層		
				1	0	0	1	
屋瓦	高麗系	平瓦	灰色	塗喰無し	1	1	2	
		平瓦	灰色	塗喰無し	1		1	
	大和	丸瓦	灰色	塗喰有り(片面)	2		2	
		平瓦	灰色	塗喰無し	2		2	
	明朝系	丸瓦	灰色	塗喰有り(片面)	2		2	
		赤色	塗喰有り(片面)	1			1	
		赤色	塗喰無し	5			5	
		褐色	塗喰無し	1			1	
		平瓦	灰色	塗喰有り(片面)	1		1	
		褐色	塗喰無し	4			4	
				2			2	
			合計	23	1	0	24	
			漆喰	1			1	
			合計	1	0	0	1	
中国産把手陶器	壺		胴部	15			15	
			合計	15	0	0	15	
タイ産把手陶器	壺		胴部	6			6	
			合計	6	0	0	6	
本土產磁器	近現	器種不明	胴部	1			1	
			合計	1	0	0	1	
金属製品	武具	八双金物 鉢形	青銅 青銅	1 1			1 1	
		合計		2	0	0	2	
ガラス製品	瓶		胴部		1		1	
			板ガラス	1			1	
		合計		1	1	0	2	



図版8 石積みSA05-B出土品① 塚瓦：1、青磁：2・3、青花：4・5、彩釉陶器：6・7、石器：8、石造製品：9



図版9 石積みSA05-B出土品②・③ 銭貨：1～11

(4) 石積み SA07 の出土遺物 (第 15 図、第 24 表～第 26 表、図版 10)

石積み SA07 から出土した遺物の種類は、第 4 表に示したように総計で 86 点 (≈100%) が得られている。出土遺物の内訳は、土器 8 点 (9.30%)、瓦類 14 点 (16.28%)、青磁 9 点 (10.47%)、青花 1 点 (1.16%)、白磁 1 点 (1.16%)、中国産褐釉陶器 25 点 (29.07%)、華南彩釉陶器 2 点 (2.33%)、本土産陶器 1 点 (1.16%)、沖縄産無釉陶器 4 点 (4.65%)、タイ産 (褐釉陶器) 10 点 (11.63%)、金属製品 4 点 (4.65%) の 14 種類が確認されている。輸入陶磁器 (タイ産、中国産) の占める割合は、60.47% であった。

当該遺構の時期を明確に示すような資料はない。石積み SA07 出土の遺物の大半は細片化した資料が多く、その中から比較的大きな破片資料や特徴的な資料を図示 (第 15 図) した。

第24表① 石積みSA07 青磁・本土産陶器出土状況

種類・器種・部位	層序	B-13 SA07				合 計	
		覆土	畦第4層 褐色土層	第5層	第6層 裏栗		
		北側トレンチ 第6層裏栗					
青磁	碗	口縁部	外反 蓮弁・笠彫り			1	1
			蓮弁・笠彫り	1			1
		胴部	有文			2	2
			無文			1	1
	皿	口縁部	外反 無文		2		2
	蟹	口縁部	鈎縁 蓮弁・櫛描	1			1
	酒会壺	胴部	有文不明			1	1
合 計			1	1	2	4	1
本土産陶器	大鉢	口縁部				1	1
		合 計		0	0	0	1
						0	1

第24表② 石積みSA07 二次的火熱溶解錢貨

錢名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
不明錢貨	1片	0.94	「通」の一文字が残存	B-13 第6層裏栗
	1片	0.62	判読不可	
	1片	1.30	「寶」の一文字が残存	
合 計		3		

第25表① 石積みSA07 青磁・本土産陶器観察一覧

単位:cm

捕団番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	部位	口径 器高 底径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層	
第15図 図版10 1	青 磁	蓮 弁 文 碗	口縁部	15.2 — —	器形: 脇部で若干丸味を帯びて口縁に移行する。口縁部が微弱に肥厚する外反口縁碗。文様: 口縁部の肥厚帯直下まで幅広の籠彫り(範幅: 4.0～4.8mm)で弁先の尖った蓮弁を描く。素地: 淡灰白色の細粒子で、微細な気泡痕が少量観察できる。釉色: 淡青緑色の釉を両面に施釉。貫入: なし。龍泉窯系。14c後半～15c前半。	B-13 SA07 北側トレンチ 第6層裏栗
				— — —		
〃 〃 2	青 磁	鈎 縁 盤	口縁部	21.2 — —	器形: 鈎縁盤。口縁端部を擴み上げて形成する。文様: 内面に五本単位の櫛で蓮弁文を描いていく。素地: 淡灰白色の細粒子で、微細な気泡痕が少量観察できる。釉色: 淡灰緑色の釉を両面に施釉。貫入: 細かい貫入が両面でみられる。龍泉窯系。14c終末～15c。	SA07 畦第4層 褐色土層
				— — —		
〃 〃 3	本 土 産 陶 器	大 鉢	口縁部	— — —	器形: 肥厚口縁の大鉢。文様: 肥厚帯の上端(口唇部)と下端部に指圧を加えて網目文を表現する。肥厚帯中央には丸窓(幅2.7mm)で界線を二条施す。素地: 淡灰白色の粗粒子で、粗い黒色鉱物を多く含む。少量ながら粗細な石英が含まれている。釉色: 茶褐色の釉が口唇部から外面に施されている。内面は釉が薄く施され、繊目となる。貫入: なし。薩摩焼。17c後半。	B-13 SA07 第6層裏栗
				— — —		
				— — —		

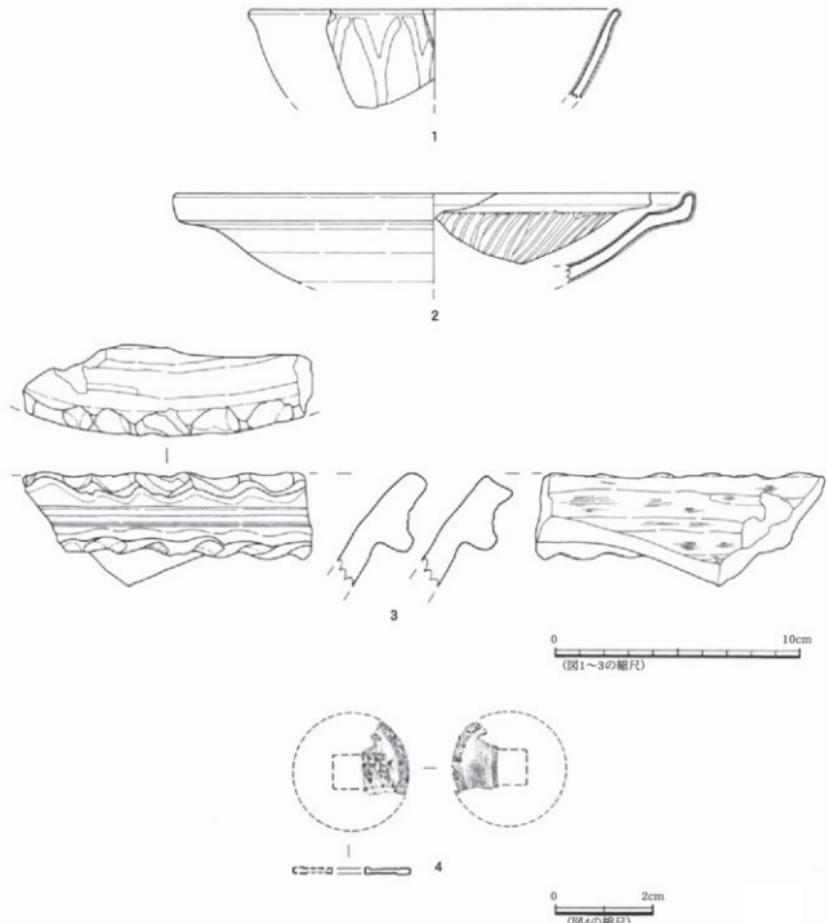
注 「-」:計測不可

第25表② 石積みSA07 錢貨観察一覧

単位:mm/g

拂団番号 図版番号 遺物番号	銭種 種類	鋳造年	初鋳年	素材	読み方	状態	書体	肉郭			方穿	断面計測部位			重量	観察事項	出土点 出土層
								A 外径	B 内径	C D		①	②	③			
第15図 図版10 4	不明	不明	不明	銅錢	不明	破損	篆書	—	—	—	1.54	0.66	1.02	0.94	3/4が欠落。字款は篆書で「通」の一字が残存。書体から類推する「周通元寶」(後周、955年初鋳造)に該当するようである。折損部と肉郭の一部に青銅がみられ地金が浸食されている。	SA07 第6層 裏栗	

注「—」:計測不可

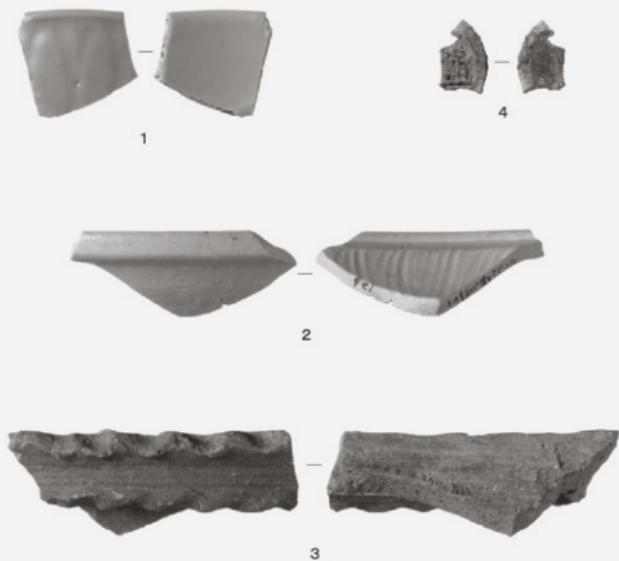


第15図 石積みSA07出土品 青磁：1・2、本土産陶器：3、銭貨：4

第26表 石積みSA07 出土遺物状況(図版外)

種類・器種・部位			層序					B-13 SA07			合 計	
			覆土	畦 第4層 褐色土層	第5層 裏栗直上	第6層 裏栗	北側 トレンチ 第6層 裏栗					
土器	器種不明	胴部								7	7	
		部位不明					1			1		
合 計			0	0	0	1		7		8		
瓦	高麗系	平瓦	灰色	漆喰無し			1			1		
	大和(古)	丸瓦	灰色	漆喰無し			1			1		
		平瓦							1	1		
	明朝系	軒平	褐色	漆喰無し			1			1		
		丸瓦	灰色	漆喰無し		1	1			2		
		平瓦	灰色	漆喰無し	2	2				4		
			赤色						1	1		
合 計			0	2	1	6		2		11		
漆喰				1						1		
合 計			1	0	0	0		0		1		
青花	皿	胴部			1					1		
合 計			0	1	0	0		0		1		
彩釉陶器	盤	胴部			1					1		
合 計			0	1	0	0		0		1		
中国産 褐釉陶器	壺	胴部			1	1	28			30		
合 計			0	1	1	28		0		30		
タイ産 褐釉陶器	壺	胴部	3			7				10		
合 計			3	0	0	7		0		10		
沖縄産 無釉陶器	壺	胴部	1							1		
	器種不明					3				3		
合 計			1	0	0	3		0		4		
石製品	石碑or羽目板	細粒砂岩(ニーピ)							1	1		
合 計			0	0	0	0		1		1		
石材	黒色千枚岩						1			1		
	細粒砂岩(ニーピ)				1					1		
合 計			0	1	0	1		0		2		
金属製品	工具類・ 生産用具	丸釘	完形	中	鉄			1		1		
	刀子		青銅		1				1			
	分類不明	用途不明		青銅		1		1		2		
合 計			0	2	0	2		0		4		

注 釘のサイズは、中:1寸半~5寸まで(3.75cm~15.75cm未満)



図版10 石積みSA07出土品 青磁：1・2、本土産陶器：3、銭貨：4

(5) 石積み SA11 の出土遺物

石積み SA11 から出土した遺物の種類は、第 4 表に示したように総計で 25 点が得られている。

出土遺物の内訳は、青磁 3 点、タイ産土器 1 点、金属製品 3 点を含む 8 種類（第 4 表）が確認されている。

当該遺構の時期に伴う遺物として呈示ができる資料は、第 27 表にみえる華南彩釉陶器やタイ産土器のみであったが、細片資料のため、図化を省略した。

第27表 石積みSA11 出土遺物状況

層序				B-C-12 SA11						合 計	
				外側 擾乱層	栗石内 第4層 (擾乱) 不発弾 検出ヶ所	東西 レンチ 栗石内 中層 直上	東西 レンチ 栗石内 中層 淡褐色 泥砂土層	下層 黄褐色 土層 (地山)	裏栗内 (擾乱層)		
種類・器種・部位											
屋瓦	高麗系	平瓦	灰色		塗喰無し					1 1	
	丸瓦	灰色		塗喰有り(片面)						1 1	
	明朝系	平瓦	灰色	塗喰無し						1 1	
合 計					0 0 0 0 0				3 3		
青磁	碗	口縁部 直口	雷文	片切彫り				1		1	
		胴部	有文				1			1	
	皿	底部	無文						1	1	
合 計					0 0 1 1 0				1 3		
彩釉陶器		鶴形水注		胴部	1					1	
合 計					1 0 0 0 0				0 1		
タイ産土器 (半縛)	蓋	胴部						1		1	
		合 計			0 0 0 0 1				0 1		
タイ産 褐釉陶器	壺	胴部							8 8		
		底部							2 2		
合 計					0 0 0 0 0				10 10		
沖縄産 無釉陶器	器種不明	胴部							3 3		
		合 計			0 0 0 0 0				3 3		
石材		細粒砂岩(ニーピ)							1 1		
合 計					0 0 0 0 0				1 1		
金属 製品	工具類・生 産用具	角釘	先端部欠損	中	鉄	1				1	
			頭部欠損	サイズ不明	鉄	1				1	
			先端+	中	鉄	1				1	
			頭部欠損							3	
合 計					0 3 0 0 0				0 0		

注 釘のサイズは、中:1寸半~5寸まで(3.75cm~15.75cm未満)

(6) 石積み SA12 の出土遺物 (第 16 図、第 28・29 表、図版 11)

石積み SA12 から出土した遺物の種類は、第 4 表に示したように総計で 123 点 (≈100%) が得られている。

出土遺物の内訳は、土器 3 点 (2.44%)、陶質土器 10 点 (8.13%)、瓦質土器 1 点 (0.81%)、瓦類 35 点 (28.46%)、青磁 8 点 (6.50%)、青花 1 点 (0.81%)、彩釉陶器 1 点 (0.81%)、中国産褐釉陶器 36 点 (29.27%)、沖縄産陶器 14 点 (11.38%)、タイ産褐釉陶器 6 点 (4.88%)、本土産陶器 5 点 (4.07%)、石器・石製品 1 点 (0.81%)、金属製品 2 点 (1.63%) の 16 種類（第 4 表）が確認されている。輸入陶磁器（タイ産、中国産）の占める割合は、42.28% であった。

当該遺構の時期に伴う遺物として呈示ができる資料は、青磁碗及び皿（第 16 図 4・5）と華南彩釉陶器（同図 6）などがある。なお、出土遺物の大半は細片化した資料が多く、その中から比較的大きな破片資料や特徴的な資料を図示（第 16 図）した。

第28表 石積みSA12 出土遺物状況

層序	種類・器種・部位	B+C-12 SA12						合計
		延長 レンチ 第1層	延長 レンチ 第1層 (覆土)	延長 レンチ 第3層c	延長 レンチ 第3層e	延長 レンチ 第3層e 栗石 直上	延長 レンチ 第3層g	
土器	圓錐不明	胸部		1	2	2	0	3
	合計		0	1	0	2	0	3
陶質土器	鍋	口縁部		2	1			3
		胸部		3				3
		底部		1				1
		蓋		1				1
	不明	胸部			1			1
瓦質土器	鉢	胸部		1				1
	合計		0	8	0	2	0	10
瓦	量瓦	高麗系	平瓦	灰色	漆喰無し	1	1	2
			丸瓦	灰色	漆喰有り(片面)	2		2
			平瓦	灰色	漆喰無し	2	1	3
		大和			漆喰有り(片面)		3	3
					漆喰有り(片面)		1	1
			丸瓦	灰色	漆喰無し	4	1	5
		明朝系	褐色	漆喰無し	1			1
			赤色	漆喰無し	1			1
			平瓦	灰色	漆喰有り(片面)		2	2
			褐色	漆喰有り(片面)	3			4
			赤色	漆喰有り(片面)	1			1
			平瓦	灰色	漆喰無し	2		2
			褐色	漆喰無し	1			1
			赤色	漆喰無し	1	1	3	5
	合計		0	18	0	2	12	32
埴瓦	Ⅱ類		灰色	漆喰無し	1			1
		Ba	灰色	漆喰無し		1		1
	Ⅲ類			角無し				
		形状不明a or 形状不明b (厚さ不明)	赤色	漆喰無し	1			1
	合計		0	2	0	1	0	3
青磁	碗	口縁部	直口	波瀾文			1	1
				波瀬文・線彫り	1			1
		胸部		有文	1			1
	皿			無文	1		1	2
		底部		無文	1			1
	盤		aタイプ	印花文	1			1
	合計		2	4	0	0	1	8
青花	碗	胸部			1			1
彩軸陶器	型物	合計		0	1	0	0	1
		輪形水注	底部		1			1
中国産	壺	合計		0	1	0	0	1
		口縁部	方形状			1	1	2
	鉢	胸部			21	1	11	33
	合計		0	22	0	2	12	36
タイ産	壺	胸部		2		3		5
	鉢	底部		1				1
本土産	磁器	合計		0	3	0	0	3
		鉢	円筒形容器		1			1
	合計		0	1	0	0	1	2
本土産	碗	胸部		2				2
	袋物	脚部	白礪摩片	1				1
	合計		0	3	0	0	0	3
沖縄産	碗	口縁部		3				3
	小碗	口縁部		1				1
	鍋	底部		1				1
	施釉陶器	口縁部		1				1
	微	胸部		1			1	1
	瓶	胸部				1		1
	急須	胸部		1				1
	合計		0	8	0	1	2	11
沖縄産	茶釜	口縁部			1			1
	無釉陶器	器種不明	胸部		2			2
自然石	合計		0	2	1	0	0	3
	河原石			1				1
金属製品	工具類・ 生産用具	丸釘	先端部 欠損	中	鐵	1		1
	武具	鍔金物覆輪		青銅	1			1
	合計		1	1	0	0	0	2

注 釘のサイズは、中:1寸半～5寸まで(3.75cm～15.75cm未満)

第29表① 石積みSA12 陶磁器類観察一覧

単位:cm

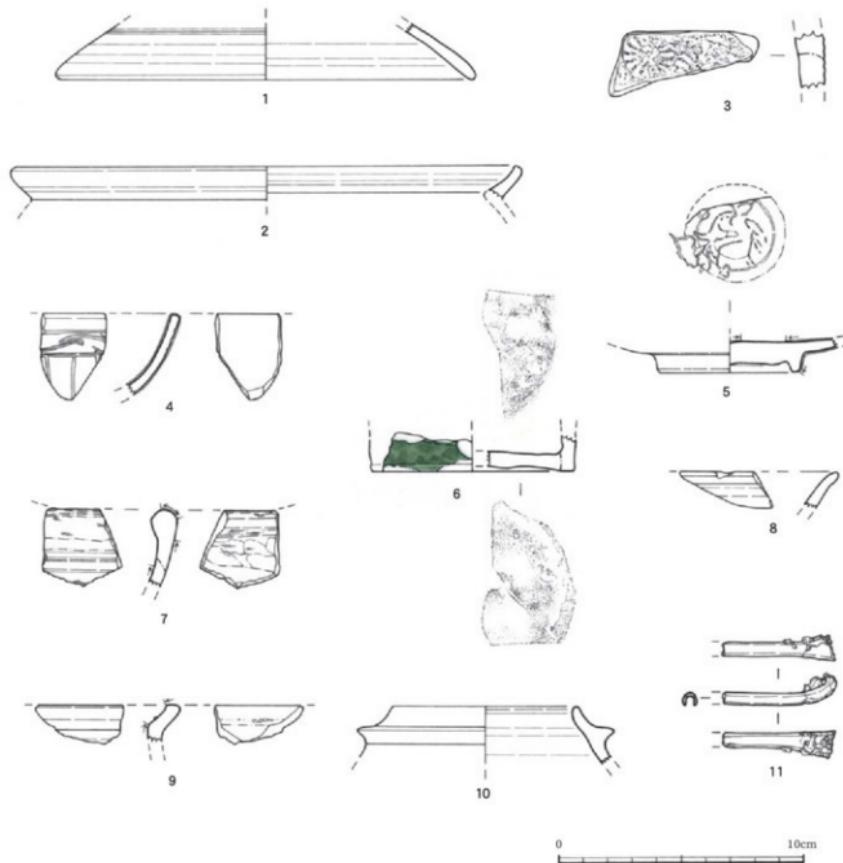
挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	部位	口径 高さ 底径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第16図 図版11 1	陶質土器	鍋	蓋 径 17.2 — —	器形:浅皿状の蓋。蓋縁近くで内湾する。器面調整:全体的に表裏面とも器面の保持が悪く摩滅する。外面には刷毛目様の擦痕が部分的にみられる。内面の一部には回転擦痕がみられる。器厚:3.9~4.6mmを測る。胎土:泥質で細かく、手で触ると粉状の粉末が付着する。混入物:微細な石英や黒色鉱物を多く含む。稀に粗い茶褐色の物質や微細な雲母片がみられる。色調:淡橙色を帯びる。焼成:良好で堅い。	SA12 延長レンチ 第1層 (覆土)
〃 2		口縁部	20.9 — —	器形:口頭部で「く」の字状に屈曲する鍋。上記の鍋蓋とセット関係にある。器面調整:表裏面とも回転擦痕がみられる。器厚:4.2~4.7mmを測る。胎土:泥質で細かく、手で触ると粉状の粉末が付着する。混入物:微細な石英を主体に黒色鉱物を含む。稀に細かい茶褐色の物質や微細な雲母片がみられる。色調:淡橙色を帯びる。焼成:良好で堅い。	SA12 延長レンチ 第3層e
〃 3	瓦質土器	鉢	胴部 — —	器形:火鉢などの鉢の胴部。文様:外面上に車輪状の菊花(菊の枚数は、16花弁)の型押し(型押しの判は、木版とみられ木目が菊花の文様に現れている)と花弁の上下に界線を施す。器面調整:内面は全体的に摩滅し、器面の保持も悪く判然としないが、ナデ調整が考えられる。器厚:10.5~12.2mmを測る。胎土:砂泥質で粗い。混入物:微細な石英を多く含み稀に細かい茶色の物質が混入する。色調:外面上は暗灰色で、内面が灰褐色を帯びている。焼成:堅い。	SA12 延長レンチ 第1層 (覆土)
〃 4	青磁	波瀬文 碗	口縁部 — — —	器形:内湾直口口縁碗。文様:口縁部に線彫りで波瀬文を描き、その上下を界線で区画する。波瀬文帯以下に線彫りの運舟文を描いている。素地:淡灰白色の細粒子で、微細な気泡痕が多くみられる。釉色:淡灰緑色の透明釉。貫入:なし。龍泉窯系。14c後半~15c後半。	SA12 延長レンチ 第1層 (覆土)
〃 5		皿	底部 — 5.7	器形:薄造りの浅皿とみられる。文様:見込みの釉を円形に搔き取って露胎とし、見込みに印花文を施す。素地:灰白色の細粒子で、微細な気泡痕が多くみられる。釉色:淡黄緑色の釉を施す。外面上の釉は高台外面下端まで施釉。貫付は露胎とする。貫入:なし。龍泉窯系。14c後半~15c前半。	SA12 延長レンチ 第1層 (覆土)
〃 6	彩釉陶器	型物 鶴形水注	底部 8.3	器形:型物の鶴形水注の底部片とみられる。肩下部の底部となる箇所には円盤状の陶土を貼り付けて成形成。文様:なし。器面調整:外下面は雑な指圧をナデ消している。縁部の線に沿うように布目压痕が確認される。その他縁辺部には剥離剤として利用された白色の陶土が付着する。内面は底部附近がナデを加えている。他は雑な指圧をナデ消している。素地:明黃白色の細粒子で半磁胎。素地には粗細な石英が少量含んでいる。釉色:釉は明緑色で外面にのみ施している。中国南部の窯。15c後半~16c。	C-12 延長レンチ 第1層 (覆土) + C-11 フーチン8の 北側
〃 7	中国産 褐釉陶器	鉢	口縁部 — — —	器形:内湾口縁の鉢。内面の口縁部は玉縁状に肥厚させて口縁部を強固とする。文様:なし。器面調整:外面上の口縁部は擦痕を施し、胴部に刷毛目様の擦痕がみられる。内面は口縁部が水引きの擦痕(水ナデ)、肥厚部直下に指圧痕がみられ他はナデ調整が加えられている。素地:明橙白色の細粒子で、粗細な石英を多く含み、稀に細かい茶褐色や黒色鉱物を含む。釉色:茶褐色の釉を内面の胴上部から下に施す。外面上の口縁部に僅かに帶状に施釉する。二次的な火熱を受けて釉上には微細なアバタ状となる。中国南部の窯。14c後半~15c。	C-12 SA12 延長レンチ 第1層 (覆土)
〃 8	沖縄産 施釉陶器	碗	口縁部 — — —	器形:外反口縁碗。口縁を僅かに屈曲させている。文様:なし。器面調整:釉上から観察すると外面上は輪暈整形で、内面は丁寧なナデ調整とみられる。素地:淡黄白色の細粒子で、微細な気泡痕が僅かにみられる。釉色:灰白色の透明釉が両面にみられる。細かい貫入が両面でみられる。壺屋焼。	C-12 SA12 延長レンチ 第1層 (覆土)
〃 9		鍋	口縁部 — —	器形:口頭部で「く」の字状に屈曲する鍋の口縁。蓋を受ける為に内面口縁が浅く靡む。内面口縁に重ね焼きの目跡(胎土目)が帶状に残っている。文様:なし。器面調整:内面口縁部の露胎する部分は丁寧な回転ナデである。素地:淡黄白色の細粒子で、微細な気泡痕が僅かにみられる。釉色:黄茶色の透明釉で、内面が白色の透明釉を施している。貫入:なし。壺屋焼。	C-12 SA12 延長レンチ 第1層 (覆土)
〃 10	沖縄産 初期 無釉陶器	茶釜	口縁部 7.6 —	器形:内傾する鉢金状の茶釜とみられる。口縁部を僅かに外側に反らせている。口唇部から下、10.2~19.2mmの範囲内に断面が三角形状となる直角鉢を造る。文様:なし。器面調整:釉上から観察した範囲では、外面上が丁寧なナデ、内面は輪暈痕を丁寧にナデ消しているようである。素地:茶褐色の微粒子で、粗細な茶褐色の鉱物を僅かに含む。稀に粗い石英がみられる。釉色:茶褐色の釉が両面に施したようであるが、二次的な火熱を受けて釉の変色(アバタ状となり、白濁する)や剥落がみられる。湧田焼。	C-12 SA12 延長レンチ 第3層c

注 「-」:計測不可、「+」:接合の意

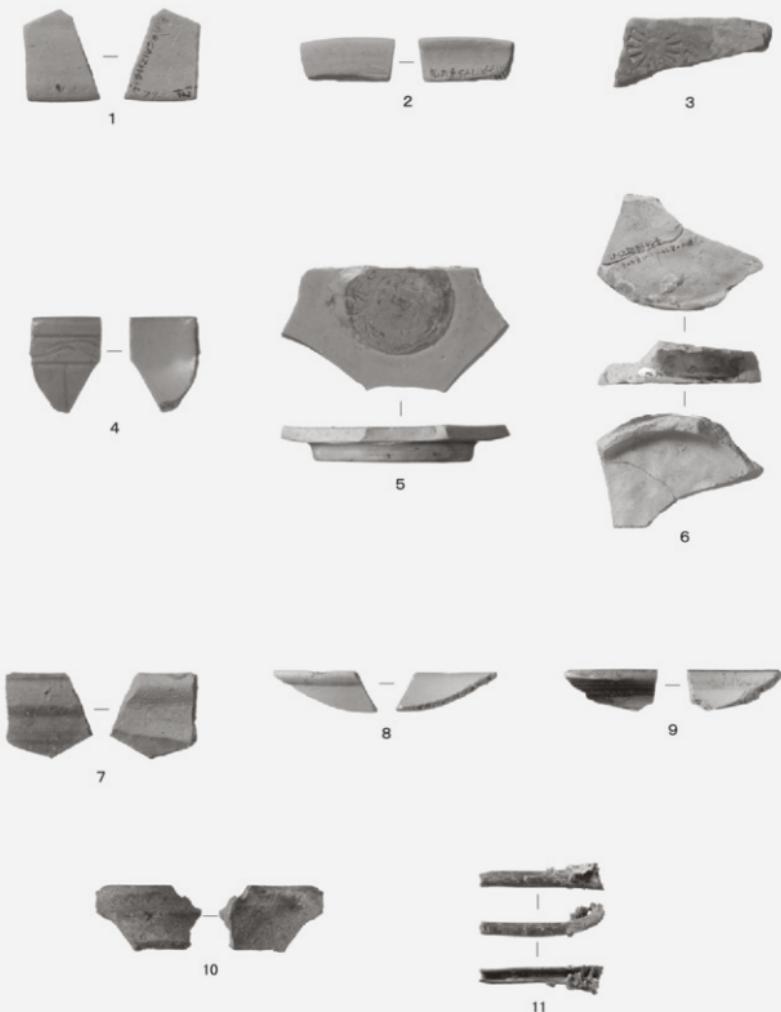
第29表② 石積みSA12 金属製品観察一覧

単位:mm/g

捕获番号 図版番号 遺物番号	分類 名称・仮称	材質	残存長(縦) 残存幅(横)	残存最大厚 残存最小厚 残存重量	観察事項	出土地点 出土層
第16図 図版11 11	武具 鎧金物 覆輪	青銅 製品	11.1 47.0	1.02 0.82 4.3	鏡の障子板、押付、冠ノ板などの覆輪金具の一部とみられる。鍍金は緑青で剥落したようである。加工は丁寧である。覆輪の右側が破損時に折れ曲がっていて「U」の字状の断面が変形してアラビア数字の「3」の様に断面中央部から折れて外側に開いている。緑青は右側部分に集中し、精緻が破裂したようである。右側内面にはケロイド状に青銅が付着している。	B-12 SA12 延長レンチ 第1層



第16図 石積みSA12出土品 陶質土器：1・2、瓦質土器：3、青磁：4・5、彩釉陶器：6、中国産褐釉陶器：7、沖縄産施釉陶器：8・9、沖縄産無釉陶器：10、金属製品：11



図版11 石積みSA12出土品 陶質土器:1・2、瓦質土器:3、青磁:4・5、彩釉陶器:6、
中国産褐釉陶器:7、沖縄産施釉陶器:8・9、沖縄産無釉陶器:10、
金属製品:11

(7) 石積み SA14 の出土遺物 (第 17 図～第 28 図、第 30 表～第 49 表、図版 12～図版 22)

石積み SA14 から出土した遺物の種類は、第 4 表に示したように総計で 1,561 点 (≈100%) が得られている。出土遺物の内訳は、土器 22 点 (1.41%)、瓦類 (屋瓦・埠瓦・煉瓦) 637 点 (40.81%)、青磁 169 点 (10.83%)、白磁 10 点 (0.64%)、中国産褐釉陶器 433 点 (27.74%)、沖縄産施釉陶器 5 点 (0.32%)、タイ産褐釉陶器 50 点 (3.20%)、高麗青磁 1 点 (0.06%)、ガラス玉 3 点 (0.19%)などの 30 種類が確認されている。

輸入陶器 (タイ産、中国産、高麗青磁) の占める割合は、44.01% であった。また、当該遺構の時期に比定できる遺物として、青磁酒会壺 (第 20 図 22・23) と青磁茶托 (同図 26)、華南彩釉陶器 (第 21 図 3・4)、タイ産 (土器、炻器、褐釉陶器。第 24 図 1～5) などがあった。なお、出土遺物の大半は細片化した資料が多く、その中から比較的大きな破片資料や特徴的な資料を図示 (第 17 図～第 28 図) した。

第30表① 石積みSA14 屋瓦出土状況

層序	B-14-15 SA14										合 計	
	東トレ					北トレ		西トレ				
	第 1 層 a		第 2 層 a		第 3 層 a	第 4 層 a		第 5 層 a		第 6 層 a	第 7 層 b	
	覆土	（上層）	褐 色	土 層	（上層）	褐 色	土 層	（上層）	褐 色	土 層	（黒褐色）	（黒褐色）
種類												
高麗系	軒丸	灰色	漆喰無し			1		1		1	1	4
	軒平	灰色	漆喰無し					1				1
	丸瓦	灰色	漆喰無し	1	2	2	7 17	5	15			1
	平瓦	灰色	漆喰無し	4	4	2 13	5	8 17	14	1 58 28	2 2 1 2	109
	赤色	褐色	漆喰無し	1	1	1	1	1				7
大和(古)	有段瓦	褐色	漆喰無し									1
	丸瓦	灰色	漆喰有り(片面)	1	1	2	1	2	1	3	4	1
	平瓦	褐色	漆喰無し	3	4	3	1	2	7	2	10	2
	灰色	漆喰無し										2
大和	雁振	褐色	漆喰無し					1				2
	丸瓦	灰色	漆喰有り(片面)			1						1
	平瓦	褐色	漆喰無し	3	4	3	1	2	7	2	10	5
	灰色	漆喰無し										1
明朝系	丸瓦	灰色	漆喰有り(片面)			1						1
	軒丸	褐色	漆喰無し									1
明朝系	丸瓦	灰色	漆喰有り(片面)	1	1	2						4
	褐色	漆喰無し	3	4	2							3
	赤色	漆喰有り(片面)			1							4
	平瓦	灰色	漆喰無し	2	1							6
	赤色	漆喰有り(片面)	10	13	7	1	1					7
合 計												5,624
22 56 9 6 56 24 27 52 24 1 93 31 2 9 1 2 13 10 3 1 22 2 24 43 12 61 11 2 5												

第30表② 石積みSA14 土器・瓦質土器・埠瓦出土状況

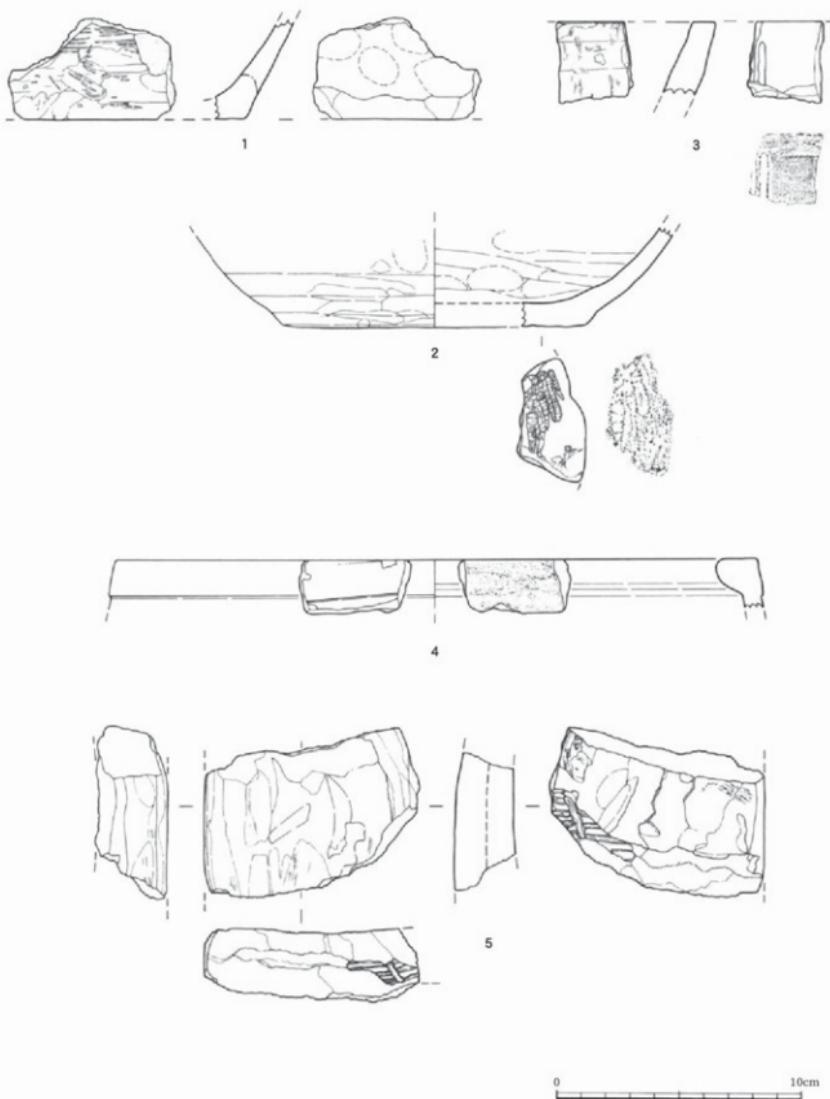
種類・器種・部位	層序	B-14+15 SA14										合計						
		第1層 (覆土)	東側ト		北側ト		SA15西側ト		SA15南側ト		壁面崩落							
			第1層 a	第2層 c	第2層 b	第2層 (淡褐色 混色土層)	第4層 (黒褐色 土層)	第4層 a	第6層 b	第6層 (淡褐色 土層)	第8層 a							
土器	壺					1						1						
	瓶											1						
	底部											1						
	底部											1						
器種不明	脛部	2	1				4	3	2	2	1	18						
	底部	1										1						
合計		3	0	1	0	0	1	0	4	3	3	0	2	1	0	3	1	23
瓦質土器	鉢					1							1					
	口縁部		1	1							1		1					
	鉢or炉		1										1					
	擂鉢					1							1					
植木鉢(四角)	口縁部					1							1					
	脣部												1					
不明	口縁部					1							1					
	脣部		3			2				1			6					
合計		0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
埠瓦	I類	B	灰色	塗喰無し	角無し								1					
			灰色	塗喰無し	角無し								1					
			灰色	塗喰無し	角無し	1	1	1					1					
			赤色	塗喰無し	角無し								1					
			赤色	塗喰無し	角無し								1					
			形状不明b	灰色	塗喰無し	角無し							1					
			形状・厚さ不明	赤色	塗喰無し	角無し							1					
			-	赤色	塗喰無し	角無し							1					
IV類(焼瓦)						1							1					
合計		3	1	3	1	3	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	13	

第31表 石積みSA14 土器・瓦質土器・屋瓦観察一覧

単位:cm

捕獲番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 底径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)						出土地点 出土層		
第17回 国版12 1	ダスク系土器	壺形	底部	器形:底面からの立ち上がり部分は直線的に内側へ閉じ気味に胴部へ移行する壺の底部とみられる。器面調整:外面上には刷毛目や難な難削りがみられる。外底面は平坦にナデで仕上げている。内面は器面の保持が悪いが、ナデで仕上げたようである。器厚:6.7~9.3mmを測る。胎土:砂泥質の粗粒子。混入物:粗細な石英を主体とする稀に細かい黒色鉱物や粗い茶褐色の物質が含まれている。色調:外面部が茶褐色で、外底面が褐色となる。内面は灰白色を主体とし、部分的に茶褐色を帯びている。焼成:良好で堅い。							B-14 SA14 第2層 東側ト 上層淡褐色混疊 土層	
				形状不明a 赤色 塗喰無し 角無し 1 1 1								
# 2	ダスク系土器	鍋形	底部	器形:底面からの立ち上がり部分で軽くび付いてから丸味を持たせながら内側へ閉じ気味に胴部へ移行する鍋の底部とみられる。器面調整:外面上には難削りを難削りでナデ消すが消えきっていない。立上がり部分は難削りで、難削りの部分は内面にナデ仕上げである。器厚:5.4~9.4mmを測る。胎土:砂泥質の粗粒子。混入物:粗細な石英を主体とする。稀に細かい黒色鉱物や粗い茶褐色の物質が含まれている。色調:外面部および外底面が灰褐色となる。内面は茶褐色を主体とし、部分的に淡褐色を帯びている。焼成:良好で堅い。							B-14 SA14 東側ト 下層淡褐色 土層	
				12.4								
# 3	擂鉢	口縁部		器形:内湾口縁の浅鉢。口唇部を難削りで形成している。文様:内面口縁に2.2mm幅の箇で難削りを深めている。器面調整:外面上には難削りを難削りでナデ消すが消えきっていない。内面には横位の難削りで仕上げている。器厚:9.2~12.5mmを測る。胎土:泥質の細粒子。混入物:粗細な茶葉状の物質(粗いものは4.1mmを測る)を多く含む。稀に微細な石英がみられる。色調:外面部は灰色で、口唇部と内面が灰褐色となる。焼成:良好で堅い。							B-14 SA14 西側レ 丁寧a 淡褐色混疊土層	
# 4	瓦質土器	鉢 or 炉	口縁部	26.2	器形:内湾口縁の鉢。若しくは炒の口縁破片。内面口縁部に断面が歪な梯形形式に肥厚させて、口唇部を平坦に幅広(15.2mm幅)に形成する。外面部は斜位方向に走る難削りを加えて疑似肥厚とする。文様:外面部の難削りを界線とみることもできるが判然しない。器面調整:外面上および口唇部には難削りとナデが施されているが、外側の調整が丁寧である。内面は肥厚部の下半部にのみ新たな難削りを加えている。他は丁寧な難削りとナデを加えている。器厚:口唇部で8.25mmを測った。胎土:砂泥質の細粒子。混入物:粗細な石英を多量に含む。稀に微細な茶褐色の鉱物と細かい雲母片がみられる。色調:口唇部と外面部は明橙色で、内面が淡褐色となる。焼成:良好で堅い。							B-14-15 SA14 第1層 (覆土)
# 5	大和系屋瓦	平瓦			平瓦の端部破片。内面は難なナデを主体とし、部分的に指圧痕がみられる。下端面は難な難削りを主体とする。部分的に擦痕が観察できる。凸面も難な難削りのナデと磨きが入り光沢を持つ面がある。劈開面からも輪羽状の叩き目が入った土痕が観察できる。素地:泥質の細粒の粒子。混入物:微細な石英を多く含んでいる。色調:外面部は茶褐色で、内面が明灰色を帯びる。焼成:堅敏。							B-14 SA14 西側ト 第4層a 淡褐色混疊土層

注「-」:計測不可



第17図 石積みSA14出土品① 土器：1・2、瓦質土器：3・4、屋瓦：5

第32表① 石積みSA14 青磁出土状況

層序	器種・部位	B-14-15 SA14																			合計						
		(覆土) 第1層	第1層 a	第1層 c	覆土	(覆土) c	第2層	第2層 (上層淡褐色 混土層)	第2層 (淡褐色混 土層)	第4層a (淡褐色混 土層)	第6層b (黒褐色 土層)	第4層a (淡褐色混 土層)	裏素 覆土直上	西側壁面	(覆土) a	第4層b (栗石内)	第5層a (灰褐色 土層)	第7層b (淡黃色混 土砂層)	第3層a (暗褐色 土層)	第4層b (栗石内)	第5層 (淡褐色混 土層)	第5層 覆土 h	(覆土) c	SA15南側ト レ	SA15西側ト レ	SA15南側ト レ	壁面清掃
		外反																									
縦	口縁部	外面: ラマ式蓮弁・片切彫り 内面: 刻花文・片切彫り ラマ式蓮弁・片切彫り																				1	1				
		有文		1																							
		無文	3	1	3	3	2	2	2	4	2						1	1			2	1	4	1	32		
		外面: 蓮弁・範彫り 内面: 刻花文・片切彫り							1																		
		蓮弁		範彫り																		1	1				
		雷文		片切彫り																				1	1		
		波瀾文																	1								
		無文		1		1																		2			
		有文																							1		
		輪花		有文																					1		
縦	胴部	外面: 有文不明 内面: 陽花文・型押し																				1	1				
		外面: 蓮弁・片切彫り 内面: 有文																				1	1				
		蓮弁		片切彫り																				2			
		有文																						1			
		無文	3	5	1	1	4		3									1	1	1	1	3	24				
		文様不明		1																				1			
		cタイプ																						1			
		aタイプ																						1			
		fタイプ																						2			
		bタイプ																						1			
縦	底部	高台なし		無文																				1			
		外反		無文																				1			
		内湾		無文																				1			
		口折		蓮弁・片切彫り																				1			
		外反		外面: 蓮弁・片切彫り 内面: 有文																				1			
		直口		無文	2	1	1															1	1	8			
		内湾		無文	1																		2				
		無文		1																			1				
		印花菊文																					3				
		無文		1		1	1	1															5				
縦	口縁部	蓮弁・丸窓		1																				1			
		外面: 織蓮弁・片切彫り 内面: 蓮弁・範彫り		1																				1			
		外面: 有文																						1			
		内面: 蓮弁・範彫り																						1			
		外面: 有文																						3			
		内面: 蓮弁・丸窓		1																				1			
		外面: 文様不明																						1			
		内面: 蓮弁・丸窓																						1			
		外面: 蓮弁・丸窓																						1			
		内面: 文様不明																						2			
盤	口縁部	文様不明																						2			
		口折		文様不明																			1	1			
		直口		蓮弁・範彫り																			1	1			
		文様不明																					1	1			

第32表② 石積みSA14 青磁出土状況

器種・部位 層序		B-14・15 SA14																		合 計	
		東側トレ						北側トレ						西側トレ						合 計	
		(覆 土) 第 1 層 a	第 1 層 c	覆 土	(覆 土) c 第 2 層	第 2 層 (上層淡褐色 混鐵土層)	第 2 層 (淡褐色混 鐵土層)	第 4 層 a (淡褐色混 鐵土層)	第 6 層 b (黑褐色 土層)	第 4 層 a (淡褐色 混鐵土層)	裏 栗 直 上	西 側 清 掃 壁 面	～ 第 1 土 層 ～ a	第 4 層 b (栗石内)	第 5 層 a (灰褐色 土層)	第 3 層 a (暗黃色混 土砂層)	第 3 層 a (暗褐色 土層)	第 4 層 b (栗石内)	第 5 層 g (淡褐色混 鐵土層)	第 5 層 h (覆 土) c 第 4 層 b	
盤	胸部	外面:無文																			4
		内面:蓮弁・丸笠	1		1																3
		外面:無文																			1
		内面:蓮弁・櫛描	1		1																1
		外面:無文																			8
		内面:蓮弁・型起し																			3
		有文不明					1														2
盤	底部	無文	1				2			3											1
		文様不明	1		1		1														1
		印花文					1			1											1
		aタイプ					1														1
		文様不明																			1
		無文																			1
		bタイプ																			1
酒会壺	蓋	印花文																			1
		文様不明																			1
		無文																			1
		蓮弁・鏡						1													1
		刻花文・片切彫り					1														1
		蓮弁・丸彫り																			1
		有文不明								1											1
酒会壺	頸部	無文																			1
		蓮弁・片切彫り																			1
		蓮弁・片切彫り																			3
		有文不明																			2
		蓮弁・丸彫																			1
		蓮弁・丸彫																			1
		蓮弁・片切彫り																			1
酒会壺	胸部	蓮弁・丸彫																			1
		蓮弁・片切彫り																			3
		有文不明																			2
		蓮弁・丸彫																			1
		蓮弁・丸彫																			1
		蓮弁・丸彫																			1
		蓮弁・片切彫り																			1
大瓶	底部	蓮弁・片切彫り・型起し																			1
		有文不明																			1
		文様不明																			1
		無文																			1
茶托	口縁部～底部																				1
合 計		13	4	4	17	6	14	14	3	22	7	1	1	2	3	3	1	1	4	1	169

第33表① 石積みSA14 青磁観察一覧

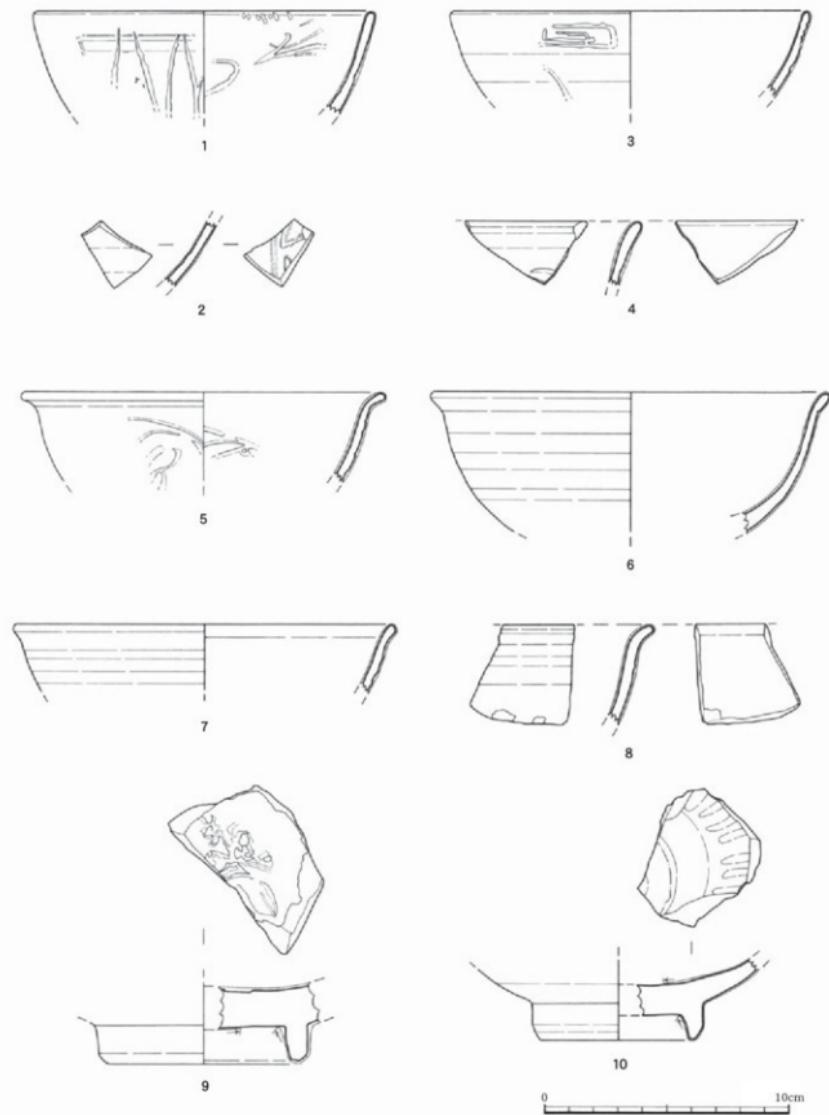
単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第18図 図版13 1	蓮弁文 碗	口縁部	14.0 — —	器形: 直口口縁碗。文様: 外面に籠彫りで弁先の開いた蓮弁文を描く。内面にも片切彫りで刻花文を描く。素地: 光沢のある淡灰白色の微粒子。釉色: 淡緑色で、貫入はない。龍泉窯系。14c後半~15c前半。	SA14 東側トレチ 第2層 (上層淡褐色 混礫土層)
〃 2	型押蓮弁文 碗	胴部	— — —	器形: 型押蓮文碗の胴部片。文様: 外面には文様は残存しないが、京の内跡土壙SK01出土の類例からすると間隔の開いた籠彫りの蓮弁文が施されている。内面は型押しによる陽文の区画界線(或いは二重線の蓮弁文)と陽文を施している。素地: 淡灰白色の細粒子で、粗細な気泡痕や微細な石英と黒色鉱物が観察できる。釉色: 淡緑色で、貫入はない。福建系の窯。14c後半~15c中葉。	SA14 (SA15 西側トレチ) 第4層g (淡褐色 混礫土層)
〃 3	雷文 帶碗	口縁部	14.8 — —	器形: 内湾直口口縁碗。文様: 外面に片切彫りで反時計回りに雷文を描く。素地: 淡灰白色の細粒子で、微細な気泡痕や微細な石英と黒色鉱物が観察できる。釉色: 淡青緑色で、貫入はない。龍泉窯系。14c後半~15c中葉。	SA14 (SA15 南側トレチ) 第4層b
〃 4	ラマ式 蓮弁文 碗	口縁部	— — —	器形: 外反口縁碗。文様: 外面に片切彫りでラマ式蓮弁を描く。素地: 淡灰白色的細粒子で、粗細な気泡痕が観察できる。釉色: 淡青緑色で、貫入はない。龍泉窯系。14c後半~15c中葉。	SA14 第1層c
〃 5	型押 蓮弁文 碗	口縁部	15.0 — —	器形: 外反口縁碗。口縁の外反は、上記4よりも強く外側に折れる。文様: 外面に片切彫りでラマ式蓮弁を描く。内面にも片切彫りで刻花文を描く。素地: 淡灰色の細粒子で、粗細な気泡痕が観察できる。釉色: 淡青緑色で、貫入はない。龍泉窯系。14c後半~15c中葉。	SA14 (SA15 南側トレチ) 第4層b
〃 6	外 反 口 縁 碗	口縁部	16.4 — —	器形: 外反口縁碗。佐敷タイプの碗(註1)。外面の成形が雄で轆轤痕のまま放置した状態で施釉がなされる。文様: なし。素地: 淡灰色の粗粒子で、粗細な気泡痕と微細な石英および黒色鉱物が観察できる。釉色: 淡灰緑色で、両面に粗い貫入がみられる。中国南部の窯。14c終末~15c初頭。	SA14 (SA15 西側トレチ) 第4層g (淡褐色 混礫土層)
〃 7		口縁部	15.6 — —	器形: 外反口縁碗。外面の轆轤痕が明瞭である。文様: なし。素地: 淡灰色の粗粒子で、微細な気泡痕と微細な黒色鉱物が観察できる。釉色: 黄緑色の透明釉。貫入: なし。中国南部の窯。14c終末~15c前半。	SA14 第1層 (覆土)
〃 8		口縁部	— — —	器形: 外反口縁碗。文様: なし。素地: 淡灰色の細粒子で、粗細な気泡痕が多く観察できる。釉色: 淡緑青色の釉で、両面に粗い貫入がみられる。中国南部の窯。14c終末~15c前半。	SA14 第1層 (覆土)
〃 9	碗	底部	— — 7.8	器形: 高台分類cタイプ。大振りの碗。文様: 見込みに印花文を施す。素地: 光沢のある淡灰白色の微粒子で、微細な気泡痕や黒色鉱物が観察できる。釉色: 淡緑色の釉を両面施釉の軸を蛇の目状に焼き取って露胎とする。露胎となった部分に胎目上の重ね焼の目痕が細く輪っか状にみられる。貫入はない。龍泉窯系。14c終末~15c中頃。	SA14 (SA15 南側トレチ) 第4層b
〃 10		底部	— — 6.3	器形: 高台分類hタイプ。見込みの釉を円形状に焼き取って露胎させる碗。佐敷タイプの碗の範疇にある。文様: 内面胴下部に籠描きの蓮弁文を施す。素地: 淡灰色の粗粒子で、粗細な石英を多量に含んでいる。釉に微細な黒色鉱物も観察できる。釉色: 淡緑青色の釉を両面に施した後に外底面と見込みの釉を焼き取って露胎とする。両面に細かい貫入がみられる。中国南部の窯。14c終末~15c初頭。	SA14 東側トレチ 第4層a (淡褐色 混礫土層)

注「—」: 計測不可

参考および文献

- 註1. 当真嗣一・宮里未廣『佐敷グスク』佐敷町教育委員会 1980年3月。
 ○ 金城亀信『青磁ラマ式蓮弁文碗について』『貿易陶磁研究』No.20 2000年。



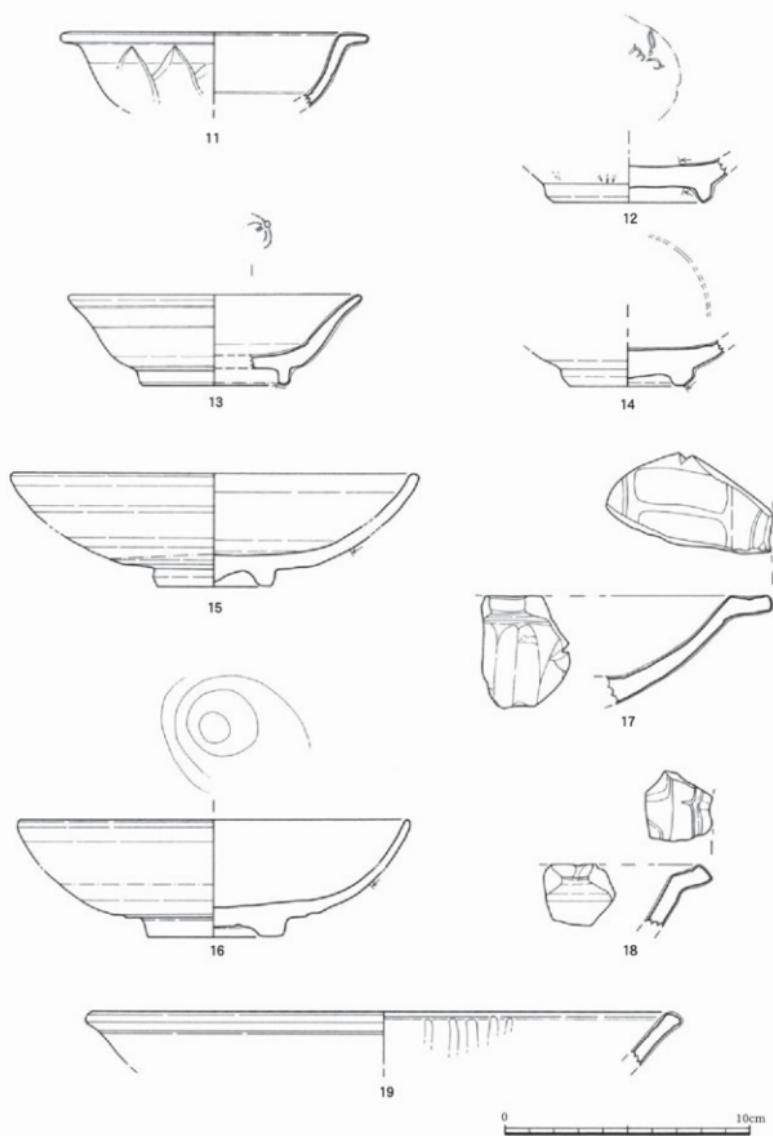
第18図 石積みSA14出土品② 青磁：1～10

第33表② 石積みSA14 青磁観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第19回 図版14 11	口 折 皿	口縁部	12.6 — —	器形:所謂鈎縁皿。文様:外面に片切彫りで弁先の尖った蓮弁文を左から右方向に描いている。素地:光沢のある淡灰白色の微粒子。釉色:淡緑色の釉を両面に施す。貫入はない。龍泉窯系。14c後半～15c前半。	SA14 西側トレンチ 第4層b (栗石内)
〃 〃 12	蓮 弁 文 皿	底部	— — 6.2	器形:見込みと外底面の釉を円形状に焼き取って露胎とする皿。文様:外面の高台脇に片切彫りによる蓮弁文を描くが釉が厚く溜まり不鮮明である。見込みに印花菊文を施す。素地:光沢のある淡灰白色の微粒子。釉色:淡青緑色の釉を施す。細かい貫入が両面で観察できる。龍泉窯系。14c終末～15c前半。	SA14 東側トレンチ 第4層a(淡褐色 混疊土層)
〃 〃 13	外 反 口 縁 皿	口縁部 ～底部	12.0 3.7 5.9	器形:外反口縁皿。胴下部で丸味を持って折れる。文様:見込みに印花花文を施す。素地:光沢のある淡灰白色の微粒子。釉色:淡緑色の釉。外面の釉は豊付から高台内面途中まで及んでいる。内面は総輪。粗い貫入が外面のみ観察できる。龍泉窯系。14c後半～15c前半。	SA14 西側トレンチ 第7層b(淡黄色 混疊砂層)
〃 〃 14	皿	底部	— — 4.7	器形:胴下部で丸味を持った皿。高台内側りが時計回りに雛に割り抜きを実施されたため、幅広の豊付が一部極端に幅が狭くなっている。文様:内底面の腰折れとなる箇所に陰圓線がみられる。素地:淡黄白色の細粒子で、粗細な気泡痕が多くみられる。釉に微細な黒色鉱物や粗い茶褐色の鉱物が含まれている。釉色:淡黃茶色の釉を両面に施した後に豊付から外底面までの釉を焼き取って露胎とする。両面に細かい貫入がみられる。中国南部の窯。14c後半～15c前半。	SA14 東側トレンチ 第2層(上層淡 褐色混疊土層)
〃 〃 15	内 湾 口 縁 皿	口縁部 ～底部	16.6 (4.6) 4.7	器形:内湾口縁皿で、高台内側りも雛で時計回りに割り抜いたため、豊付の幅が定まらない。外底面中央が三角雛状に尖っている。外面に雛な輪轂成形で仕上げている。文様:なし。素地:淡灰色の粗粒子で、粗細な黒色鉱物を多く含む。豊開面から粗細な気泡痕が観察できる。釉色:透明な黄緑色の釉を内面から外胴下部まで施釉。細かい貫入が両面でみられる。泉州窯系。14c後半～15c前半。	SA14 東側トレンチ 第2層(上層淡 褐色土層)
〃 〃 16	内 湾 口 縁 皿	口縁部 ～底部	16.0 (4.8) 5.5	器形:内湾口縁皿で、高台内側りが浅く時計回りに割り抜いている。豊付の幅は8.2～9.9mmと幅広である。見込みの部分に「の」の字状の回転螺旋痕がみられる。文様:なし。素地:淡灰色の粗粒子で、粗細な黒色鉱物を多く含む。豊開面から粗細な気泡痕が観察できる。釉色:透明な黄緑色の釉を内面から外胴下部まで施釉。細かい貫入が両面でみられる。泉州窯系。14c後半～15c前半。	SA14 東側トレンチ 第1層c + SK02 SA15西トレ 層序第8層b
〃 〃 17	鈎 縁 盤	口縁部	— — —	器形:鈎縁皿で口唇部を稜花状に成形した盤。鈎の内面が浅く窪む。文様:鈎上面の縁沿いの稜花に沿って片切彫りで文様を施す。外面は片切彫りで弁先が純角となる鈎蓮弁文を描く。内面には窪彫り(窪幅17.1mm)で蓮弁文を描き、その直下に陰圓線を施している。素地:光沢のある淡灰色の微粒子で、粗細な気泡痕が僅かに観察できる。釉色:淡黄緑色の釉を両面に施釉。貫入はない。龍泉窯系。14c中頃～14c後半。	SA14 西側トレンチ 第1層a(覆土) + B-14排水溝①
〃 〃 18	鈎 縁 盤	口縁部	— — —	器形:鈎縁皿で口唇部を稜花状に成形した盤。鈎の内面が浅く窪む。文様:鈎上面の縁沿いの稜花に沿って片切彫りで文様を施す。外面は片切彫りで弁先が純角となる鈎蓮弁文を描く。内面には窪彫り(窪幅3.4～4.0mm)で蓮弁文を描く。素地:淡灰白色の微粒子。釉色:淡青緑色の釉を両面に施釉。細かい貫入が両面でみられる。龍泉窯系。14c後半～15c中頃。	SA14 東側トレンチ 第4層a(淡褐色 混疊土層)
〃 〃 19	直 口 口 縁 盤	口縁部	24.6 — —	器形:直口口縁盤。口縁部に削りを入れて微弱な肥厚を造る。文様:内面に窪彫り(窪幅3.4～4.0mm)の蓮弁文を描く。素地:淡灰白色の微粒子。釉色:薄緑色の透明釉を両面に施釉。貫入はない。龍泉窯系。14c後半～15c中頃。	SA14 (SA15) 南側トレンチ 覆土

注 () :推定、「-」:計測不可、「+」:接合の意



第19図 石積みSA14出土品③ 青磁：11～19

第33表③ 石積みSA14 青磁観察一覧

単位:cm

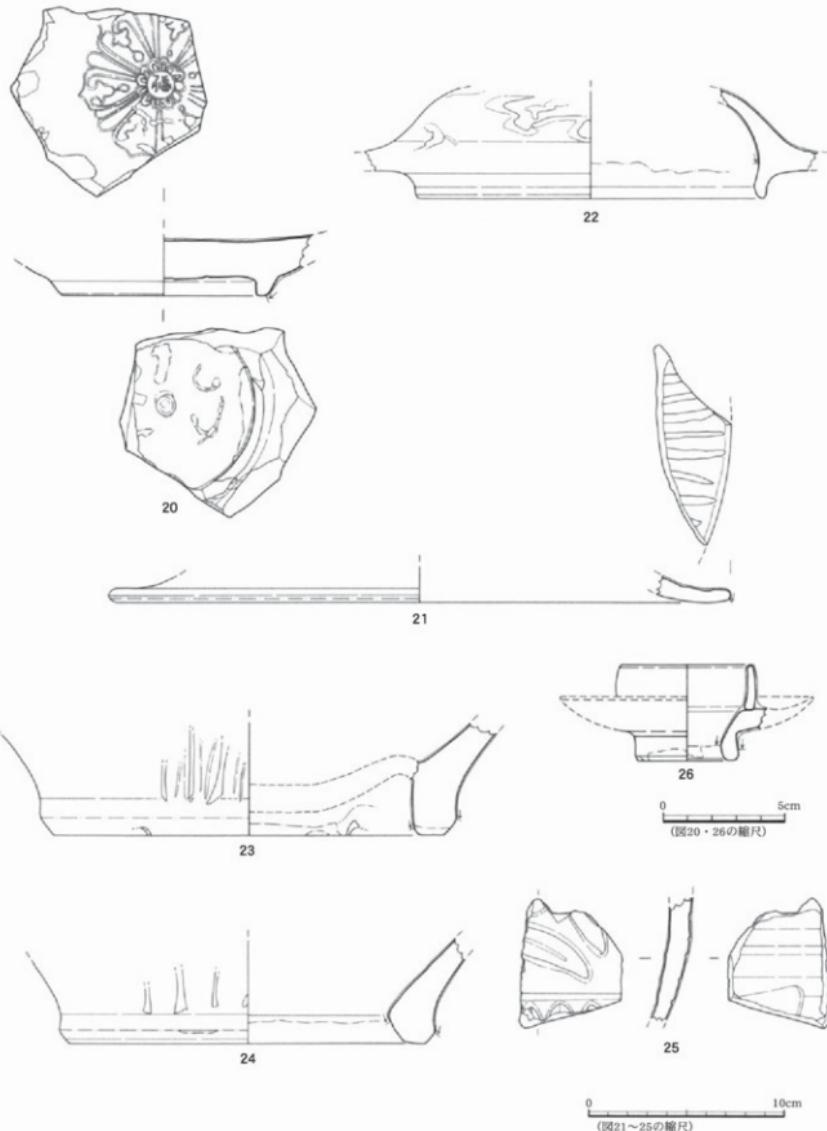
挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第20回 図版15 20	盤	底部	— 8.4	器形:高台分類aタイプ。高台を有する盤。外底面に陶土目の目痕がみられる。文様:見込みに印花文を施す。花文中央に菊花(12花弁)と花芯に「福」の字款を配置する。菊花周辺にはラマ式蓮弁文の中垂下三葉文と滴を配置した文様構成となっている。素地:光沢のある淡灰色の細粒子で、微細な黒色鉱物が多くみられる。釉色:淡黄緑色の釉。外面は豊付けまで施釉。内面は終釉。貫入はない。龍泉窯系の地方窯。14c後半~15c中頃。	SA14 東側レンチ 第2層
〃 〃 21		蓋	外径 32.0 —	器形:鈍縁と甲頂部が欠落した蓋。文様:蓋甲に片切彫りで刻花文を描き、その周辺(縁近く)に片切彫りの圓線を二条描かれている。素地:光沢のある淡灰白色の微粒子。釉色:明緑色の釉。外面は施釉で、内面は蓋甲部分にのみ施釉。貫入はない。龍泉窯系。14c後半~15c中頃。	SA14 東側レンチ 第2層
〃 〃 22		蓋	— 内径 17.8	器形:鈍縁のみが残存する薄造りの蓋。文様:外面に丸彫りの蓮弁文を描くが雑である。素地:光沢のある淡灰白色の微粒子。釉色:濃緑色の釉。外面は口唇部下端まで施釉。内面は釉が施されていない。露胎のままである。釉下に微細な気泡が多くみられる。貫入はない。龍泉窯系。15c後半~16c。	SA14 (SA15 南側レンチ) 第4層b
〃 〃 23	酒会壺	底部	— — 20.0	器形:高台外面から緩やかに立ち上がる壺。高台豊付の一部分が抉り取られていて、その部分にのみ釉が掛かっている。壺内面の高台近くに底面となる陶土の貼り付け痕がみられる。文様:外面の高台近くから片切彫りで蓮弁文を深く描き、蓮弁内に浅い丸彫りの蓮弁を二条描いている。素地:淡灰白色の微粒子で、微細な黒色鉱物が少量みられる。釉色:淡緑色の釉。外面は高台近くまで施釉され、丁寧に釉が焼き取られている。内面は豊付近くまで施釉。両面に粗い貫入がみられる。龍泉窯系。15c後半~16c。	SA14 東側レンチ第2層 (上層淡褐色混 疊土層)
〃 〃 24		底部	— — 18.0	器形:高台外面から緩やかに立ち上がる壺。壺内面に底面となる陶土の貼り付けはみられない。文様:外面の高台近くから鏤彫りで蓮弁文を描く。素地:淡灰白色の微粒子で、微細な黒色鉱物が少量みられる。釉色:淡灰白色の釉。外面は高台近くまで施釉され、丁寧に釉が焼き取られている。内面は高台近くまで施釉。貫入はない。龍泉窯系。15c後半~16c。	SA14 東側レンチ第2層 (上層淡褐色混 疊土層)
〃 〃 25	大瓶	胴部	— —	器形:花瓶の胴下部の破片。文様:外面に型起し陽刻の唐草文と界線直下に弁先の尖った蓮弁文が施されている。素地:淡灰白色の細粒子で、微細な気泡痕がみられる。釉色:淡緑色の釉を両面に施釉。細かい貫入が両面でみられる。龍泉窯系。14c後半~15c中頃。	B-14 SA14 壁面清掃
〃 〃 26	茶托	口縁部 ～底部	5.6 3.9 4.2	器形:中空の茶托片。類例は黄金御殿跡(註1)や渡地村跡(註2)などから出土している。器台と皿部を同時作成に身部を貼り付けて製作する。文様:なし。素地:橙白色の細粒子で、微細な石英と黒色鉱物が僅かに混入し、稀に粗細な気泡痕が観察できる。釉色:黄茶色釉を両面とも高台途中まで施釉。細かく貫入が両面でみられる。龍泉窯系。15c終末~16c。	SA14 (SA15 西側レンチ) 第5層h

注「—」:計測不可

註文献

註1.『首里城跡－黄金御殿地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター 2007年3月。天目台で報告。

註2.『渡地村跡－臨港道路那覇1号線整備に伴う緊急発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター 2007年3月。茶たぐ茶受けで報告。



第20図 石積みSA14出土品④ 青磁：20～26

第34表 石積みSA14 白磁・青花・彩釉陶器出土状況

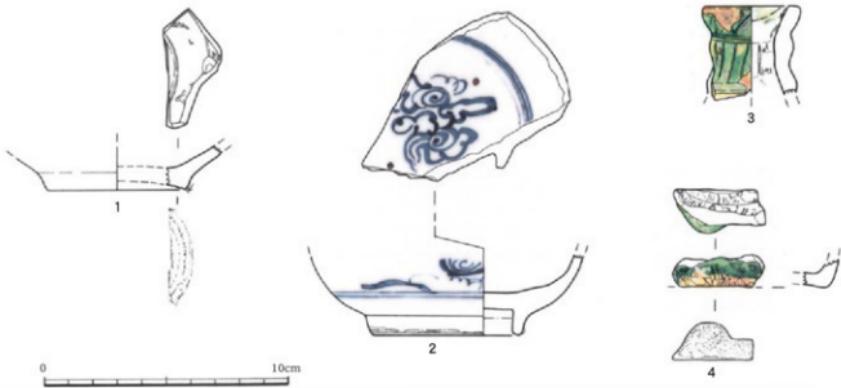
種類・器部位	層序	B-14・15 SA14								合計	
		東側トレ		西側トレ		SA15西側トレ		SA15南側トレ			
		第1層 (覆土)	第1層c (覆土)	第2層	裏堀直上 覆土	第1層a (覆土)	第4層b (栗石内)	第4層b (栗石内)	第1層c (攪乱)		
白磁	碗	口縁部 外反 胸部		1 3		1				1 4	
	皿	口縁部 内湾 底部		1 1				1		2 1	
	杯	底部				1				1 1	
合計			3 2	1 2	1	0	1	0	0	10	
青花	碗	口縁部 直口 胸部	1 1						2	4	
	皿	底部	1		1	2				1 1	
	器種不明	胸部		1						1	
	合計		3 1	0 0	1	3	0	0	2	12	
彩釉陶器	盤	胸部		1						1	
	鶴形水注	胸部						1		1	
	型物水注	口縁部 底部	1 1							1 1	
合計			1 2	0 0	0	0	0	1	0	4	

第35表 石積みSA14 白磁・青花・彩釉陶器観察一覧

単位:cm

捕獲番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第21図 図版16 1	白磁	杯 底部	— — 5.6	器形:高台内刺が階段状に浅く切りひいた杯の底とみられる。文様:内面に櫛描文と見込みに浅い二条の園線を施す。素地:淡灰白色の細粒子。釉色:淡灰白色の釉を高台外面まで施釉。呑付は露胎。貫入:なし。景德鎮窯。14c後半~15c前半。	SA14 東側トレンチ 第1層c
〃 〃 2	青花	碗 底部	— — 6.0	器形:外反口縁碗。文様:外面に主文の「雲文」と「草花文」を描き。主文直下に二条の界線で区画する所謂雲堂手の文様。内面の見込みに園線と如意頭雲(雲芝雲)を描く。素地:淡灰白色の微粒子。釉色:淡灰白色の釉を総施釉後に高台外面下端から高台内面途中までの釉を搔き取って露胎とする。貫入:なし。景德鎮窯。15c前半~15c中頃。	SA14 (SA15) 南側トレンチ 第4層b
〃 〃 3	彩釉陶器 型物水注	型物水注 口縁部	4.0 — —	器形:鶴型か鶴型の型物水注の口縁。文様:口縁外面の文様は型起こしである。口縁部の上位に二重の蓮弁文、その下位に二条の園線と線彫りで蛇行気味の蓮弁文を型で起こしている。裏面は雄な指圧痕を主体とし部分的にナデがみられる。型合わせの接合面から外れている。素地:淡黄白色の細粒子で、少量ながら微細な黒色や茶褐色の鉱物などがみられる。釉色:緑色の釉が内面口唇部から外面まで施釉され、部分的に内面の口縁部に釉が垂れています。貫入:なし。中国南部(福建・広東)の窯。15c後半~16c。	B-14 SA14 第1層 (覆土)
〃 〃 4	型物水注	型物水注 底部	— —	器形:龍、若しくは亀形の型物水注とみられる。足の部分が残存する底部破片。文様:外面の底部近くに三角形形状の中羅(輪様に表現)と足の部分が型で抜かれている。裏面は丁寧な指圧痕がナデ様に加えられている。素地:淡黄白色の細粒子で、少量ながら微細な黒色や茶褐色の鉱物などがみられる。僅かながら粗糲な石英も混入している。釉色:緑色の釉を外面の底部近くまで施されている。貫入:なし。中国南部(福建・広東)の窯。15c後半~16c。	SA14 東側トレンチ 第1層c

注:「-」:計測不可



第21図 石積みSA14出土品⑤ 白磁：1、青花：2、彩釉陶器：3・4

IV
期

第36表 石積みSA14 中国産褐釉陶器出土状況

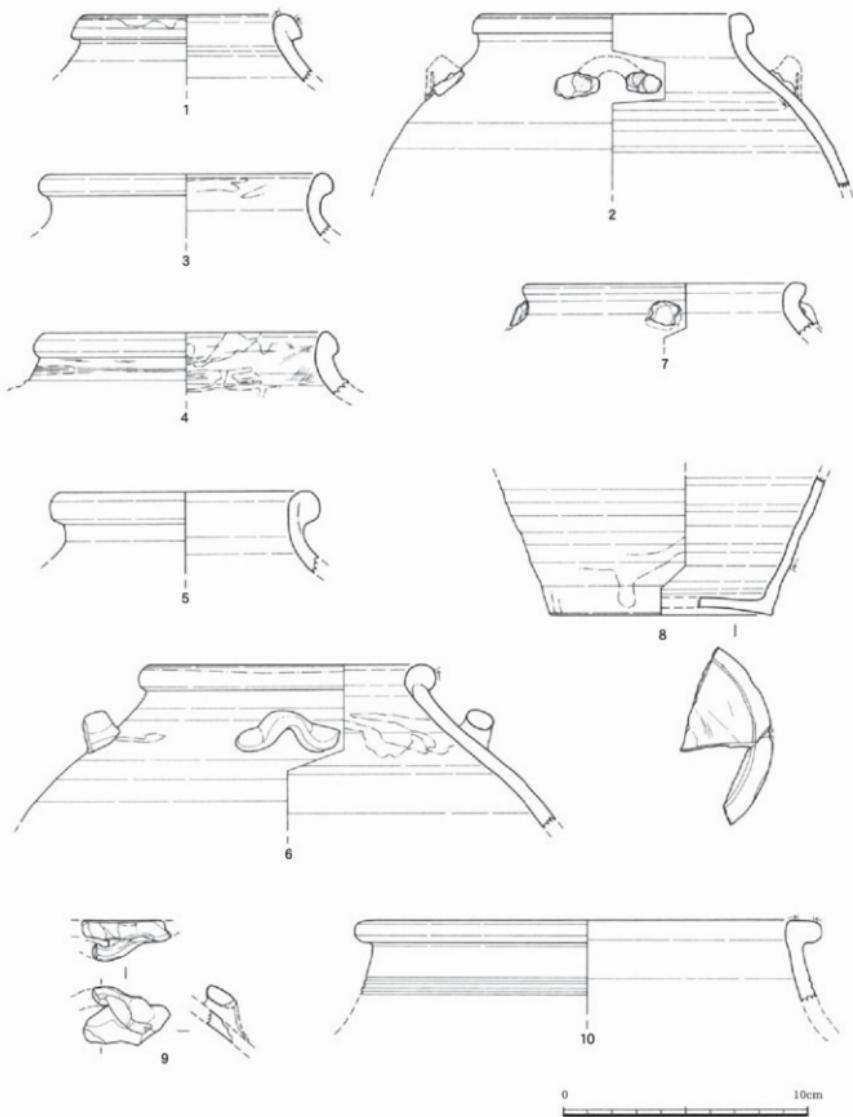
層序	B-14-15										合計	
	SA14					SA15						
	東側トレ			北側トレ	西側トレ	西側トレ			南側トレ			
器種・部位	第1層 (覆土)	第1層 a	第1層 c	第2層 (上層淡褐色混雜土層)	第4層 a (淡褐色混雜土層)	第7層 a (黑色土層)	第7層 b (黑褐色土層)	西側延長トレ 覆土	第1層 a	第3層 a	壁面清掃	
口縁部	玉線状	2	1	1	1	1	1				2	
	方形状			2	2	1				1	2	
	三角形状	1		1							2	
	無肥厚「く」字状		1								1	
	逆「フ」字状		1			1			1		4	
	逆「L」字状								1		1	
壺	頸部	1	1	2	6	1					11	
	肩部				2					1	3	
	耳	1	1								2	
	把手				1						1	
	胴部	51	9	100	16	50	38	5	1	1	381	
	有文									1	1	
	底部		2		2	1	1			2	8	
鉢	口縁部				1						1	
	合計	55	10	108	1	17	57	50	9	1	433	

第37表① 石積みSA14 中国産褐釉陶器観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	口径 器高 高台径	部位	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第22図 図版17 1	口 縁 部	9.4	—	器形: 口縁部の陶土を外側に折り曲げて縫断面が歪な玉縁状の肥厚口縁となるナデ肩の壺。肥厚帯下端に丸窓状の工具で削り取って成形する。文様:なし。器面調整:外面の大半が釉で覆われて観察できない。内面は輪廻痕を雜なナデを加えてナデ消すが輪廻痕が消えきっていない。肥厚部の一部と口唇部には回転擦痕とナデがみられる。素地: 淡橙白色の細粒子で、粗細な鉱物(石英、茶褐色、黒色)を少量ながら混入する。色調: 両面に茶褐色の釉を施すが、内面は外面向より雜な釉掛けで部分的に露胎する。口唇部の釉もナデで搔き取られている。焼成:堅緻。中国南部の窯。14c~15c。	SA14 東側レンチ 第1層c
		11.5	—	器形: 口縁部の縫断面が歪な方形状の肥厚口縁となるナデ肩の壺。肥厚帯下端は輪廻引きで成形した為、下端の陶土が下方尖り気味となる。文様:なし。肩部に横位の紐状の把手を貼り付けていたようである。器面調整: 外面の大半が釉で覆われているが部分的に輪廻痕が観察できる。内面は輪廻痕を雜な擦痕でナデ消すが輪廻痕は消えきっていない。口唇部には丁寧な回転擦痕がみられる。素地: 淡灰白色の細粒子で、粗細な石英と黒色の鉱物が少量混入する。色調: 両面にのみ茶褐色の釉を施す。口唇部の釉は回転擦痕で搔き取られている。焼成:堅緻。中国南部の窯。14c~15c。	SA14 東側レンチ 第1層c+ SA14(SA15 西側レンチ) 5層h+ SA14(SA15 西側レンチ) 5層g
		12.0	—	器形: 口縁部の縫断面が歪で小さな玉縁状の肥厚口縁となるナデ肩の壺。肥厚帯下端は丁寧な輪廻引きで成形する。文様:なし。器面調整: 外面の大半が釉で覆われて観察できない。内面も大半が釉で覆われているが部分的に雜な擦痕がみられる。口唇部も施釉である。素地: 灰白色の細粒子で、粗細な鉱物(石英、黒色)を少量ながら混入する。色調: 両面に白化粧の釉を施した後に淡い緑灰色の釉を薄く施す。焼成:堅緻。中国南部の窯。15c~16c。	SA14 西側レンチ 第4層b
	口 縁 部	12.4	—	器形: 口縁部の縫断面が歪で小さな三角形状の肥厚口縁となる怒り肩の壺。肥厚帯下端は輪廻引きで雛に成形する。文様:なし。器面調整: 外面の大半が釉で覆われて観察できない。内面も大半が釉で覆われているが部分的に雜な擦痕がみられる。口唇部も施釉される。素地: 淡橙白色の細粒子で、粗細な鉱物(石英、茶褐色)が少量ながら混入する。色調: 両面に茶褐色の釉を施す。内面にもまだらに施釉する。焼成:堅緻。中国南部の窯。14c~15c。	SA14 東側レンチ 第1層c
		11.0	—	器形: 口縁部の縫断面は陶土を折り返して玉縁状の肥厚口縁とする。ナデ肩の壺。文様:なし。器面調整: 両面とも釉で覆われて観察していくが釉上から観察できた範囲では肥厚帯下端に雜な回転擦痕がみられる。内面は施釉が薄く輪廻痕を雜な擦痕でナデ消している。素地: 淡灰白色の細粒子で、粗い石英と茶褐色の鉱物が少量ながら混入する。色調: 両面に墨緑色の釉を施す。焼成:堅緻。中国南部の窯。14c~15c。	SA14 第1層a
	壺	12.0	—	器形: " " " 。文様:なし。肩部に紐状の把手(横幅42.3mm、紐部の縦長10.5mm、紐部の厚さ0.8mm)を横位に貼り付けている。器面調整: 外面は釉で覆われて観察していくが釉上から観察できた範囲では肥厚帯下端には比較的丁寧なナデがみられる。内面は無釉で露胎上に回転擦痕がみられる。部分的に把手貼り付けの部分には指圧痕が頗るにみられる。素地: 淡灰白色の細粒子で、粗い石英と黒色鉱物が少量ながら混入する。色調: 外面と口唇部に茶褐色の釉を施すが、口唇部の釉は雛なナデで搔き取されている。焼成:堅緻。中国南部の窯。14c~15c。	SA14 (SA15 南側レンチ) 第4層b
		11.6	—	器形: 口縁部を緩く「く」の字状に外反させた怒り肩の壺。文様:頭部に非実用的(アクセントとしての飾りで、把手との機能はない)な小振りの把手を縫位に貼り付けている。把手の孔は貫通していない。器面調整: 両面とも釉で覆われて観察できない。口唇部も施釉される。素地: 黄白色の細粒子で、粗細な石英と細かい黒色や茶褐色が少量ながら混入する。色調: 両面に茶褐色の釉を施す。焼成:堅緻。中国南部の窯。14c~15c。	SA14 東側レンチ 覆土
		9.0	—	器形: 前記した同図3と同様の白濁した灰白色の釉を施した壺。外底面からの立ち上がりは外側に若干開きながら直線的に胴部へ移行する。文様:なし。器面調整: 外面の大半が釉で覆われているが、釉上から観察すると輪廻成形である。底面近くは輪廻痕を丁寧にナデ消している。内面は輪廻痕を回転擦痕でナデ消している。外底面の縁に沿うように磁器質(灰色の微粒子で粗い黑色鉱物が含まれている)の胎土目の目痕が半円形状にみられる。素地: 淡い灰色の細粒子で、粗細な石英が少量ながら混入する。色調: 外面に白化粧の釉を下地にして、その上から淡い緑白色の透明釉を施す。焼成:堅緻。中国南部の窯。15c~16c。	SA14 東側レンチ 第2層+ 東側レンチ 第1層c+ (覆土)

注 「-」:計測不可、「+」:接合の意



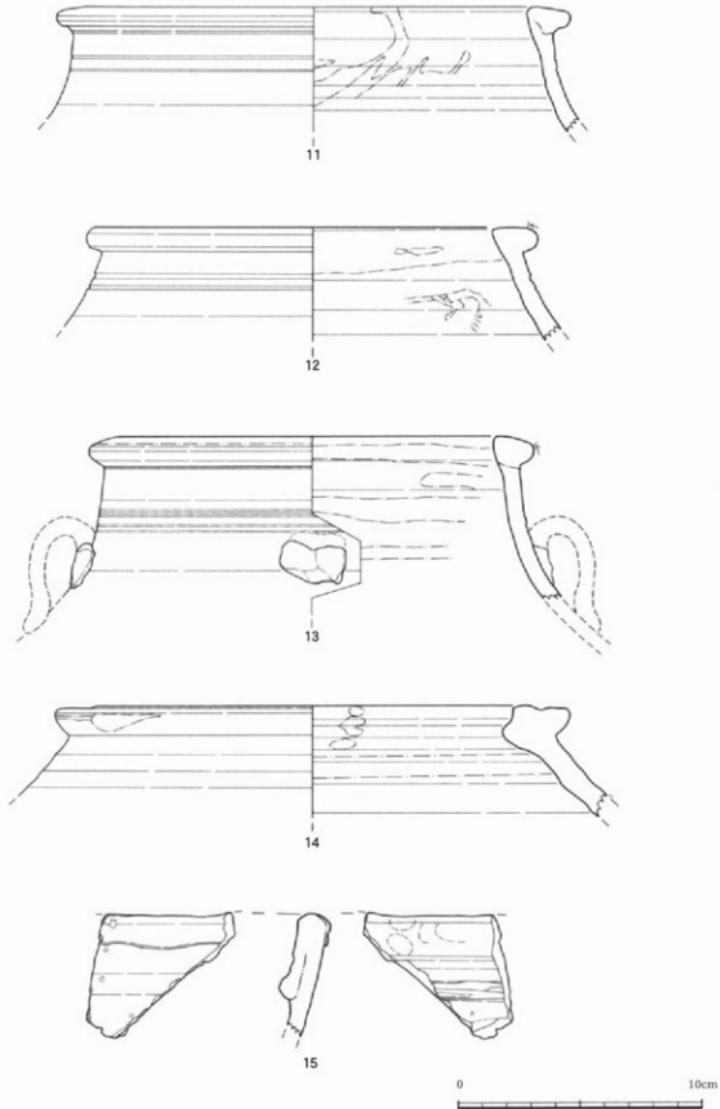
第22図 石積みSA14出土品⑥ 中国産褐釉陶器：1～10

第37表② 石積みSA14 中国産褐釉陶器観察一覧

單位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位 口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第22図 図版17 9	把手	-	器形:ナデ肩壺に貼り付けられる把手。文様:なし。器面調整:外面は釉で覆われて観察できない。内面は露胎し輪廻痕をナデ消している。内面の把手貼り付け部分には指圧痕がみられる。素地:淡茶色の細粒子で、粗細な石英と微細な茶褐色の鉱物が少量ながら混入する。色調:外面に光沢のある茶褐色の釉を施す。焼成:堅緻。中国南部の窯。14c~15c。	SA14 東側レンチ 第2層 (上層淡褐色 混疊土層)
		19.0	器形:口縁部の継断面が逆「フ」字状の肥厚口縁となるナデ肩の壺。口唇部を幅広に成形する。肥厚帯直下の陶土を削などで削り取って成形するが雑である。文様:外面の頸部に片切切りの界線を三条施す。界線の幅は0.9mmを測る。器面調整:輪廻痕は外面が丁寧で、内面は外面よりも雑である。口唇部には回転擦痕がみられる。素地:淡橙白色の細粒子で、粗細な石英と茶褐色の鉱物が少量含む。色調:両面に黄茶色の釉を施すが、内面は外面より雑な釉掛けで部分的に露胎する。口唇部の釉は搔き取られている。焼成:堅緻。中国南部の窯。14c~15c。	SA14 西側レンチ 第4層b (栗石内)
		-	器形: " " " 。肥厚帯直下は丁寧に輪廻引きで成形する。文様:外面の頸部に片切切りで雑な界線を二条施す。界線の幅は0.6~1.0mmを測る。器面調整:輪廻痕は外面が丁寧で、内面は外面よりも雑である。口唇部と内面の一部には輪廻痕以外に釉の搔き取りを兼ねた回転擦痕(口唇部)と雑なナデ(内面)がみられる。素地:淡緑白色の細粒子で、粗細な石英と茶褐色の鉱物が多く含まれている。色調:両面に淡黄茶色の釉を施すが、内面は外面より雑な釉掛けで部分的に釉の搔き取りで露胎する。口唇部の釉の搔き取りは雑な刷毛目状の搔き取りである。焼成:堅緻。中国南部の窯。14c~16c。	SA14 (SA15 南側レンチ) 第5層g (暗褐色 土色層) + SK02 第3層a
第23図 図版17 11	壺	口 縁 部	器形: " " " 。肥厚帯直下に丸彫り様の削りを加えて成形する。文様:外面の頸部に片切切りで雑な界線を二条施す。界線の幅は0.6~1.4mmを測る。器面調整:輪廻痕は外面が丁寧で、内面は外面よりも雑である。口唇部と内面の一部には輪廻痕以外に釉の搔き取りを兼ねた回転擦痕(口唇部)と雑なナデ(内面)がみられる。素地:淡灰白色の粗粒子で、粗細な鉱物(石英、茶褐色、黒色)が多く含まれている。色調:両面に茶褐色の釉を施すが、内面は外面より雑な釉掛けで部分的に釉の搔き取りで露胎する。口唇部の釉の搔き取りは丁寧な回転擦痕による搔き取りである。焼成:堅緻。中国南部の窯。14c~16c。	SA14 (SA15 西側レンチ) 第5層g (淡褐色 混疊土層) + SK02(SA15) 東側レンチ 覆土
				SA14 東側レンチ 第1層c + SK02 第3層a + SK02 東側 層序第1層d + SD07-A 第1層e
				SA14 東側レンチ 第2層 + 東側 レンチ第1層c + 第1層(覆 土) + SK02(SA15) 東側レンチ 覆土
" " 13		21.0	器形:口縁部の継断面が歪な隅丸形状の肥厚口縁とする怒り肩の壺。口唇部を回転指圧で凹ませている。内面口縁部も同様の手法で凹ませて蓋受けの溝を造る。文様:輪廻引きで陽圧圓線二条を表現か。器面調整:両面とも輪廻痕が顕著にみられる。素地:淡い紫黄じりの灰色の粗粒子で、粗細な石英を多量に含む。色調:両面に茶褐色の釉を施すが、内面は外面より雑な釉掛けで部分的に露胎する。口唇部の釉の搔き取りは丁寧な回転擦痕による搔き取りである。口唇内端近くに粗い石英を主体とする砂胎土の重ね焼きの目痕がみられる。焼成:堅緻。中国南部の窯。14c~16c。	SA14 東側レンチ 第2層 + 東側 レンチ第1層c + 第1層(覆 土) + SD07-A 第1層e
				SA14 東側レンチ 第2層 + 東側 レンチ第1層c + 第1層(覆 土) + SK02(SA15) 東側レンチ 覆土
				SA14 東側レンチ 第4層a (淡褐色 混疊土層)
" " 15	鉢	口 縁 部	器形:直口縁の鉢。外面の口縁部に陶土の折り返しによる雑で低平な肥厚を造る。内面口縁にも継断面が歪な隅丸の三角形状の肥厚を造る。文様:なし。器面調整:外面は釉で覆われているが釉上からの観察では輪廻痕が丁寧に消されているようである。内面は外面よりも雑な成形で輪廻痕を擦痕でナデ消している。口唇部には削り削りと刷毛目様の擦痕がみられる。素地:淡橙白色の細粒子で、粗い石英を多量に含む。黒色鉱物も少量ながら混入する。色調:明茶色の釉を外面にのみ施す。焼成:堅緻。中国南部の窯。15c頃か。	SA14 東側レンチ 第4層a (淡褐色 混疊土層)

注 「-」:計測不可、「+」:接合の意



第23図 石積みSA14出土品⑦ 中国産褐釉陶器 : 11~15

第38表 石積みSA14 タイ産土器(半練)・タイ産炻器・タイ産褐釉陶器・高麗青磁出土状況

層序			B-14-15 SA14										合計
種類・器種・部位	(覆土) 第1層 a	(覆土) 第1層 c	東側トレ				西側トレ		SA15西側トレ		SA15南側トレ		
			第2層 b	第2層 c	第2層 混 土 層 （上 層 淡 褐色）	第2層 混 土 層 （淡 褐色）	第4層 a （栗 石 内 ）	第4層 b （栗 石 内 ）	第3層 a （第4層 内 ）	第4層 c （第1層 内 ）	第4層 b （第1層 内 ）		
タイ産土器 (半練)	蓋	皿類			1	1							2
		蓋端部	-			1							1
		胸部		1						1			2
	合計		0 0 1	0 2	1	0 0	0 0	0 1	0 0	0 0	0 0	0 0	5
タイ産炻器	壺	口縁部										1	1
		胸部	1										1
	合計		1 0 0	0 0	0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	2
タイ産 褐釉陶器	壺	口縁部			1 1								2
		頸部				1							3
		肩部							1				1
		耳	1 1										2
		胸部	6 1 11	5 2	3	1 2	2			1 2	5	1	42
	合計		7 2 11	6 3	4	1 3	2	0	1	2 7	1	50	
高麗青磁	皿or碗	胸部	1										1
	合計		1 0 0	0 0	0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	1

第39表① 石積みSA14 タイ産土器(半練)・タイ産炻器・タイ産褐釉陶器観察一覧

単位:cm

挿団番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	部位	口径 器高 底径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第24図 図版18 1	タイ 産 土 器 (半 練)	Ⅲ 類 蓋	端部 端部径 13.5 高さ4.4	器形: 蓋端部近くに縱断面が歪な隅丸台形状の突帯を造る落とし蓋。器面調整: 上面は、端部近くから突帯までが丁寧なナデで、他は雑で粗目の刷毛目様の擦痕がみられる。下面は縁近くから回転擦痕で下面中央よりに雑な削りが集中する。素地: 灰白色の細粒子で、粗い石英を主体にして細かい茶褐色の鉱物を少量含む。色調: 両面とも淡橙色を呈する。焼成: 良好で堅い。15c~16c。	SA14 東側トレンチ 第2層(上 層淡褐色 混疊土層)
〃 〃 2	の そ の 他	端部	端部径 17.6 高さ5.0	器形: 蓋縁を丸籠状の工具を利用して花弁状に抉り取り、端部近く丸籠状の工具で圍線を二条回織る落とし蓋。器面調整: 上面及び下面是回転擦痕で調整する。素地: 淡灰白色の細粒子で、粗細な石英を主体にして細かい茶褐色や黒色の鉱物を少量含む。色調: 両面とも灰白色を呈する。焼成: 良好で堅い。15c~16c。	SA15 第3層a + SA14東側ト レンチ第2層
〃 〃 3	タイ 産 炻 器	壺	口 縁 部 18.8 - -	器形: 口縁部が「へ」の字状に折れた外反口縁の拓器壺。口縁が大きく外側に反り返るようである。文様: 内面口縁部に丸彫りの圓窓(幅2.5mm)を三条回織し、口唇部にも浅めの圓窓を一条施す。器面調整: 器面の大半が剥落するが、外面の一部には丁寧なナデがみられる。外側の器面は大部分が剥落し、口縁部に僅かに窓ナデの痕跡がみられる。内面は丁寧なナデで仕上げている。素地: 淡灰白色の細粒子で、粗細な鉱物(石英、茶褐色、黒色)を多く含む。色調: 両面とも淡灰白色を帯びるが、器面の大半が剥落しているが、僅かに茶褐色の釉が残存する事から本来は両面に施釉したものと判断される。焼成: 良好で堅い。パンプーン村産。15c後半~16c。	SA14 (SA15 南側トレンチ) 第4層b
〃 〃 4	褐 釉 陶 器 タイ 産	壺	口 縁 部 19.8 - -	器形: 外反口縁の壺。口縁端部を上方と下方に突出させている。文様: ない。器面調整: 外面の頸部が丁寧な回転擦痕がみられる。内面は輕微痕を丁寧にナデ消す。素地: 淡茶紫色の細粒子で、粗い茶褐色の鉱物を少量含む。色調: 内面には下地に茶紫色の化粧釉を施す。口縁部と頸下部に黒色の釉がみられる。焼成: 壓緻。シーサッチャナライ塗。15c~16c。	SA14 東側トレンチ 第2層

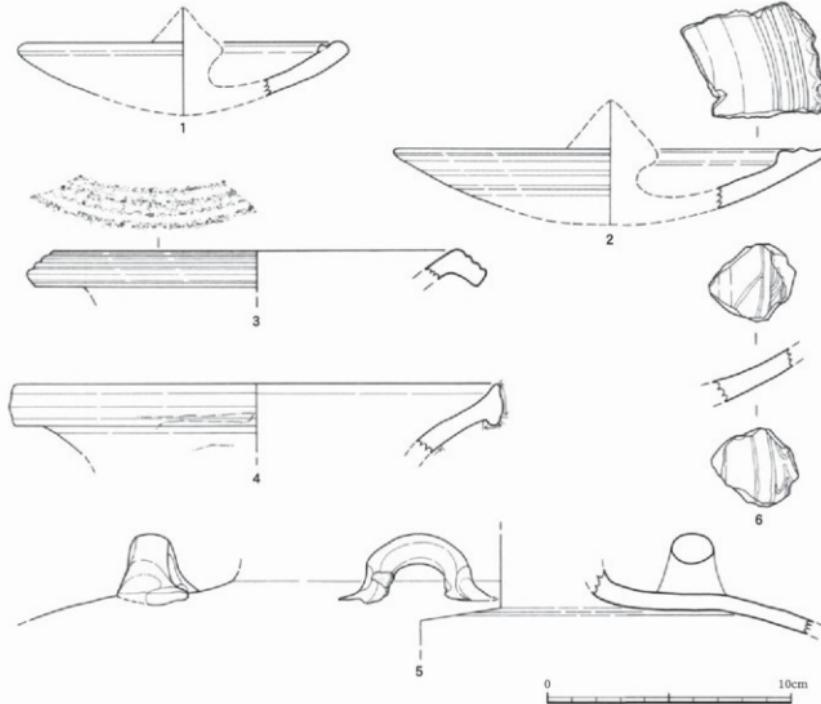
注「-」:計測不可、「+」:接合の意

第39表② 石積みSA14 タイ産褐釉陶器・高麗青磁観察一覧

単位:cm

掲図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	部位	口径 器高 底径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層	
第24図 図版18 5	タイ 産 褐 釉 陶 器	壺	胸 部	— — — — — —	器形:外反口縁壺の胴部破片。文様:なし。肩部に横位の把手(紐状の部分で縦長17.8mmで、厚みが11.9mmを測る)を貼り付ける。器面調整:外面上は施釉されているが釉上から輪縁痕のナデ消しがみられる。内面には回転擦痕がみられる。素地:淡茶紫色の粗粒子で、粗細な石英を多く含み稀に粗細な茶褐色や黒色の鉱物を含む。色調:外面にのみ黒色の釉を施す。焼成:堅致。シーサッチャナライ窯。15c~16c。	SA14東側トレンチ第2層 (上層淡茶色 色混入土 層)+SA14 第1層(覆 土)
〃 〃 6	高 麗 青 磁	皿 or 碗	胸 部	— — — — — —	器形:皿、若しくは碗の胴部片。文様:外面は白土象眼の草花文と区画の界線を二条描いている。内面も白土象眼の雷文と蓮弁文を描いている。素地:灰色の細粒子で、微細な黒色鉱物が僅かに観察できる。色調:灰緑色の透明釉を両面に施釉。貫入:両面に細かい貫入がみられる。朝鮮半島産。14c後半~15c前半。	SA14 第1層 (覆 土)

注:「—」:計測不可、「+」:接合の意



第24図 石積みSA14出土品⑧ タイ産土器(半練):1・2、タイ産炻器:3、タイ産褐釉陶器:4・5、高麗青磁:6

第40表 石積SA14 本土産陶器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器出土状況

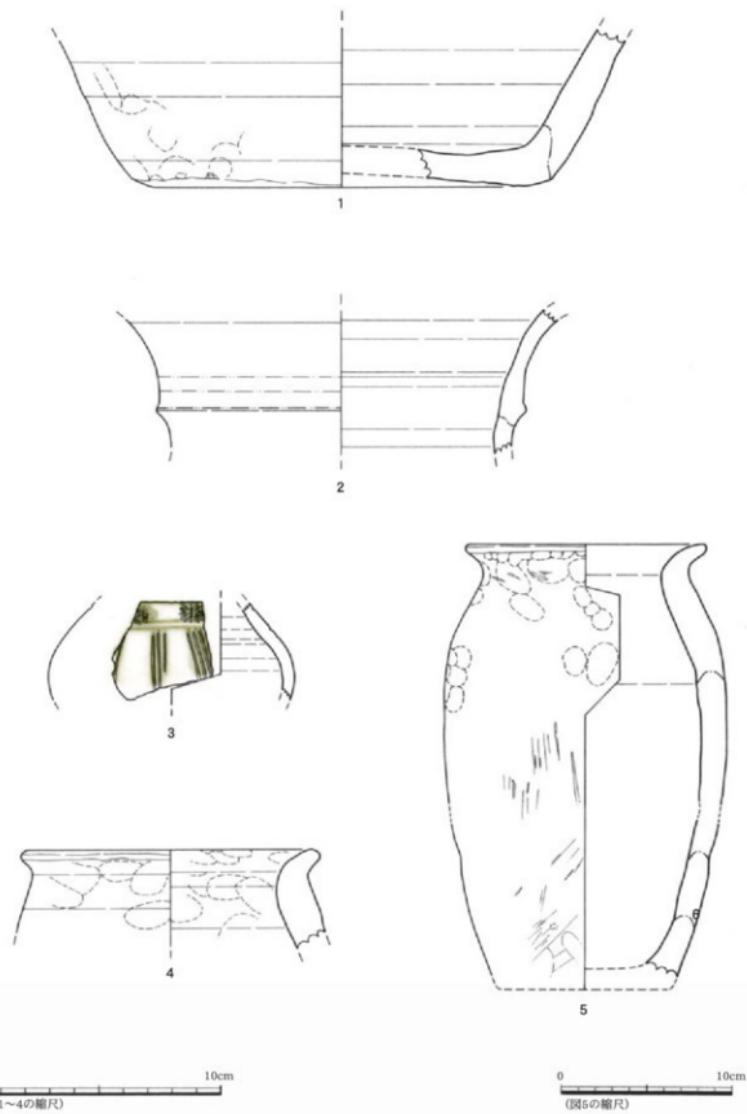
種類・器種・部位	層序 (覆土)	B-14-15 SA14						合計	
		東側トレ			西側トレ		SA15南側トレ		
		第1層 (覆土)	第1層c (覆土)	第2層	第2層 (上層淡褐色混疊土層)	第4層b (栗石内)	覆土	第4層b	
本土産 陶器	壺	胸部		1				1	2
	花瓶	胸部	1						1
	器種不明	胸部						2	2
合計			1 1 0 0		0	0 0	3	5	
沖縄産 施釉陶器	碗	口縁部					1		1
	小碗	口縁部	1						1
	鉢	胸部				1			1
	急須?	胸部		1					1
	袋物	胸部	1						1
合計			1 1 1 0		1	0 1	0	5	
沖縄産 無釉陶器	壺	口縁部～底部			1				1
		口縁部		1					1
		耳		1					1
		胸部	4			1 1			6
		壺or甕	胸部	1					1
		器種不明	胸部	1	1		1		3
合計			1 6 1 2		1 1 1	1	0	13	

第41表 石積みSA14 本土産陶器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層	
第25図 図版19 1	本土産陶器	壺	底部	器形:中世陶器の壺。底面から立ち上がりは内側に凹み気味に胴部へ直線的に移行する。外底面の縁に砂胎土目の目痕が部分的にみられる。文様:なし。器面調整:外表面と内底面に施釉されているが輪軸上からの観察では外面部が雑なナデを主体にし、底面から立ち上がり部分に箒削りを施している。内面は露胎し、外面よりも丁寧なナデで仕上げている。外底面は微弱な起伏のある平坦面ではあるが、器面はアバタ状となり器面調整は判然としない。内底面は雑なナデと指圧痕がみられる。素地:灰色の粗粒子で、粗い石英を多量に含んでいる。釉に細かい黒色飴物がみられる。色調:外面に茶褐色の雫を施釉する。内底面には白濁した黄緑色の自然釉が溜まっている。信楽焼か。15c。	SA14 東側トレンチ 第1層c	
〃 〃 2	沖縄産施釉陶器	花瓶	胸部	器形:ラッパ状に開いた施釉陶器の花瓶の胴部。文様:頸下部の綻断面が轆引きによる三角形の界隈線を造る。器面調整:両面に施釉されているが輪軸上からの観察では外面が丁寧なナデ仕上げで、内面が轆引痕を主体とし部分的に刷毛目様に擦痕がみられる。素地:淡灰白色の粗粒子で、粗細な石英を多量に含んでいる。釉に細かい茶褐色の飴物がみられる。色調:両面に灰白色の透明釉を施すが部分的に白濁する。	SA14 東側トレンチ 第1層 (覆土)	
〃 〃 3	沖縄産施釉陶器	急須?	胸部	器形:急須。若しくは袋物の胴部片とみられる。文様:外面に型押しの印花菊文を主にして菊花文の上位と下位に丸彫りの界線を施す。界線直下に三本脚で綻びの沈線文を輪郭で区切っている。器面調整:外面にのみ施釉されているが袖上部の輪郭では外面が丁寧なナデ仕上げで、内面が轆引痕と回転擦痕がみられる。素地:光沢のある淡灰灰白色の粗粒子で、微細な黒色飴物が少量ながら含んでいる。色調:外面の下地に白化粧土を施した後に淡い灰白色の透明釉を施す。湧田焼。	SA14 東側トレンチ 第1層c (覆土)	
〃 〃 4	沖縄産無釉陶器	口縁部	12.2	器形:初期沖縄産無釉陶器で、手捏手法による厚手の外反口縁壺。文様:なし。器面調整:外表面は雑なナデを主体にして部分的に指圧痕や粗い擦痕がみられる。内面もナデを主体に指圧痕や粗い擦痕がみられる。文様:なし。器面調整:外表面の口縁から胴部中央までは綻びのナデを主体にして部分的に指圧痕や粗い擦痕がみられる。胴下部から下は綻びのナデを主体にして部分的に指圧痕や粗い擦痕がみられる。開口面の観察から灰白色の陶土が散在して混じっている。色調:両面とも灰褐色を帯びる。湧田焼。	SA14 東側トレンチ 第1層c	
〃 〃 5	沖縄産無釉陶器	壺	口縁部 ～底部	14.0 26.0 (10.2)	器形:。手捏手法による成形であることからすると上記4と同一の個体とみられる。文様:なし。器面調整:外表面の口縁から胴部中央までは綻びのナデを主体にして部分的に指圧痕や粗い擦痕がみられる。胴下部から下は綻びのナデを主体にして部分的に指圧痕や粗い擦痕がみられる。開口面の観察から灰白色の陶土の大きな塊が混じっている。色調:両面とも灰褐色を帯びる。湧田焼。	SA14 東側トレンチ 第2層

注 ():推定、(-):計測不可



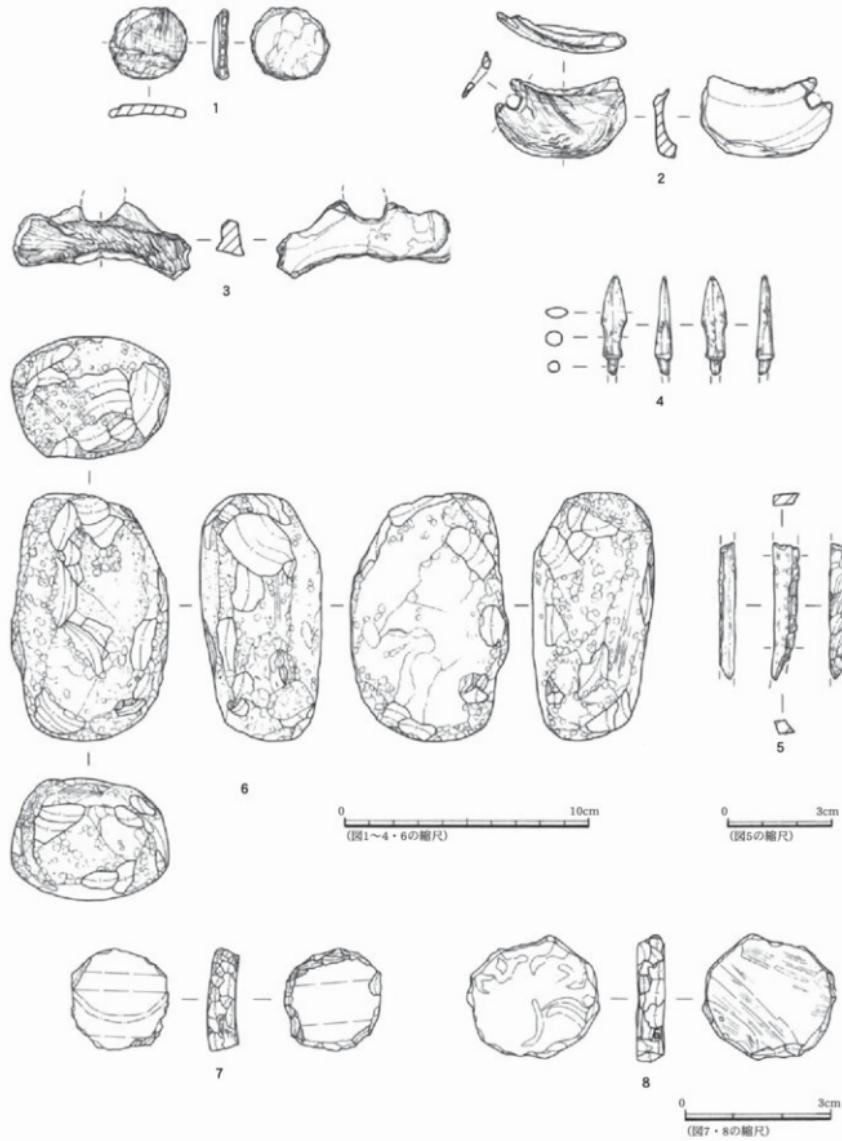
第25図 石積みSA14出土品⑨ 本土産陶器：1・2、沖縄産施釉陶器：3、沖縄産無釉陶器：4・5

第42表 石積みSA14 貝製品・骨製品・石器・石製品・石材・自然石・円盤状製品出土状況

種類	(第 1 層 土)	B-14-15 SA14										合 計	
		東側ル (上層淡 褐色混 土層)					西側ル (栗石 内)						
		第 1 層 a	第 2 層 c	第 4 層 a (淡褐色 混土層)	直 上裏 a	第 4 層 b (栗石 内)	壁 面 西 混 側 掃	第 3 層 a (暗褐色 土層)	第 5 層 g (淡褐色 混土層)	第 5 層 h (暗褐色 土層)	第 4 層 c (第 1 層 乱 土 層)		
貝製品	ヤコガイ製円盤状製品											1	
	チラバテイ製有孔製品									1		1	
	ヤコガイ製有孔製品									1		1	
	合 計	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	3	
骨製品	骨鱗		1									1	
	加工跡のある製品										1	1	
	合 計	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	
石器	石器片	細粒砂岩(ニーピ)								1	1	2	
	叩き石		1									1	
	合 計	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	3	
石材	石英		1									1	
	緑色一枚岩		1									1	
	溶結凝灰岩		1									1	
	細粒砂岩(ニーピ)	4	1	1	4	1	1	1	2	5		22	
	河原石	1	1	1					1			4	
	合 計	5	2	4	5	1	0	1	1	2	1	29	
円盤状製品	青磁						1					1	
	中国産褐釉陶器	2					1					5	
	瓦		1	1								2	
	合 計	2	0	1	1	0	2	0	0	0	0	8	

第43表 石積みSA14 貝製品・骨製品・石製品・円盤状製品観察一覧

辨団番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	観察事項	出土地点 出土層
第26図 図版20 1	貝製品 ヤコウガ イ製 円形 状製品	サザエ科ヤコウガイを円形に加工された製品。外周縁辺部は背面から孔を穿っている。背面から孔の縫合部は摩耗するが17箇所穿られたようである。内面の外周縁辺部には研磨が施されている。製品の用途として考えると素材が脆く、剥離しやすいため事から判断すると、その可能性は低い。内面の研磨が深くなるがヤコウガイの身を取るために円形に先にした可能性が高いものと思われる。穿孔縦:3.2cm、横:3.5cm、厚さ:0.6cm、重量:7.5g。	SA14 (SA15 南側ルンチ) 第4層b
# # 2	貝製品 サザバ タテイ 製有孔製品	ニシキイズガイ科サザバタテイの股底外唇近くの破片を利用した有孔貝製品。左側の外殻面から孔を歪な隅丸方形に穿孔(穿孔)された孔のサイズや形状からすると穿孔された孔の数は四箇所が推定される。残存する縫合位の孔のサイズは2.7mmを測る。推定された孔(乳孔)当たりの孔のサイズは直径3.5~3.7mmであった。)するが、左側が破損する。右側面は打削調整後に研磨を加えた平坦面となる。左側面の下部に剥離痕が4・5箇所存在するが、剥離痕の観察から剥離痕が新鮮な状況であることなどからすると破損や発棄の際に生じたものとのどちらか。縦:3.6cm、横:5.94cm、最大厚:0.76cm、最小厚:0.24cm、重量:14.4g。	SA14 (西側ルンチ) 第3層a (暗褐色土層)
# # 3	貝製品 ヤコウガ イ製 有孔製品	サザエ科ヤコウガイの身を取るために縫合で穿った有孔製品。孔は体部脛の肋(筋)近くに穿たれている。残存する孔周縁の穿孔数を数えたり4が確認できる事から孔は四箇所に穿たれたようである。ヤコウガイの身と殻を剥離線工に使用するため穿たれた孔(剥離の孔)とみられる。縫合部の剥離痕や倒れ面は自然剥離や発廃後の削除などがみられる。縦:3.5cm、横:7.94cm、最大厚:1.44cm、最小厚:0.36cm、重量:21.2g。	SA14 (SA15 西側ルンチ) 第5層g (淡褐色混 土層)
# # 4	骨製品 骨鱗	ジゴン、若しくはウシの骨を利用した製品で、鰓先・脛先部と茎部の先端部を欠いた鱗。鱗身の中央部分の横断面は扁平な形態、鱗身の下部で横断面が歪な隅丸三角形となる。鱗身と茎部の間は、刃物などの工具で剥離線工によって茎部を製作する。茎部の横断面は歪な隅丸三角形となる。製品の加工は鉄製の刃物などの工具で丁寧に削り出しているが、その用途は判然しないが、素材の厚みなどから推察する。ウシの両側の刃部の上面は、面の保持が悪く、剥落、剥離や摩耗などみられる。残存部分から工具は研磨仕上げとみられる。サイズは縦:4.0cm、鱗身最大幅:1.0cm、鱗身最大厚:6.78mm、鱗身基礎:4.50mm、基部直径:1.93mm、残存重量:1.75g。	SA14 (東側ルンチ) 第1層c
# # 5	骨製品 加工痕のある 製品	縫合されたウシの背筋片に加工して資料である。加工痕は右側面に限定され、鉄製の刃物とみられるものを利用して上から下に向かって斜位に削っているが、その用途は判然しないが、素材の厚みなどから推察する。半身・骨質・骨針などの製作時に発生した不要の廃棄材料とみられる。縦:3.94cm、横:0.78cm、厚さ:0.4cm、重量:0.9g。	SA14 (SA15 南側ルンチ) 覆土
# # 6	石器 叩き石	平面観が歪な長方形状を呈する叩き石。横断面は隅丸方形状を呈する。拳大のサイズの石を用いている。敲打痕は各側面にみられ特に上下の面は使用頻度が高いうようである。表面は自然面が部分的に残存するが大部分は敲打痕や剥離痕、砥面である。裏面には敲打痕の集中と磨耗面がみられる。右側面上部の剥離面は、新鮮な面であることから使用時に発生した剥離面ではない。細粒砂岩(俗称:ニーピ)。縦:10.0cm、横:6.4cm、厚さ:5.0cm、重量:400g。	SA14 (東側ルンチ) 第1層c
# # 7	円盤状 製品	中国産褐釉陶器並(中国南部の窯。14~15c頃の製品)の胴部破片に打削調整を加えて円盤状に加工した製品である。外周縁辺部の打削調整は、主に表面から実施されている。剥離面は縫合の縫合部の摩耗(一箇所のみ)や研磨など少ないと使用頻度で限られたようである。裏面には黄茶色の釉が施されている。外面には浮文の龍の模様とみられる文様がある。縦:2.05cm、横:1.95cm、厚さ:0.6cm、重量:3.5g。	SA14 (東側ルンチ) 第4層g (淡褐色混 土層)
# # 8	円盤状 製品	"。外周縁辺部の打削調整は、主に表面から実施されている。剥離面は、上記7よりも大きな剥離面が多くみられる。剥離面の縫合部の摩耗(一箇所のみ)や研磨など少ないとから上記7と同様に使用頻度は極めて低かったようである。外面にのみ黄茶色の釉が施されている。裏面には浮文の龍の模様とみられる文様がある。縦:2.6cm、横:2.7cm、厚さ:0.5cm、重量:5.2g。	SA14 (SA15 南側ルンチ) 第4層b



第26図 石積みSA14出土品⑩ 貝製品：1～3、骨製品：4・5、石製品：6、円盤状製品：7・8

第44表 石積みSA14 金属製品出土状況

層序		B-14・15 SA14												合計							
		東側トレ				北側トレ		西側トレ		SA15 西側トレ		SA15 南側トレ									
		第1層 (覆土)	第1層 a	第1層 c	第2層	第4層 a (東半分) 黄褐色土層	第6層 c (東半分) 黄褐色土層	第6層 b (黒褐色混土層)	裏栗直上 覆土	西側壁面 清掃	第1層 a (覆土)	第5層 h	第1層 c (複乱)	第4層 b	第5層 g (暗褐色土層)						
工具類・生産用具	丸釘	完形	中 鉄	3	1				1			1			5						
		小 鉄													1						
		先端部 欠損	中 鉄			1									1						
		不明	鉄	1											1						
		頭部欠損	中 鉄	3						1	1				5						
	角釘	完形	中 鉄											3	1	1					
		小 鉄													1						
		先端部 欠損	中 鉄				4	1							6						
		不明	鉄		1					1					2						
		頭部欠損	中 鉄									1	1		2						
	釘 (形状不明)	先端+ 頭部欠損	中 鉄			1		1	1						4						
		不明	鉄		3										8						
装身具	釘	先端+ 頭部欠損	青銅	1											1						
	鍼		青銅				1								1						
	縁金具		青銅					1							1						
	簪		青銅											1	1						
生活用具	鍋	口縁部	鉄				1								1						
		底部	鉄						1						1						
武具	鍋?	胴部	鉄	1											1						
	陣子板と札		鉄		1										1						
	責鞆		青銅												1						
	譽具足		鉄		1										1						
	譽具足(骨牌金)		青銅					1							1						
武器	鍔		青銅											1	1						
	砲弾片		鉄	23	1	5				2	2			1	34						
不明類	用途不明		青銅	1											1						
			鉄			1								1	3	6					
	青銅	1													2						
		合計	38	1	8	7	2	1	5	5	4	1	1	2	1	5	6	1	2	3	10

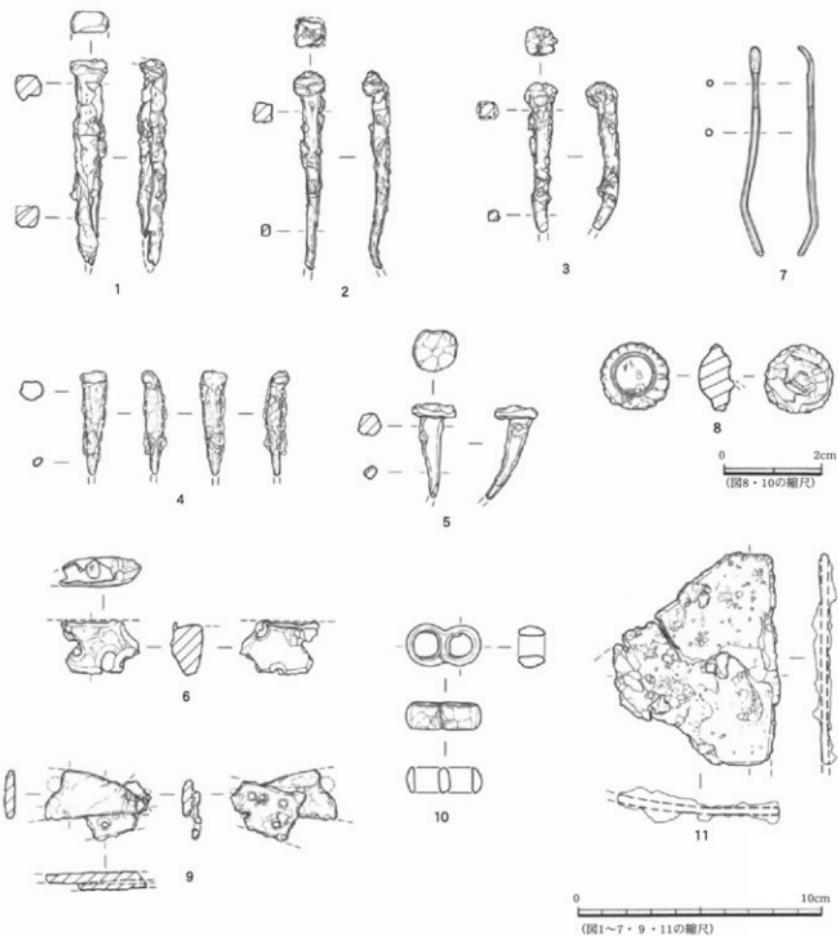
注 釘のサイズは、中:1寸半~5寸まで(3.75cm~15.75cm未満)、小:1寸まで(3.75cm未満)

第45表 石積みSA14 金属製品観察一覧

単位:mm/g

拂回番号 国版番号 遺物番号	分類 名称・仮称	材質	残存長(縦) 残存幅(横)	頭部		観察事項	出土地点 出土層	
				縦	横			
第27回 国版21 1	工具類・ 生産用具 釘	鉄製品	84.0 9.35	8.22 4.20 19.2	8.75	14.92	頭部の一部。先端部、身の一部を欠いた皆折釘。各面とも 跡割れや精磨などがみられる。身部正面の中央から下位 にかけて大きな剥離は精磨の破裂による破損面である。	SA14 東側トレチ 第2層(上層淡 褐色混練土層)
			80.5 5.71	6.10 2.93 10.0	—	11.66	細身の皆折釘。先端部分が折れ曲がっている。頭部と身の 半分程度が剥離している。各面とも跡割れや精磨などが みられる。頭部の剥離は精磨の破裂による破損面と みられる。	SA14 西側トレチ 第4層b(栗石内)
			61.0 6.16	7.31 3.80 9.5	11.0	11.0	先端部分のみが欠損する皆折釘。各面に跡割れ、精磨など がみられる。身の一部に跡割れがみられる。部分的に精磨 によって砂粒(粗い石英)などが付着する。	SA14 東側トレチ 第4層a(淡褐色 混練土層)
			42.5 7.80	7.0 3.0 4.8	—	—	頭部の屈曲部から先端までが欠損する皆折釘。各面に跡割 れがみられ先端部を除いて身部が肥大化する。頭部、身の 上位と下位に微細な跡割れがみられる。先端部は使用時に 摩耗して丸くなっている。	SA14 (SA15) 西側トレチ 第5層h
〃 5	〃 鉈	青銅製品	38.0 8.04	8.84 3.89 13.7	16.89	17.23	頭部の平面觀が刃の有る歪な円形状を呈している。頭部と 身部の位置は、身部が頭部の中心からずれた状態にある鉈 である。頭部は板材などに打ち込む際に変形している。頭部 と身部の変形がみられるところから板材などから抜き取る際に 変形したようである。先端部の形状は側面觀が刃羽状となる。 刃の幅は2.5mmを測り、刃線は慣れや折れによって歪な 円線となる。各面に緑青がみられ、特に身上半部には精磨 がみられる。	SA14 第1層 (覆土)
〃 6	〃 鍍金具		22.0 31.8	12.0 — 22.5	—	—	用途が判然としない金具である。形状などから推察すると重 量のある鍍金具などが考えられるところである。二次的な火 熱を受けて左側と裏面が溶解して彫れや形状の変形が著し い。その他に緑青が全体的にみられる。本来の面は、残存 面が少なく正面と裏面、そして下面に形状を留めている。下 面の一部には段差のある縁が残っていることから当該面に 対象となるものが入る隙地とみられる。	SA14 東側トレチ 第2層
〃 7	装身具 簪	武具 鉈	85.5 4.24	2.56 0.88 3.5	—	—	耳搔き形の簪であるが、先端で捻れる。頭部が耳搔き形で、 竿の首部は断面が円形で、竿本体は六角形となる。竿の先 端部は撲粋で丸棒を帯びる。部分的に緑青の付着や緑青 による浸食がみられる。	SA14 (SA15) 南側トレチ 第1層c(梶乱)
〃 8	武具 鉈		13.9 14.0	5.95 1.17 2.1	—	—	菊花の有る丸頭の鉈。二股の身部は破損し、身部の折れ部 と頭部の間に鉄板が挟まっている状況から判断すると、武 具(鎧・兜)などに取り付けられた鉈の利用が考えられる。菊 花の花弁は半円形で周縁辺部に二重圓線を刃の幅に狭い 鑿で線を入れている。花弁は、部分的に開弁となる箇所が みられる。花弁内には鑿による継ぎの線を1・2本入れてい る。	SA14 西側トレチ 第4層b (栗石内)
〃 9	〃 障子板と札	鉄製品	障子板 21.0 41.0	障子板 25.8 1.81 8.8	—	—	鎧の障子板と札が疊て溶着した資料、表裏面とも精磨や部 分的な精磨などがみられる。障子板は、障子板の先端部の 破片で複数が外れ状態である。札は、札頭と札足を欠いて いる。札に穿たれた孔は、札存する孔の位置関係から6孔 が残り、左右に孔の痕跡が2つ認められる。札のサイズ(残 存長(縦):27.68mm、残存幅(横):18.58mm、残存最大厚:2.14 mm、残存最小厚:1.61mm)	SA14 東側トレチ 第1層c
〃 10	〃 責鉗		縦左: 8.08 〃右: 8.32 横: 15.3	1.66 1.36 2.2	—	—	鎧金の責鉗。「8」の字状の孔に組紐を二本とおして紐の輪 を繋げて使用する金具である。組通しの孔は、一孔毎に互い違い に互い違いに折り曲げて接合して製作されている。接続部 分には、0.5mm程度の金具の隙間がみられる。左側の孔が 右側よりも若干大きな孔となっている。孔のサイズは左側(平 面觀が歪な楕丸形状を呈する)が、直径5.0~5.9mmを測 る。右側(平面觀が円形状となる)は直径5.0~5.2mmを測 る。左側の孔は裏面で縁の変形がみられる。鎧金の多くは 緑青で失われているが、錆び落としの段階で検出されてい る。	SA14 西側トレチ 第4層b (栗石内)
〃 11	〃 釘具足 (骨牌金)	鉄製品	86.0 66.0	4.60 4.46 73.6	—	—	武具の釘具足(骨牌金)として考えられた資料である。横断 面が僅かに内側に溝凹するが、継断面が直線的な形状とな る事から釘具足の可能性が高いものとして判断したが、接続 部の孔が欠落しているのが残念でならない。両面の縁の進 行は著しく、精磨や精磨の破裂による器面に剥離、そして跡 割れがみられる。その他に精磨による石灰岩片の溶着がみ られる。	SA14 東側トレチ 第6層b (黒褐色土層)

注「-」:計測不可



第27図 石積みSA14出土品⑪ 金属製品：1～11

第46表 石積みSA14 二次の火熱溶解錢貨

銭名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
太平通寶(北宋976年)	1片	0.44	「平」の一字が残存	B-14・15 SA14西側レンチ第4層b(栗石内)
天聖元寶(北宋1023年)	1片	1.19	「元」「寶」の二字が残存	B-14・15 SA14東側レンチ第1層c
景祐元寶(北宋1034年初鋤)	1片	2.37	「元」「祐」の二字が残存	B-14・15 SA14 SA15西側レンチ第5層a(淡褐色混羅土層)
皇宋通寶(北宋1038年)	1片	1.09	「宋」「通」の二字が残存	B-14・15 SA14東側レンチ第1層c
元符通寶(北宋1089年初鋤)	1片	1.62	「元」「寶」の二字が残存	B-14・15 SA14東側レンチ第1層c
永樂通寶(明1408年初鋤)	1片	0.90	「永」の一宇が残存	B-14・15 SA14東側レンチ第1層c
	1片	0.06	-	
鳩目錢(初鋤年不明)	1片	0.03	-	B-14・15 SA14 西側レンチ第4層b(栗石内)
	1片	0.08	-	
	1片	0.72	「寶」の一宇が残存	B-14・15 SA14 東側レンチ第1層c
不明錢貨	1片	0.72	「通」の一宇が残存	
	1片	0.26	-	B-14・15 SA14西側レンチ第4層b(栗石内)
合計	12			

第47表 石積みSA14 鍛冶関連・ガラス玉・ガラス製品出土状況

種類	層序	B-14・15			合計
		SA14	SA14	SA14	
		第1層(覆土)	第1層a	西側レンチ 第1層a(覆土)	
鍛冶関連	鉄滓		1		1
	合計	0	1	0	1
ガラス玉	I類	茶黒色		1	1
	II類	水色		1	1
		白濁		1	1
	合計	0	1	2	3
ガラス 製品	瓶	破片		1	1
	板ガラス	破片		2	3
	おはじき		1		1
	合計	1	3	3	7

第48表① 石積みSA14 ガラス玉観察一覧

挿図番号 図版番号 遺物番号	形状 分類	色 調	素 材	残存 状況	2次的加 熱の有無	観察事項	出土地点 出土層
第28図 図版22 10	I類	茶 黒 色	ガ ラ ス	良好	無	二次的な火熱を受けて微細なアバタ状の気泡痕がみられる。下面の孔周辺に剥離面がみられ剥離部分から内部の色調を観察すると色合いは淡緑白色である。上面には巻き付け成形時のガラスを切り離した際、歪で微細な突起がみられる。サイズ:長軸6.31mm、短軸6.10mm、厚さ4.77mm、重量0.28g。孔径:最大1.64mm、最小1.58mm。製法:巻き付け。	SA14 西側レンチ 第1層a

第48表② 石積みSA14 鍛冶関連・おはじき観察一覧

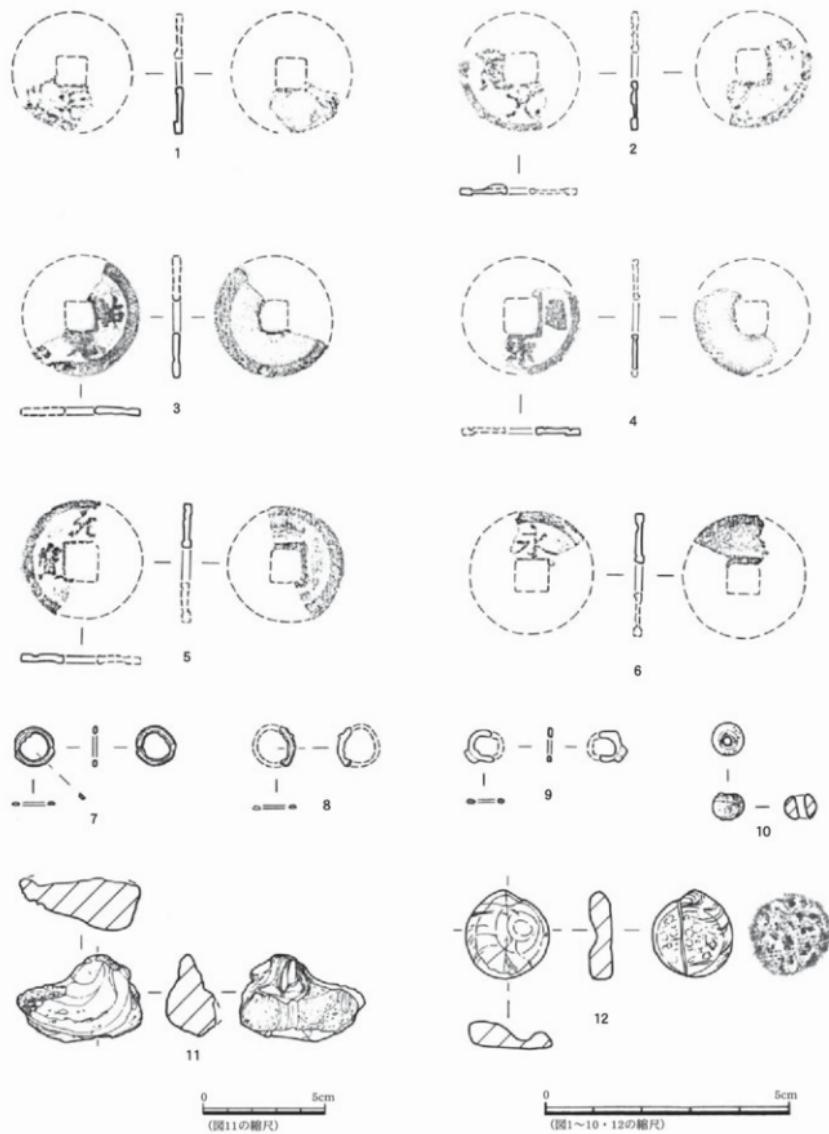
挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	観察事項	出土地点 出土層
第28図 図版22 11	ガラス 質 底 滓	鍛冶関連の資料で磁性のないガラス質底滓。溶解した鉄滓が再凝固して形状が歪な滴状となった椀形滓。表面とも茶黒色を呈する。劈開面から観察すると粗細な気泡痕が多量にみられ、丁度、割れた軽石のような状態となっている。サイズは、縦:3.5cm、横:5.04cm、厚さ2.0cm、重量:19.6g。	SA14 第1層a
〃 〃 12	お は じ き	製造工程で丸いガラス玉を潰す際に発生した不良品のおはじき。形状も正円ではなく歪である。表面には鍋底状の痛み(直径7.3mm前後、深さ2.61mm)が生じている。裏面には滑り止めを兼ねた不鮮明な型押しの基盤目がみられる。色調は透明な若草色。縦:17.55mm、横:17.27mm、最大厚:4.91mm、最小厚:3.38mm、重量:2.2g。	SA14 第1層 (覆土)

第48表③ 石積みSA14 錢貨観察一覧

単位:mm/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	銭種 铸造種類	初 鑄 年	素 材	読 み 方	状 態	書 体	肉郭 外径 A B	肉郭 内径 C D	方 穿 E F	断面計測部位			重量	観察事項	出土点 出土層	
										①	②	③				
第28回 1	太平通寶 公鑄銭	北宋 976年	銅 銭	対 読	破 損	真 書	—	—	—	1.69	1.09	1.46	0.44	1/4弱が残存する。字款は「平」の一字のみ残存。二次的な火熱を受けて変形する。面の肉郭の幅は2.44~2.52mmを測る。背の肉郭の幅2.75mmと面よりも幅広である。破断面にも緑青がみられ地金が浸食されて青白色となる。両面とも緑青が著しい。	SA14 西側レンチ 第4層b (栗石内)	
〃 2	天聖元寶 公鑄銭	北宋 1023年	銅 銭	対 読	破 損	真 書	—	—	—	1.77	0.50	1.38	1.99	2/3強が残存する。字款は「元」・「寶」の二字が残存。二次的な火熱を受けている。面の肉郭の幅は1.69~1.88mmを測る。背の肉郭の幅1.84~2.07mmと面よりも若干幅広である。緑青は両面にみられ、特に面の字款部分が鏡で彫りされている。背の緑青は微細な鉛瘤が散在した状態で観察できる。火熱の影響で微細な解剖れや瘻蓋状となる。	SA14 東側レンチ 第1層c	
〃 3	景祐元寶 公鑄銭	北宋 1034年	銅 銭	回 読	破 損	真 書	—	—	—	1.45	0.97	1.14	2.37	1/2近くが欠落する。字款は「元」・「祐」の二字が残存。面の肉郭は背よりも鮮明であり、面の肉郭の幅は2.8mmを測る。面背の一部に緑青による鉛膨れや鉛瘤の破裂による微細な剥離面がみられる。	SA14 (SA15西側 レンチ)第5層g(淡褐色 混練土層)	
〃 4	皇宋通寶 公鑄銭	北宋 1038年	銅 銭	対 読	破 損	真 書	—	—	—	1.10	0.65	0.95	1.09	1/3程度が残存する。字款は「宋」・「通」の二字が残存するが、字款が摩耗して潰れている。面の肉郭の幅は1.98~1.99mmを測り、幅が均一である。背の幅は2.53~3.17mmと面よりも幅広である。緑青により微細な亀裂が両面の肉郭部分で発生している。	SA14 東側レンチ 第1層c	
〃 5	元符通寶 公鑄銭	北宋 1098年	銅 銭	回 読	破 損	行 書	—	—	—	1.43	0.78	1.18	1.62	1/2強が欠落する。字款は「元」・「寶」の二字が残存。錢鉄型のズレにより面の肉郭の幅は均一的ではなくていている。面の肉郭は幅が1.6~2.4mmと無駄がある。背も同様に肉郭の幅(2.0~3.3mm)に無駄がある。面背とも緑青で全体的に発生し、緑青による器面の浸食がみられ微細なアバタ状となる。特に面で浸食が大きい。	SA14 東側レンチ 第1層c	
〃 6	永樂通寶 公鑄銭	明 1408年	銅 銭	対 読	破 損	楷 書	—	—	—	1.62	0.86	1.26	0.90	1/4程度が残存する。字款は「永」の一字が残存。面の肉郭は背よりも鮮明である。面の肉郭の幅は2.3mmを測る。背の肉郭は不鮮明で一部に於いて肉郭が消えて無輪郭となる。両面に微細な緑青がみられる。	SA14 東側レンチ 第1層c	
〃 7	不明	不明	不明	不明	完 形	不 明	8.23	—	—	0.74	—	—	0.06	輪銭。孔が円穿となる場合。錢鉄型が堆で輪郭や厚みに無駄が多く並んでる。両面とも緑青による浸食などの影響を受けて非常に脆くなっている。	SA14 西側レンチ 第4層b (栗石内)	
〃 8	場目銭	不明	不明	不明	不明	破 損	不 明	—	—	—	0.87	—	—	0.03	2/3近くが欠落した輪銭。孔が円穿となる場合。錢鉄型のバリが残っている。両面とも緑青による浸食などの影響を受けて非常に脆くなっている。	SA14 第4層b (栗石内)
〃 9		不明	不明	不明	不明	破 損	不 明	6.94	—	—	0.77	—	—	0.08	1/4程度が欠落した輪銭。孔が円穿となる場合。錢鉄型の大きさバリ(最少幅3.6mm)が残っていて銭の幅よりも大きい。両面とも緑青による浸食などの影響を受けて微細なアバタ状となる。	SA14 第4層b (栗石内)

注 「-」:計測不可

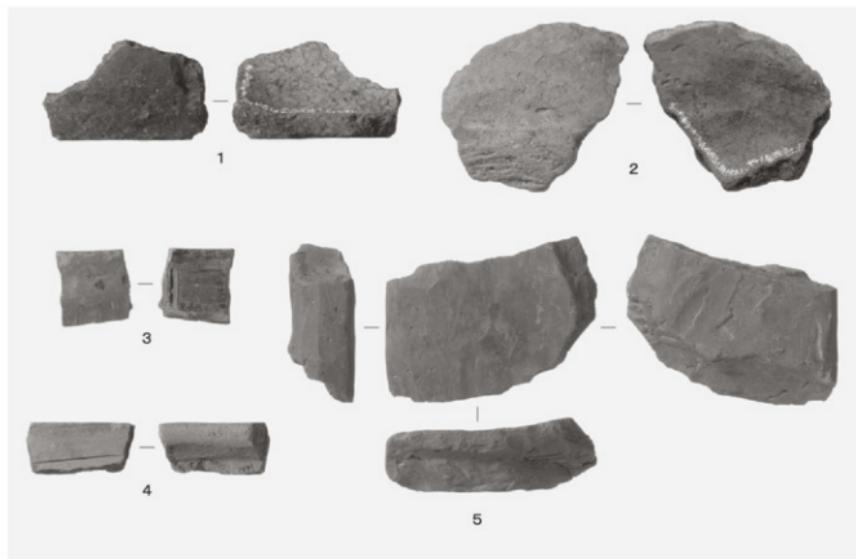


第28図 石積みSA14出土品⑫ 銭貨：1～9、ガラス玉：10、鍛冶関連鉄滓：11、おはじき：12

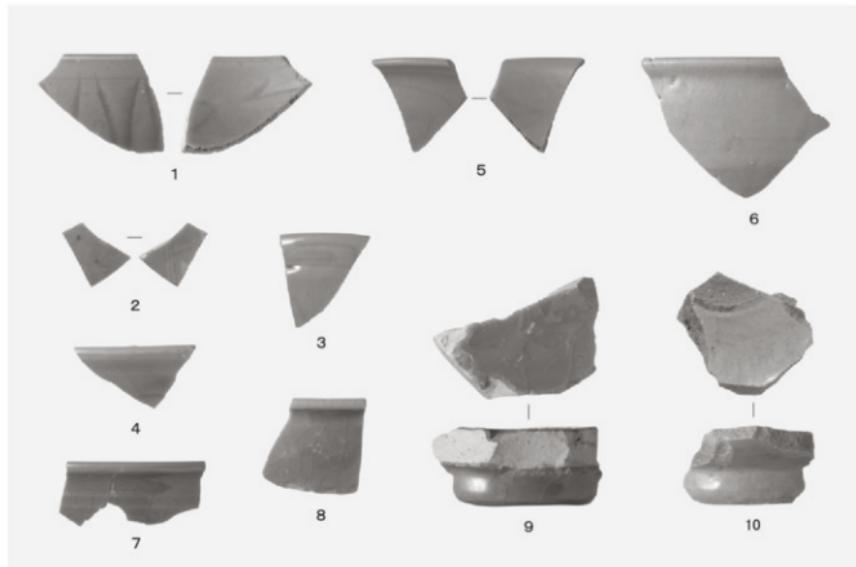
第49表 石積みSA14 出土遺物状況(図版外)

種類・器種・部位			層序	B-14・15						合 計	
				SA14							
				第1層 (覆土)	第1層 c	第2層	(黒褐色土層) 第6層 b	(栗石内) 第1層 a	(暗褐色土層) 第3層 a	第10層	SA15西側トレス SA15南側トレス
陶質土器	鉢	胴部			2						2
		胴部				1					1
	器種不明	底部			1						1
	合 計			0	3	1	0	0	0	0	4
	焼土				1		1				2
	合 計			0	1	0	1	0	0	0	2
黒釉陶器	碗	胴部							1		1
	合 計			0	0	0	0	0	0	1	0
須恵器	盞	胴部			1	1					2
	合 計			0	1	1	0	0	0	0	2
本土産 磁器	碗	印判 染付	口縁部						b. 1		1
	小碗		底部						e. 1		1
	皿		底部	1							1
	絵の具皿	近現	(紙部焼き?)					1			1
	器種不明		胴部						1		1
	合 計			1	0	0	0	1	1	0	5

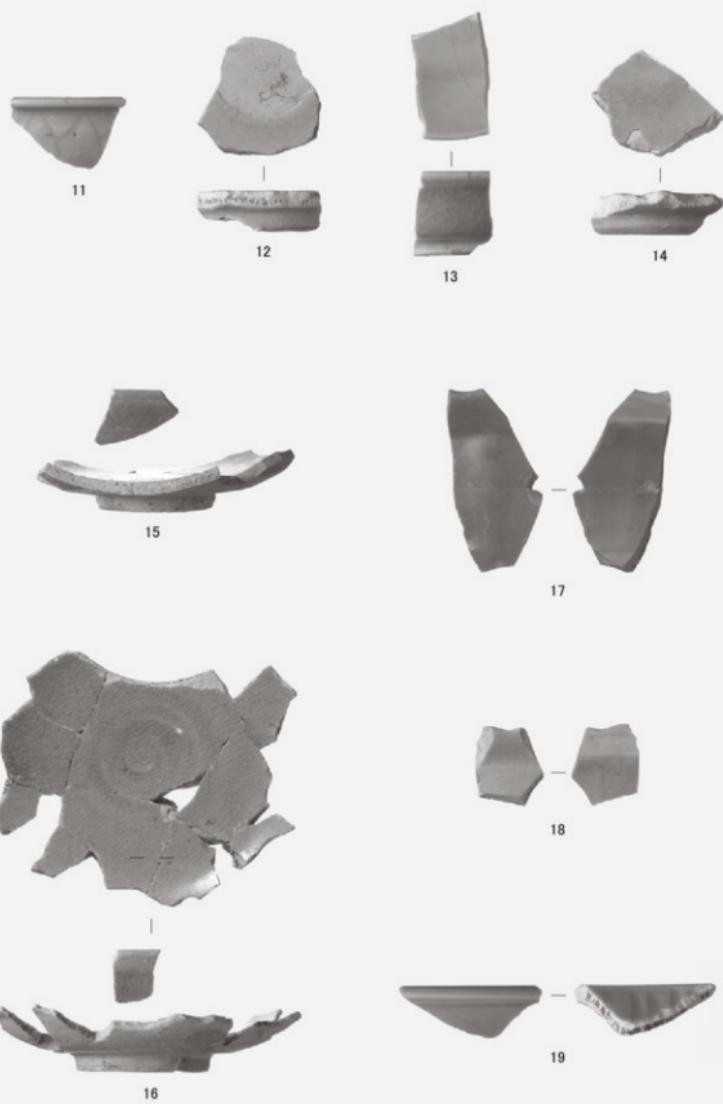
注 印判染付・印判 [b:型紙摺り、e:銅版転写]



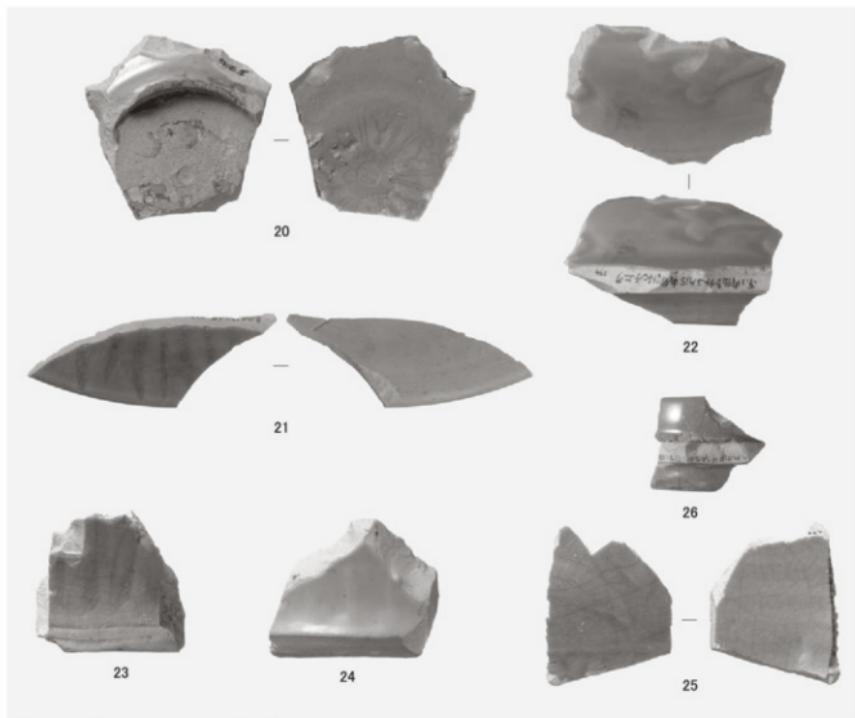
図版12 石積みSA14出土品① 土器：1・2、瓦質土器：3・4、屋瓦：5



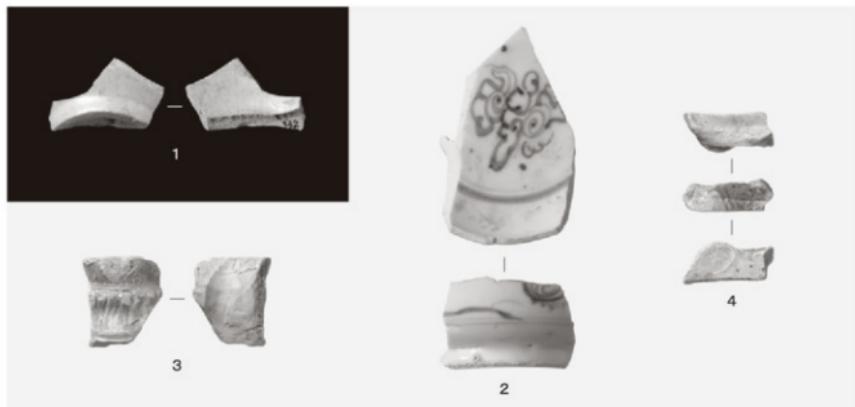
図版13 石積みSA14出土品② 青磁：1～10



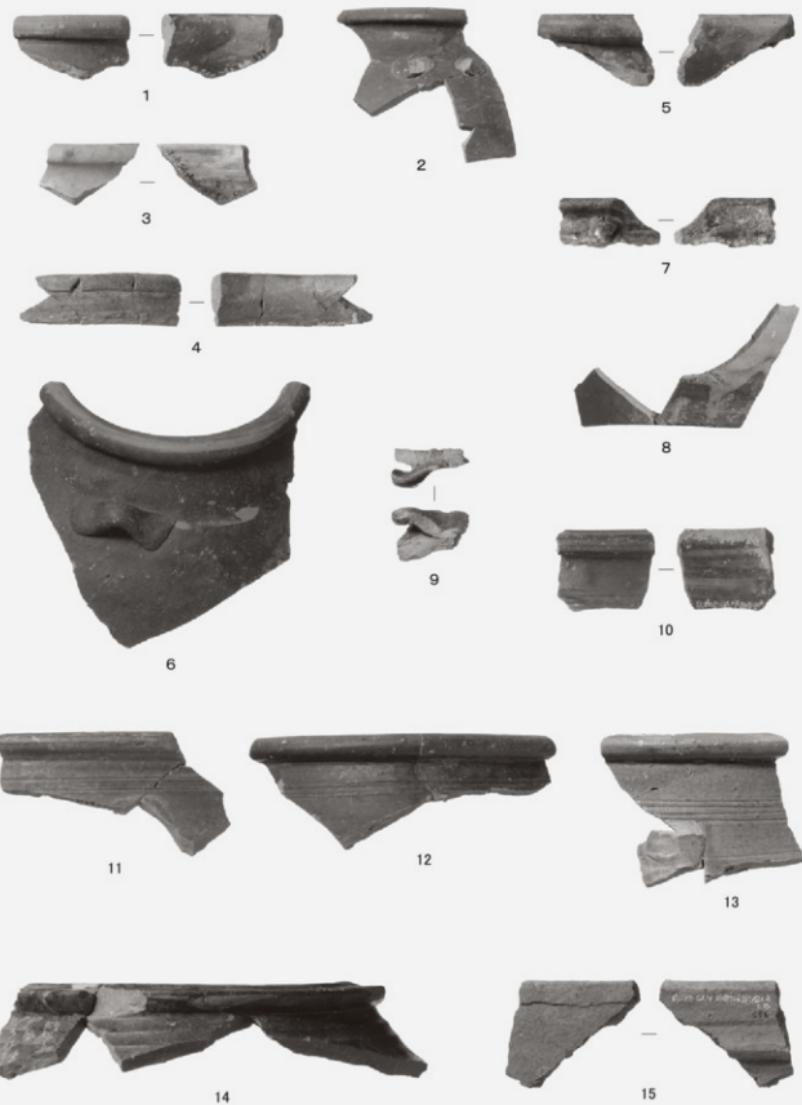
図版14 石積みSA14出土品③ 青磁：11～19



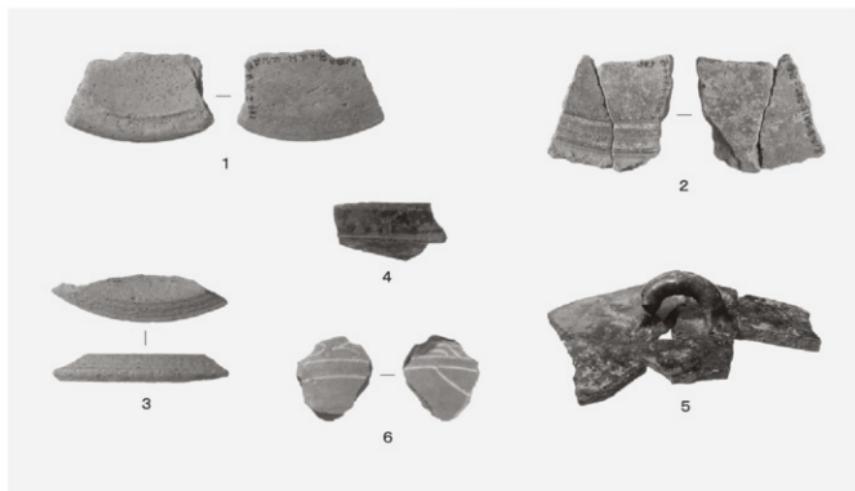
図版15 石積みSA14出土品④ 青磁：20～26



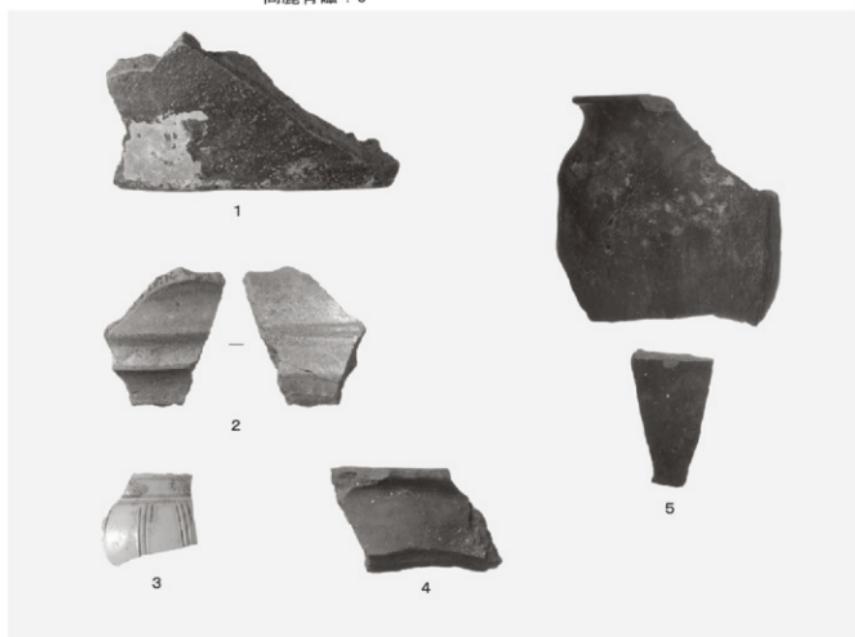
図版16 石積みSA14出土品⑤ 白磁：1、青花：2、彩釉陶器：3・4



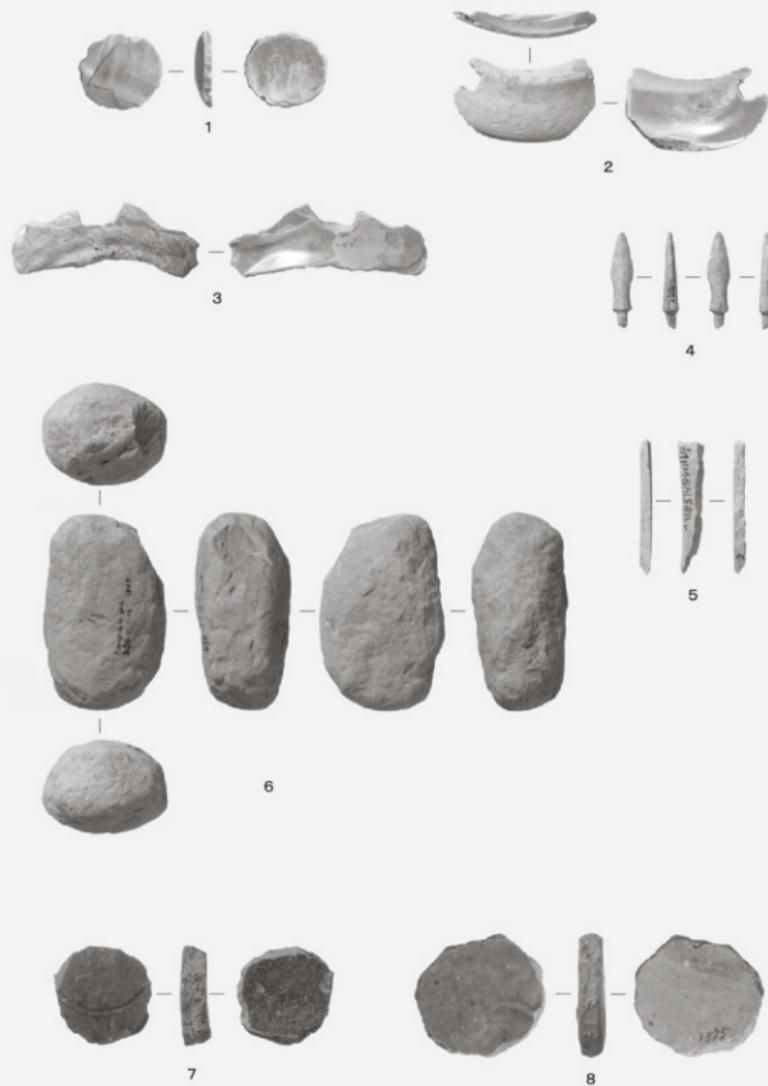
図版17 石積みSA14出土品⑥・⑦ 中国産褐釉陶器：1～15



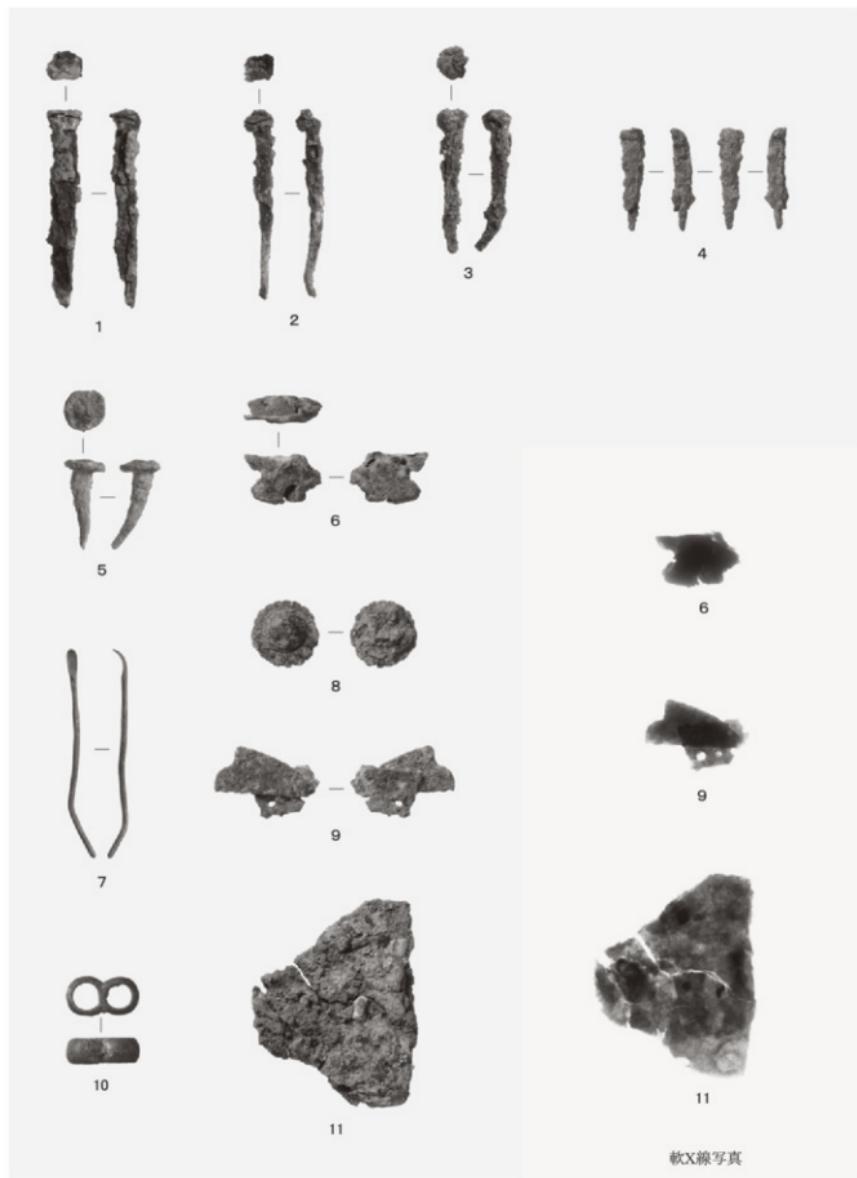
図版18 石積みSA14出土品⑧ タイ産土器（半練）：1・2、タイ産炻器：3、タイ産褐釉陶器：4・5、高麗青磁：6



図版19 石積みSA14出土品⑨ 本土産陶器：1・2、沖縄産施釉陶器：3、沖縄産無釉陶器：4・5

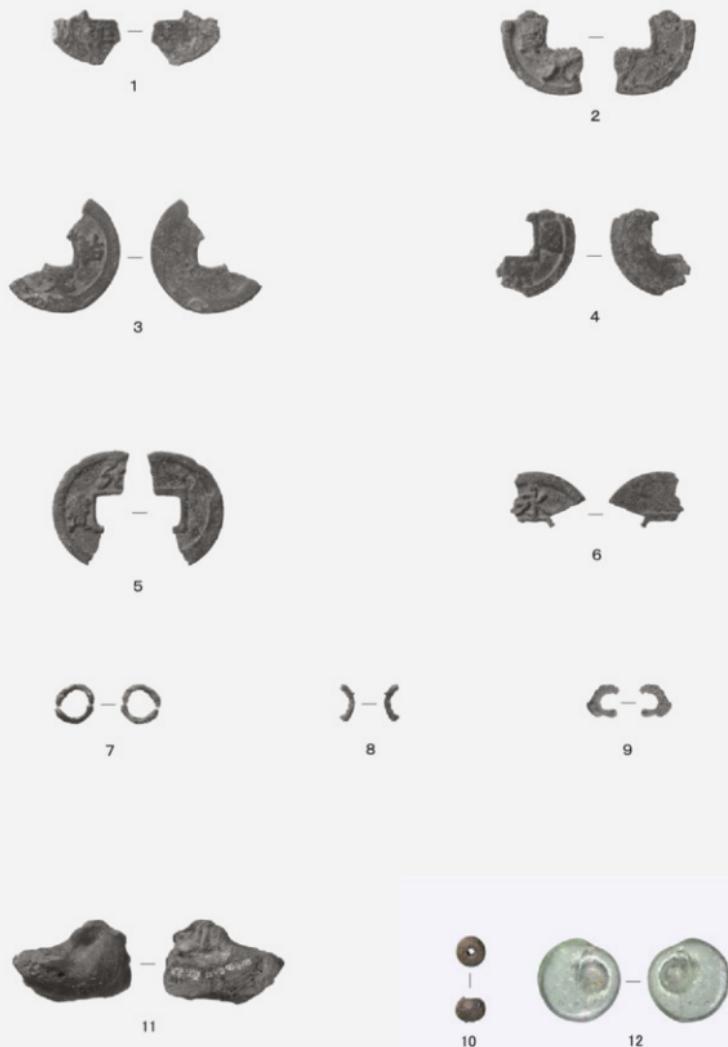


図版20 石積みSA14出土品⑩ 貝製品：1～3、骨製品：4・5、石製品：6、円盤状製品：7・8



軟X線写真

図版21 石積みSA14出土品⑪ 金属製品：1～11



図版22 石積みSA14出土品⑫ 銭貨：1～9、ガラス玉：10、ガラス質鉄滓：11、おはじき：12

(8) 石積み SA27 の出土遺物 (第 29 図～第 37 図、第 50 表～第 65 表、図版 23～30)

石積み SA27 から出土した遺物の種類は、第 4 表に示したように総計で 1430 点 (≈100%) が得られている。出土遺物の内訳は、土器 25 点 (1.75%)、瓦質土器 16 点 (1.12%)、瓦類 (屋瓦・博瓦) 243 点 (16.99%)、青磁 191 点 (13.36%)、白磁 7 点 (0.49%)、黒釉陶器 4 点 (0.28%)、中国産褐釉陶器 637 点 (44.54%)、沖縄産施釉陶器 10 点 (0.70%)、タイ産褐釉陶器 127 点 (8.88%)、ガラス製品 3 点 (0.21%)、金属製品 89 点 (6.22%)、錢貨 9 点 (0.63%) の 23 種類が確認されている。輸入陶磁器 (タイ産、中国産) の占める割合は、68.39% であった。

当該遺構の時期に比定できる資料は、青磁直口縁皿 (第 30 図 11)、青花碗 (第 32 図 4)・青花壺 (同図 5)、中国産褐釉陶器壺 (第 33 図 4・5)、タイ産 (土器、褐釉陶器。第 34 図 1～3) などがある。なお、出土遺物の大半は細片化した資料が多く、その中から比較的大きな破片資料や特徴的な資料を図示 (第 29 図～第 37 図) した。

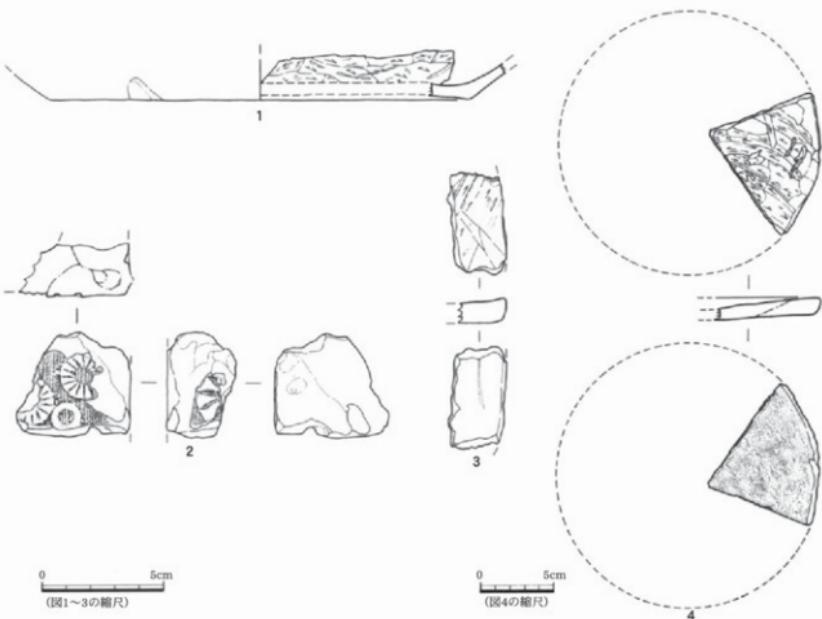
第50表 石積みSA27 土器・瓦質土器出土状況

種類・器種・部位	層序	B-16・17 SA27										合計	
		第1層 覆土	栗石 直下覆土	栗石内 表探	栗石内 表探	第1層a (客土)	第1層b (客土)	第3層a	第4層b	第5層a	第6層 清掃		
土器	鍋							1		1		2	
	器種不明				3	1			2	5	9	22	
瓦質土器	蓋				1							1	
	火鉢	口縁部	1			8	1			1	1	12	
瓦質土器	器種不明	胴部			3							3	
	合計			0	0	4	0	1	2	0	3	9	25
													16

第51表 石積みSA27 土器・瓦質土器観察一覧

捕回番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 底径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第29図 図版23 1	土器	鍋	底部	器形: 底面からの立ち上がりは、外側に大きく開いて直線的に胴部下部に移行する鍋の底部とみられる。器面調整: 各面とも器面保持が悪い。外面は置削りを施すが一部は深く削り込んで浅く窪んでいる。外底面は平坦に成形されているが調整方法については不明瞭で判然としないが箇削りが入っているようである。内面は指圧痕や雑な指ナデが入っている。器厚は、胴部で 4.2mm、底部部分が 4.4～5.1mm を測る。胎土: 砂質の細粒子。混入物: 微細な鉱物 (石英、黒色) を主体とする。稀に粗い茶褐色や灰褐色の物質も含まれている。色調: 外面及び外底面は明褐色。内面が淡灰色を帯びている。焼成: 良好で堅い。	SA27 第4層b
〃 2	瓦質 土器	火鉢	口縁部	器形: 方形状の角型の火鉢の角部分。文様・器面調整: 表面と右側面に継ぎの刷毛目を加えた後に菊花花 (三種類: 大: 推定復元直径 26.3mm、中: 直径 18.7mm、小: 直径 11.2mm) を施す。内面は僅かに残存し、継ぎに細かな擦痕がみられる。器厚: 17.7～29.3mm を測った。胎土: 砂質質の細粒子。混入物: 微細な石英を微量に含む。稀に微細な雲母片や微細な (茶褐色、灰褐色) 物質がみられる。色調: 両面とも明茶褐色を帯びる。焼成: 良好で堅い。	SA27 第1層 覆土
〃 3	瓦質 土器	蓋		円盤状の型枠に入れて製作された蓋で酒甕 (タイ産や中国産大型褐釉陶器などの蓋) 利用された代用品。上面は箇削りを主体に縁沿いにナデを施している。縁沿いには型枠から僅かに食み出した陶土が凹状となる。下面及び外周側面は型枠に入る面で、下面には微細な起伏のある平坦面である。外周側面も歪な曲面となっている。胎土: 泥質で細かい。混入物: 微細な石英を僅かに含む。稀に粗い石英や粗細な茶褐色の鉱物がみられる。色調: 両面とも淡褐色。焼成: 良好で堅い。器厚: 7.9～9.7mm。	B-16・17 SA27 栗石直下 覆土
〃 4	瓦質 土器	蓋	最大 径 18.0	”。上面は雑な指ナデを主体に縁沿いに指圧が僅かにみられる。縁沿いには型枠から僅かに食み出した陶土が凹状となる。下面及び外周側面は型枠に入る面で、下面には微細な起伏のある平坦面であるが、下面及び外周側面には型枠に陶土を充填した際に陶土の皺や歪な隙間がみられる。外周側面も歪な曲面となっている。上面に大麦とみられる圧痕 (長軸: 5.36mm) がみられる。下面には籠織の圧痕や藁灰とみられる微細な圧痕がみられる。胎土: 泥質で細かい、混入物: 微細な石灰質砂粒を少量含む。稀に粗細な石英がみられる。色調: 両面とも茶褐色を主体とし、蓋縁沿いが灰褐色や灰黒色となる。焼成: 壓酸。器厚: 9.3～10.6mm。	B-16・17 SA27 栗石内

注 「-」: 計測不可



第29図 石積みSA27出土品① 土器：1、瓦質土器：2~4

第52表① 石積みSA27 青磁出土状況

		層序	B-16・17 SA27									合計
			第1層 栗石直上 覆土	栗 石内 黄褐色 土層	第 1 層 a	第1層a (北側 覆土)	第 3 層 a	第 3 層 b	第 5 層 a	第 6 層	第 7 層	第 8 層
口 縁 部	外反	無文						2		4	2	11
	直口	外面:雷文・片切彫り、刻花文 内面:刻花文						1			1	2
		蓮弁	縹彫り	1							1	2
		雷文	片切り彫り							2	2	
		スタンプ		1			1	5		12	19	
		無文					1		1		2	
碗 脚 部	外面:蓮弁・片切彫り 内面:蓮弁文								1	1	2	
	外面:蓮弁・片切彫り 内面:有文									1	1	
	外面:有文 内面:無文									2	2	
	外面:無文 内面:有文									1	1	
	雷文		片切彫り				2				2	
	外面:蓮弁・片切彫り、刻花文 内面:有文									1	1	
	有文						1	5	1	5	11	
	無文			4	1			2			7	

第52表② 石積みSA27 青磁出土状況

		層序		B-16・17 SA27								合計		
		第1層 複土	栗石直上 複土	栗石 内	栗石内 黄褐色 土層	第1層 a （北側複 土）	第3層 a	第3層 b	第5層 a	第6層 b	第7層 a	第8層 b		
		器種・部位												
碗	底部	aタイプ	有文									1	1	
		cタイプ	無文										1	
		文様不明											1	
		gタイプ	有文		1								1	
		有文											2	
		hタイプ	無文										2	
		文様不明											2	
		高台のみ	文様不明										3	
		底面のみ	無文		1								1	
		文様不明		1									1	
大碗 or鉢	口縁部	高台片	文様不明										1	
		有文				1							3	
	胴部	直口	雷文	片切彫り						2	1		3	
		雷文	片切彫り		1								1	
	口縁部	外反	花文	丸彫り		1							1	
			無文		1	3							5	
		外面:蓮弁・片切彫り	内面:花弁・丸彫り							1			1	
		直口	外面:蓮弁・片切彫り	内面:無文		1							1	
			無文			3				5	1	5	14	
皿	胴部	外面:蓮弁・片切彫り	内面:無文			1							1	
		外面:蓮弁・片切彫り、櫛描	内面:無文										1	
		無文								1	1	1	3	
	底部	印花文		1						1	1	1	1	
		無文			1					1	1	1	4	
		無文	内底のみ										1	
		文様不明	高台のみ										1	
盤	口縁部	タガ状 跨縫	外面:無文		1								1	
		文様不明	内面:蓮弁・鏡彫り		3								3	
	胴部	外面:有文不明	内面:蓮弁・櫛描							1			1	
		外面:無文	内面:蓮弁・丸鉢		1								1	
	底部	aタイプ	文様不明		1					1			1	
酒会臺	胴部	有文不明								3	1	4		
瓶	胴部	刻花文・片切彫り			1								1	
大鉢	口縁部	外面:雷文・櫛彫り	内面:刻花文・片切彫り							1		3	4	
		有文不明								3	8	1	24	
	胴部	刻花文・鏡彫り								1			1	
		無文		1						1			2	
	底部	有文不明	内底のみ							1			1	
大鉢	胴部	蓮弁・片切彫り、刻花文								1			4	
香炉	底部	文様不明			1								1	
不明	底部 (底面のみ)	外面:無文 内面:有文不明											1	
合計				2	5	27	1	1	1	6	31	4	37	1
										75		191		

第53表① 石積みSA27 青磁観察一覧

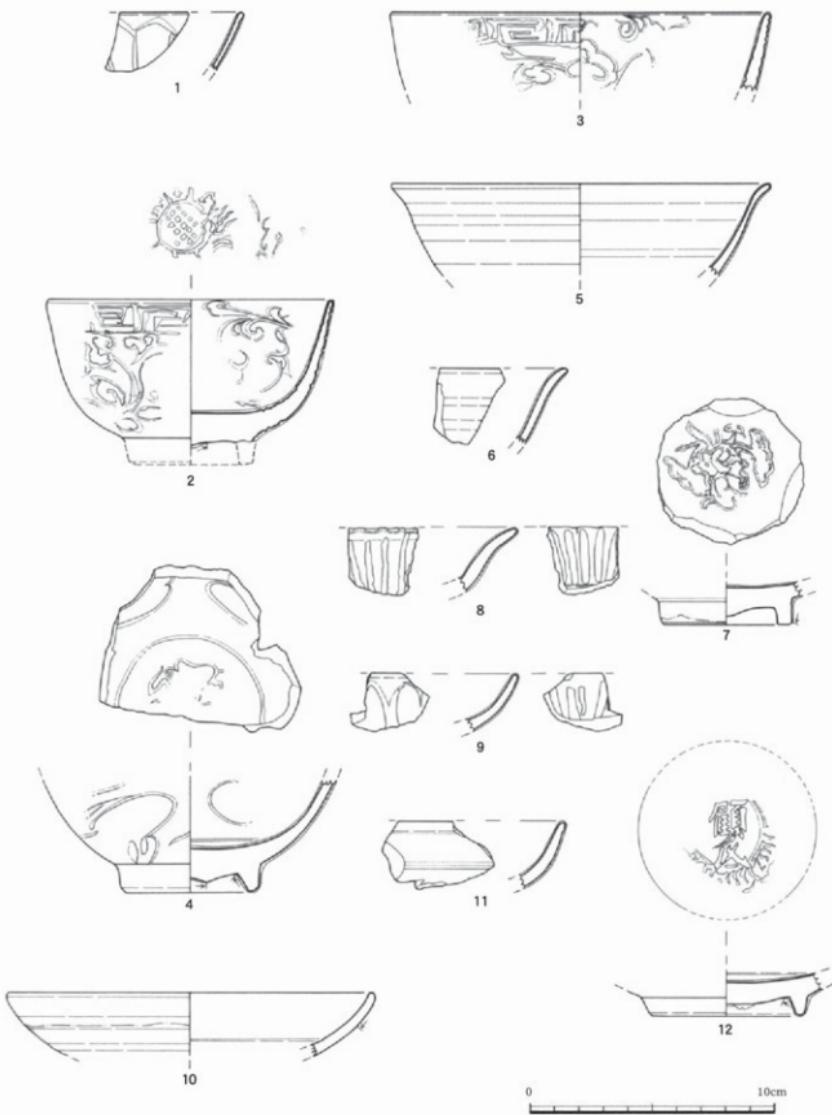
挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第30図 図版24 1	線刻 細 蓮弁 文碗	口縁部	— — —	器形:直口口縁碗。文様:外面に線刻の蓮弁文を描く。蓮弁の弁先は劍先状に描くが、鋸角である。素地:灰白色の細粒子で、微細な石英と黒色鉱物が僅かにみられる。劈開面から微細な気泡痕が多くみられる。釉色:淡緑色で、買入はない。龍泉窯系。15c中頃～15c後半。	SA27 栗石直上 覆土
# # 2	雷文 帶 碗	口縁部	11.8 (6.7) (5.2)	器形:直口口縁碗。文様:外面口縁に片切彫りで雷文(雷文は中心で時計回りから反時計回りに反転させて外側に向かって展開している)を描いている。雷文帯直下に刻花文を高台脇近くまで描いている。内面にも口縁部から見込み近くまで片切彫りによる刻花文を描いている。見込みには菊花文が描かれている。素地:光沢のある灰白色の微粒子で、微細な気泡痕が多くみられる。釉色:淡緑色の釉を両面に施した後に外底面の釉を輪状に搔き取って露胎とする。買入はない。龍泉窯系。14c後半～15c中頃。	B-16・17 SA27 第3層b
# # 3		口縁部	15.6 — —	器形: " 。文様:外面口縁に片切彫りで雷文(左から左上は時計回りで右が上から右したへ反時計回りとなる雷文を組み合わせている)を描いている。雷文帯直下に刻花文を描いている。内面にも口縁部から脇部まで片切彫りによる刻花文を描いている。素地:光沢のある灰白色の微粒子。釉色:淡緑色で、買入はない。龍泉窯系。14c後半～15c中頃。	B-16・17 SA27 第8層
# # 4		底部	— — 5.8	器形:高台分類gタイプ。高台脇から丸味を持つ脇部へ移行する碗。文様:外面に片切彫りで刻花文を高台脇まで描いている。内面にも片切彫りの刻花文を描いている。見込みには闇線と花文を施している。素地:淡灰白色の微粒子。釉色:淡緑色で、全面に絶縁後外底面の釉を蛇の目状に搔き取って露胎とする。向面に細かい買入がみられる。龍泉窯系。14c後半～15c中頃。	B-17 SA27 栗石内
# # 5	外反 口 縁 碗	口縁部	15.6 — —	器形:外反口縁碗。文様:なし。素地:淡灰白色的細粒子。釉色:淡緑色で、両面に施釉。両面に細かい買入がみられる。龍泉窯系。14c終末～15c中頃。	SA27 第3層b
# # 6		口縁部	— — —	器形: " 。文様:なし。素地:淡灰色の細粒子で、微細な石英が多くみられる。釉色:淡黄緑色で、両面に施釉。買入はない。中国南部の窯。14c終末～15c中頃。	B-16・17 第3層b
# # 7	碗	底部	— — 5.1	碗の高台破片。高台分類aタイプ。文様:見込みに蓮花(花、葉)を施している。素地:灰色の粗粒子で、微細な石英と黒色鉱物を多く含む。釉色:透明な灰緑色の釉を内面と外面の高台途中まで施す。買入はない。中国南部の窯。14c終末～15c初頭。	B-16・17 SA27 第6層
# # 8	外反 口 縁 皿	口縁部	—	器形:外反口縁皿。口唇部を細かく抉り取って菊花の弁先を表現する。文様:内外面に丸彫りで花文を描くが口唇部の弁先とは一致しない。素地:光沢のある淡灰色の微粒子。釉色:淡緑色の釉を両面に施している。買入はない。龍泉窯系。15c。	SA27 栗石直上 覆土
# # 9	直 口 口 縁 皿	口縁部	— — —	器形:直口口縁皿。文様:外面に片切彫りで弁先が開いた蓮弁文を描く。内面は丸彫りで弁先の無い花弁を二条一組で描いている。素地:光沢のある淡灰色の微粒子。釉色:淡緑色の釉を両面に施しているが二次的な火熱を受けて釉の爛れや気泡痕がみられる。粗い買入が両面にみられるが、火熱によって発生した跡とみられる。龍泉窯系。14c終末～15c中頃。	SA27 第3層a
# # 10		口縁部	15.0 — —	器形:直口口縁皿。文様:内面に闇線を施している。素地:淡黄白色の粗粒子で、粗細な黒色や茶褐色の鉱物を多く含んでいる。釉色:黄白色の釉を内面から外側の脇部まで施している。両面に非常に細かい買入がみられる。泉州窯系。14c後半～15c前半。	SA27 栗石内
# # 11		口縁部	—	器形:直口口縁皿。口縁部に削りを入れて小さな玉線状の肥厚を造る。文様:外面の脇部に界線とみらものが三条施されている。素地:光沢のある淡灰白色の微粒子。釉色:淡緑色の釉が両面にみられる。買入はない。龍泉窯系。15c後半～16c。	SA27 第3層b
# # 12		底部	— — 6.0	器形: " 。上記11と釉や素地などが一致する同一の個体であるが、直接は接合ができなかった。文様:見込みに花弁と花芯に「顧氏」(註1)銘が陽刻で施されている。素地:光沢のある淡灰白色の微粒子。釉色:淡緑色の釉が両面にみられる。買入はない。龍泉窯系。15c中頃。	SA27 第1層 覆土

注 () :推定、「-」:計測不可

註文献

註1-a. 亀井明徳「日本出土の明代青磁碗の変遷」鏡山先生古希記念古文化論叢1980年発行によると亀井氏は、「顧氏」銘の落款をもつ碗については、15世紀後半を遡らないことを指摘している。

註1-b. 国際交流企画展『鶴統の華・明代龍泉窯青磁大窯洞窯址発掘成果展』大阪市立東洋陶磁美術館2011年9月発行の作品解説(小林仁)で青磁刻花蓮唐草文「顧氏」銘の解説文に「・顧氏といけば、『乾祐龍泉窯志』に記載のある正統年間(1435～49年)に龍泉で青磁生産を行った顧仕成が想起されます。窯洞窯址の主に明代早期の地層からは「顧氏」あるいは「顧」銘の資料が少なからず出土しており、顧氏一族は龍泉において早くから力のある窯主であった・」と記載されている。



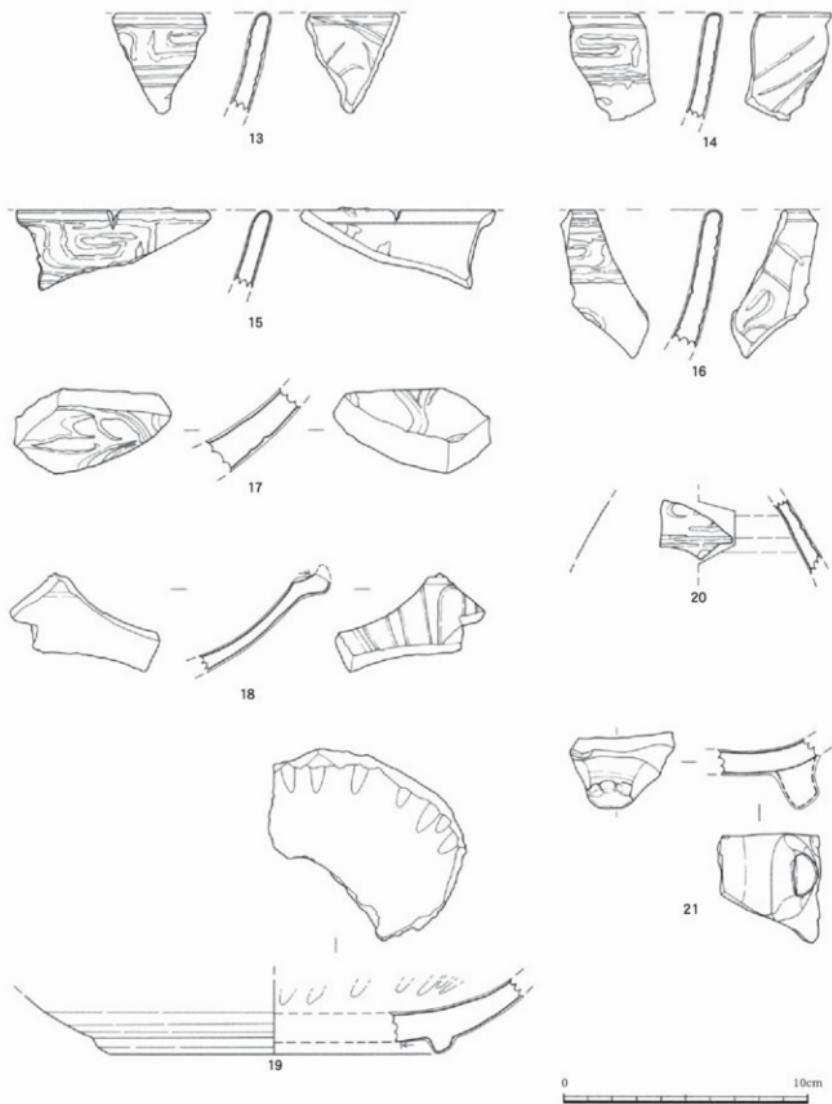
第30図 石積みSA27出土品② 青磁：1～12

第53表② 石積みSA27 青磁觀察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第31圖 図版25 13	口 縁 部	大 鉢	—	器形:直口口縁の大鉢。文様:外面口縁に篦彫りで時計回りの雷文がみられ、雷文直下に界線と刻花文を描いている。内面にも片切彫りの刻花文が描かれている。 素地:光沢のある淡灰白色の微粒子。釉色:淡緑色であるが、二次的な火熱を受けで微細な気泡痕や釉が爛れている。貫入はない。龍泉窯系。14c後半～15c中頃。	B-16 SA27 第8層
" " 14			—	器形: " 文様:外面口縁に篦彫りで雷文中央で時計回りから反転する雷文を描く、雷文直下に界線と刻花文を描いている。内面にも片切彫りの刻花文が描かれている。素地: " 釉色: " 貫入:なし。龍泉窯系。14c後半～15c中頃。	SA27 第5層a
" " 15			—	器形: " 文様: " 内面にも片切彫りの刻花文が描かれている。雷文の展開方法が上記14と一致する事などから同一個体とみられる。素地: " 釉色:淡緑色の釉は、二次的な火熱を受けで釉に気泡痕や溶けた釉の気泡が浮けて黒色となる。貫入:なし。龍泉窯系。14c後半～15c中頃。	B-16 SA26 栗石内 + B-16・17 SA27 第8層
" " 16	胴部	大 鉢	—	器形: " 文様:外面口縁に篦彫りの雷文を描ぐが展開手法は不明である。雷文直下に界線と刻花文を描いている。内面にも片切彫りの刻花文が描かれている。素地:光沢のある淡灰白色の微粒子。釉色:淡緑色で、貫入はない。龍泉窯系。14c後半～15c中頃。	B-16・17 SA27 第8層
" " 17			—	器形:直口口縁の大鉢の胴部。文様:内外面に篦彫りの刻花文を描いている。素地:光沢のある淡灰白色の微粒子。釉色:淡緑色。貫入:なし。龍泉窯系。14c後半～15c中頃。	SA27 第3層b
" " 18	鰐 縁 盤	口縁部	—	器形:鰐縁盤。文様:外面には文様はみられない。内面には幅広の篦(幅11.3mm)で蓮弁文を描く。素地:淡灰色の微粒子。釉色:淡緑色。両面に細かい貫入がみられる。龍泉窯系。14c後半～15c。	SA27 栗石内
" " 19	盤	底部	13.5	器形:鰐縁盤。高台分類aタイプ。文様:外面には文様はみられない。内面には丸彫り(幅6.2mm)で蓮弁文を描く。素地:淡灰白色的粗粒子で、微細な黒色鉱物が僅かに混入する。釉色:淡灰白色的失透釉で白濁する。施釉は内面から外底面まで掛かり、外底面の釉を搔き取っている。貫入はない。中国南部の窯。14c終末～15c。	SA27 第3層b
" " 20			—	器形:瓶の頸下部の破片。文様:外面には片切彫りによる二条の界線を施し、界線の上位と下位に刻花文を描く。素地:淡灰白色的微粒子。釉色:淡緑色。貫入:なし。龍泉窯系。14c後半～15c中頃。	B-16・17 SA27 栗石直上 覆土
" " 21	香 炉	底部	—	器形:大振りの三足(脚付)香炉。文様:外面の脚部は獸足で片切彫りによる指を二本継ぎに描いている。脚部近くに花弁形の陶土の貼り付けがみられる。素地:光沢のある灰白色的微粒子。釉色:濃緑色を両面に絶釉する。貫入:なし。龍泉窯系。14c後半～15c中頃。	SA27 栗石内

注 「-」:計測不可、「+」:接合の意



第31図 石積みSA27出土品③ 青磁：13～21

第54表 石積みSA27 白磁・青花・黒釉陶器出土状況

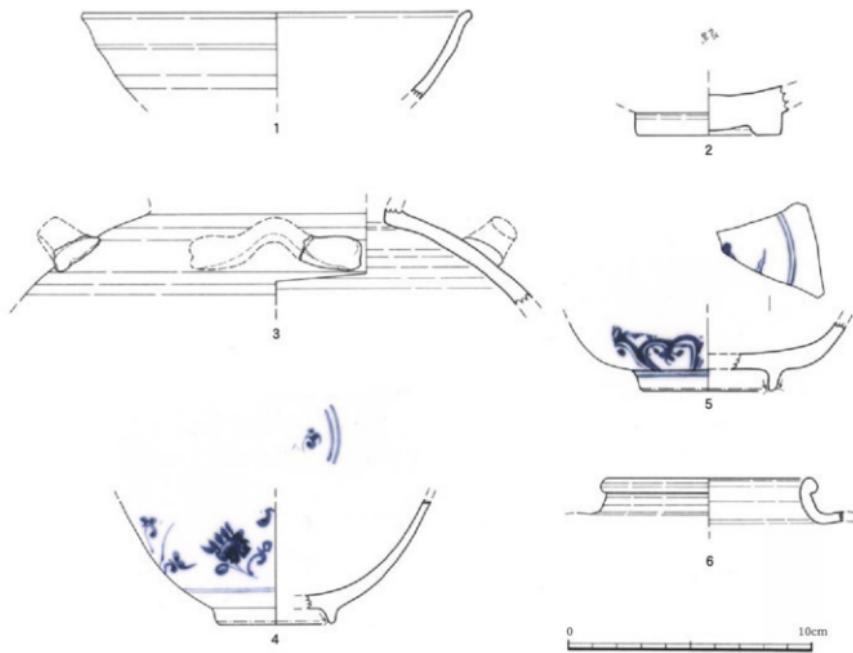
種類・器種・部位		層序	B-16-17					合計	
			SA27						
			栗石内	第1層a (北側覆土)	第3層a	第5層a	第6層		
白磁	碗	口縁部	外反					1	
		胸部		1				1	
		底部			1			1	
	皿	口縁部	内湾		1			1	
		外反				1		1	
		胸部		1				1	
合 計				2	1	1	1	7	
青花	碗	口縁部	直口		1			1	
		胸部		2				2	
		底部		1		1		2	
	皿	胸部			1			1	
		底部		1				1	
		瓶	口縁部				1	1	
合 計				5	1	0	1	10	
黒釉陶器	碗	胸部						2	
	茶入れ壺	口縁部		1				1	
		胸部					1	1	
合 計				1	0	0	0	3	
								4	

第55表 石積みSA27 白磁・青花・黒釉陶器観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・軸等)	出土地点 出土層	
第32図 図版26 1			外 反 口 縁 碗	16.0 — —	器形:外反口縁碗。輪廓成形が顕著で口縁部が外反する。文様:なし。素地:淡灰色の微粒子で、微細な気泡痕が多くみられる。釉色:淡灰白色の透明釉が両面にみられる。貫入:なし。福建省閩清窯。14c終末～15c初頭。	SA27 第6層
〃 〃 2	白 磁	底部	— — 5.8	器形:外反口縁碗の高台破片。高台疊付が幅広くなる所謂蛇の目高台の範疇にある。疊付の幅は5.0～9.4mmを測る。文様:見込みに不鮮明で小さな印花文を施している。素地:淡灰色の微粒子で、微細な気泡痕が多くみられる。釉色:内面にのみ淡灰白色の透明釉がみられる。貫入:内面に粗い貫入がみられる。福建省閩清窯。14c終末～15c初頭。	SA27 第3層a	
〃 〃 3		壺	胸部	— — —	器形:壺の頸下部の胴繋ぎ部分から破損した破片で、肩部に横位の把手が貼り付けられている。文様:なし。素地:灰色の微粒子で、微細な気泡痕が多くみられる。釉色:淡灰白色の釉が両面でみられる。貫入:なし。中国南部の窯。14c終末～15c。	SA27 栗石内
〃 〃 4		碗	底部	— — 4.6	器形:高台脇から緩やかに胴部に移行する碗。文様:外面胴部に宝相華唐草文と二条の界線を描く。内面には二重圓線と宝相華唐草文を描く。素地:淡灰白色の微粒子。釉色:淡灰白色の釉を両面施釉後に疊付と高台内面上部まで釉を搔き取って露胎とする。貫入:なし。景德鎮窯系。15c中頃～15c後半。	SA27 栗石内
〃 〃 5	青 花	壺	底部	— — 5.2	器形:高台脇から丸味を強くして胴部に移行する碗。文様:外面胴部に唐草文の一部とみられる文様とラマ式蓮弁と弁内に垂下五葉文を吳須で描いている。高台脇には界線を二条描く。内面には二重圓線と草花文とみられる文様を描いている。素地:淡灰白色的微粒子。釉色:淡灰白色的釉を両面施釉後に疊付の釉を搔き取って露胎とする。貫入:なし。景德鎮窯系。16c前半～16c中頃。	SA27 栗石内
〃 〃 6	黒 釉 陶 器	茶 入 れ 壺	口縁部	8.8 — —	器形:小さな玉縁を造る怒り肩の茶入壺。文様:なし。素地:茶紫色の細粒子で、粗細な石英を多量に含む。釉色:茶褐色の釉を両面に施す。貫入:なし。中国南部の窯。時代不詳。	SA27 栗石内

注「-」:計測不可



第32図 石積みSA27出土品④ 白磁：1～3、青花：4・5、黒釉陶器：6

第56表① 石積みSA27 中国産褐釉陶器出土状況

器種・部位	層序	B-16・17 SA27							
		第1層 覆土	栗石直上 覆土	栗石内	栗石内 表採	第1層 ～第3層a 北側覆土 (植栽穴)	第1層a (北側覆土)	第1層b (客土)	第2層
		方形							
壺	口縁部	方形							
	逆L字			2					
	形状不明			1					
	耳		1	1					
	頸部			3	1				
	肩部		1	1					
	把手			1		1			
	胴部	15	62	219	9	2	3	1	2
	底部		1	1					
合計		15	65	229	10	3	3	1	2

第56表(2) 石積みSA27 中国産褐釉陶器出土状況

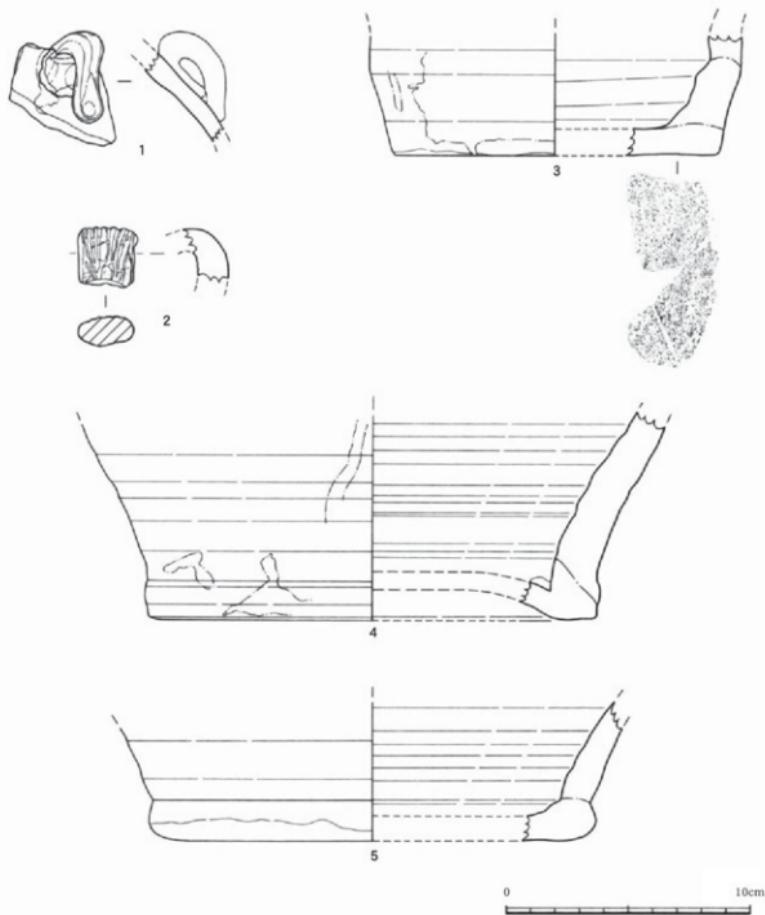
器種・部位	層序	B-16-17 SA27								合計
		第3層a	第3層b	第3層b (攤点)	第4層b	第5層a	第6層	第7層	第8層	
		方形	逆L字	形状不明	耳	頸部	肩部	把手	胸部	
壺	口縁部	16	57	1	14	25	101	6	80	613
		1							1	4
	底部									
	耳									
	頸部									
	肩部									
	把手									
合 計		17	60	1	15	26	101	7	82	637

第57表 石積みSA27 中国産褐釉陶器観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層	
第33図 図版27 1		把手	—	器形:怒り肩の壺の把手とみられる。文様:なし。把手は縦位方向に右側に傾いた状態で縦に貼り付けられ解剖が生じている。器面調整:両面とも釉で覆わされて判然としないが、裏面には把手を貼り付けた際の指圧痕がみられる。素地:灰褐色の粗粒子で、微細な石英が多く混入する。色調:二次的な火熱を受けて微細な気泡痕が多くみられる。釉本来の色調は失われ白濁している。釉は両面に施釉されている。焼成:他と比較して脆い。中国南部の窯。14c~15c。	SA27 第1層~第3層a北側覆土(植栽穴)	
			—	器形:ナデ肩の壺の把手。文様:把手の外側に獅子頭の鉗と前足を0.8~1.5mm幅の棒状の工具で線彫りする。把手の厚みは11.8mm、幅22.5~24.0mmを測る。把手前面は紐状の陶土を折り曲げた際に発生した横位方向の皺(皺の総長:0.2~0.9mm)が斑状にみられる。器面調整:外面はナデ調整で、裏面はナデ調整と指圧痕が釉上から観察できる。素地:淡灰色の細粒子で、粗い(石英、黒色、茶褐色)鉱物が少量ながら混入する。色調:黄茶色の釉が両面に施されている。焼成:堅緻。中国南部の窯。14c~15c。		
			—			
〃 2		壺	—	器形:厚手の壺。底面と胴部を貼り付けて製作する。文様:外底面に1.28mm幅の沈線が一条みられる。器面調整:外面は輪轂痕を主体にナデが施されている。外底面は微弱で起伏のある平坦面で調整方法は不明。内面は粗雑な輪轂調整がみられる。素地:淡橙白色の粗粒子で、粗細な石英を主体に粗い黒色や茶褐色の鉱物が多量に混入する。色調:茶褐色の釉を外面の底部近くまで施しているが雑な釉掛けである。内底面にも釉が垂れている。焼成:堅緻。中国南部の窯。14c~15c。	SA27 栗石内 窯石直上 覆土	
			13.1			
〃 3		底部	—	器形:怒り肩の壺の底部。文様:なし。器面調整:釉上からの観察では、両面とも輪轂痕が顕著にみられる。外底面にも釉が施されている。素地:茶紫色の細粒子で、粗細な石英が少量化される。釉に茶褐色の鉱物がみられる。色調:黄茶色の釉を外面から底面まで施している。焼成:堅緻。中国南部の窯。15c~16c。	SA27 栗石直上 覆土	
			18.4			
〃 4		—"—"18.2	—"—"18.2	器形: 壺部に外底面を貼り付けて製作している。外底面は上位に大きく窪ませている為、外周縁辺部に疊付(幅19.0mm)となるように成形成する。疊付の部分に砂船土目の目痕がみられる。文様:なし。器面調整:釉上からの観察では、両面とも輪轂痕であるが内面の輪轂痕は起伏が著しい。素地:淡灰色の細粒子で、粗細な石英を多く含んでいる。色調:黄茶色の釉を外面から底面まで施しているが、二次的な火熱を受けて釉が内面では白色に変色している。焼成:堅緻。中国南部の窯。15c~16c。	SA27 栗石内 窯石直上 覆土	
〃 5		—"—"18.2	—"—"18.2	器形: 壺部に外底面を貼り付けて製作している。外底面は上位に大きく窪ませている為、外周縁辺部に疊付(幅19.0mm)となるように成形成する。疊付の部分に砂船土目の目痕がみられる。文様:なし。器面調整:釉上からの観察では、両面とも輪轂痕であるが内面の輪轂痕は起伏が著しい。素地:淡灰色の細粒子で、粗細な石英を多く含んでいる。色調:黄茶色の釉を外面から底面まで施しているが、二次的な火熱を受けて釉が内面では白色に変色している。焼成:堅緻。中国南部の窯。15c~16c。	SA27 第3層a	

注 「—」:計測不可



第33図 石積みSA27出土品⑤ 中国産褐釉陶器：1～5

第58表 石積みSA27 タイ産土器(半練)・タイ産褐釉陶器・中世陶器・沖縄産施釉陶器・円盤状製品出土状況

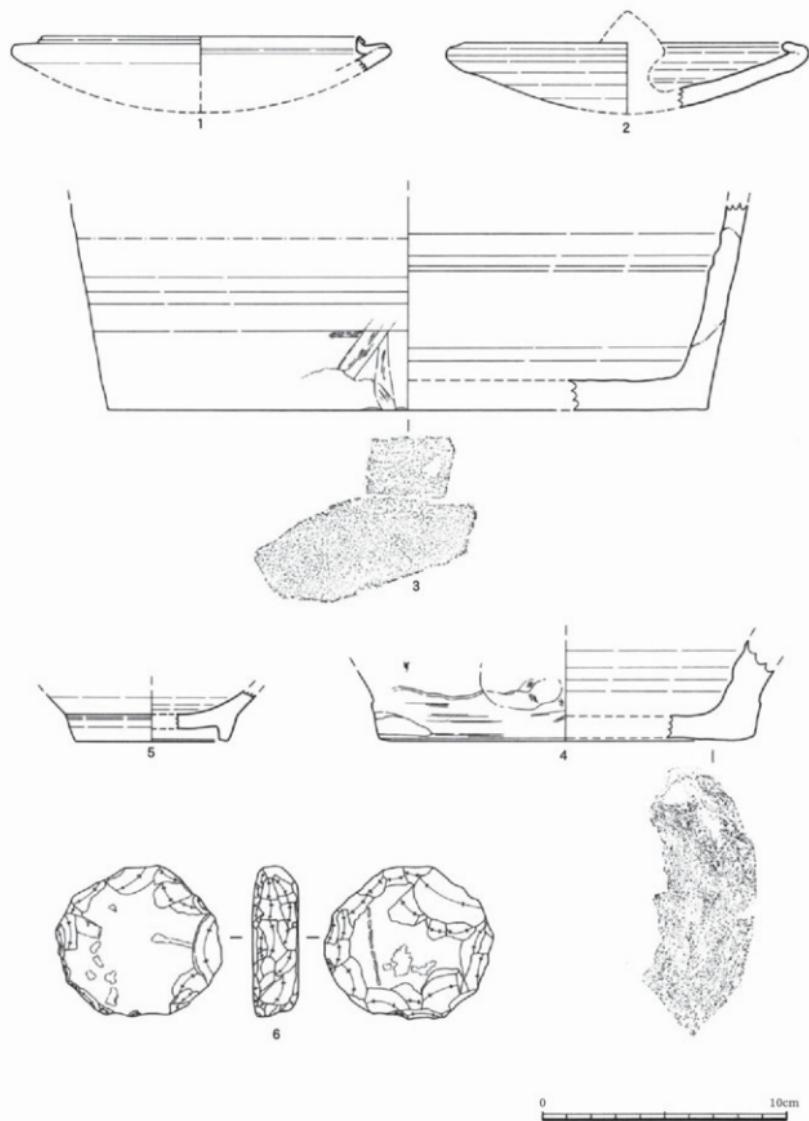
種類・器種・部位		層序											合計
		第1層 覆石上	栗石内	表探内	栗 ～第3層a 北側覆土 (植松穴)	第2層 ～第3層a	第3層 a	第4層 b	第5層 a	第6層	第7層	第8層	
タイ産土器 (半練)	蓋	II類	1										1
	蓋端部	IV類	1										1
	合計	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
タイ産 褐釉陶器	口縁部											1	1
	頸部				3	1		1			1		1
	肩部				3								6
	胴部		1	14	34	1	2	1	8	11	2	10	11
	底部				3	1	1					4	4
	合計	1	14	43	3	3	1	9	11	2	11	18	127
中世陶器	蓋												2
	底部												2
	合計	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2
沖縄産 施釉陶器	碗												1
	鍋												1
	鉢												1
	急須												5
	器種不明 部位不明				1								1
	合計	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	2	10
円盤状製品	具												1
	合計	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1

第59表 石積みSA27 タイ産土器(半練)・タイ産褐釉陶器・中世陶器・沖縄産施釉陶器・円盤状製品観察一覧

単位:cm

押出番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第34図 図版28 1	タイ 産 土 器 (半 練)	蓋 II 類	端部径 15.6 高さ 1.5 (4.2)	器形: II類の範囲に含めた落とし蓋。蓋端部を内側に折り返して内面に肥厚帯を造り、肥厚帯端部を上方に強く突出させるため、縱断面が歪な「U」字状の肥厚となる。器面調整: 外器面に微弱な起伏や凹面の痕跡が見えることから削り削りと指圧を施した後に方向が一定しない指ナメを加えて凹部を消している。内面は雑なナデナと擦痕がみられる。素地: 灰白色の細粒子で、粗繊な凹部(茶褐色、石英)を多量に含んでいる。色調: 淡橙白色。焼成: 塗装。	B-14 SA27 栗石内
				器形: IV類の範囲にある落とし蓋。蓋端部を内側に折り返して内面の線上部を平坦形成した肥厚帯を造る。縱断面が「フ」の字状の肥厚となる。器面調整: 外面には器形に併せて横位の粗底と副毛目様の擦痕を施した後に同種の調整方法を斜位や縦位に雜に施して仕上げている。内面は丁寧な回転擦痕がみられる。素地: 淡灰白色の細粒子で、粗繊な凹部(茶褐色、石英、黒色)を多量に含んでいる。色調: 淡橙白色を主体とするが、外側(蓋下部)が部分的に焼けて黒色を帯びている。焼成: 塗装。15cm~16cm	SA27 第1層 栗土内 + SA27 栗石内
## 2	タイ 産 土 器 (半 練)	蓋 IV 類	端部径 14.8 高さ 1.5 (4.2)	器形: IV類の範囲にある落とし蓋。蓋端部を内側に折り返して内面の線上部を平坦形成した肥厚帯を造る。縱断面が「フ」の字状の肥厚となる。器面調整: 外面には器形に併せて横位の粗底と副毛目様の擦痕を施した後に同種の調整方法を斜位や縦位に雜に施して仕上げている。内面は丁寧な回転擦痕がみられる。素地: 淡灰白色の細粒子で、粗繊な凹部(茶褐色、石英、黒色)を多量に含んでいる。色調: 淡橙白色を主体とするが、外側(蓋下部)が部分的に焼けて黒色を帯びている。焼成: 塗装。15cm~16cm	SA27 第1層 栗土内 + SA27 栗石内
				器形: 底部から内側に強く閉じ気味に直線的に立ち上がる底部破片。底面に陶土の雜足による繩引きが強烈にみられる。器面調整: 内面は底部近くまでナデを施し、胴部には機械擦痕がみられる。外底面は平坦な面となっているが難明な布目底痕とみられるものが途切れかねない観察である。内面は雑な割り加えられ陶土の雜足し痕が堅調である。内底面は回転擦痕を主体と指ナデがみられる。素地: 淡紫灰色~淡茶色を帯びた細粒子で、粗繊な石英を多く含み、稀に粗い黒色の凹部がみられる。釉色: 外面にのみ茶紫褐色の釉が胴下部に施釉。シーサッチャナライ層、15cm後半~16cm前半。	SA27 栗石内 + SA26 西側覆土
## 3	褐 釉 陶 器 タイ 産 土 器	蓋	底部	器形: 底面から立ち上がりで一端くびれて外側に閉じ気味に開く蓋の底部。器面調整: 立ち上がりの部分には難な難削りとナデにより陶土がくびれの部分に食みだしている。器面調整: 外底面は歪な歪面で剝離削りや指圧痕が指ナデや擦痕でナデしてある。内面は難な機械調整が難看である。内底面は水引きによる回転擦痕がみられる。素地: 淡紫灰色~灰色を帯びた細粒子で、粗い石英を多く含み、稀に粗い黒色の凹部がみられる。釉色: 外面から外底面まで淡茶色の釉を施す。	SA27 栗石内 + SA26 西側覆土
				器形: 底面から立ち上がりで一端くびれて外側に閉じ気味に開く蓋の底部。器面調整: 立ち上がりの部分には難な難削りとナデにより陶土がくびれの部分に食みだしている。器面調整: 外底面は歪な歪面で剝離削りや指圧痕が指ナデや擦痕でナデしてある。内面は難な機械調整が難看である。内底面は水引きによる回転擦痕がみられる。素地: 淡紫灰色~灰色を帯びた細粒子で、粗い石英を多く含み、稀に粗い黒色の凹部がみられる。釉色: 外面から外底面まで淡茶色の釉を施す。	SA27 栗石内 表探
## 4	中 世 陶 器	蓋	底部	器形: 底面からの立ち上がりで一端くびれて外側に閉じ気味に開く蓋の底部。器面調整: 立ち上がりの部分には難な難削りとナデにより陶土がくびれの部分に食みだしている。器面調整: 外底面は歪な歪面で剝離削りや指圧痕が指ナデや擦痕でナデしてある。内面は難な機械調整が難看である。内底面は水引きによる回転擦痕がみられる。素地: 淡紫灰色~灰色を帯びた細粒子で、粗い石英を多く含み、稀に粗い黒色の凹部がみられる。釉色: 外面から外底面まで淡茶色の釉を施す。	SA27 栗石内 表探
				器形: 高台脇から若干丸味を持って外側に開く碗。器面調整: 高台外面には回転削りを施し、高台脇から丁寧な回転擦痕である。高台内面から外底面には回転削りによる削り抜きで外底面を平坦に仕上げる。内面は水引きによる回転擦痕がみられる。素地: 淡紫灰色の細粒子で、微細な石英を少量含み、稀に粗い茶褐色の物質や細かい黒色物質がみられる。色調: 外面は淡灰色で内面が灰褐色を帯びている。サイズ: 幅: 6.1cm、横: 6.8cm、厚さ: 1.9cm、重量: 83.8g。	SA27 第3層a
## 5	施 釉 陶 器 沖 縄 産	碗	底部	大和系灰色の平瓦を円盤状に加工した製品である。打削調整は主に外側(凸面)から実施されている。内面(凹面)は剥離痕が全体的に摩耗し磨耗は確認できない。素地: 灰白色の細粒子で、微細な石英や石灰質微細砂を少量含み、稀に粗い茶褐色の物質や細かい黒色物質がみられる。色調: 外面は淡灰色で内面が灰褐色を帯びている。サイズ: 幅: 6.1cm、横: 6.8cm、厚さ: 1.9cm、重量: 83.8g。	SA27 第4層b
## 6	圓 盤 狀 製 品				

注: 「-」: 計測不可、(): 推定、(+): 接合の意



第34図 石積みSA27出土品⑥ タイ産土器（半練）：1・2、タイ産褐釉陶器：3、中世陶器：4、沖縄産施釉陶器：5、円盤状製品：6

第60表 石積みSA27 金属製品出土状況

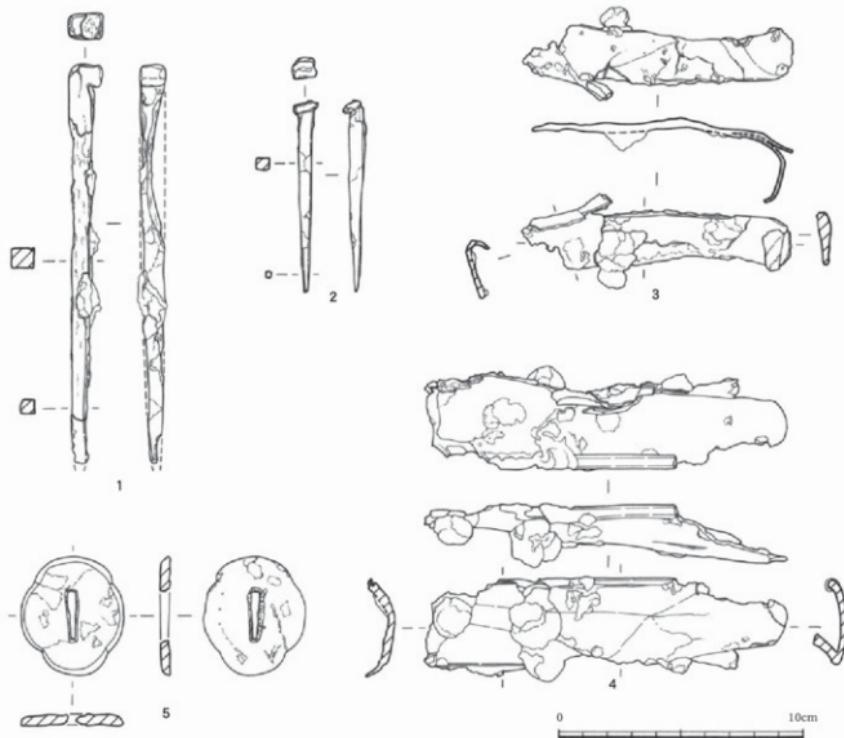
分類・種類			層序										合計	
			B-16・17 SA27											
			第1層 土層	栗石 覆土 直上	栗石 内	第1層a (北側 覆土)	第3層 a	第4層 b	第5層 a	第6層	第7層	第8層		
工具類・生産用具	丸釘	完形	中	鉄		1							1	
		完形	大	鉄		1							1	
		中	鉄		2	6			1	3	1	3	3	
		先端部欠損	中	鉄		1	1						1	
		サイズ不明												
	角釘	頭部欠損	中	鉄	1	4			2	1			8	
		先端+頭部欠損	中	鉄	5	13		1		5			24	
		サイズ不明			1								1	
	調度品鍍金具			青銅			2						2	
用生活具活	鍼	口縫部		鉄					1				1	
		胸部					1						1	
武具	鎖帷子		鉄						2				2	
	覆輪		青銅		2				1				3	
	障子板		鉄						1				1	
武器	切羽		青銅	1									1	
	薙刀の蛭巻		鉄						1				1	
分類不明	砲弾片		青銅			1							1	
	用途不明		鉄	1	7	1	1	1	1				11	
			青銅		2	4			3				9	
合計					2	11	41	2	3	11	12	1	4	89

注 釘のサイズは、大：5寸半以上(15.75cm以上)、中：1寸半～5寸まで(3.75cm～15.75cm未満)

第61表 石積みSA27 金属製品観察一覧

単位:mm/g

捕団番号 図版番号 遺物番号	分類	名称・仮称	材質	残存長(縦) 残存幅(横)	残存最大厚 残存最小厚 残存重量	観察事項				出土地点 出土層
第35図 図版29 1	工具類 2	釘	鉄 製品	163.0 9.51	9.78 5.63 40.1	先端と身部を欠いた皆折釘。全体的に鋸による解剖れや鋸瘤がみられる。特に鋸による身部の破損が著しく地金まで浸食されている。頭部：縦1.57mm、横9.55mm。				B-16・17 SA27 栗石内
				77.5 5.38	5.58 1.82 9.5	ほぼ完形の皆折釘。頭部の屈曲部に解剖れが生じている。これは身部上部と頭部製作時に身部の屈曲部分が斜位に成形され、頭部を折り曲げる際に頭部と身の位置がズレたために解剖れが生じるのである。欠陥商品とみることできる。頭部：縦7.10mm、横9.44mm。				B-16・17 SA27 栗石内
工具類 3	生産用具	調 度 品 鍍 金 具	青 銅 製 品	31.0 11.0	2.20 0.45 30.0	板状に割れた青銅製品の調度品などの鍍金具とみられる。上辺の左端近くを内側に折り曲げている。鉄鋒の付着と大きな鋸瘤がみられる。鋸による影響で身の一部が剥離する。				SA27 第3層a
				41.0 147.9	4.69 0.90 89.9	上記と同一固体であるが接合ができなかつた青銅製の調度品などの鍍金具とみられる。上辺に覆輪を取り付けている。下辺は内側に折り曲げている。二次的な火熱を受けて青銅の一部が溶けてケロ卜状となる。表面には鉄鋒の付着と大きな鋸瘤がみられる。鋸による影響で身の一部が剥離する。				SA27 第3層a
工具類 4	武器	切 羽	青 銅 製 品	48.5 42.1	3.05 2.76 34.8	完形の木瓜形の切羽。鋒部成形の切羽で裏面の鋒部は斜位となっていることから裏面から溶解した青銅を鋒部に流し込んで製作されている。全体的に錆色で覆われている。刃の裏の入る茎孔は短軸上部が44.35mm、短軸下部で1.93mm、長軸は19.96mmを測った。				B-16・17 SA27 第1層覆土



第35図 石積みSA27出土品⑦ 金属製品：1～5

第62表 石積みSA27二次的火熱溶解銭貨

錢名	片数	重量 (g)	残存状況	出土層
天聖元寶(北宋1023年初鋤)	1枚	3.73	完形	B-16・17 SA27栗石内表採
治平元寶(北宋1064年初鋤)	1片	1.52	「平」・「元」の二字が残存	B-16・17 SA27第6層
元豐通寶(北宋1078年初鋤) or 元祐通寶(北宋1086年初鋤)	1片	1.05	「元」の一字が残存	B-16・17 SA27第8層
洪武通寶(明1368年初鋤)	1枚	3.26	完形	B-16・17 SA27栗石内表採
	1枚	3.78	完形	B-16・17 SA27 第7層
永樂通寶(明1408年初鋤)	1枚	3.97	完形	B-16・17 SA27栗石内
元祐通寶(中世末期～近世初頭)	1片	2.28	「祐」・「通」・「寶」の三字が残存	B-16・17 SA27第8層
開元通寶(中世末期～近世初頭)	1枚	2.77	完形	B-16・17 栗石内表採
加热溶解の銭貨の塊	1片	1246.84	-	B-16・17 SA27栗石内
合計	9			

第63表 石積みSA27 ガラス玉・ガラス製品出土状況

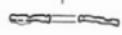
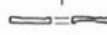
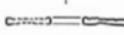
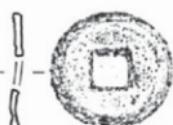
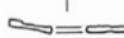
種類・分類		層序				B-16・17 SA27			合計
		栗石直上覆土		栗石内		栗石内灰褐色土層			
ガラス玉	II類	青色		2					2
		濃緑色			1				1
合計				2	1	0		0	3
ガラス製品	浴解したガラスの塊						1		1
	瓶							1	1
	板ガラス				1				1
合計				0	1	1		1	3

第64表① 石積みSA27 錢貨觀察一覧

単位:mm/g

拂回番号 図版番号 遺物番号	錢種 銅 鑄 年	新 造 種 類	初 鋤 年	素 材	読 み 方	状 態	書 体	肉 郭 外 径	肉 郭 内 径	方 穿	断面計測部位			重量	観察事項	出土地点 出土層
											A B	C D	E F	①	②	③
第36図 図版30 1	天聖元寶 公銅錢 ?	北宋 1023 年	銅 錢	回 読	完 形	真 書	24.02 25.06	20.81 20.45	7.2 6.93	1.37	0.71	1.13	3.73	完形の天聖元寶。面と背の内郭の鋤型のズレが大きい。鋤の横断面が変形し至とな る。背よりも面で緑青で覆われ、字款の部分には緑青による微細な瘤状の隆起がみられ る。	B-16 SA27 栗石内 表探	
# # 2	治平元寶 公銅錢	北宋 1064 年	銅 錢	回 読	破 損	篆 書	—	—	—	1.08	0.57	1.11	1.52	1/2近くが欠落、字款は「平」「元」の二字 が残存。鋤の厚みは内郭で1mm、内郭と 外郭の間が0.5mmと極端に薄い。内郭の 幅は面(内郭幅:2.09~2.24mm)よりも背で 幅広(2.24~3.74mm)となる。両面とも緑青 が部分的にみられる。	B-16・17 SA27 第6層	
# # 3	洪武通寶 模銅錢	明 1368 年	銅 錢	対 読	完 形	—	21.45 21.6	16.5 18.11	4.42 4.86	1.33	0.56	1.05	3.26	完形の洪武通寶。人為的な穿たれたとみら れる小さな孔が二箇所対角線上に存在す る。左斜め上の孔は歪な円形で、孔のサイ ズは長軸:1.62mm、短軸:1.38mmを測る。右 斜め下の孔は歪な扁橢円形で、孔のサイ ズは長軸:1.68mm、短軸:1.47mmを測った。 鋤の断面が面側に緩やかに溝曲する。両 面に緑青がみられ、特に面に集中し、字款 周辺が著しい。	B-16 SA27 栗石内 表探	
# # 4	洪武通寶 公銅錢	明 1368 年	銅 錢	対 読	完 形	—	23.32 23.05	17.53 17.54	5.93 6.01	1.57	0.62	1.29	3.78	完形の洪武通寶。内郭の幅が他の洪武通 寶よりも幅広(面:2.69~3.19mm、背:3.97 ~4.54mm)である。字款は深く鋤削されて いる。面・背とも緑青ががみられ、面において は内郭の一部が微細なワロド状となる。 背には鉄筋や粗い石英粒が付着する。	B-16 SA27 第7層	
# # 5	永樂通寶 公銅錢	明 1408 年	銅 錢	対 読	完 形	—	24.77 24.92	20.35 20.21	5.33 5.48	1.79	1.03	1.38	3.97	完形の永樂通寶。字款は「永・」と「寶」の二 字が緑青で覆われている。「通・」と「樂」の二 字が判読できる。背の内郭は慣れ氣味で 不鮮明である。二次的な火熱や緑青の影響 で微細なアーヴィング状となる。	B-16・17 SA27 栗石内	
# # 6	元祐通寶 模銅錢	近世 中期 初頭 ~ 末期	銅 錢	回 読	破 損	不明	—	—	6.23	1.12	1.03	1.17	2.28	1/4弱が欠落した鋤。面・背とも緑青によ る浸食などにより裏面の保持が悪く、脆弱で ある。面の字款も緑青の影響で慣れてい る。「祐・」と「通」の二字が辛口で判読でき る。「寶」の字款は判読できない。	B-16・17 SA27 第8層	
# # 7	開元通寶 模銅錢	近世 中期 初頭 ~ 末期	銅 錢	対 読	完 形	—	23.46 23.49	19.03 19.37	7.18 7.01	1.02	0.76	0.94	2.77	開元通寶(唐、845年初鋤造)の模銅錢。面 の字款は完全に消えてしまつて、鋤 型のズレや字款の鋤削も浅く不鮮明であ る。背は内郭が無く、無郭のままである。完 全なる偽金である。	B-16 SA27 栗石内 表探	
第37図 図版30 8	火熟溶解 の 錢貨の塊	不明	不明	銅 錢	不明	完 形 / 破 損	不明	128.0 152.0	—	—	81.03	—	—	1246.84	錢貨が二次的な火熱を受けて溶解して固 まつた塊。参考までに錢貨の塊を1 洪武通寶(明、1368年初鋤造)の重量4.5gを 基準にして、1246.84gを4.5gで割ると、洪 武通寶277枚相当分の重量であることが 三つ確認できる。錢の重なり具合から孔に 繩などの紐を通して袋や容器に保管され た状態で火災などにより二次的に火熱を受 けて溶解・変形したようである。表面には石 灰岩の細片が緑青などで付着する。裏面 には鉄釘の一部や鉄筋が付着する。	B-16・17 SA27 栗石内

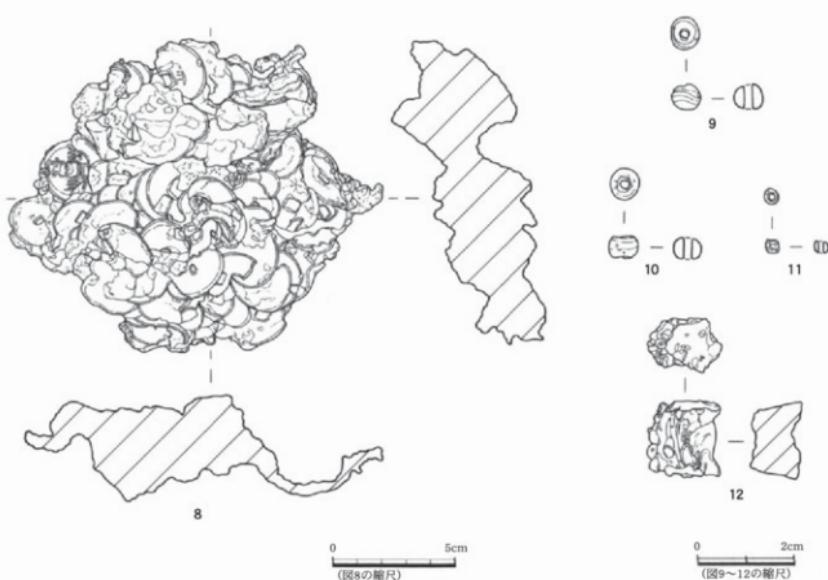
注:「-」:計測不可



第36図 石積みSA27出土品⑧ 錢貨：1～7

第64表② 石積みSA27 ガラス製品(玉・溶解したガラスの塊)観察一覧

擲出番号 図版番号 遺物番号	形状 分類	色調	素材	残存 状況	2次的な加 熱の有無	観察事項	出土地点 出土層
第37図 図版30 9		青 色	ガ ラ ス	良 好	無	二次的な火熱を受けて玉の上部から下部が変形し、面が取られたような状態となる。気泡痕が表面の上部に集中する。巻き付け技法で上位と下位の孔周縁部に微細な剥離痕や気泡痕がみられる。サイズ:長軸6.43mm、短軸6.17mm、厚さ5.31mm、重量0.34g。孔径:最大1.66mm、最小1.61mm。製法:まきつけ。	B-16 SA27 直上覆土
〃 〃 10	II 類	濃 緑 色	ガ ラ ス	良 好	無	二次的な火熱を受けて玉の上端部と下端部が破損する。全体的に火熱により微細な晴れ目が発生している。上下の孔の破損した面から観察するとガラスが層状に重なっていることから巻き付け技法であることが判明した。下部サイズ:長軸6.25mm、短軸6.20mm、厚さ4.19mm、重量0.23g。孔径:最大2.26mm、最小2.20mm。製法:まきつけ。	B-16 SA27 栗石内
〃 〃 11		青 色	ガ ラ ス	良 好	無	側面観から観察すると溶解したガラスをそのまま巻き付け状態でガラスを切り離して製作している。分析を必要とするが、表面には銀色に輝く付着物がみられることがからガラス素材に混和した苛性ソーダなどの成分が表面に現れたものとみられる。サイズ:長軸2.88mm、短軸3.01mm、厚さ2.46mm、重量0.02g。孔径:最大1.66mm、最小1.57mm。製法:まきつけ。	B-16 SA27 栗石内
〃 〃 12	ラ ス の 塊	溶 解 し た ガ ラ ス	—	ガ ラ ス	—	紐などで連結されたガラス小玉が二次的な火熱を受けて溶解して再凝固した塊である。小玉は大半が溶けて灰褐色に変色しているが、僅かに緑色を帯びた玉もみられる。サイズ:縦長16.12mm、短軸13.36mm、厚さ8.72mm。重量3.11g。	B-16 SA27 栗石内 灰褐色 土層

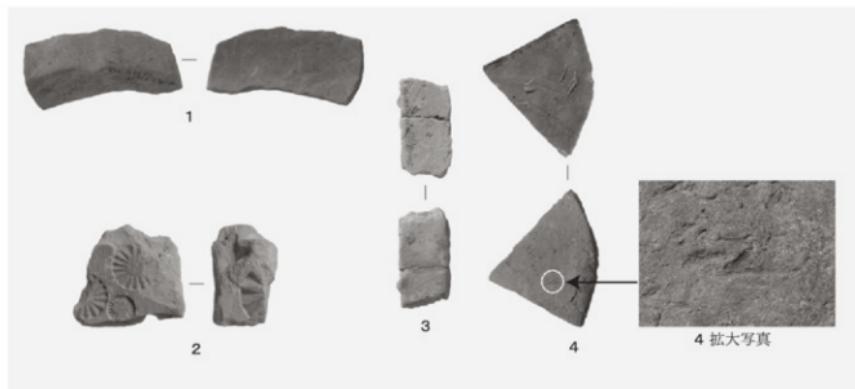


第37図 石積みSA27出土品⑨ 溶解銭貨の塊：8、ガラス玉：9～11、溶解したガラスの塊：12

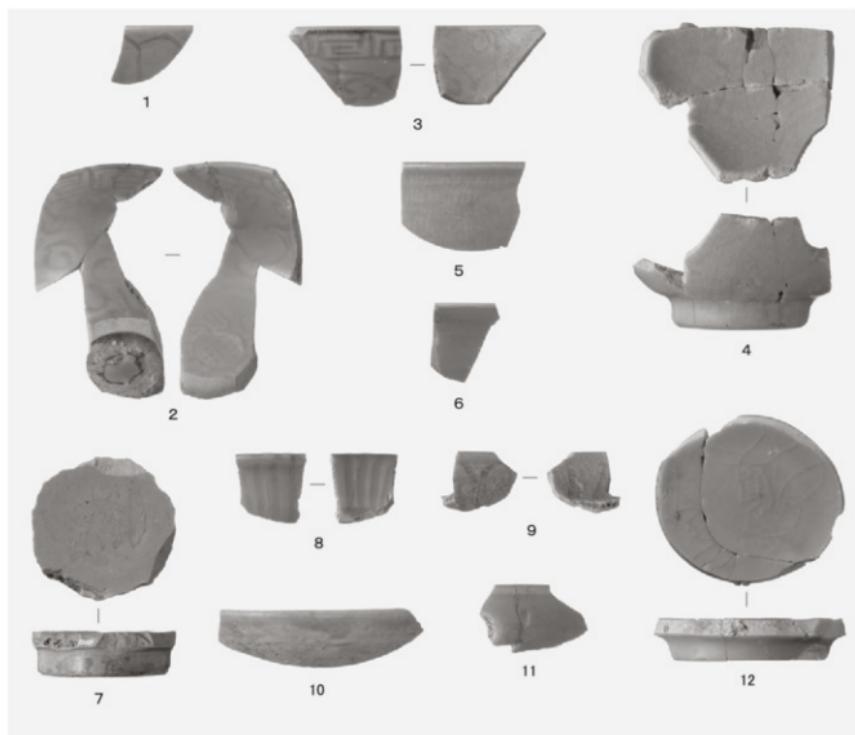
第65表 石積みSA27 出土遺物状況(図版外)

種類・器種・部位			層序								合計			
			B-16-17 SA27		第1層 栗石 覆土 直上	栗石 内	第1層 ～第3層a 北側覆土 (植栽穴)	第1層a (北側 覆土)	第3層a	第3層b	第4層b	第5層a	第6層	
陶質土器	器種不明	部位不明										1	1	
		合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	
屋瓦	高麗系	丸瓦	灰色	漆喰無し		3	4	1		1	3	12		
		丸瓦	褐色			4	4	1	2			11		
		平瓦	灰色	漆喰無し			1					1		
		平瓦	灰色	漆喰無し		5	29	3	1		3	41		
		丸瓦	褐色			1						1		
	大和(古)	丸瓦	灰色	漆喰無し			7	1		1		9		
		平瓦				3	14			3		20		
	大和	丸瓦	灰色	漆喰有り(片面)				1				1		
		平瓦	灰色	漆喰無し			1					1		
	明朝系	軒平	赤色	漆喰有り(片面)				1				1		
		丸瓦	灰色	漆喰有り(片面)			3	1				4		
		丸瓦	赤色	漆喰無し			15	2	3			20		
		平瓦	灰色	漆喰有り(片面)			5	2				7		
		平瓦	灰色	漆喰有り(片面)			10	2				12		
		平瓦	灰色	漆喰有り(片面)		1	7					8		
		平瓦	褐色	漆喰無し			4			2	6	6		
		平瓦	褐色	漆喰無し			7					7		
	博瓦	IV類(煉瓦)	灰色	漆喰有り(片面)			2	5				7		
		IV類(煉瓦)	赤色	漆喰無し (片面、セメント付着)		2	11	13				27		
		IV類(煉瓦)	赤色	漆喰無し			3	26	3	3		35		
		合計		1	16	67	99	14	27	0	1	10	3	238
		III類	形狀不明a	灰色	漆喰無し 角1 角無し			1					1	
		III類	形狀不明b	赤色	漆喰無し (セメント付着)			1					1	
		IV類(煉瓦)	赤色	漆喰無し 角無し			1					1		
	合計			0	0	0	5	0	0	0	0	0	6	
本土產 磁器	印判染付・ 印刷	皿	口縁部								h. I	1		
	近現	器種不明	胴部			1						1		
合計				0	0	1	0	0	0	0	0	1	2	
沖繩產 無釉陶器	壺or甕 器種不明	胴部				1			1			1	3	
合計				0	0	1	0	0	0	1	0	0	4	
石器	用途不明	砂岩(北部地城) 細粒砂岩(ニーピ)					1					1	2	
合計				0	2	0	2	0	0	0	0	0	5	
石材		細粒砂岩(ニーピ) 石灰岩		6	10	2		2	3	6	6	35		
自然石		河原石		1			1	1				1		
合計				0	7	10	3	1	2	0	3	6	38	

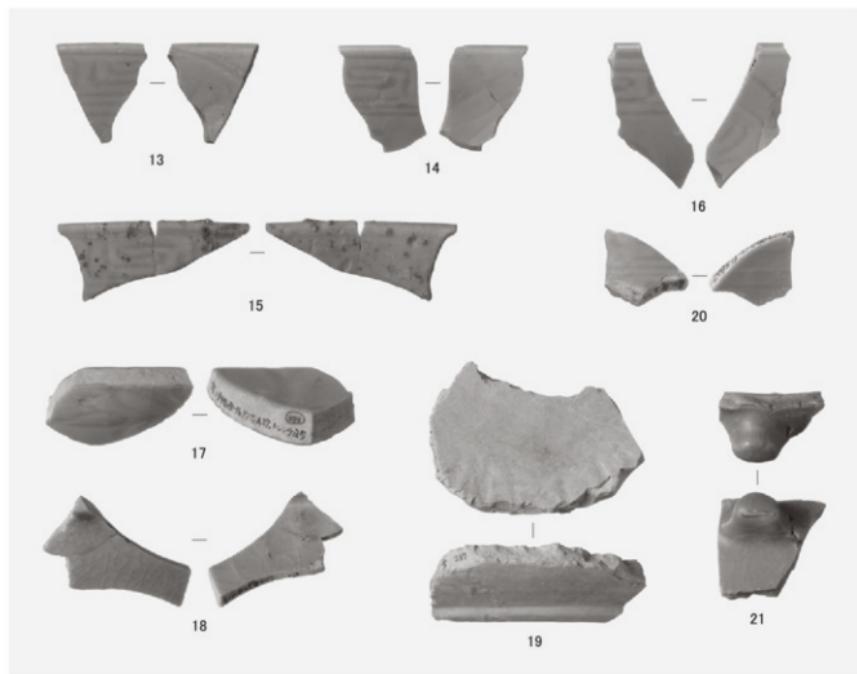
注 本土產磁器 印判染付:印判 [h:スタンプ]



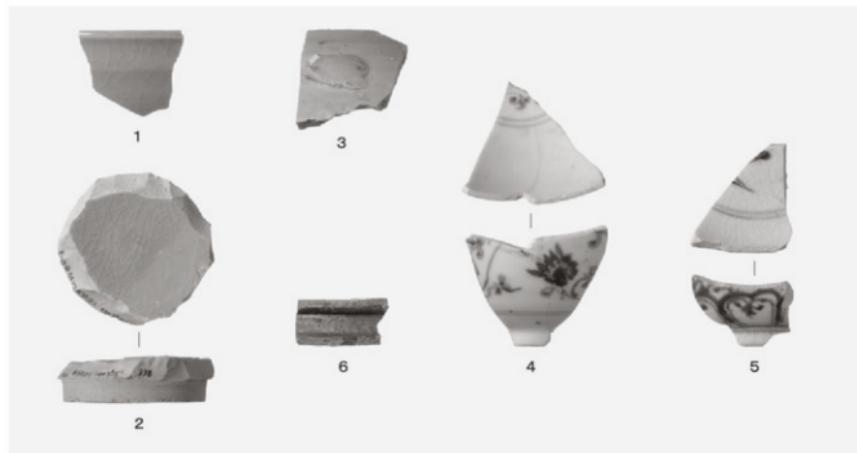
図版23 石積みSA27出土品① 土器：1、瓦質土器：2～4



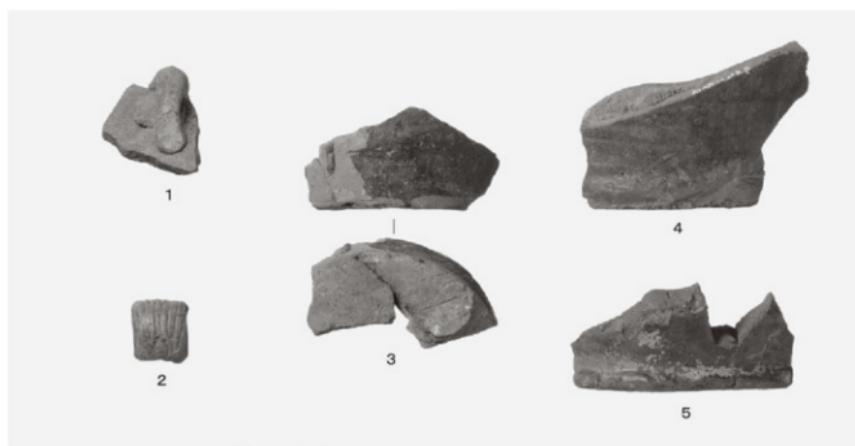
図版24 石積みSA27出土品② 青磁：1～12



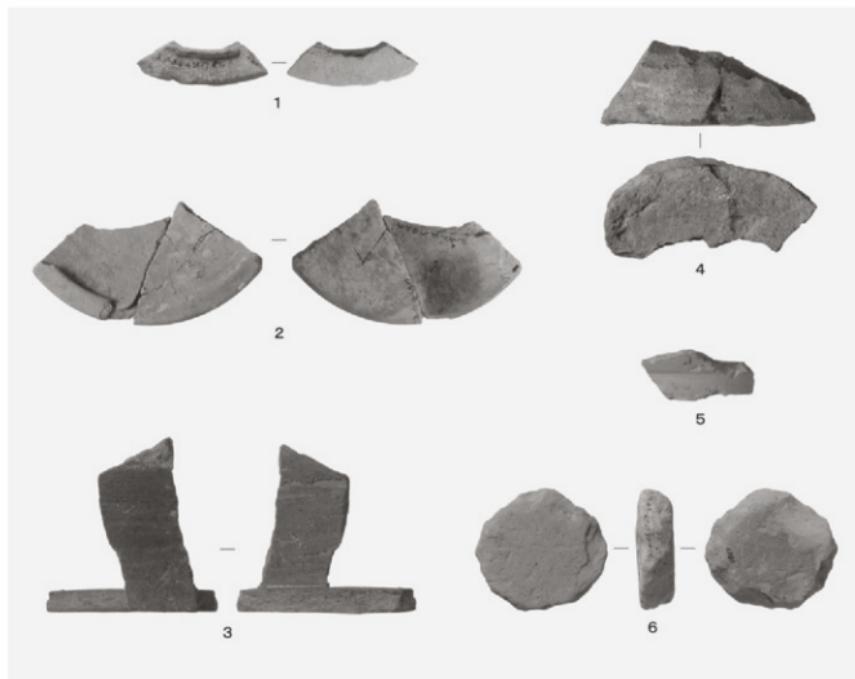
図版25 石積みSA27出土品③ 青磁：13～21



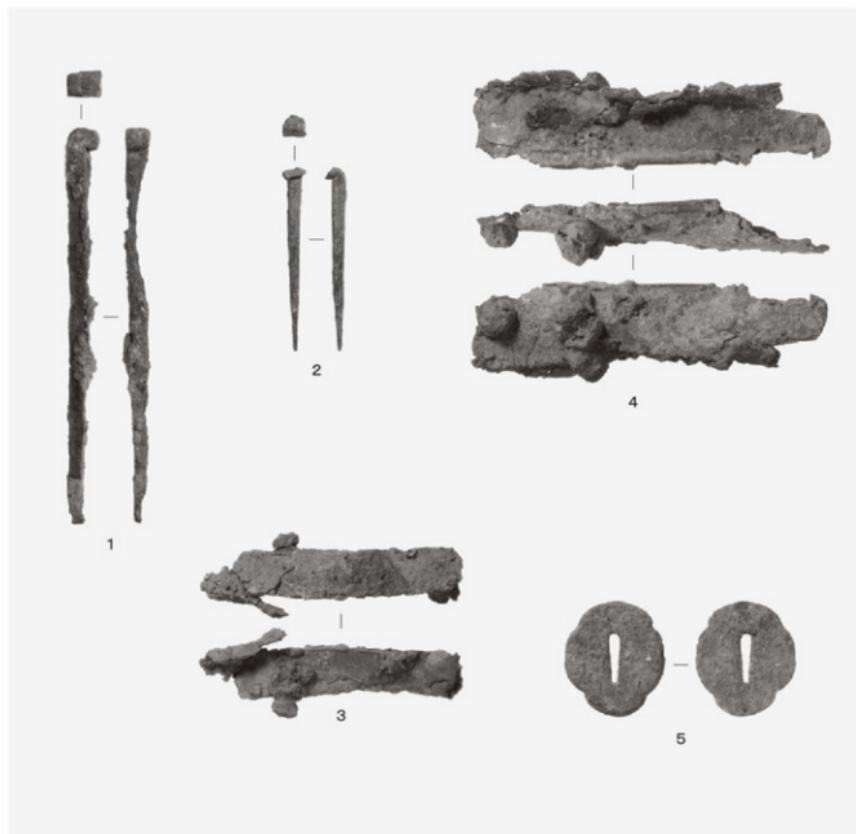
図版26 石積みSA27出土品④ 白磁：1～3、青花：4・5、黒釉陶器：6



図版27 石積みSA27出土品⑤ 中国産褐釉陶器：1～5

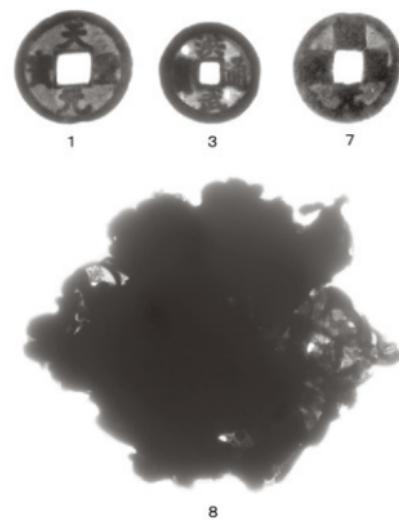
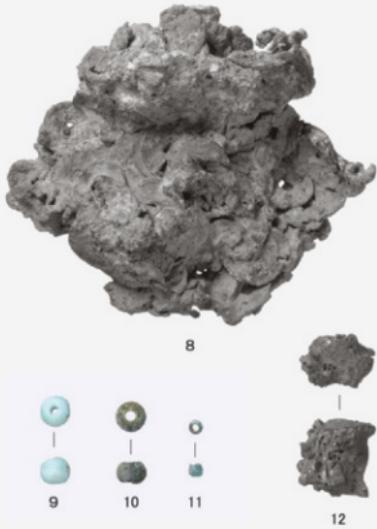
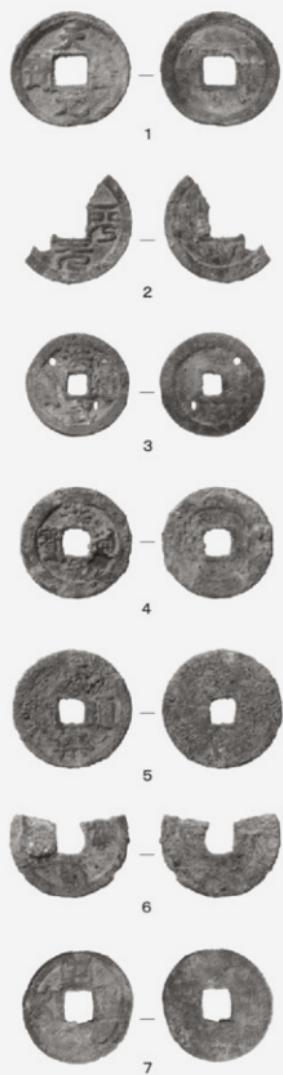


図版28 石積みSA27出土品⑥ タイ産土器（半練）：1・2、タイ産褐釉陶器：3、中世陶器：4、沖縄産施釉陶器：5、円盤状製品：6



軟X線写真

図版29 石積みSA27出土品⑦ 金属製品：1～5



軟X線写真

図版30 石積みSA27出土品⑧・⑨ 錢貨：1～7、溶解銭貨の塊：8、ガラス玉：9～11、溶解したガラスの塊：12

(9) 石積み SA30 の出土遺物 (第 38 図、第 66・67 表、図版 31)

石積み SA30 から出土した遺物の種類は、第 4 表に示したように総計で 70 点 (≈100%) が得られている。出土遺物の内訳は、土器 5 点 (7.14%)、瓦質土器 1 点 (1.43%)、瓦 2 点 (2.86%)、青磁 8 点 (11.43%)、白磁 4 点 (5.71%)、中国産褐釉陶器 18 点 (25.71%)、タイ産褐釉陶器 2 点 (2.86%)、骨製品 1 点 (1.43%)、金属製品 12 点 (17.14%)、ガラス玉 9 点 (12.86%) の 12 種類が確認されている。輸入陶磁器 (タイ産、中国産) の占める割合は、48.57% であった。

当該遺構の時期を示す明確な資料は得られていない。出土遺物の大半は細片化した資料が多く、その中から比較的大きな破片資料や特徴的な資料を図示 (第 38 図) した。

第66表① 石積みSA30 出土遺物状況

層序	B-16 SA30					合計
	第1層	トレンチ第3層b	第4層b	トレンチ第7層	表探	
土器 器種不明			5			5
合 計	0	5	0	0	0	5
瓦質土器 器種不明			1			1
合 計	0	1	0	0	0	1
屋瓦 高麗系	平瓦	灰色	漆喰無し			1
大和(古)					1	1
合 計	0	0	0	2	0	2
青磁	碗	口縁部	外反	有文	1	1
				無文	1	1
		直口	外面:雷文・片切彫り 内面:有文		1	1
	皿	口縁部	外反	無文	1	1
				無文	1	1
	盤	胴部	外面:無文 内面:蓮弁・丸窓		1	1
			外面:無文 内面:蓮弁・櫛描		1	1
			無文		1	1
	大合子	口縁部			1	1
	合 計		0	9	0	10
白磁	碗	口縁部	外反		1	1
			直口		1	1
		胴部		2		2
	皿	底部		1		1
		口縁部	内壁		1	1
	合 計		0	4	1	6
中国産 褐釉陶器	壺	頸部			1	1
		胴部			14	14
	合 計		1	0	1	17
タイ産 褐釉陶器	壺	胴部			2	2
合 計		0	0	0	2	2
石材		細粒砂岩(ニーピ)			1	1
合 計		0	1	0	1	2
骨製品		妻子の制作途中			1	1
合 計		0	1	0	0	1
金属 製品	工具 用具類	角釘	先端部欠損	中	鉄	1
			頭部欠損	中	鉄	1
	工具 類		銛		青銅	1
			八双金物		青銅	1
	武 具		八双金物?		青銅	1
			用途不明		青銅	7
	合 計		0	12	0	12
	ガラス玉		II類	白濁		4
			III類	青色		1
			IV類	水色		1
			V類	白濁		1
			分類不明	水色		1
		合 計		0	9	9

注: 釘のサイズは、中:1寸半~5寸まで(3.75cm~15.75cm未満)

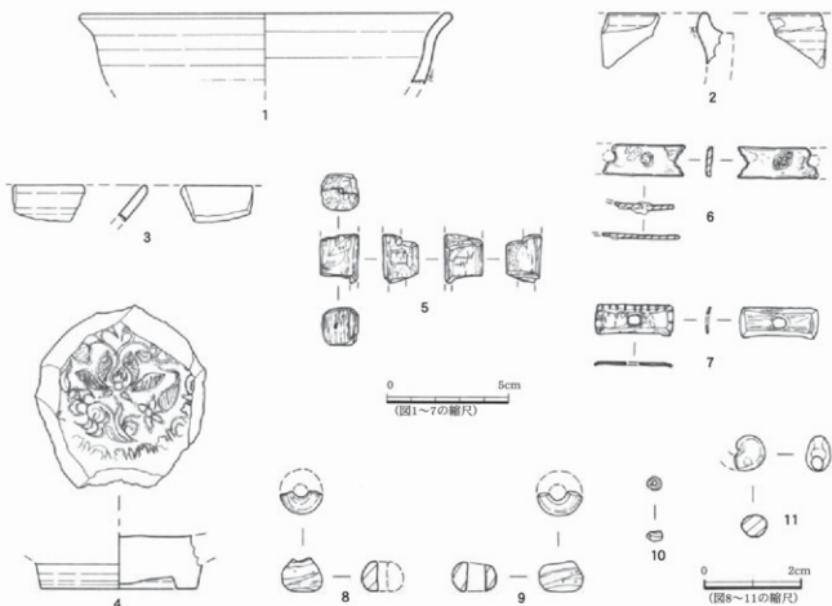
第67表② 石積みSA30 二次の火熱溶解鏡貨

銘名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
不明銕貨	4片	2.92	-	B-16 SA30レンチ第3層b

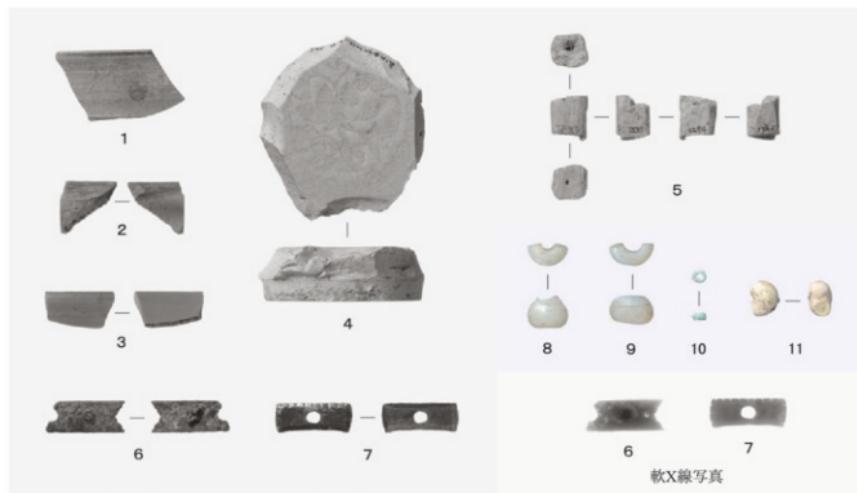
第67表 石積みSA30 青磁・白磁・骨製品・金属製品・ガラス玉観察一覧

拂団番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称・部位	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)			出土地点 出土層
第38図 図版31 1	青磁 身部の 口縁部	器形: 口径15.2cm。無文外反口縁碗。文様:なし。素地: 淡灰色の粗粒子で、粗細な黒色鉱物と石英を多量に含む。劈開面から微細な気泡痕が僅かに観察できる。釉色: 透明な黄緑色の釉を内面から外面底部の途中まで施釉。貫入:なし。泉州窯系。14c後半～15c前半。			SA30 レンチ 第3層b
# # 2	青磁 大合子	器形: 大合子の身部の口縁破片。外面が破損するが、蓋受けの部分(タガ)は外面から深く削り出している。削り出された部分は細かい擦痕が横走る。内面の口縁端近くにも同様の擦痕がみられる。文様:なし。素地: 淡灰白色の粗粒子で、劈開面から微細な気泡痕が多くの観察できる。釉色: 透明な黄緑色の釉が内面にみられる。口唇端部が施釉する。貫入: 内面に細かく、貫入がみられる。中国南部の窯。14c後半～15c前半。			SA30 レンチ 第3層b
# # 3	白磁 口直 縁 碗	器形: 直口口縁碗。文様:なし。素地: 淡灰色の粗粒子で、微細な石英と黒色鉱物を少量含む。釉色: 透明な黄緑色の釉が両面にみられる。貫入:なし。中国南部の窯。14c後半～15c前半。			SA30 レンチ 第3層b
# # 4	白磁 外反 口 縁 碗	器形: 底径6.4cm。無文外反口縁碗の高台破片。高台観付を蛇の目状に形成する。高台内側は浅く、外底面中央が削り抜きの際に盛り上がりしている。文様: 見込みの中央に牡丹文と周辺に唐草文を施す。素地: 淡黄白色の粗粒子で、劈開面から粗細な気泡痕がみられる。釉色: 内面にのみ透明な淡灰色の釉がみられる。貫入: 内面に粗細な貫入がみられる。福建省の窯。14c終末～15初頭。			SA30 レンチ 第3層b
# # 5	骨製品 賽子の 制作途中	ウシの肋骨とみられる部位を賽子などの道具として利用する目的で長方形状に加工したものであるが、制作途中で廃棄されたものとして考えられる。正面下端の右側突出部を平机に削り取り際に途中で中断している。正面上面は裏面から平坦加工の削り取りを実施しているが途中で終了している。形状から類する赛子を作成する予定が測材の海綿質の骨質部が出現した為、制作目的を別の用途に変更(下記)する際に削り出しているが中止する。上面の孔のサイズは長軸1.86mm、短軸0.93mmを測る。上面は海綿質の部分に方形形状の孔を削り出しているが中止する。上面の孔のサイズは、長軸4.02mm、短軸3.42mmを測る)し、途中で放棄したものとみられる。各面に削りの際に生じた微細な段差や柔度がない。幅: 19.9mm 横: 15.5mm 厚さ: 14.0mm 重量: 3.6g。			SA30 レンチ 第3層b
# # 6	武具 八双金物	左側は孔(直径4.83mm)の部分から欠落している。右側を魚尾鰭状に抉っている。表裏面の中央寄りに紙の身部が残存する。縁背に限り鍍金は残っていない。残存長(縦): 12.5mm、残存幅(横): 32.9mm、最大厚: 1.88mm、最小厚: 1.59mm、重量: 3.6g。			B-16 SA30 レンチ 第3層b
# # 7	青銅製品 八双金物?	八双金具か、若しくは調度品などの飾り金具とみられる。平面觀は直な長方形状を呈する。外側から内側に向かって上左右の縁近くを軽く切り曲げて、上位と左右の縁沿いに鑿で孔を入れて菊花状に形成する。中央に直な隅彫りの孔(孔サイズ:長軸5.48mm、短軸4.51mm)を内面から開けている。縁背の防止發生を兼ねた鍍金が施されているが大半が剥落する。残存長(縦): 12.7mm、残存幅(横): 32.0mm、最大厚: 0.94mm、最小厚: 0.75mm、重量: 2.1g。			B-16 SA30 レンチ 第3層b
# # 8	II類	玉の1/2強が縱方向にわたった資料である。破損面が磨面面の平垣であることと縁辺部に角が無く丸味を帯びている事などから、再利用(飾りとして嵌め込む為に加工)を兼ねて破損面や縁辺部に研磨を加えた可能性が高い。上面に巻き付けた後に切り離しの際に生じた微細な突起が残っている。下面は丁寧に形成されている。形状分類: II類。色調: 白濁。素材: ガラス。残存状況: 脆い。二次的加熱の有無: 無。サイズ: 長軸推定9.0mm、短軸0.9mm、厚さ6.04mm、重量: 2.53g。孔径: 最大推定3.30mm、最小推定2.95mm。整法:巻き付け。			B-16 SA30 レンチ 第3層b
# # 9	ガラス玉	玉の1/2強が縱方向にわたった資料である。破損面と縁辺部に研磨を加えたようであるが研磨が徹底せず破損面の側面襯が「へ」の字状となる。外側の大きな気泡痕の痛みの周辺には微細な線状痕がみられる。当該製品も再利用(飾りとして嵌め込む為に加工)を兼ねて破損面や縁辺部に研磨を加えたようである。上面と下面は巻き付け丁寧に形成されている。形状分類: II類。色調: 白濁。素材: ガラス。残存状況: 良好。二次的加熱の有無: 無。サイズ: 長軸推定9.45mm、短軸推定9.17mm、厚さ5.78mm、重量: 0.32g。推定孔径: 最大3.8mm、最小2.0mm、整法:巻き付け。			B-16 SA30 レンチ 第3層b
# # 10	III類	二次的な火熱を受けて表面が白濁し、外側に粗細な気泡痕が観察できる。巻き付け成形も上下の面とも丁寧に平垣に形成されているが、孔の平面形状が直な隅彫三角形状(長軸1.29mm、短軸1.07mm)となる。形状分類: III類。色調: 青色。素材: ガラス。残存状況: 脆い。二次的加熱の有無: 無。サイズ: 長軸2.99mm、短軸2.69mm、厚さ1.57mm、重量: 0.01g。孔径: 最大1.25mm、最小0.63mm。整法:巻き付け。			B-16 SA30 レンチ 第3層b
# # 11	V類	ガラス製品加工時に発生した不用となった廃材、若しくは廃金具から外れたガラス製品などが考えられるが判然としない。平面觀が勾玉の尾が折れた形状となるが二次的な火熱を受けて表面が白濁する。表面には粗細な気泡痕が少しみられる。その他に炭化した黒色物質の付着が観察できる。形状分類: V類。色調: 白濁。素材: ガラス。残存状況: 良好。二次的加熱の有無: 有り。サイズ: 長軸7.17mm、短軸5.20mm、厚さ4.76mm、重量: 0.21g。整法:巻き付け。			B-16 SA30 レンチ 第3層b

注「-」:計測不可



第38図 石積みSA30出土品 青磁：1・2、白磁：3・4、骨製品：5、金属製品：6・7、ガラス玉：8～11



図版31 石積みSA30出土品 青磁：1・2、白磁：3・4、骨製品：5、金属製品：6・7、ガラス玉：8～11

(10) 石積み SA27・30 の出土遺物（第39図、第68・69表、図版32）

石積み SA27・30 から出土した遺物の種類は、第4表に示したように総計で82点（≈100%）が得られている。

出土遺物の内訳は、土器2点（2.44%）、瓦類24点（29.27%）、青磁12点（14.63%）、中国産褐釉陶器27点（32.93%）、タイ産褐釉陶器4点（4.88%）、ガラス玉3点（3.66%）の10種類が確認されている。輸入陶器（タイ産、中国産）の占める割合は、52.44%であった。

当該遺構の時期を示す資料は得られていない。出土遺物の大半は細片化した資料が多く、その中から比較的大きな破片資料や特徴的な資料を図示（第39図）した。

第68表 石積みSA27-30 青磁・ガラス玉観察一覧

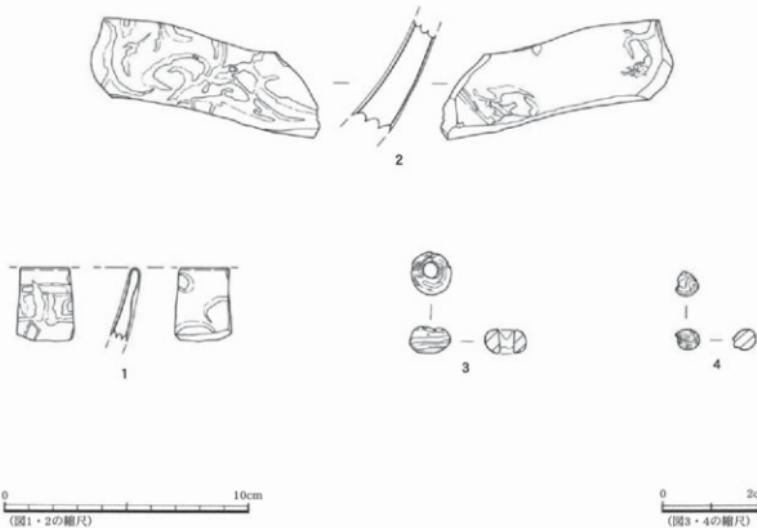
挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称・部位	観察事項（素地・混入物・色調・釉色等）			出土地点 出土層
第39図 図版32 1	青磁 雷文 帶碗	口縁部	器形：直口口縁碗。文様：外面口縁に片切彫りで時計回りの雷文と反時計回りの雷文を単独で描いている。雷文直下にも片切彫りで刻花文とみられる文様を描く。内面にも刻花文を片切彫りで描いている。素地：光沢のある淡灰白色の微粒子であるが、微細な気泡痕が少量ながら観察できる。釉色：淡緑色の釉が両面にみられる。貫入：なし。龍泉窯系。14c後半～15c中頃。		B-16 SA27-30 第5層
〃 〃 2	大鉢	胸部	器形：大鉢の胴部。文様：外面に片切彫りで牡丹唐草文とみられる文様を描く。内面にも刻花文を片切彫りで描いている。素地：光沢のある淡灰白色の微粒子であるが、微細な気泡痕が少量ながら観察できる。釉色：淡緑色の釉が両面にみられる。貫入：なし。龍泉窯系。14c後半～15c中頃。		B-16 SA27-30 遺構内表探
〃 〃 3	ガラス 玉	II類	二次的な火熱を受けて器面全体が剥離し、本来の形状を失っている。孔内部には別個体のガラスが溶けて塞がっている。形状分類：II類。色調：白濁。素材：ガラス。残存状況：脆い。二次的加熱の有無：有。サイズ：長軸8.41mm、短軸8.20mm、厚さ5.13mm、重量0.19g。孔径：2.85mm。製法：巻き付け。		B-16 SA27-30 第5層
〃 〃 4		V類	平面觀の形状からするとガラス製品加工時に発生した滴状（滴下済状）の廃材かと考えられる。二次的な火熱を受けて表面には白濁や剥離がみられる。その他に表面には粗細な気泡痕が少量みられる。その他に炭化した黒色物質の付着が劈開面から観察できる。形状分類：V類。色調：白濁。素材：ガラス。残存状況：脆い。二次的加熱の有無：不明。サイズ：長軸4.39mm、短軸4.28mm、厚さ4.12mm、重量0.10g。		B-16 SA27-30 第5層

注「-」：計測不可

第69表 石積みSA27・30 出土遺物状況

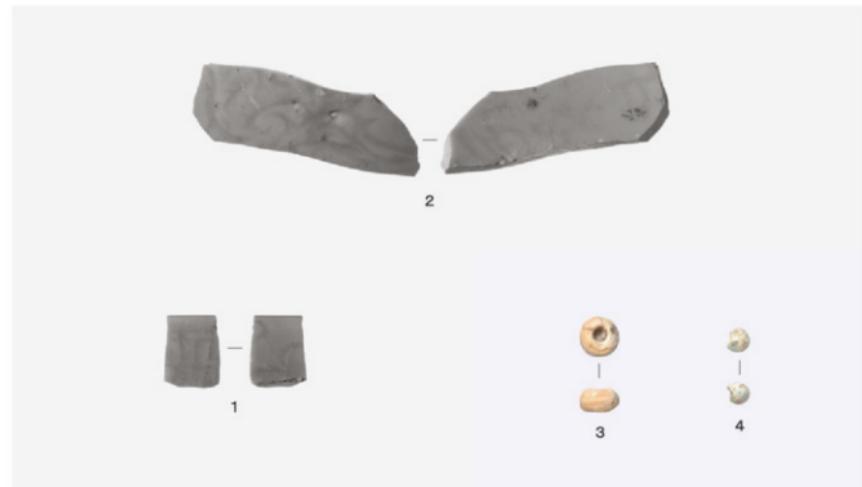
分類・種類・器種・部位				層序							B-16-17 SA27・30					合計
				第2層e (客土)	第3層b (擾乱)	第5層	第5層b (擾乱)	第6層 (擾乱)	第6層	遺構内 表採	壁面 清掃					
土器	壺	頭部		1												1
	器種不明	胸部			1											1
	合 計			1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
屋瓦	高麗系	平瓦	灰色	漆喰無し	2											2
			褐色	漆喰無し	2											2
	大和	丸瓦	灰色	漆喰無し	1											1
			灰色	漆喰有り(片面)	1											1
	明朝系	平瓦	灰色	漆喰無し	1											1
			灰色	漆喰無し	1											1
		丸瓦	漆喰有り(片面)	1												1
			赤色	漆喰無し	2											2
	平瓦	赤色	漆喰有り(片面)	6												6
		赤色	漆喰無し	6												6
合 計				23	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	23
埴瓦	III類	形状不明b	灰色	漆喰無し	角1	1										1
	合 計			1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
青磁	碗	口縁部	外反	蓮弁	その他										1	1
			直口	外面:雷文・片切彫り 内面:刻花文・片切彫り				1								1
		胴部	有文												1	1
	大碗or鉢	胴部	雷文	片切彫り											1	1
		胴部	内・外表面:有文不明												1	1
	皿	胴部 ～底部	胴部:内、外表面:有文不明 底部:有文不明		1											1
			底部:不明	高台のみ											1	1
		口縁部	直口	無文											1	1
	酒会壺	胴部	有文不明			1	1									2
		(真底)		1												1
	大鉢	胴部	外面:牡丹唐草文・片切彫り 内面:刻花文・片切彫り												1	1
合 計				2	0	2	1	0	2	4	1	12				
中国産 掲袖陶器	壺	胸部		19						1	1	6	27			
	合 計			19	0	0	0	1	1	0	6	27				
タイ産 掲袖陶器	壺	胸部		3								1	4			
	合 計			3	0	0	0	0	0	0	0	1	4			
沖縄産 無袖陶器	鉢	胸部		1									1			
	合 計			1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1		
円盤状 製品	中国産掲袖陶器			1										1		
	沖縄産無袖陶器			2										2		
	合 計			3	0	0	0	0	0	0	0	0	3			
金属製品	工具類 ・生産用具	丸釘	先端+ 頭部欠損	中	鉄	1										1
		角釘	完形	中	鉄	1										1
	武器	砲弾片	先端+ 頭部欠損	中	鉄							2		2		2
					青銅	1									1	
					鉄	1									1	
	合 計			4	0	0	0	0	0	2	0	0	6			
	ガラス玉	II類		白濁			1							1		
		V類		白濁			1							1		
		不明		淡青色			1							1		
	合 計			0	0	3	0	0	0	0	0	0	3			

注 釘のサイズは、中:1寸半～5寸まで(3.75cm～15.75cm未満)



第39図 石積みSA27・30出土品 青磁：1・2、ガラス玉：3・4

IV
期



図版32 石積みSA27・30出土品 青磁：1・2、ガラス玉：3・4

(11) 石敷き SS01 の出土遺物 (第 40 図～第 52 図、第 70 表～第 90 表、図版 33～図版 43)

石敷き SS01 から出土した遺物の種類は、第 4 表に示したように総計で 1,554 点 (≈100%) が得られている。

出土遺物の内訳は、陶質土器 8 点 (0.51%)、土器 4 点 (0.26%)、瓦類 屋瓦・埠瓦 652 点 (41.96%)、青磁 47 点 (3.02%)、青花 10 点 (0.64%)、華南彩釉陶器 6 点 (0.39%)、中国産褐釉陶器 410 点 (26.38%)、沖縄産無釉陶器 27 点 (1.74%)、沖縄産施釉陶器 42 点 (2.70%)、タイ産 (土器) 2 点 (0.13%)、本土産磁器 43 点 (2.77%)、貝製品 1 点 (0.06%)、円盤状製品 3 点 (0.19%)、金属製品 81 点 (5.21%)、錢貨 52 点 (3.35%)、の 26 種類が確認されている。輸入陶磁器 (タイ産、中国産) の占める割合は、35.33% であった。

当該遺構の時期に伴う遺物として比定される資料は、青花碗 (第 43 図 3)・青花小碗 (第 45 図 4)、華南彩釉陶器 (同図 6・7) などがある。なお、出土遺物の大半は細片化した資料が多く、その中から比較的大きな破片資料や特徴的な資料を図示 (第 40 図～第 52 図) した。

第70表 石敷きSS01 陶質土器・瓦質土器出土状況

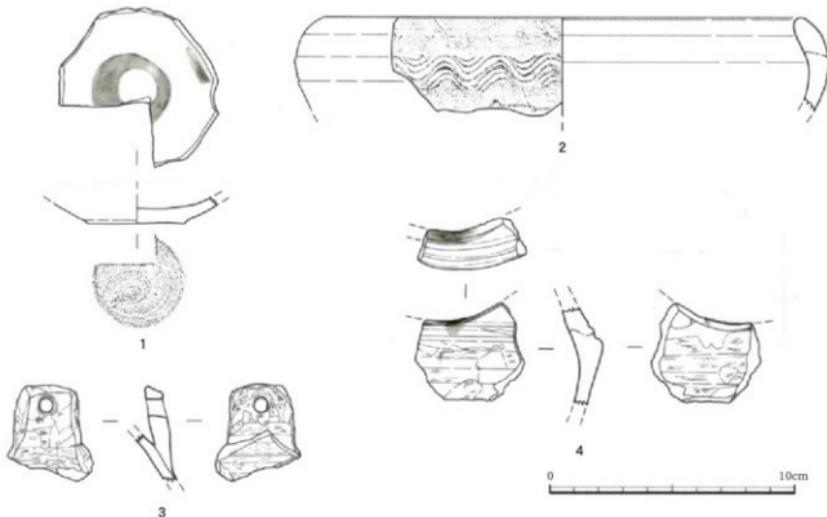
種類・器種・部位	層序		C-11 SS01 合計	
	第1層			
	北側第4層b			
陶質土器	鉢	胴部	2 2	
	水鉢	口縁部	1 1	
	鍋	耳	1 1	
	鍋	胴部	1 1	
	急須	把手	1 1	
	火炉	胴部	1 1	
	灯明皿	底部	1 1	
	合 計		3 5 8	

種類・器種・部位	層序		C-11 SS01 合計	
	第1層			
	北側第4層b			
瓦質土器	鉢	口縁部	1 1	
		底部	1 1	
	植木鉢	口縁部	1 1	
	火鉢or炉	口縁部	1 1	
	茶壺	口縁部	1 1	
	蓋		3 3	
	器種不明	胴部	1 1	
	合 計		2 7 9	

第71表 石敷きSS01 陶質土器観察一覧

探査番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 底径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第40図 図版33 1	灯明皿	底部	— 3.9	器形: ベタ底の皿で、内面に煤が付着することから灯明皿として判断できる。外底面に反時計回りの糸切り痕が顕著にみられる。文様:なし。器面調整: 内外面に回転擦痕がみられる。外面の調整は堆で内面が丁寧に仕上げている。素地: 明稚色の細粒子で、微細な石英や黒色の物質が多いみられる。僅かながら微細な雲母や粗い黒色の物質がみられる。色調: 表裏面とも明稚色を呈するが、内面の見込み部分に輪状の煤痕、胴部にも煤痕がみられる。焼成: 良好で堅い。	SS01 北側 第4層b
〃 〃 2	水鉢	口縁部	19.6 —	器形: 内湾口縁の水鉢(俗称:ミクブサー)で、口唇部を舌状に尖らせて形成する。文様: 外面胴上部にて本體で波状文を描く。器面調整: 内外面に回転擦痕がみられる。素地: 渡黃色の細粒子で、微細な飴物(石英、茶褐色、黒色)が多くみられる。僅かながら微細な雲母や粗い茶褐色の物質がみられる。色調: 表裏面とも淡黄色を呈する。焼成: 良好で堅い。	C-11 SS01 北側 第4層b
〃 〃 3	急須	把手	— — —	器形: 橢円成形の急須本体に貼り付けられた固定の把手で、正面觀が歪な梯形状の型枠に陶土を押し込んで形成している。可動把手の上部には、可動把手が取り付けられた孔がある。孔のサイズは、外面の孔が直径6.10~6.74mm、内面の孔は直径5.93~6.24mmを測る。孔は外側から穿っている為、外面の孔周辺が僅んでいる。文様:なし。器面調整: 外面は身部を貼り付ける際に生じた横位のナデや鍍なナデが施されている。両側面及び上面にナデが部分的にみられる。内面は孔周縁部に雜な指圧痕がみられ下半分は横位のナデがみられる。身部の内面には糖繊維が顕著にみられる。素地: 淡橙色の細粒子で、微細な飴物(石英、茶褐色、黒色)や微細な雲母が少量観察できる。色調: 表裏面とも淡黄色を呈する。焼成: 良好で堅い。	SS01 第1層
〃 〃 4	火炉	胴部	— — —	器形: 口縁部が内傾する火炉。当該製品は椭円成形と文様施文後に口縁部を半円状に箆状の工具で抉り取って新たな口唇部を造る。半円状に抉られた部分に煤が付着する。文様: 口縁部と肩部にかけて幅2.8mmの丸籠状の工具で界線を二条施す。器面調整: 外面は内面よりも丁寧でナデを主体として調整する。内面には回転擦痕がみられる。素地: 淡橙色の細粒子で、微細な飴物(石英、茶褐色、黒色)が多くみられる。僅かながら微細な雲母や粗い茶褐色の物質がみられる。色調: 外面が黄褐色で、内面が茶褐色を帯びている。焼成: 良好で堅い。	C-11 SS01 北側 第4層b

注 「—」:計測不可



第40図 石敷きSS01出土品① 陶質土器：1~4

第72表① 石敷きSS01 瓦質土器観察一覧

単位:cm

捕獲番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 底径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第41図 図版34 1	植木鉢	口縁部	—	器形: 内湾口縁の植木鉢で、口唇部を幅広く成形する為、内面の口縁端近くが突出する。文様: 口縁部の凸面に指圧を上下に加えて波状文とする。口唇部の中央寄りに指圧による陽圏線を施す。器面調整: 両面とも器面の保持が悪いが、丁寧なナデ調整が施されていたようである。素地: 灰黒色の粗粒子で、粗細な石英や黑色鉱物が少量含む。稀に粗い茶褐色の鉱物がみられる。劈開面から微細な気泡痕が多くみられる。色調: 両面とも明茶色を帯びる。焼成: 良好で堅い。	SS01 北側 第4層b
〃 2	鉢	底部	—	器形: 底面からの立ち上がりが外側に軽く傾いた状態で直線的に開く鉢(植木鉢、こね鉢、擂鉢)の底部破片。外表面は丁寧な荒削り、外底面は器面の保持が悪く不明。内部も器面の保持が悪いが回転擦痕をナデ消している。素地: 灰褐色の粗粒子で、粗細な黑色鉱物が少量含む。劈開面から微細な気泡痕が多くみられる。色調: 両面とも黒褐色を帯びる。外底面は灰色を呈している。焼成: 良好で堅い。	C-11 SS01 北側 第4層b
〃 3	火鉢 or 炉	口縁部	—	器形: 内湾口縁の火鉢or炉が考えられる。口唇部に丸味を持たせて成形する。輪積み痕が外側から観察される事が輪積み成形。文様: 内面の口縁から35.16cmの箇所に丸彫りの工具で横側に沈線が2条観察できる。器面調整: 外面に雑な指ナデを施すため、輪積み痕が消えきっていない。口唇部および内面は外面よりもやや丁寧にナデを施すがナデは施していない。素地: 淡橙色の粗粒子で、細かい石英や黑色鉱物が少量含む。稀に粗い石英がみられる。色調: 両面とも明茶色を主とする。口縁部は暗褐色を基調とするが部分的に煤けて帯びる。焼成: 良好で堅い。	C-11 SS01 北側 第4層b
〃 4	茶壺	口縁部	8.9 —	器形: 肩部で内側に折れて強く屈曲(水平)させた後に更に肩部で垂直に立ち上がる。所謂肩衝(かたつき)茶入れ(註1)に近似する器形が想定される。肩衝茶入れを模倣した可能性が高いが、取り敢えず一般的な茶入れとするには口径が大きいので茶壺として報告する。文様: 脊部に幅の異なる丸彫りが三条施されている。器面調整: 内面は輪轉痕をナデ消すが消えきっていない。外表面は頭部から頭部近くまで丁寧にナデを施すがナデは施していない。素地: 灰色の粗粒子で、粗細な鉱物(石英、黒色)や粗い茶褐色の物質がみられる。その他に巻貝の压痕がみられる。貝殻サンプルと照合した結果、フトヘナタリ科のカワアイ(河口干潟マングローブ域 潮間帯中・下部 砂/泥)と判明した。色調: 外面が艶のある明茶色で、内面が明椎色を帯びている。焼成: 良好で堅い。	C-11 SS01 第1層

注「—」:計測不可

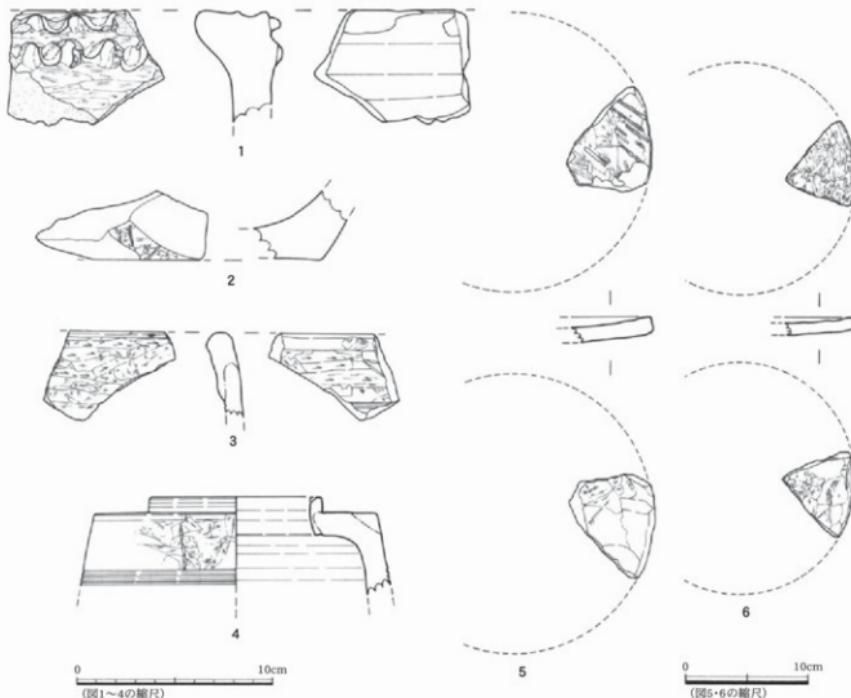
第72表② 石敷きSS01 瓦質土器観察一覧

押因番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第41図 図版34 5	蓋	円盤状の型枠に陶土を入れて作成された蓋。タイヤや中国産の大型褐釉陶器壺などの蓋として利用されたものである。外周縁辺部には型枠からみだした陶土が使用時に潰されている。器面調整:上面は植物(稻穀)の茎を潰した状態で一定方向からナデを加えた為、粗密な幅広の線条痕を施した後に雑な指ナデを加えて終了している。下面は型枠に陶土が入る面で微弱な起伏を持った平坦面である。下面および脇開口には模殻圧痕(下面模殻のサイズ:長軸7.13mm、短軸2.11mmを測る。)がみられる。胎土:泥質で細かい。混入物:粗細な茶褐色の物質が僅かに含まれる。種に粗い石英や微細な雲母がみられる。色調:上面は黄茶色、下面が灰白色を帯びるが、部分的に暗褐色となる。推定復元直径22.8cm、器厚11.55~13.91mm。	C-11 SS01 北側 第4層b
" " 6	" " "	毛目様のナデがみられる。下面は型枠に陶土が入る面で全体的に陶土の皺(陶土をそのまま押し込んだ状態)が観察できる。部分的にナデがみられる。上面には模殻圧痕(模殻のサイズ:長軸5.14mm、短軸1.96mmを測る。)がみられる。胎土:泥質で細かい。混入物:粗細な石英と細かい茶褐色の物質が僅かに含まれる。色調:上面は茶白色で、下面が暗褐色を帯びる。推定復元直径18.8cm、器厚8.56~11.57mm。	C-11 SS01 北側 第4層b

注「-」:計測不可

註文献

註1-a、岡田嘉一・矢部良明『日本陶磁大系 16 薩摩』平凡社 1989年11月刊行収録の堅野窯系の17世紀前半肩衝茶入(高さ8.3cm)と器形が近似。
 註1-b、吉戸直『沖縄の古陶』吉美術 観宝堂 2002年9月刊行の壹里焼の19c前半~中葉の船軸肩衝茶入(口径3.2、高7.0、底径4.7cm)と器形が近似。



第41図 石敷きSS01出土品② 瓦質土器 : 1~6

第73表 石敷きSS01 屋瓦・埠瓦出土状況

		層序		C-11 SS01			合計
		種類・分類		第1層	北側第4層b	石敷直上	
高麗系	軒平	褐色	塗喰無し		1		1
	丸瓦	灰色	塗喰無し		2		2
	平瓦				7		7
	丸瓦	灰色	塗喰無し	2	1		3
大和(古)	平瓦			3	14		17
	役瓦	褐色	塗喰無し	1			1
	丸瓦		塗喰有り(片面)	1	6		7
	平瓦		塗喰無し	2			2
大和	丸瓦		塗喰有り(両面)		1		1
			塗喰有り(片面)		1		1
	平瓦	灰色	塗喰有り(片面)		1		1
			塗喰無し	4			4
屋瓦	軒丸	灰色	塗喰有り(両面)	1			1
			塗喰有り(片面)		1		1
			塗喰無し		1		1
		赤色	塗喰有り(両面)		1		1
	軒平	灰色	塗喰有り(片面)		2		2
		赤色	塗喰有り(片面)	1			1
			塗喰無し	2	3		5
		灰色	塗喰有り(両面)		1		1
	丸瓦	灰色	塗喰有り(片面)	12	26	4	42
			塗喰無し	16	34	5	55
		褐色	塗喰有り(片面)			1	1
		赤色	塗喰無し		8	1	9
	平瓦	灰色	塗喰有り(片面)	5	27		32
			塗喰無し	1	8		9
		褐色	塗喰有り(両面)	9	13	3	4
			塗喰有り(片面)	13	50	3	66
		赤色	塗喰無し	35	102	23	7
			塗喰有り(片面)		2	1	3
		褐色	塗喰有り(片面)		2	1	3
		赤色	塗喰有り(両面)	2	1		3
			塗喰有り(片面)	10	20	5	35
			塗喰無し	13	37	1	2
合計				136	373	38	574
埠瓦	II類	-	灰色	塗喰無し	角1	1	1
		-			角無し	2	5
	Aa	灰色		角1		2	
				角無し		2	
		赤色		角1		2	
				角無し		2	
	Ba	灰色	塗喰無し	角1			1
		赤色			1		1
	形状不明a	灰色		角1	4		4
				角無し	2	4	9
		赤色		角1	3	4	7
				角無し	3	7	10
	III類	形状不明b	灰色	塗喰有り(片面)	角1	1	1
					塗喰無し	1	4
			塗喰無し		(ゼット付着)	1	
					角無し		1
		赤色	塗喰無し		塗喰無し	1	11
					(ゼット付着)	1	
			塗喰有り(両面)	角1		1	1
					角1	1	1
	形状不明a or 形状不明b	赤色	塗喰有り(片面)		角無し	1	1
					角1	1	3
		赤色	塗喰無し		角1	1	2
					角無し	1	4
煉瓦	IV類	形状不明a or 形状不明b	赤色	塗喰無し	角1	1	1
		不明	灰色	塗喰無し	角無し	1	1
		-	赤色	塗喰無し	角2	1	1
					角無し	1	1
合計				22	52	2	78

第74表 石敷きSS01 屋瓦・埠瓦・煉瓦観察一覧

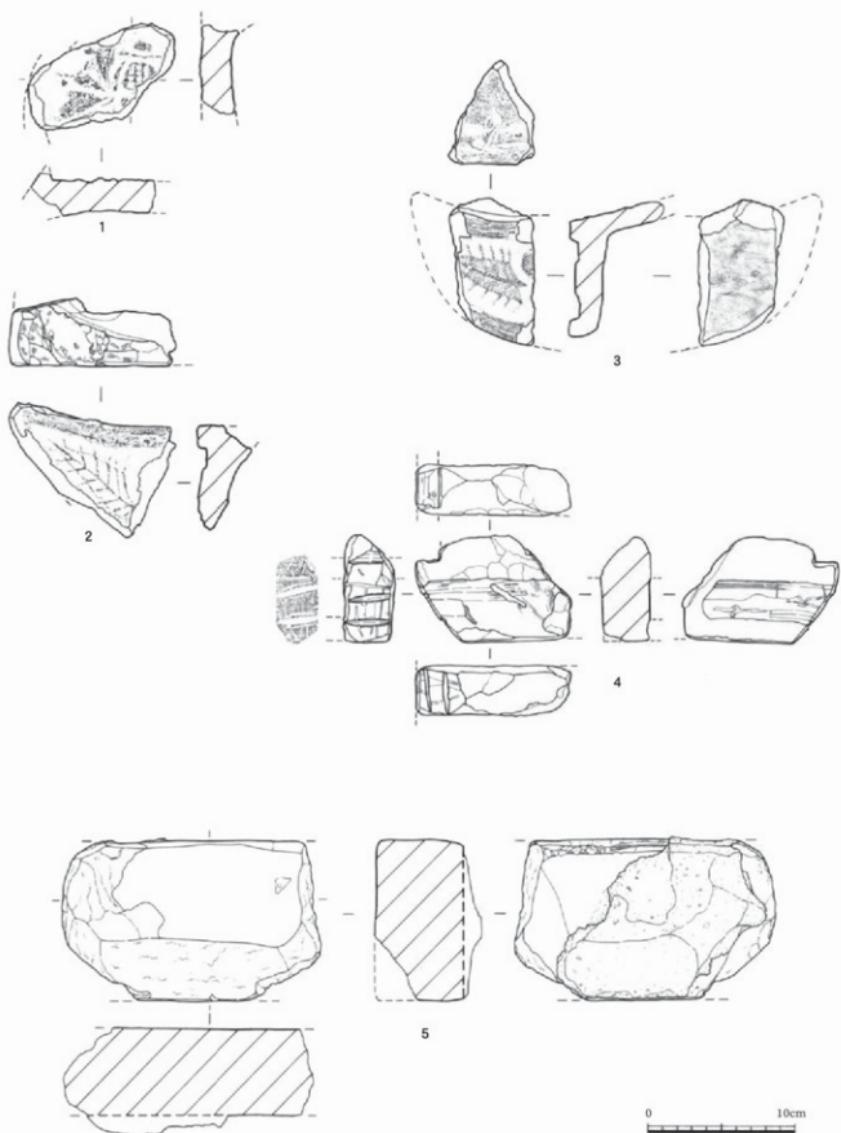
単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称・ 部位	観察事項	出土地点 出土層
第42回 図版35 1	屋瓦・ 明朝系・ 軒丸瓦・ 瓦当	軒丸瓦の瓦当部の破片で、丸瓦の凸面と瓦当面の離ぎ足し部分(接合部分)から破損している。瓦当部の外周縁は被損により外周縁の幅は不明である。瓦当文様は牡丹花文と珠文を施した瓦型から起しているが、丸瓦との離ぎ足しの際に瓦当文様を逆さまにした状態で接合したようである。上原静分類の第I文様系B式(I Ba01灰色)の範疇(註1)にある。器面調整:裏面は刷毛目様のナデを主体にして部分的に指圧を施す。器厚:21.69~22.74mm。胎土:泥質で粗い。混入物:微細な石英が多くみられ、稀に粗い茶褐色の物質が含まれている。色調:外面は淡茶灰色で、内面が灰白色。焼成:良好で堅い。	C-11 SS01 北側 第4層b
〃 2	屋瓦・ 明朝系・ 軒平瓦・ 瓦当	軒平瓦の瓦当部の破片で、平瓦の凹面が僅かに瓦当に取り付いている。瓦当部の上辺外周縁の幅は11.07~15.62mmを測る。左辺外周縁は被損のため不明である。瓦当文様は葉のみが残存する。上原静分類の第III文様系B式(III Ba01赤色)の範疇(註1)にある。器面調整:裏面は主に平瓦接続部分は平瓦と平行するようにナデが施されている。その他に雑なナデと指圧がみられる。平瓦の凹面部分は瓦当と平行する雑なナデが主体で部分的に指ナデでナデ消している。平瓦左側面にも雑なナデアリ。ナデアリがみられる。平瓦の凹面と瓦当の一部には漆喰が付着する。器厚:瓦当面は9.15~22.03mm、平瓦が16.80~18.46mm。胎土:泥質で粗い。混入物:微細な鉱物(石英、黒色)が多くみられ、稀に粗い灰色や茶褐色の物質が含まれている。色調:外面は灰白色で、内面が淡茶灰色。焼成:良好で堅い。	C-11 SS01 北側 第4層b
〃 3	屋瓦・ 明朝系・ 軒平瓦	〃、瓦当部の上辺外周縁の幅は11.97mmを測る。下辺外周縁の幅が9.92~10.85mmを測る。瓦当文様は花弁(丸文が半円状に残る)と葉のみが残存する。上原静分類の第III文様系B式(III Ba01赤色)の範疇(註1)にある。器面調整:裏面は瓦当縫合部と平瓦の凸面に沿うよう刷毛目様のナデが施されている。平瓦凸面は丁寧なナデがみられる。平瓦凹面には布目压痕と桶板留縫痕がみられ、部分的に雑な削りとナデがみられる瓦当裏面と平瓦凸面には漆喰が部分的に付着する。器厚:瓦当面は12.54~17.12mm、平瓦が14.18~15.15mm。胎土:泥質で細かい。混入物:微細な鉱物(石英、黒色)が僅かにみられる。稀に粗い茶褐色の物質が含まれている。色調:外面は明橙色を基調とするが、全体的に石灰分の付着がみられる。内面及び平瓦が淡橙色。焼成:良好で堅い。	C-11 SS01 第1層
〃 4	埠瓦	屋根用の下駄状の突起を有した埠(註2)。下駄状の突起部のみが残存する。下駄状突起の下端部で小突起を造るが、小突起の部分で欠落する。下駄状突起の側面は「L」字状となるようである。下駄状突起の左側面は麓削りで斜面に成形され、左側面には屋根に埠を敷並べる際の番号とみられる漢数字の「二」が麓状工具で深く刻まれている。下駄状突起の幅は、30.48~32.97mmを測る。上原静分類のIV式の範疇(註1)にあるが、下駄状突起を斜面に成形する点などから考えると、新たなタイプとして設定が可能かもしれない。器面調整:下駄状突起の正面は麓削りでナデ消すが徹底していない。裏面は顕著な麓削りで調整する。下駄状突起の下面是麓削り後に丁寧なナデ消しを加えたようである。胎土:泥質で細かい。混入物:微細な石英が少量含まれ、稀に粗い茶褐色の物質が含まれている。色調:内外面とも黒褐色を帯びる。焼成:良好で堅い。	C-11 SS01 第1層
〃 5	煉瓦	近現代の煉瓦(平面觀が長方形状となるが、正面の下半分と左右が汚落する)とみられるもので、裏面にモルタルが厚く(5.45~15.56mmを測る)塗布されているが厚みに無駄がみられる。器面調整:型枠成形で、裏面及び上下の側面が型枠に入る面となる。上側面には緻密な刷毛目が丁寧に施されている。下側面は微細な起伏があることから、麓削り後にナデ消しを行なうが部分的に器面の一部が削られて素地が露胎する。裏面は型枠の底面にあたる平坦面であるが、横断面から観察すると微弱に中央で浅く窪んでいる。正面は型枠に陶土を詰め込んだ面であり、型枠からはみ出した陶土を上から下に向かって削り取っているが、中央寄りで陶土が微弱に盛り上がりつつある。胎土:砂質で粗い。混入物:粗細な石英を多量に含んでいる。稀に粗い黒色の物質がみられる。劈開面から植物の茎(タケやススキなど)の压痕(直径3.22mm)がみられる。色調:各面とも明橙色を帯びる。焼成:悪く脆い。	C-11 SS01 第1層

文献

註1. 上原 静「沖縄諸島における琉球瓦の再編年」『沖縄国際大学総合学術研究紀要』第11巻 第2号 通巻第14号 沖縄国際大学総合学術学会 2008年1月。

註2. 上原 静「琉球の埠と煉瓦」『南島考古』第30号 沖縄考古学会 2011年5月。



第42図 石敷きSS01出土品③ 瓦類：屋瓦：1~3、博瓦：4、煉瓦：5

第75表 石敷きSS01 青磁・青花・彩釉陶器・中国産褐釉陶器・タイ産土器(半練)出土状況

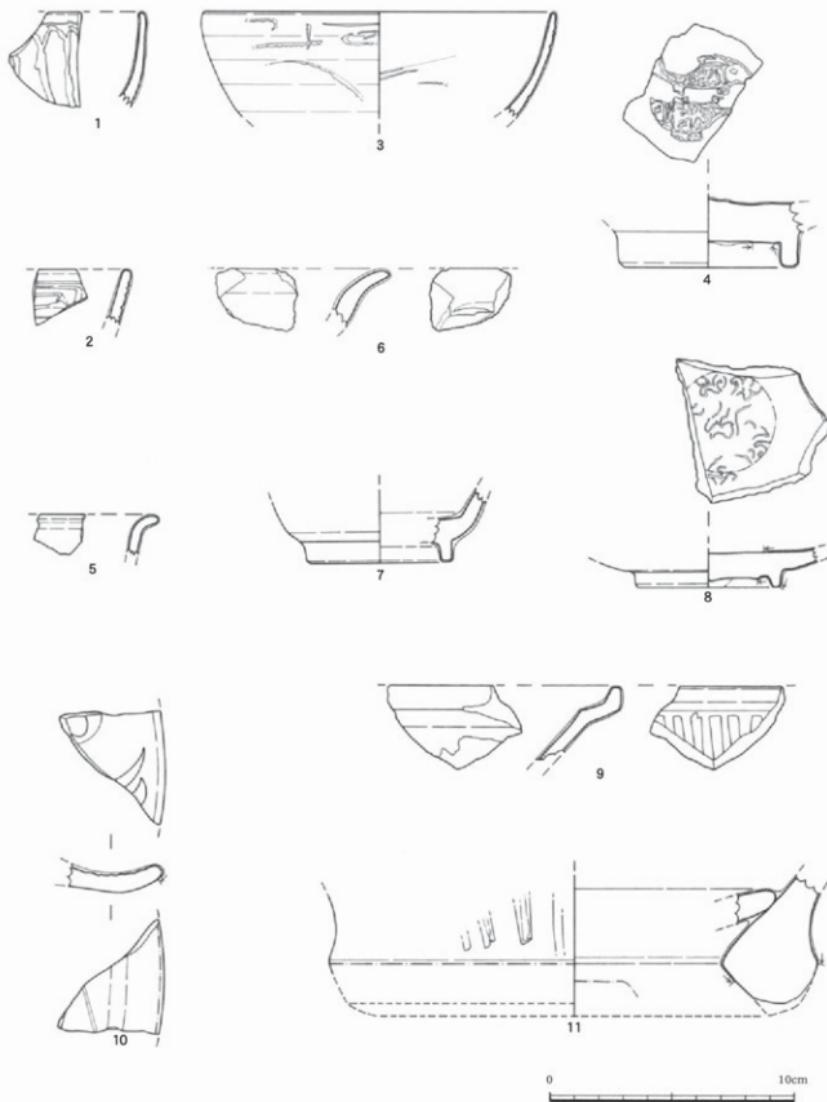
			層序		C-11 SS01			合計
			第1層	北側第4層b	石敷直上	石敷東端部分		
種類・器種・部位								
青磁	碗	口縁部	外反	無文	2	4		6
			蓮弁	片切彫り		1		1
			外面:雷文・片切彫り 内面:刻花文・片切彫り		1			1
			直口	片切彫り	1	1		2
			雷文	文様不明	1			1
			有文		1			1
			蓮弁	片切彫り			1	1
	胴部	その他・蓮弁		1				1
		有文			2			2
		無文		4	7	1	1	13
	底部	cタイプ	無文		1			1
		eタイプ	有文		1			1
盤	皿	口縁部	外反	無文	1			1
			刻花文・片切彫り			1		1
			外面:蓮弁・片切彫り、内面:無文		1			1
			直口	無文	1			1
			稜花	外面:文様不明、内面:有文不明	1			1
		胴部	外面:蓮弁・片切彫り、内面:無文				1	1
			有文不明		1			1
		底部	印花文	内底のみ			1	1
	盤	口縁部	タガ状	外面:文様不明、内面:蓮弁・丸窓		1		1
			鈎縁	蓮弁・櫛描		1		1
			稜花	外面:文様不明、内面:刻花文		1		1
			印花葉文				1	1
		底部	無文		1			1
			文様不明	高台なし		1		1
	酒会盤	蓋	刻花文・丸彫り		1			1
		底部	蓮弁・窓彫り				1	1
合計				17	23	1	6	47
青花	碗	口縁部		1	1			2
					1			1
		底部			1			1
	小碗	口縁部		1				1
		底部		1				1
彩釉陶器	皿	胴部		1	1			2
		底部		1	1			2
	合計			4	5	1	0	10
彩釉陶器	瓶	胴部			1			1
	盤	口縁部		1				1
	鶴形水注				3			3
		胴部			1			1
合計				1	5	0	0	6
中国産褐釉陶器	壺	口縁部	方形状	1	3			4
			台形状		1			1
		頸部		2	5	1		8
		胴部		96	231	45	1	373
		底部		1	3			4
	器種不明	胴部			20			20
合計				100	263	46	1	410
タイ産土器 (半練)	蓋	端部	IV類	1				1
		胴部			1			1
合計				1	1	0	0	2

第76表 石敷きSS01 青磁観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第43図 図版36 1	蓮弁文 碗	口縁部	— — —	器形: 口唇部は丸味を持たせて成形する直口口縁碗。文様: 外面は口縁部に片切彫りで蓮弁文を描くが弁先の表現は難に描く。素地: 淡灰白色の微粒子で、微細な気泡痕が少量観察できる。釉色: 淡青緑色の釉を両面に施釉。貫入: 両面に粗い貫入がみられる。龍泉窯系。14c後半~15c中頃。	SS01 北側 第4層b
〃 〃 2	雷文 帶 碗	口縁部	— — —	器形: 〃。文様: 外面口縁部に片切彫りで雷文を描くが雷文の展開は不明。素地: 淡灰白色の微粒子。釉色: 淡青緑色の釉を両面に施釉。貫入: なし。龍泉窯系。14c後半~15c中頃。	C-11 SS01 北側 第4層b
〃 〃 3	雷文 帶 碗	口縁部	14.6 —	器形: 〃。文様: 外面口縁部に片切彫りで時計回りと反時計回りで難な雷文を描き、雷文帯直下に片切彫りで幅広の丸味のある蓮弁文を難に描いている。内面にも片切彫りで刻花文を描いている。素地: 淡灰白色の微粒子で、僅かに微細な黒色鉱物がみられる。釉色: 淡黄緑色の釉を両面に施釉。貫入: なし。中国南部の窯。14c終末~15c中頃。	SS01 第1層
〃 〃 4	碗	eタイプ 底部	— — 7.4	器形: 大振りの碗の破片。文様: 見込みに陰文の双魚文が型押しして施されている。素地: 淡灰白色の粗粒子で、微細な黒色鉱物が多くみられる。釉色: 淡灰緑色の釉を両面に施釉後に外底面の釉を輪状に描き取って蛇の目状とする。貫入: 両面に細かい貫入がみられる。中国南部の窯。14c終末~15c中頃。	SS01 北側 第4層b
〃 〃 5	外反 口 縁 皿	口縁部	— —	器形: 外反口縁皿。口縁部が大きく外側に折れている。文様: なし。素地: 淡灰白色の微粒子。釉色: 淡青緑色の釉を両面に施釉。貫入: 両面に細かい貫入がみられる。龍泉窯系。14c終末~15c中頃。	SS01 第1層
〃 〃 6	外反 口 縁 皿	口縁部	— — —	器形: 〃。口縁部が緩やかに外反する。文様: 内面の胴下部に片切彫り刻花文を描く。素地: 淡灰白色の微粒子。釉色: 淡青緑色の釉を両面に施釉。貫入: なし。龍泉窯系。14c終末~15c中頃。	SS01 北側 第4層b
〃 〃 7	外反 口 縁 皿	底部	— — 6.0	器形: 外反口縁皿の高台破片とみられる。高台脇から丸味を持たせて胴部へ移行する。文様: なし。素地: 淡灰白色の微粒子。釉色: 淡青緑色の釉を両面に施釉後に外底面の釉を搔き取って露胎とする。貫入: 両面に細かい貫入がみられる。龍泉窯系。14c終末~15c中頃。	SS01 第1層
〃 〃 8	皿	底部	— — 5.8	器形: 皿の高台破片。高台脇から大きく外側に開きながら若干丸味を持たせて胴部に移行する。文様: 見込みに印花葉文を施した後に見込みの釉を円形状に搔き取って露胎とする。素地: 淡灰色の微粒子で、微細な黒色鉱物が多くみられる。釉色: 淡黄緑色の釉を外面が疊付まで施釉する。内面は見込みの釉を搔き取って露胎とする。貫入: なし。中国南部の窯。14c終末~15c中頃。	SS01 石敷 東端部分
〃 〃 9	鉄 縁 盤	口縁部	— — —	器形: 鉄縁盤。口縁端部を上方に擁込み上げてタガ状に成形する。文様: 内面に2本櫛で蓮弁文を描いている。素地: 淡黄白色の微粒子で、微細な気泡痕が少量観察できる。釉色: 淡緑黄色の釉を両面に施釉。貫入: なし。龍泉窯系。14c後半~15c。	C-11 SS01 北側 第4層b
〃 〃 10	酒 会 壺	蓋	— — —	器形: 鉄縁のみが残存する薄造りの蓋。文様: 外面に丸彫りの刻花文を描く。素地: 光沢のある淡灰白色の微粒子。釉色: 淡青緑色の釉を蓋上面から口縁部下端まで施釉。内面は施釉が施されていない。露胎のままである。釉下に微細な気泡がみられる。貫入: 細かい貫入がみられる。龍泉窯系。14c終末~15c。	SS01 第1層
〃 〃 11	酒 会 壺	底部	— — (18.4)	器形: 高台外面で一端くびれてから緩やかに外側に開いて胴部に移行する壺。高台疊付が破損している。壺内面に底面となる陶土の貼り付けがみられる。文様: 外面の高台近いから縁彫りで蓮弁文を描く。素地: 淡灰白色の微粒子。釉色: 淡青緑色の透明釉。外外面の高台下端が露胎。貫入: なし。龍泉窯系。14c後半~15c中頃。	SS01 石敷 東端部分

注 ():推定、(ー):計測不可



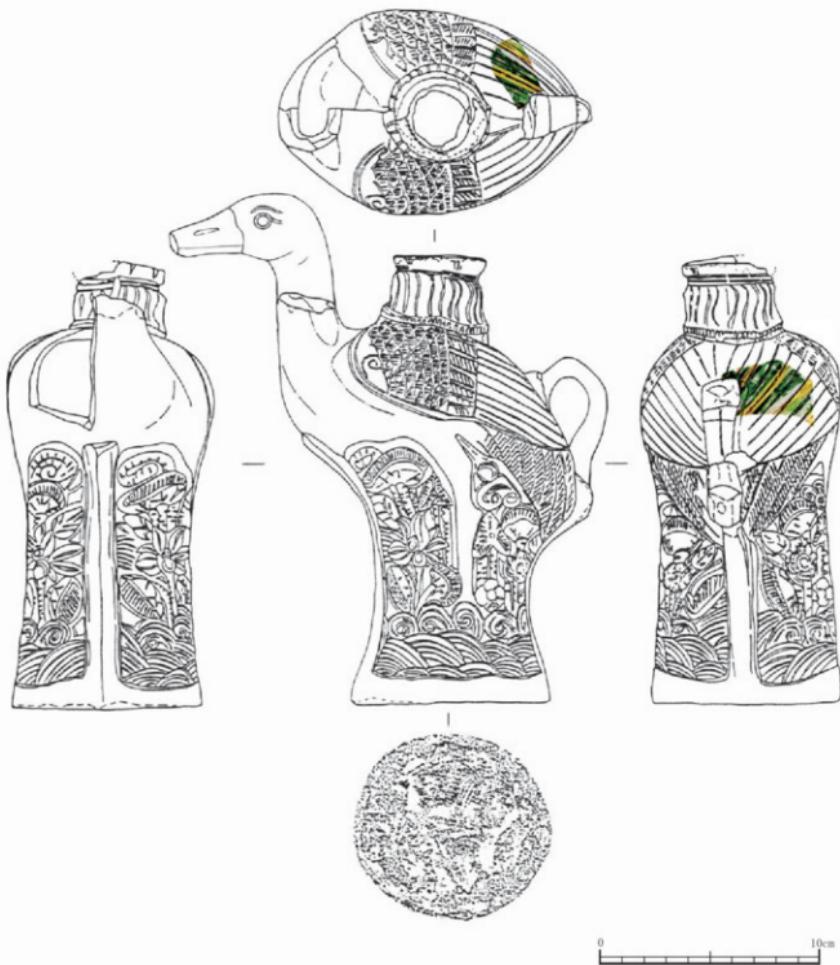
第43図 石敷きSS01出土品④ 青磁：1～11

第77表 石敷きSS01 青花・彩釉陶器・中国産褐釉陶器・タイ産土器(半練)観察一覧

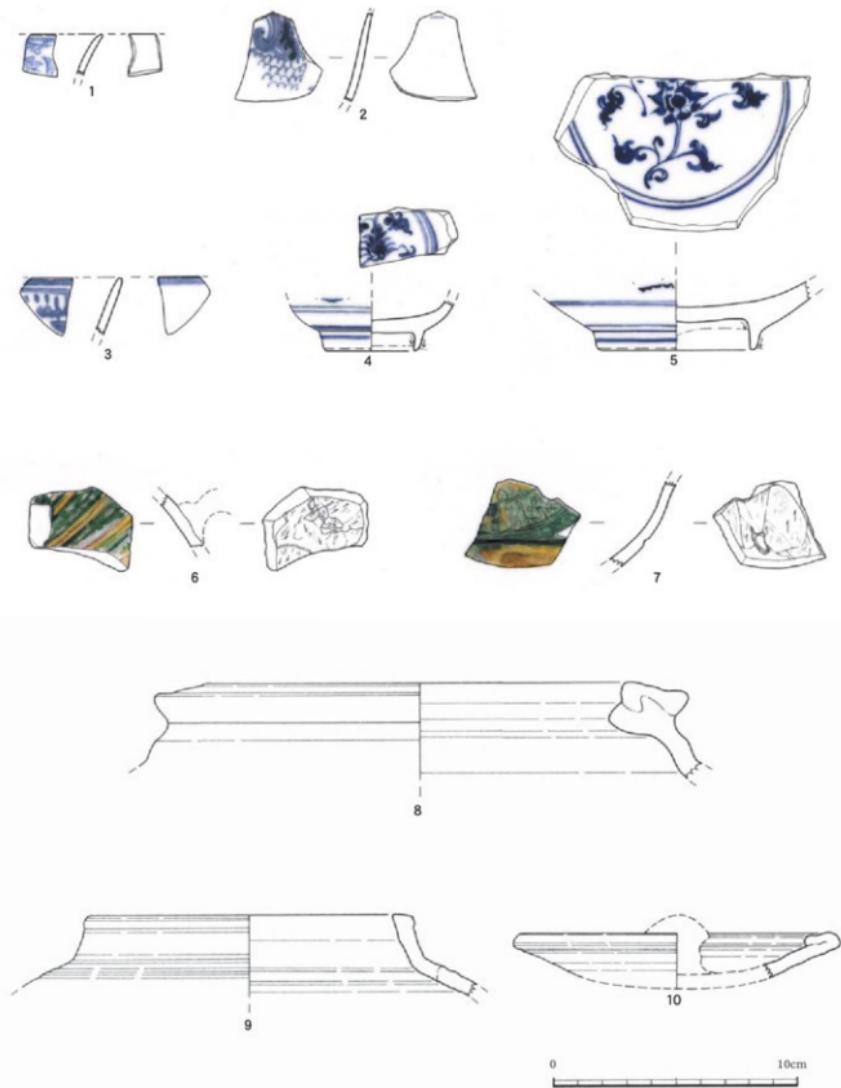
単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第45図 図版37 1	青花	小碗	口縁部	器形:外反口縁小碗。文様:外面に吳須で口縁部に二条一組の界線を描き、その直下に細繩の草花文とみられる文様を描く。素地:光沢のある白色の微粒子。釉色:淡青白色の釉が両面にみられる。貢入:なし。景德鎮窯。18c終末~19c中頃。	C-11 SS01 第1層
〃 2				器形:外反口縁碗の脚部。文様:外面に主文の「雲文」と「龍」とみられる文様を描く。内面に界線が一條確認できる。所謂雲堂手の文様。素地:淡灰白色の微粒子。釉色:淡灰白色の釉が両面にみられる。貢入:なし。景德鎮窯。15c前半~15c中頃。	SS01 第1層
〃 3				器形:直口口縁碗。文様:外面口縁に二条の界線と波濤文を描き、その直下に如意頭唐草文とみられる文様を描いている。内面に界線が一条確認できる。素地:淡灰白色の微粒子。釉色:淡灰白色の釉が両面にみられる。貢入:なし。景德鎮窯。16c前半~中頃。	C-11 SS01 北側 第4層b
〃 4		小碗	底部	器形:高台脇から丸味を持たせて内側に閉まつ脇部に移行する碗。文様:外面は脇部と高台外面にそれぞれ二条の界線を描く。脇部の界線直上には主文とみられる文を描いておりが構図が判然しない。内面の見込みには二重の圓線と宝相華唐草文を描いている。素地:淡灰白色の微粒子。釉色:淡灰白色の釉は疊付を除いて両面に施す。貢入:なし。景德鎮窯。15c頃。	SS01 第1層
〃 5				器形:高台脇から若干丸味を持たせて外側に開き気味に脇部に移行する碗。文様:外面は脇部に主文の一部とみられる草花文を描き、その直下に二条の界線を施す。高台脇と高台外面にも圓線を施す。内面の見込みには二重の圓線と宝相華唐草文を描いている。素地:淡灰白色の微粒子。釉色:淡灰白色の釉を両面に施釉後に疊付と高台内面直中までを露胎とする。貢入:阿面に粗い貢入がみられる。景德鎮窯。15c(明切)。	C-11 SS01 北側 第4層b
〃 6		彩釉陶器	鶴形水注	器形:型物水注で、鶴型の羽の部分にある破片。文様:型で羽を沈線文で表現したものを起している。裏面は雑なナデと指圧がみられる。素地:淡黄白色の細粒子で、粗細な石英を少量含むが僅かに微細な黒色鉱物もみられる。釉色:外面にのみ施釉、外側の羽の部分に緑色と黄色の釉を交互に施釉。貢入:微細な貢入がみられる。中国南部(福建・廣東)の窯。15c後半~16c。	C-11 SS01 北側 第4層b
〃 7				器形:型物水注で、鶴型の羽の部分にある破片。文様:型で羽(羽の輪郭は二重沈線で曲線となる。羽の一枚一枚は、沈線と短沈線を組み合わせて表現)と脇下部を横位の深い沈線文で表現したものと起している。裏面は雑なナデがみられる。裏面には陶土の小さな塊と白化粧土の付着がみられる。素地:淡橙色の細粒子で、粗細な石英と黒色鉱物が僅かにみられる。釉色:外面にのみ施釉、外側の羽の部分は緑色で、脇下部が黄色を施す。貢入:微細な貢入がみられる。中国南部(福建・廣東)の窯。15c後半~16c。	C-11 SS01 北側 第4層b
〃 8		中国産褐釉陶器	壺	器形:口縁部の縱断面が歪な隅丸形状の肥厚口縁とする怒り肩の壺。口縁部の肥厚は陶土の維持足として製作されている。口唇部を回転指圧で浅く凹ませてある。内面口縁部も同様の手法で凹ませて蓋受けの溝を造る。文様:なし。器面調整:外面の袖上からの觀察では輪轉痕が顕著にみられる。内面は輪轉調整が丁寧にナデ消されている。素地:淡灰白色の粗粒子で、粗細な石英を多量に含む。色調:両面に茶褐色の釉を施した後に口唇部の釉を離して露胎とする。焼成:良好で堅い。中国南部の窯。15c~16c。	C-11 SS01 北側 第4層b
〃 9				器形:口縁部の縱断面で小さく歪な台形状の肥厚を造る怒り肩の壺。文様:なし。器面調整:外面の輪轉痕は内面より顕著にみられる。外面の輪轉痕は稚で肥厚帯及び肥厚帯直下にも籠ナデ様の輪轉痕が稚に加わっている。素地:淡橙色の細粒子で、粗細な石英や茶褐色の鉱物を少量含む。色調:両面に茶色の釉がみられる。焼成:良好で堅い。中国南部の窯。16c。	C-11 SS01 北側 第4層b
〃 10	(半練土器) タイ (半練土器)	蓋 IV 類	端部	器形:蓋端部近くの縱断面が歪な隅丸台形状の突帯を造る落とし蓋。器面調整:上面は、端部近づから肥厚部までが丁寧なナデで、他は稚でナデがみられる。下面は外周縁近くに丸籠で沈線様の削りを加えて縁端を強調する。外周縁近くから上面半部が刷毛目様のナデを加え、下面上半部から下半部までが丁寧な擦痕がみられる。素地:灰青色の粗粒子で、粗細な石英を多く含み稀に細かい茶褐色の鉱物がみられる。色調:両面とも暗褐色を帯びるが、外周縁が部分的に黒褐色を帯びる。焼成:良好で堅い。15c~16c。	C-11 SS01 第1層

注「-」:計測不可



第44図 石敷きSS01出土品の資料の重ね図
金城亀信「豊見城村内確認の明代三彩鶴形水注」『文化課紀要』第6号1990年3月発行



第45図 石敷きSS01出土品⑤ 青花：1～5、彩釉陶器：6・7、中国産褐釉陶器：8・9、
タイ産土器(半練)：10

第78表 石敷きSS01 本土産陶磁器出土状況

種類・器種・部位	層序	C-11 SS01			合計
		第1層	第4層a 石敷壁面	北側 第4層b	
		b. 1	b. 1	2	
本土産 印判 染付 印判	碗	b. 1	b. 1	1	
	口縁部		d. 1	1	
	胴部		a. 1	1	
	底部				
	小碗	口縁部	l. 1	1	
	胴部		e. h. f. 3	3	
	底部		h. 1	1	
	皿	口縁部	a. 1	1	
	底部	c. 1		1	
	大鉢	口縁部	d. 1	1	
蓋	—		e. 1	1	
	器種不明	口縁部	d. e. 2	2	
ペロ藍	器種不明	胴部	i. 1	2	
	碗	口縁部	—	1	
クロム 青磁	小碗	胴部	—	1	
	香炉	口縁部	—	1	
	袋物	胴部	—	1	

注 印判染付:印判 [a:印判染付, b:型紙捺り, c:型紙転写, d:型紙+ダミ, e:銅版転写, f:銅版転写+ダミ,

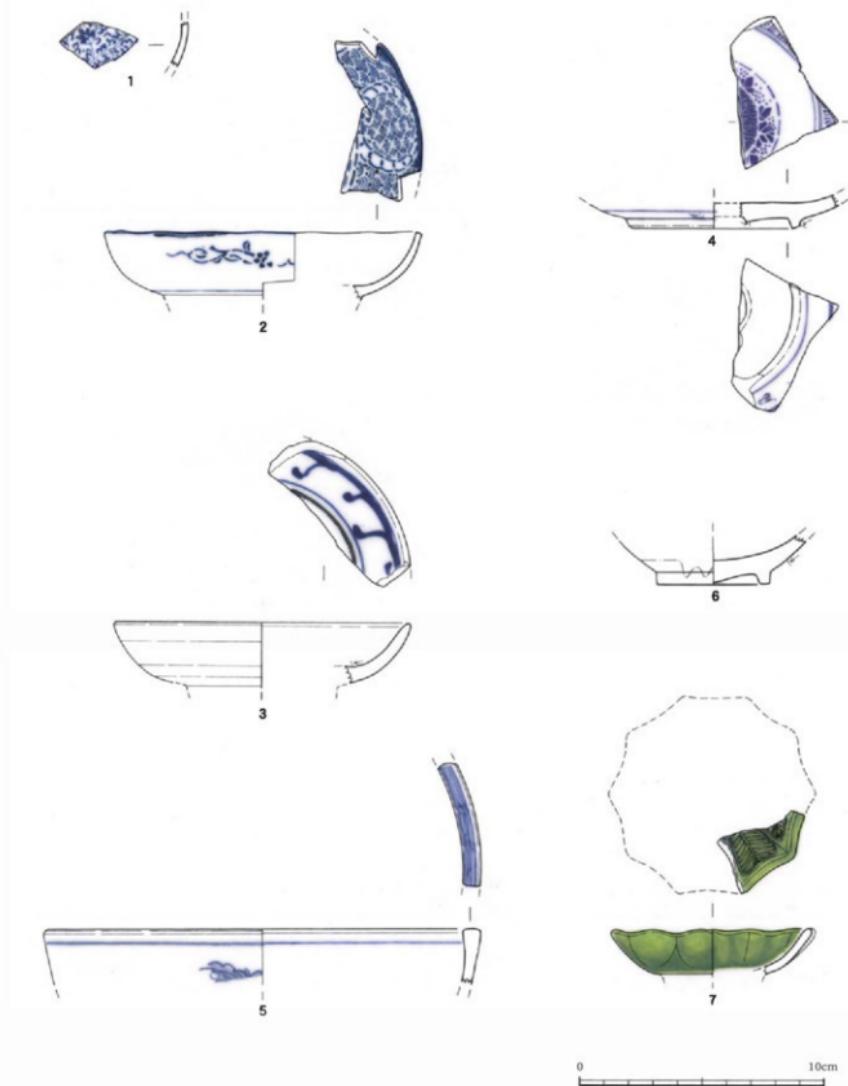
g:銅版転写+型紙転写, h:スタンプ, i:シール転写(近現)]

種類・器種・部位	層序	C-11 SS01			合計
		第1層	第4層a 石敷壁面	北側 第4層b	
		1	1	2	
本土産 磁器	碗	口縁部	底部	—	
	小碗	底部	—	1	
	皿	底部	—	2	
	鉢	口縁部	—	2	
	円筒形	口縁部	—	1	
	容器	底部	—	1	
	部位不明	—	—	1	
	絵の具皿	—	—	1	
	器種不明	胴部	—	3	
	器種不明	胴部	部位不明	4	
合計				12 1 30 43	
九州産か? 本土 陶器	九州産か?	小碗	底部	—	
	平底焼	皿	口縁部	—	
	肥前	鉢	胴部	—	
	唐津系、肥前	—	—	1	
	薩摩	壺	胴部	—	
	薩摩	壺	胴部	—	
合計				2 0 4 6	

第79表 石敷きSS01 本土産陶磁器観察一覧

補図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第46図 図版38 1	小碗	胴部	—	器形: 胴部で丸味を帯びた小碗の胴部破片とみられる。文様: 外面に細筆描で蔓唐草文を描いている。素地: 淡灰白色の微粒子。釉色: 白色。銅版転写+ダミ。18c末~19c前半。	C-11 SS01 北側 第4層b
			—		
			—		
〃 〃 2	皿	口縁部	13.0	器形: 型抜き成形の皿。文様: 文様は外表面とも印判手型紙摺で、外面に花唐草文と界線を施している。内面は花文、波文(青海波)を起こしている。見込みには途切れた短沈線で二条の團線がみられる。素地: 光沢のある淡灰白色の微粒子。釉色: 白色。型紙摺。肥前。明治・大正期。	SS01 北側 第4層b
			—		
〃 〃 3	本土 産 磁器	皿	12.0	器形: 直口口縁皿。文様: 内面に逆さの波文を口縁部から胴部にかけて縦に描いている。見込みには二重團線で囲繞する。素地: 淡灰白色の微粒子。釉色: 淡灰白色。印判染付。肥前系or薩摩焼。明治頃。	C-11 SS01 北側
			—		
〃 〃 4	皿	底部	—	器形: 高台脇から大きめ外側に開いて若干丸味を保持したまま胴部へ移行する直口皿。文様: 外面に筆書きで胴部と高台脇に界線を一条施されている。内面は胴下部に短沈線文を組み合わせた文様がみられるが構図は不詳である。見込みには二条の團線(筆書き)と印判手型紙摺による菊花、葉文、團線(短沈線で表現)が起こされている。素地: 光沢のある白色の微粒子。釉色: 淡青白色。型紙転写。肥前系。明治・大正期。	C-11 SS01 第1層
			7.0		
〃 〃 5	大鉢	口縁部	18.0	器形: 直口口縁の大鉢とみられる。口縁部を幅広く成形する。文様: 口縁部に扁平で重な雷文とみられる文様を描く。口縁部には界線と葉文を描いている。内面口縁にも界線を一条描いている。素地: 光沢のある淡灰白色の微粒子。釉色: 両面に淡青白色の釉を施す。質入:なし。型紙+ダミ。肥前。明治期。	C-11 SS01 第1層
			—		
〃 〃 6	本土 産 陶 器	小碗	—	器形: 高台脇から若干外側に開いて胴部で丸味を帯びた小碗。高台脇付が平坦に成形、高台内側は斜位に矧みかれ中央が三角錐状に浅く盛り上がってい。文様: なし。素地: 淡黄灰色の微粒子で、微細な気泡痕が多くみられる。釉色: 白濁した淡黄白色の釉を内面から高台脇まで施す。質入:なし。九州産か。18c~19c前半。	C-11 SS01 北側 第4層b
			4.6		
〃 〃 7	皿	口縁部	8.4	器形: 推定復元を試みたところ多角(十角)形の皿となつた。型物成形。文様: 内面には扇(單配)と構図不詳の文様が陽文で起こされている。素地: 淡黄白色の微粒子。釉色: 内外面に草緑色の釉が施されている。質入: 内面に微細な質入がみられる。平底焼。19c	SS01 第1層
			—		

注 「-」: 計測不可



第46図 石敷きSS01出土品⑥ 本土産磁器：1～5、本土産陶器：6・7

第80表 石敷きSS01 沖縄産陶器出土状況

種類・器種・部位	層序	C-11 SS01		合計
		第1層	北側第4層b	
沖縄産 施釉陶器	碗	口縁部	3	1
		胴部	1	1
		底部	3	2
	小碗	口縁部	1	1
		底部	1	1
	皿	口縁部	1	1
		底部	1	1
	鉢	胴部		1
		底部	1	1
	鍋	胴部	1	1
		底部	1	2
	壺	胴部	1	1
		底部	1	2
	壺or鉢	胴部		1
		底部	1	1
	鉢or香炉	口縁部		1
		底部	1	1
	急須	口縁部		1
		頸部		1
		胴部	2	4
		底部		2
		蓋		1
	酒器	底部	1	1
		瓶	1	1
	火炉	口縁部	1	1
		火取	口縁部	1
	袋物	蓋		1
		器種不明	胴部	1
	合計		19	23
				42
沖縄産 無釉陶器	鉢	口縁部	1	1
	水鉢	口縁部	1	1
	擂鉢	底部	1	1
	甕	口縁部		1
	酒器or攪	胴部		1
		底部	5	14
	器種不明	胴部	1	1
	合計		9	18
				27

第81表① 石敷きSS01 沖縄産施釉陶器観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 底径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第47図 図版39 1	灰釉 碗	口縁部	— — —	器形:直口口縁碗。文様:なし。器面調整:釉上からの観察では、外面が丁寧な輪廻調整で、内面には回転擦痕がみられる。素地:淡灰色の細粒子で、微細な石英や黒色の鉱物を少量含む。劈開面から微細な剥離状態の気泡痕が多くみられる。釉色:緑灰色の透明釉を両面の胴部中央付近まで施す。フィガキー(器の高台を揃え主で口縁を逆さにして釉薬に浸して釉掛けをおこなう)手法。貫入:なし。	SS01 北側 第4層b
# # 2	染付 碗	口縁部	— —	器形:外反口縁碗。文様:外面に具須で草花文を描く。素地:淡灰色の細粒子で、微細な石英や黒色の鉱物を少量含む。稀に茶黒色の粗い鉱物がみられる。釉色:白化粧後に透明釉を施す。貫入:両面に粗細な貫入がみられる。	SS01 第1層
# # 3	染付 碗	底部	— — 6.6	器形:外反口縁碗の底部とみられる。文様:外面に具須で花文を描くもので、花弁のみ残存する。器面調整:釉上からの観察では、両面とも輪廻調整である。素地:淡橙色の細粒子で、微細な鉱物(石英、黒色、茶褐色)を多く含む。釉色:下地に白化粧後に透明釉を両面施粧後に見込みの釉を輪状(蛇の目状)に搔き取って露胎とする。豊付釉も搔き取られ露胎となるが重ね焼きの白色(石灰質)の目痕が帯状に付着する。貫入:両面に細かい貫入がみられる。	C-11 SS01 北側 第4層b

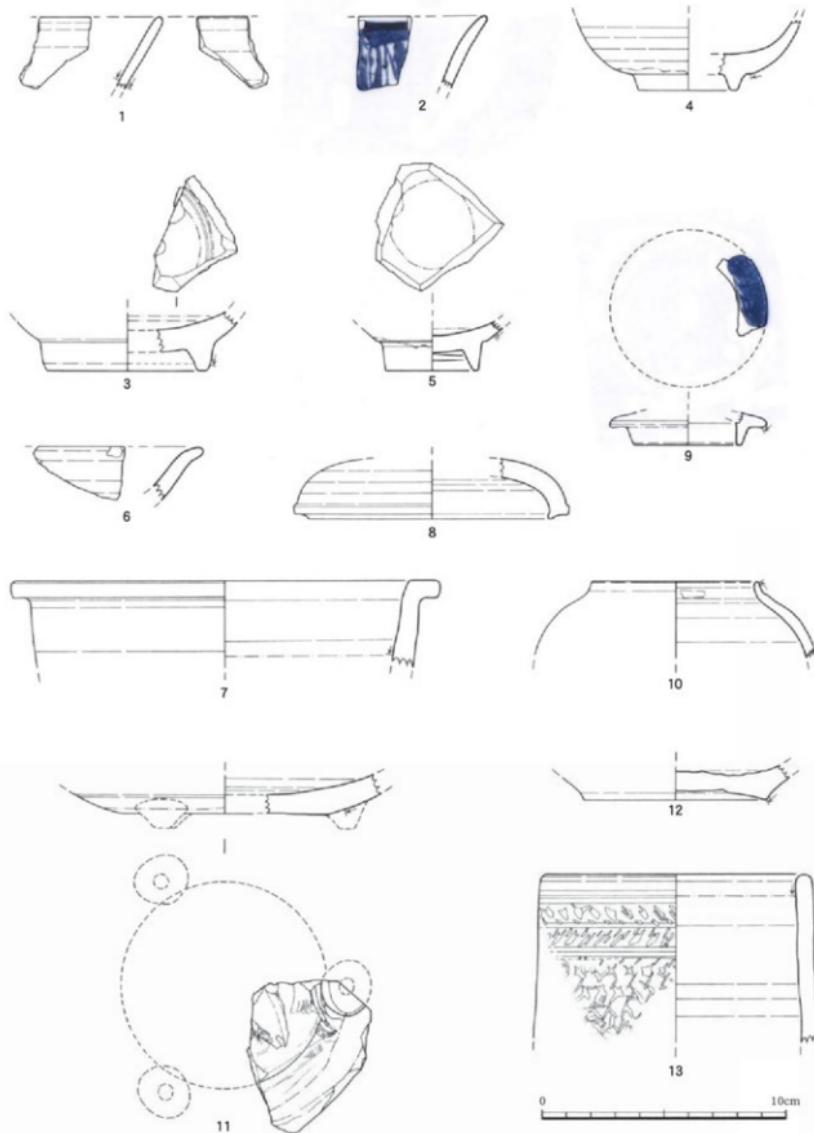
注:「—」:計測不可

第81表② 石敷きSS01 沖縄産施釉陶器観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 底径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第47図 図版39 4	白釉 小碗	底部	— — 4.0	器形:直口線or外反口線の小碗の底部とみられる。文様:なし。器面調整:釉上から観察では、両面とも丁寧な輪轂調整とみられる。高台内割りは深い。疊付は平坦に仕上げる。素地:淡黄白色の微粒子で、微細な鉱物(石英、茶褐色)が僅かにみられる。釉色:白濁した灰白色の釉を内面から外面高台際まで施釉。フィガキー手法の範囲に含まれる。貫入:なし。	C-11 SS01北側 第4層b+ フーチン8北
〃 〃 5	灰釉 小碗	底部	— — 3.8	器形:〃。文様:なし。器面調整:両面とも丁寧な輪轂調整。高台内割りは深く、外底面が微弱に盛り上がっている。疊付の幅(1.76~2.75mm)は狭いが、平坦に仕上げる。素地:淡橙白色の細粒子で、微細な石英が僅かにみられる。釉色:白濁した灰黄色の釉は、外高台際まで施釉し、内面は釉を施釉後に蛇の目状に搔き取って露胎とする。貫入:なし。	SS01 第1層
〃 〃 6	白釉 皿	口縁部	— — —	器形:外反口線皿。文様:なし。器面調整:釉上からの観察では、両面とも丁寧な輪轂調整とみられる。素地:淡黄白色の微粒子で、微細な鉱物(石英、茶褐色)が僅かにみられる。釉色:両面とも白化粧土から透明釉を施す。貫入:両面に粗い貫入がみられる。	SS01 第1層
〃 〃 7	灰釉 鉢 or 香炉	口縁部	17.6 — —	器形:口縁部の縦断面が逆さ「L」字状となる鉢or香炉。口唇部が幅広(12.16mm)に形成する。外反口線皿。文様:なし。器面調整:釉上からの観察では、両面とも丁寧な輪轂調整とみられる。素地:淡橙白色の微粒子で、微細な鉱物(石英、茶褐色)が僅かにみられる。釉色:灰绿色の透明釉を内面口縁から外面まで施す。貫入:なし。	C-11 SS01 北側 第4層b
〃 〃 8	袋物	蓋	11.2 — —	器形:袋物(壺類)の被せ蓋。蓋甲上面が饅頭の様に盛り上がっている。蓋の外周縁を小さく方形状に外側に突出させて成形する。蓋の内面縁沿いで身部の口縁と合致させる目的で三角形状に突出させて成形する。文様:なし。器面調整:釉上からの観察では、内面に丁寧な回転擦痕がみられる。素地:淡橙白色の微粒子で、微細な石英が少量みられる。開閉面から微細な気泡痕が多くみられる。釉色:両面に白化粧土を施した後に外面にのみ透明釉を施す。貫入:外面にのみ微細な貫入がみられる。	SS01 北側 第4層b
〃 〃 9	白釉	急須	6.4 — —	器形:急須蓋。被せ蓋。蓋甲下面の縁沿いで身部の口縁と合致させる目的で高台状に細長く突出させて成形する。文様:蓋甲上面に具須で文様を描くが構圖は判然しない。器面調整:蓋甲内面に丁寧なナデと回転擦痕がみられる。素地:淡灰白色の微粒子で、微細な石英や黒色の鉱物が僅かにみられる。開閉面から微細な気泡痕が僅かにみられる。釉色:蓋甲上面にのみ施釉。白化粧土を施した後に透明釉を施す。貫入:外面にのみ粗い貫入がみられる。	SS01 北側 第4層b
〃 〃 10	鉄釉	急須	— — —	器形:鉄釉急須の身部、短頸急須で、口縁は垂直に成形し、全体的に内湾気味の下懸れの急須とみられる。文様:なし。器面調整:内面の口縁部のみナデで、胸部は回転擦痕が顕著にみられる。素地:淡灰色の細粒子で、微細な石英や黒色の鉱物が多くみられる。釉色:茶褐色の釉を外面にのみ施す。貫入:なし。	SS01 北側 第4層b
〃 〃 11	白釉染付	急須	— — 8.4	器形:白釉染付の急須の底部。文様:外面に僅かに呉須が垂れている。器面調整:釉上から観察では、外面胴部は丁寧なナデ調整とみられる。足(脚部)を貼り付けた周辺には半円形状にナデが施されている。外底面には糸切りの可能性があるが白化粧土が厚く施され認知しない。内面も白化粧土が判然としないが回転擦痕が刷毛目模様となる。素地:灰色の細粒子で、微細な鉱物(石英、黒色、茶褐色)の鉱物が多くみられる。釉に粗い赤茶色の物質(サイズ:4.72~5.46mm)が混入される。釉色:外面上に白化粧土を塗布した後に外面にのみ透明釉を底面近くまで施釉。貫入:外面にのみ細かい貫入がみられる。	C-11 SS01 北側 第4層b
〃 〃 12	灰釉	酒器	— — 7.4	器形:カラカラと俗称される酒器の底部。高台内割りが疊付外端から斜位に削り出して蛇の目状に成形する。文様:なし。器面調整:内面は反時計回りの輪轂痕が顕著にみられる。素地:灰色の細粒子で、細かい石英や黒色の鉱物が僅かにみられる。釉色:外面にのみ施釉。下地に白化粧土を塗布し、その上から透明釉を施してから外底面の釉を雜に蛇の目状に搔き取って露胎とする。貫入:外面に粗細な貫入がみられる。	C-11 SS01 第1層
〃 〃 13	白土象眼	火取	— — 11.0	器形:円筒形の火取の口縁部。口唇部を舌状に厚みを持たせて成形する。文様:外面は工具による文様を彫り込んだ後に白土で象眼とする三島手技法を採用。文様構成は、ロ線部に輪羽状(蘇鉄葉の葉状)の文様を彫り込んでいる。有輪羽状の文様帶の上下に丸彫りによる二条一組の界線で区画する。有輪羽状文様の直下には線彫りで崩れた格子目の文様を彫り込んでいる。器面調整:内面は回転擦痕が顕著にみられる。素地:灰色の細粒子で、粗細な石英と微細な黒色の鉱物が少量含まれる。釉色:外面から内面口縁まで施釉。灰色の透明釉を施しているが白濁する。貫入:なし。	SS01 北側 第4層b

注「-」:計測不可、「+」:接合の意



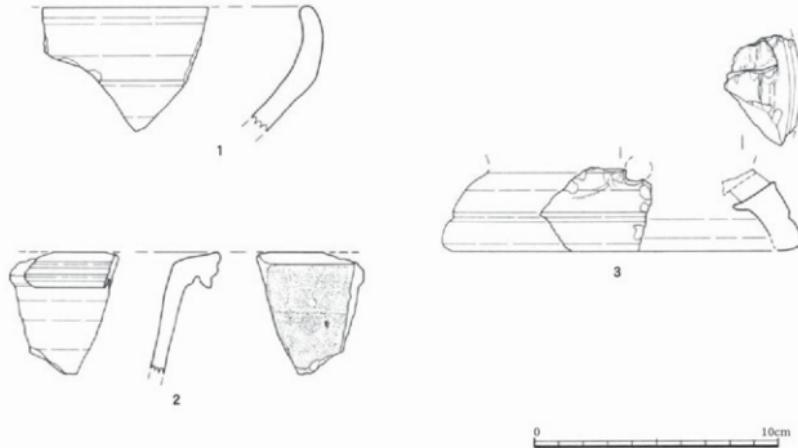
第47図 石敷きSS01出土品⑦ 沖縄産施釉陶器：1～13

第82表 石敷きSS01 沖縄産無釉陶器観察一覧

単位:cm

押団番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	部位	口径 器高 底径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土地点 出土層
第48図 図版40 1	水鉢	口縁部	— — —	器形:内湾口縁の水鉢。口縁部に微弱な段差を付けて口縁部を肥厚させている。文様:なし。器面調整:両面に丁寧な回転擦痕がみられる。素地:橙色の細粒子で、粗細な鉱物(石英、黒色、茶褐色)を少量含む。色調:外面は口縁部のみが暗褐色で、肥厚帯直下が橙色を帯びる。内面は橙色。焼成:良好で堅い。	C-11 SS01 第1層
〃 〃2	鉢	口縁部	— — —	器形:外傾する擂鉢か捏ね鉢の口縁破片。陶土を口縁部分で外側に丁寧に折り曲げて成形する為、口唇部が幅広(17.97mm)となる。文様:口縁部の肥厚帯部分に二条一組の界線を丸彫りで施す。肥厚帯直下に段差を付けて肥厚部を強調する。器面調整:両面に丁寧な回転擦痕がみられる。素地:淡橙色の細粒子で、粗細な鉱物(石英、黒色、茶褐色)を少量含む。稀に粗い茶褐色の鉱物(サイズ:3.93~5.40mm)がみられる。色調:両面とも橙色を帯びる。焼成:良好で堅い。	SS01 第1層
〃 〃3	擂鉢	底部	— — 14.8	器形:擂鉢の脚台部。脚部に隅丸長方形状の粗孔を穿っている。穿孔の際に2・3回穿った為、陶土が外側面にバツ状に突出する。文様:脚部下端(足付)から上方に片切ぎで界線を一条(幅3.47mm)開継する。器面調整:外面上には茶褐色の自然釉が被っているが釉上からの観察では、回転擦痕と粗目の刷毛目様の擦痕がみられる。内面は回転擦痕のみが観察される。素地:淡茶紫色~淡橙色の細粒子で、粗細な鉱物(石英、茶褐色)を僅かに含む。稀に細かい茶褐色の鉱物がみられる。色調:外面上は茶褐色(自然釉)で、内面が淡茶白色となる。焼成:上記1・2よりも焼成が良好で堅い。	C-11 SS01 第1層

注 「—」:計測不可



第48図 石敷きSS01出土品⑧ 沖縄産無釉陶器 : 1~3

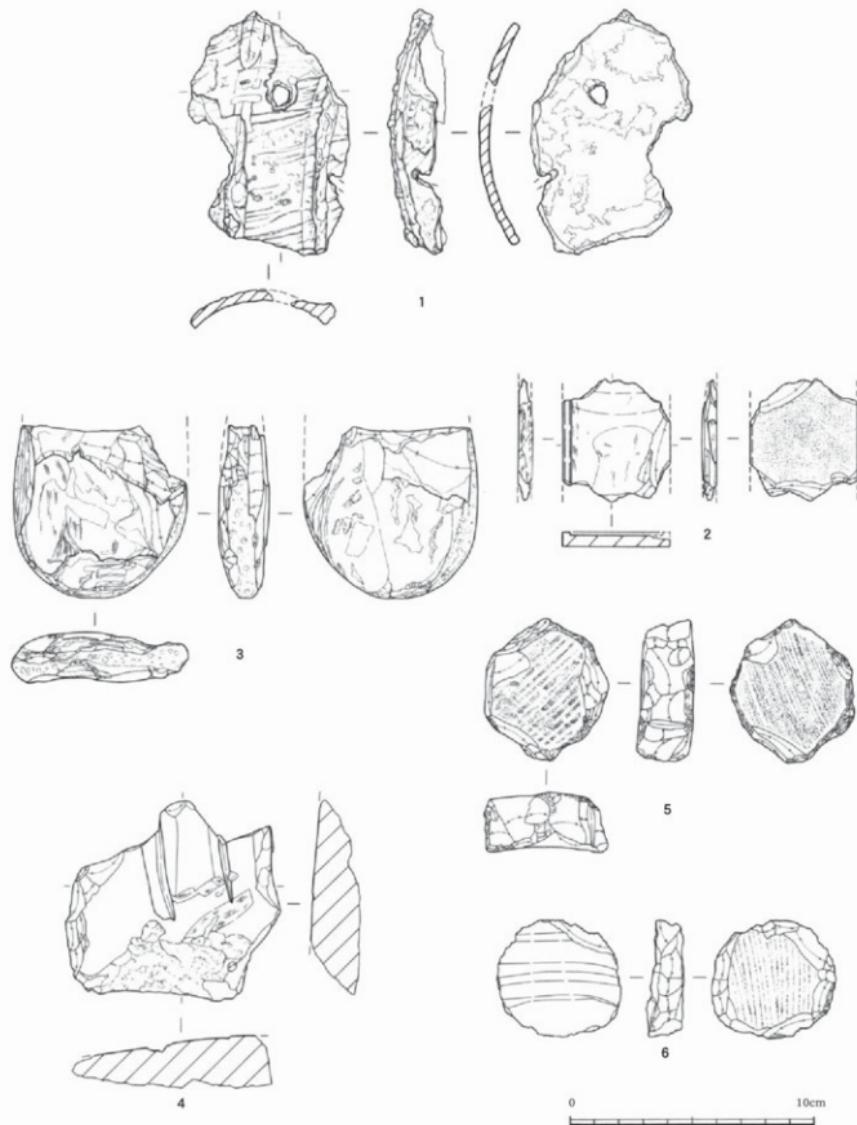
第83表 石敷きSS01 貝製品・石製品・石材・自然石・円盤状製品出土状況

種類	層序				合計	層序	C-11 SS01				合計	
	第1層	第4層	北側	石敷直上			第1層	第4層	北側	石敷直上		
貝製品	未製品		1		1		角閃石安山岩	1			1	
	合計	0	1	0	0	1	細粒砂岩(ニービ)	15	23	1	43	
石製品	硯	黒色頁岩	1		1		石墨岩				1	
		赤色頁岩(中国か韓半島産の可能性あり)	1		1		自然石				1	
		石器片(羽目板片)	細粒砂岩(ニービ)	1		1		河原石	4	6		10
		石皿片	黒色千枚岩			1		合計	20	29	1	55
		石鏟片	本部石灰岩(古生代今帰仁層)	1		1		円盤状製品	瓦		1	1
			細粒砂岩(ニービ)	3		3		沖縄産無釉陶器	2			2
			硫球石灰岩	1		1		合計	2	1	0	3
		砥石片	緑色千枚岩			1						
			砂岩	1		1						
			細粒砂岩(ニービ)			1						
	合計	2	8	2	1	13						

第84表 石敷きSS01 貝製品・石製品・円盤状製品観察一覧

博団番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)				出土地点 出土層
第49図 図版41 1	貝製品 未製品	サザエ科ヤコガイの殻の外周縁を粗削りし、孔を二孔穿った製作途中の製品とみられる。正面の上部には外側から孔を複数回穿って穿孔する。孔の平面観が歪な隅丸三角形状となる。他の孔は右側縁辺近にみられ、外側から内側に向かって2・3回実施した為、抉れた溝状の孔となる。研磨や研磨面は観察できない。外周縁部にみられる剥離面の線が潰れている箇所が若干観察できる。正面上部の孔はヤコガイの身を取りるために穿孔した可能性が高いものと思慮されるが、右側縁辺部の孔は製品加工を目的とした孔とみられる。サイズ:縦:10.0cm 横:6.59cm 厚さ:0.53cm 重量:50.9g、正面上面の孔:外径:長軸:9.83mm、短軸:9.18mm 内径:長軸:8.11mm、短軸:7.14mm。右側縁辺近くの孔:外径:長軸:3.62mm、短軸:-。内径:長軸:2.06mm 短軸:-。				C-11 SS01 北側 第4層b
II II 2	硯	薄造りの砥石片で、底部が主に残存し、墨池が僅かに残存する。陸部には固形墨を水で磨りおろした際の使用痕が陸部から墨池方向に微細な線状痕がみられる。左側硯縁と陸部の間に、硯縁の製作痕が線状痕となって平行する。硯縁に桃色の物質が付着することから固形墨以外の赤色墨汁が使用された可能性が高い。右側は硯縁の被破損する側面が僅かに残存する。両側面には製作時の加工痕である線状痕が斜位方向に顕著にみられる。裏面には製作時の微細な研磨痕が身部と平行に線状痕を主体に右側面から左側面に向かって微細な線状痕が斜めに入っている。その他は使用時の傷や意図的に針などで彫り込んだ傷がみられる。黒色頁岩。サイズ:縦:4.98cm、横:4.4cm、厚さ:陸部:4.64mm、硯縁:6.17mm、墨池:3.05mm、重量:18.8g。			C-11 SS01 北側 第4層b	
II II 3	石製品 砥石	扁平な川原石を砥石として利用したようである。砥石以外に叩石としての利用もあり側面に敲打や潰れ、そして剥離面がみられる。表面の被破損面には研磨がみられる。裏面は主に砥石として利用されている。砂岩(頁岩の薄層が挟まっている)製。サイズ:縦:7.08cm、横:7.1cm、厚さ:2.05cm、重量:137.1g。				SS01 第1層
II II 4		細粒砂岩(俗称:ニービヌフ)製の砥石の破片。表面は砥面で、金属製品の刃を研ぎ直す際の溝が二条残存する。裏面は被破損面である。右側に僅かに砥石本来の面が残っている。サイズ:縦:8.2cm、横:8.74cm、厚さ:2.1cm、重量:168.3g。				C-11 SS01 北側 第4層b
II II 5	円盤状製品 高麗瓦	高麗系平瓦の破片を打割調整を加えて円盤状に加工した製品で遊具として使用された。打割調整は主に凸面から実施されている。凹面からの打割調整は3~4回程度実施されているようである。剥離面の縁沿いの潰れや摩滅面が多いようである。使用頻度はある程度は、高かったようである。凹面には布目唐痕がみられる。凸面は羽状の叩き目が一部重なって格子目状となる。素地:淡灰色の細粒子で、微細な氷柱(石英、黒色)が僅かに観察できる。サイズ:縦:5.68cm、横:5.1cm、厚さ:2.2cm、重量:61.4g。				C-11 SS01 北側 第4層b
II II 6	沖縄産無釉陶器	沖縄産無釉陶器の摺鉢の胴部片に外側から打割調整を集中的に加えて円盤状に加工した製品で遊具として使用された。外周縁辺部の打割調整は、主に表面から実施されている。裏面からの打割調整は1回のみ実施されている。剥離面の縁沿いの潰れや摩滅面が少ないとから使用頻度は極めて低かったようである。両面には八条一組の摺目がみられる。素地:淡橙色の細粒子で、粗細な氷柱(石英、黒色、茶褐色)が僅かに観察できる。サイズ:縦:4.74cm、横:5.1cm、厚さ:1.5cm、重量:34.5g。				C-11 SS01 第1層

注「-」:計測不可



第49図 石敷きSS01出土品⑨ 貝製品：1、石製品：2～4、円盤状製品：5・6

第85表 石敷きSS01 金属製品観察一覧

単位:mm/g

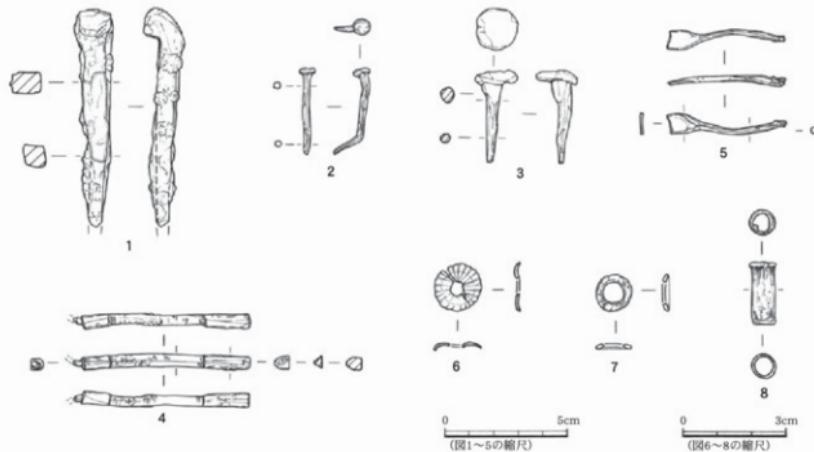
挿図番号 図版番号 遺物番号	分類	名称・ 仮称	材質	残存長 (mm)	残存幅 (横)	残存最大厚 残存最小厚 残存重量	頭部	観察事項	出土地点 出土層
第50図 図版42 1		釘	鉄製品	89.0	12.56	8.74 5.45 33.5	11.5 13.76	ほぼ完形の皆折釘。頭部の厚みが身よりも薄く製作された為、板材への打ち込みや抜き取りの際に頭部先端が身部と接近するほどに内側に強く折り曲げられている。また、身部上面や身部中央で湾曲がみられる。	C-11 SS01 第1層
〃 2	工具類 ・ 生 産 用 具	釘		24.8	2.04	2.26 0.96 0.5	4.30 4.64	青銅製の釘。頭部と身部の位置が鋲形(或いは頭部と身部接合時)のズレにより頭部中心から身部がズレた(釘としてのバランスが崩れた)状態となっている。頭部と身部のズレに起因して、身部上面に屈曲がみられる。先端近くの屈曲部分には使用時に発生した跡割れによって生じた微細な空洞がみられる。身部の先端は微弱に折れている。	C-11 SS01 北側 第4層b
〃 3		釘	青	37.0	5.47	7.45 2.20 8.7	16.5 16.23	二次的な火熱を受けて頭部が溶解してケロイド状となる。頭部の平面観が辺の有る歪な隅丸方形状を呈している。頭部と身部の位置は、身部が頭部の中心からずれた状態にある。頭部は板材などに打ち込む際に変形している。頭部と身部の変形がみられるところから板材などから抜き取る際に変形したようである。先端部は使用により潰れている。頭部と身部に縫合がみられ、特に頭部は緑青による浸食で部分的に欠落する。	C-11 SS01 北側 第4層b
〃 4		引手金具	銅	72.0	4.92	5.26 2.42 6.9	— —	引手の受け軸金具。單管などの引手通し座金に取り付けられる引手の受け軸金具とみられる。受け軸金具の両端に引手可動用の軸(直径1.99~2.19mm)を入れるが右端は外されている。軸の両側の断面は継長の半円形となる。軸の中央から両端近くは断面が三角形形状に加工されていることから引手通し座金と一緒に化させるなど複雑な構造で製作された製品の一部である。	C-11 SS01 第1層
〃 5		覆輪		48.8	7.45	2.38 0.59 1.1	— —	鍍などの縁に取り付けられる覆輪。覆輪が潰れ捻れている。本來は如意頭文を型取っているが、潰れて底状に開いている。武具の縁に填める「U」の字状の溝も潰れて捻れている。鍍金は緑青などにより全て剥落したようである。	C-11 SS01 北側 第4層b
〃 6	武	八双金物の留め金具	製品	14.0	13.7	0.60 0.43 0.5	— —	八双金物とセッタ關係にある留め金具。菊花文を施した菊座(座金具)で外面に鍍金を施す。内面は緑青がみられる。菊花は輪柱による毛彫りで表現する。中央に歪な隅丸方形状の粗孔(一辺の長さ2.30mm、最大綫長3.71mm)を穿つが孔の部分から割れて破損する。孔は主に外側から穿孔したようである。	C-11 SS01 北側 第4層b
〃 7		具		10.4	2.45	0.96 0.86 0.4	— —	八双金物とセッタ關係にある留め金具の菊座と組み合わせて使用するもの。鍍金が施されている。内面は緑青がみられる。表面に接合面とみられる部分が潰されて微弱な起伏のある面が観察されることから船造製品である。青銅を細い板状のものを円形に加工した後に外周縁や孔周縁にヤスリなどの工具を使用して仕上げたようである。中央の孔のサイズは、6.13~6.48mmを測った。	C-11 SS01 北側 第4層b
〃 8		茱萸金物		18.0	6.81	0.93 0.70 2.0	— —	鍍の押付に付属する袖付の茱萸金具。或いは鍍の胴側面にある葦の縁に付属する茱萸金具とみられる。鍍金された円筒形で両端が玉縁状に肥厚する。茱萸金具の上下の孔を観察すると厚みに無駄があることから鍛造による製法と想應される。上位の孔:外径6.87~7.11mm、内径5.02~5.12mm。下位の孔:外径6.53~6.72mm、内径4.88~5.04mm。	C-11 SS01 北側 第4層b

注 「-」:計測不可

第86表 石敷きSS01 金属製品出土状況

分類・種類		層序				合計
		C-11 SS01		第1層	北側第4層b	
工具類・ 生産用具	丸釘	完形	中	鉄	1	1
		完形	中	青銅	1	1
		小	青銅		1	1
	角釘	完形	中	鉄	1	2
		先端部欠損	中	鉄	2	2
		頭部欠損	中	鉄		1
		先端+	中	鉄	1	1
		頭部欠損	不明	鉄		1
	引手金具		青銅		1	1
	近代?の凸型金具 (飾り金具か留め金具)			真鍮		1
武具	札		鉄		1	1
	覆輪		青銅		5	6
	八双金物の留め金具		青銅		2	2
	茱萸金物		青銅		1	1
武器	砲弾片		鉄		10	15
	弾丸		青銅		2	8
	薬莢		青銅		4	4
分類不明	用途不明		鉄		19	1
近・現代	ボタン		青銅		1	1
	鉄管		鉄		1	1
合 計		15		60	1	5
						81

注 釘のサイズは、中：1寸半～5寸まで(3.75cm～15.75cm未満)、小：1寸まで(3.75cm未満)



第50図 石敷きSS01出土品⑩ 金属製品：1～8

第87表 石敷きSS01 二次の火熱溶解銭貨

銭名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
開元通寶(唐621年初鋤)	1片	2.13	「開」・「通」・「寶」の三字が残存	C-11 SS01第1層
咸平元寶(北宋998年初鋤)	1片	1.41	「咸」・「寶」の二字が残存	C-11 SS01石敷東端部分
天聖元寶(北宋1023年初鋤)	1片	0.79	「天」の一宇が残存	C-11 SS01北側第4層b
明道元寶(北宋1032年初鋤)	1片	1.57	「明」・「寶」の二字が残存	C-11 SS01北側第4層b
皇宋通寶(北宋1038年初鋤)	1片	1.54	「皇」・「寶」の二字が残存	C-11 SS01石敷直上
	1片	0.95	「宋」の一宇が残存	C-11 SS01石敷東端部分
	1片	0.61	「宋」の一宇が残存	
熙寧元寶(北宋1068年初鋤)	1片	0.79	「熙」の一宇が残存	C-11 SS01第1層
	1片	1.33	「熙」・「寧」の二字が残存	
	1片	0.49	「熙」の一宇が残存	C-11 SS01北側第4層b
	1片	1.50	「熙」・「寶」の二字が残存	C-11 SS01石敷東端部分
	1片	0.77	「熙」の一宇が残存	
元豐通寶(北宋1078年初鋤)	1片	1.96	「元」・「豐」の二字が残存	
	1片	1.70	「豐」・「通」の二字が残存	C-11 SS01第1層
	1片	1.56	「豐」の一宇が残存	
元祐通寶(北宋1086年初鋤)	1片	2.32	「元」・「通」・「寶」の三字が残存	C-11 SS01北側第4層b
	1片	1.26	「元」・「祐」の二字が残存	C-11 SS01石敷直上
紹聖元寶(北宋1094年初鋤)	1片	1.75	「元」・「寶」の二字が残存	C-11 SS01第1層
聖宋元寶(北宋1101年初鋤)	1片	1.95	「聖」・「寶」の二字が残存	C-11 SS01第1層
大觀通寶(北宋1107年初鋤)	1片	1.35	「大」・「通」の二字が残存	C-11 SS01第1層
政和通寶(北宋1111年初鋤)	1片	1.21	「政」・「寶」の二字が残存	C-11 SS01石敷東端部分
宣和通寶(北宋1119年初鋤)	1片	0.84	「和」の一部、「通」の一宇が残存	C-11 SS01第1層
淳熙元寶(南宋1174年初鋤)	1片	1.62	「熙」・「元」の二字が残存	C-11 SS01第1層
洪武通寶(明1368年初鋤)	1片	2.67	「洪」・「武」・「通」・「寶」の四字が残存	C-11 SS01石敷東端部分
	1片	1.00	「洪」の一宇が残存	
	1片	1.25	「洪」・「寶」の二字が残存	C-11 SS01第1層
不明銭貨	1片	0.53	「寶」の一宇が残存	
	1片	1.68	「〇」・「寶」の二字が残存	
	1片	0.93	「寶」の一宇が残存	
	1片	0.71	「寶」の一宇が残存	
	1片	1.56	「元」・「寶」の二字が残存	C-11 SS01第1層
	1片	2.03	「元」・「寶」の二字が残存	
	1片	0.81	「通」の一宇が残存	
	1片	0.73	判読不可	
	5片	3.41	-	
	1片	1.04	「元」の一宇が残存	
	1片	0.68	「通」の一宇が残存	
	1片	0.60	「寶」の一宇が残存	
	1片	0.72	「元」の一宇が残存	
	1片	0.49	「元」の一宇が残存	C-11 SS01石敷東端部分
	1片	0.50	「元」の一宇が残存	
	1片	0.76	「寶」の一宇が残存	
	1片	0.51	「寶」の一宇が残存	
	-	2.55	-	
	2片	1.04	-	
	3片	1.47	-	C-11 SS01北側第4層b
	-	1.24	-	
合計	52			

第88表 石敷きSS01 ガラス製品出土状況

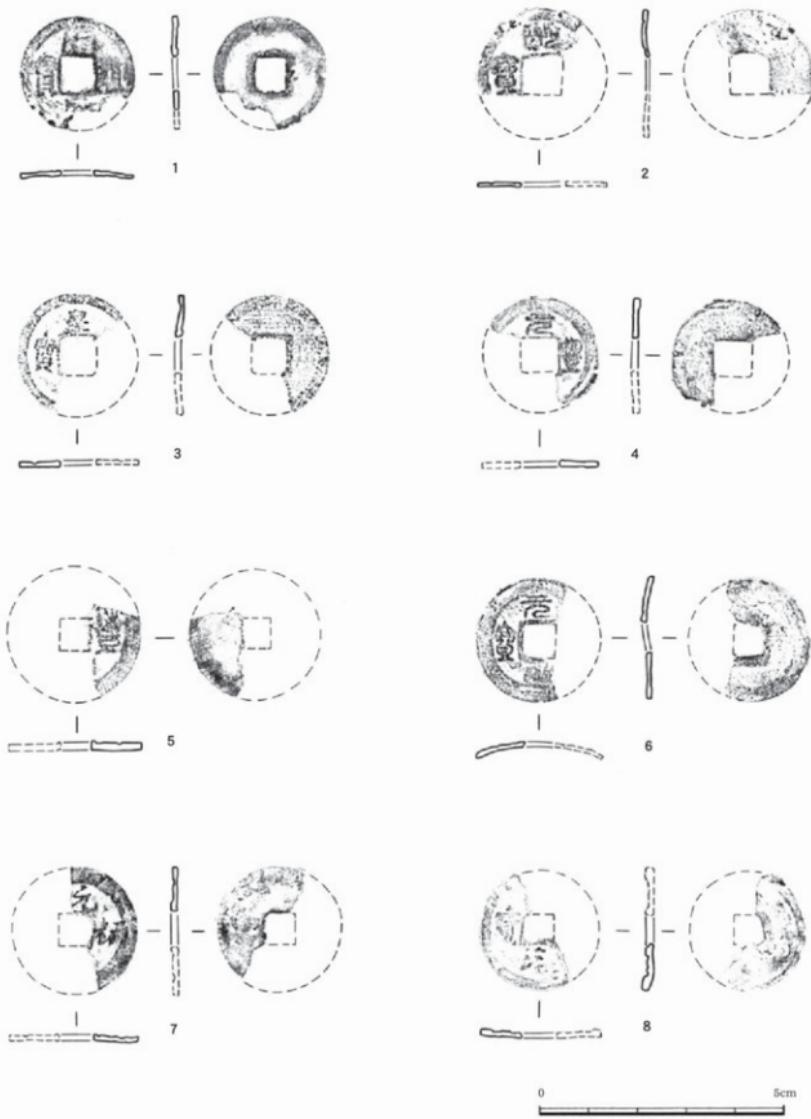
種類	C-11					合計
	SS01	SS01	SS01	SS01		
	第1層	北側第4層b	石敷直上	石敷東端部分		
削器(ナイフ)	1					1
瓶					1	1
胴部					1	1
板ガラス				1	1	2
おはじき			1			1
不明	1					1
合 計	2	1	1	2	6	

第89表① 石敷きSS01 錢貨観察一覧

単位:mm/g

捕獲番号 図版番号 遺物番号	銭種 種類	銅 鑄 造 年	初 銅 年	素 材	読 み 方	状 態	書 体	肉郭 外径 A B	肉郭 内径 C D	方 穿 E F	断面計測部位			重量	観察事項	出土地点 出土層	
											①	②	③				
第51図 図版43 1	開元通寶 不明	唐 845	唐 845	銅 錢	対 読	破 損	真 書	—	23.45	—	7.05	1.10	0.36	0.51	2.13	銭の一部が欠落する。残存する字款は「開」・「通」・「寶」の三字がみられる。「元」の字款が半分以上欠落する。錢鋳型の字款が浅い為、字款が薄く鋳造されている。その他「寶」の字款と肉郭の間に小さな粗孔(長軸1.15mm、短軸0.54mm)がみられる。当該粗孔は鋳造時に溶かした青銅が鋳型全体にいきわたらなかった事により自然に開いた状態で型から抜かれたものとみられる。面(肉郭幅2.01~2.27mm)よりも背(肉郭幅2.20~2.62mm)の肉郭が幅広である。背の肉郭は表面も不鮮明である。表面裏面とも綠青がみられるが、特に面は浸食が著しく微細なアバタ状となる。	C-11 SS01 第1層
# # 2	明道元寶 公鑄銭	北宋 1032年	北宋 1032年	銅 錢	回 読	破 損	篆 書	—	—	—	—	1.21	0.80	1.11	1.57	1/2以上が破損する銭。字款は「明」・「寶」の二字が判読できる。孔および孔郭が丸方形形状となる。面と背には緑青が一部で鱗瘤がみられる。	C-11 SS01 北側 第4層b
# # 3	皇宋通寶 不明	北宋 1038年	北宋 1038年	銅 錢	対 読	破 損	真 書	—	—	—	—	1.10	0.46	0.84	1.54	1/2近くが破損する銭。字款は「皇」・「寶」の二字が判読できる。肉郭は面よりも背が幅広(2.65~2.84mm)であるが摩滅して不鮮明である。面と背には緑青がみられるが、特に面の肉郭は緑青で微細なアバタ状となる。	C-11 SS01 石敷直上
# # 4	元豐通寶 不明	北宋 1078年	北宋 1078年	銅 錢	回 読	破 損	篆 書	—	—	—	—	1.32	0.67	1.10	1.96	1/2近くが破損する銭。字款は「元」・「豐」の二字が判読できる。面の肉郭は背よりも幅広(2.61~3.24mm)である。「豐」の右側に鋳造時のバリがみられる。面と背には緑青がみられる。	C-11 SS01 第1層
# # 5	元豐通寶 模鑄銭	北宋 1078年	北宋 1078年	銅 錢	回 読	破 損	篆 書	—	—	—	—	1.62	1.04	1.44	1.56	1/4近くが残存する銭。字款は「豐」の一字が判読できる。面の肉郭は幅広(3.48mm)であるが、背の肉郭はほとんど摩滅して確認しにくい。二次的な火熱を受けて面の一部が微細なクロコイド状となる。割れた破断面からは微細な気泡や溶解した部分がみられる。緑青は背よりも面で多くみられる。	C-11 SS01 第1層
# # 6	元祐通寶 公鑄銭	北宋 1086年	北宋 1086年	銅 錢	回 読	破 損	篆 書	25.72	19.66	—	6.42	1.19	0.70	0.89	2.32	3/4近くが残存する銭。字款は「元」・「通」・「寶」の三字が判読できる。面の肉郭は幅広(3.37mm)であるが、背の肉郭の段差が不鮮明で確認しにくい。二次的な火熱を受け面や背が部分的に微細なクロイド状となる。割れた破断面からは微細な気泡や溶解した部分がみられる。緑青は面よりも背で多くみられる。	C-11 SS01 北側 第4層b

注 「-」:計測不可



第51図 石敷きSS01出土品⑪ 銭貨：1～8

第89表② 石敷きSS01 錢貨観察一覧

単位:mm/g

拂団番号 図版番号 遺物番号	銭種 鑄造種類	初 鋳 年	素 材	読み 方	状 態	書 体	肉郭 外径 A B	肉郭 内径 C D	方 穿	断面計測部位 E F	①	②	③	重量	観察事項	出土地点 出土層
第51図 図版43 7	元祐通寶	北宋 1086 年	銅 錢	回 読	破 損	行 書	—	—	—	1.12	0.59	1.09	1.26	1/2弱が残存する銭。字款は「元」・「祐」の二字が判読できる。面の肉郭は幅広(3.30~3.39mm)であるが、背の肉郭は不鮮明で平坦面となり孔郭もない。背は無文鏡のような状態にある。縁青以外に縁青の上からタール状の物質が両面に付着している。	C-11 SS01 石敷直上	
# # 8	紹聖元寶	北宋 1094 年	銅 錢	不 明	破 損	行 書	—	—	—	1.69	0.65	1.01	1.75	1/2強が残存する銭。字款は「元」・「寶」の二字が判読できる。面の肉郭の幅は1.67mmと狭い。背の肉郭は鋳型のズレで幅が1.09~2.52mmと無駄がある。二次的な火熱を受けていて面と背が部分的に溶解している。破壊した開口面も溶解している。縁青は面と背の両面でみられる。	C-11 SS01 第1層	
第52図 図版43 9	大觀通寶	北宋 1107 年	銅 錢	対 読	破 損	真 書	—	—	—	1.40	0.75	1.06	1.35	2/3強が残存する銭。字款は「大」・「通」の二字が判読できる。肉郭の幅は面で1.23~1.76mm、背が1.23~1.95mmを測る。二次的な火熱を受けていて面と背が溶け合してクロロゲン酸となる。破壊した開口面も溶解している。縁青は面と背の両面でみられる。	C-11 SS01 第1層	
# # 10	政和通寶	北宋 1111 年	銅 錢	対 読	破 損	篆 書	—	—	—	1.75	0.76	1.21	1.21	1/3弱が残存する。字款は「政」・「寶」の二字が残存する。肉郭の幅は面が2.08~2.27mm、背で2.25mmを測る。二次的な火熱を受けて鏡が変形する。縁青は面でみられ、特に背は縁青により器面が微細なアバタ状となる。	C-11 SS01 石敷東端 部分	
# # 11	淳熙元寶	南宋 1174 年	銅 錢	回 読	破 損	真 書	—	—	—	1.39	0.82	1.07	1.62	1/2弱が残存する銭。字款は「熙」・「元」の二字が残存する。肉郭の幅は面で2.41~2.70mmと幅広であるが、背の肉郭は鋳型のズレで幅(3.11~4.97mm)が広くなっている。鋳型のズレで孔郭の一辺(一部)が失われている。縁青は両面でみられる。	C-11 SS01 第1層	
# # 12	洪武通寶	明 1368 年	銅 錢	対 読	破 損	楷 書	—	—	—	6.3 6.52	1.56	0.61	1.15	2.67	銭の肉郭の一部が欠落する銭。字款は「洪」・「武」・「通」・「寶」の四字が判読できる。肉郭の幅は面(1.34~1.99mm)及び背も幅広(1.40~2.24mm)となる。二次的な火熱を受けて割れた開口面が溶解する。面と背の一部には縁青による微細な錆跡がみられる。	C-11 SS01 石敷東端 部分

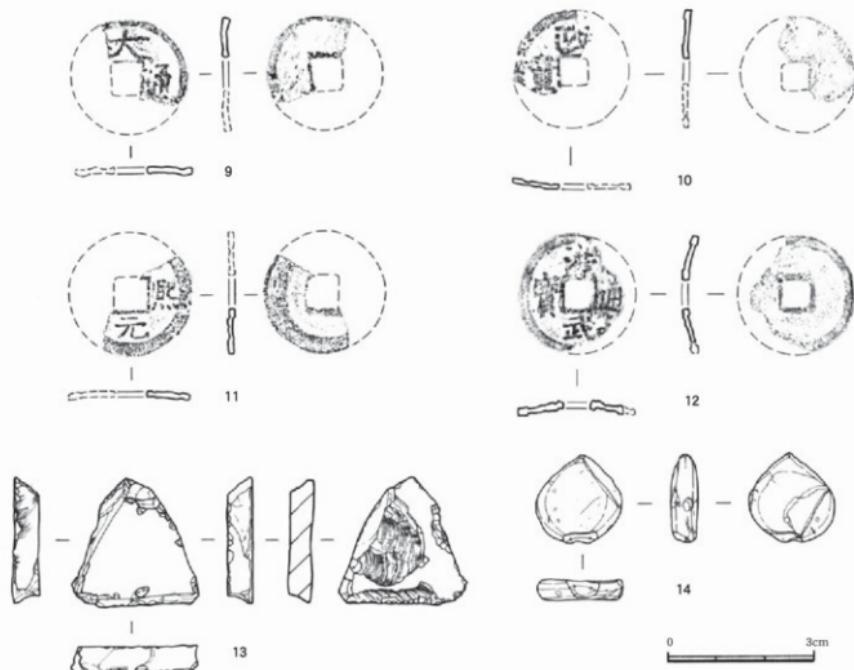
注「-」:計測不可

第89表③ 石敷きSS01 ガラス製品観察一覧

単位:cm

拂団番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)												出土地点 出土層
第52図 図版43 13	削器 (ナイフ)	平面観が三角形状を呈する資料で、ガラス板の一辺を微細な押圧剥離を加えて鶲歯状に加工して刃を付けている。刃とやや垂直に使用痕が観察できる。恐らく鉛筆削りで代用(注)したものとみられる。他の二辺には、割れたガラスの縁沿いを押圧剥離後に剥離面の角が潰れている。縦:2.88cm 横:2.5cm 厚さ:0.53cm 重量:4.4g。												C-11 SS01 第1層
# # 14	おはじき	製造工程で丸いガラス玉を潰す際に発生した不良品のおはじき。形状も正円ではなく歪で半円に二辺が構成された形(桃の実形)となっている。表面の一辺と裏面にはプレス機械のものとみられる圧痕が段差となって残っている。下辺中央の抉れは剥離によってなされるが、剥離面の縁沿いは角が潰れている。滑り止めを兼ねた型押しの基盤などはみられない。色調は透明な淡緑色。縦:1.8cm 横:1.74cm 厚さ:0.5cm 重量:2.2g。												C-11 SS01 北側 第4層b

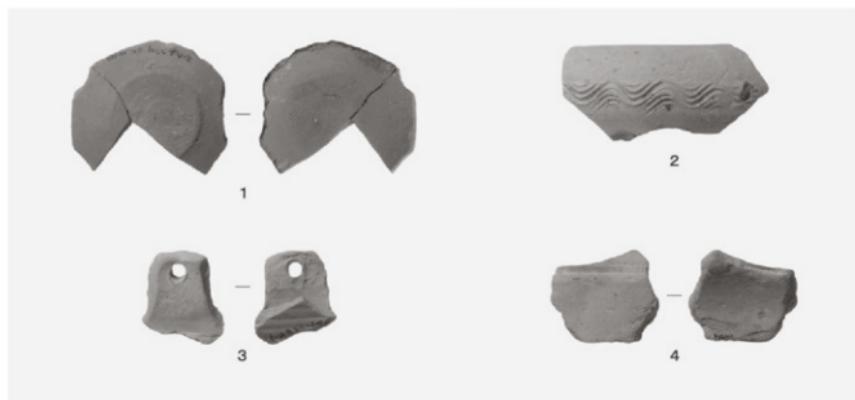
注 1960年代後半頃まで小学校高学年生や中学生が鉛筆削り用の折りたたみ式のナイフ「肥後の守」や「安全カミソリ」を使用していたが、ナイフなどを忘れた際はガラス片を拾って転用して鉛筆を削っていた。



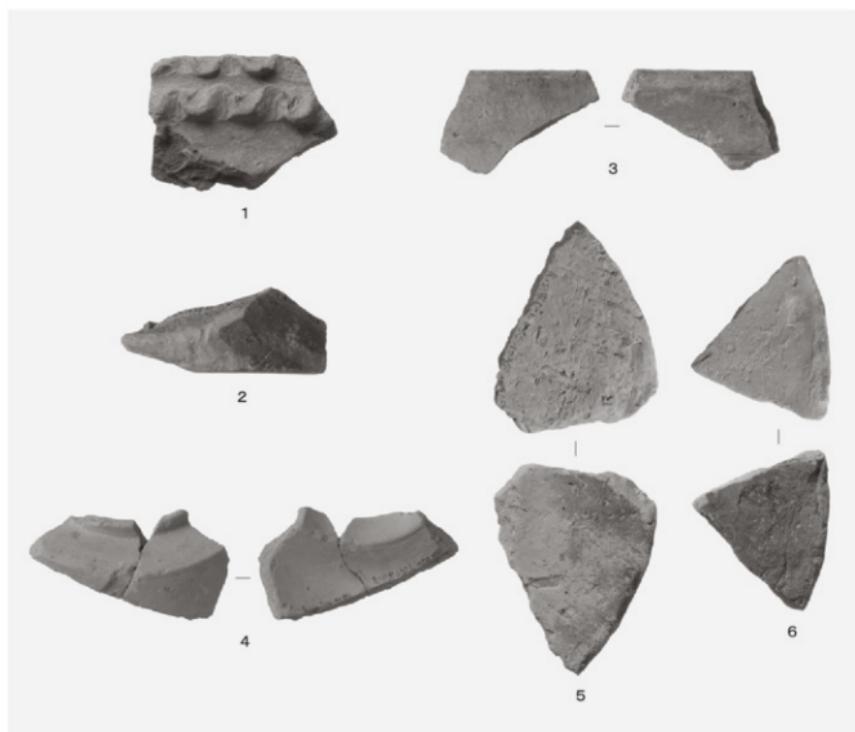
第52図 石敷きSS01出土品⑫ 錢貨：9～12、ガラス製品：13・14

第90表 石敷きSS01 出土遺物状況(図版外)

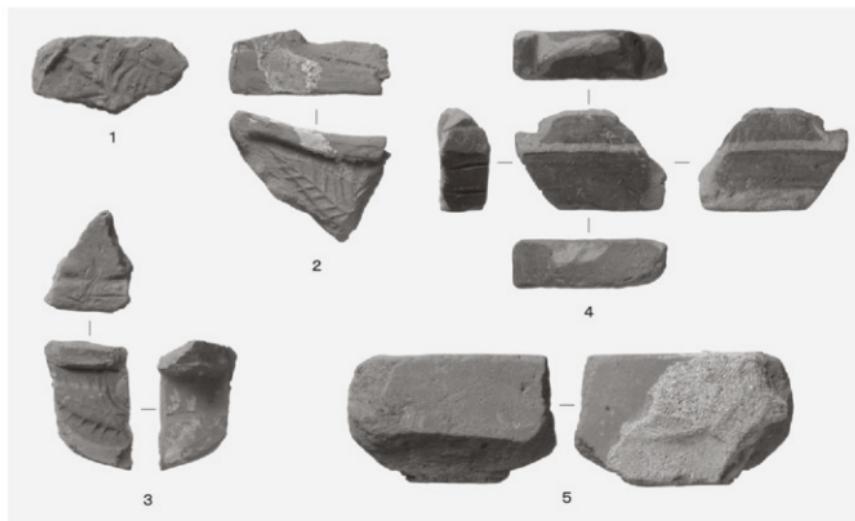
種類・器種・部位	層序	C-11 SS01			合計
		第1層	北側第4層b	石敷車廻部分	
土器	不明	4	0	0	4
	合 肝	0	4	0	4
白磁	合 肝	1			1
瑠璃物	合 肝	0	1	0	1
黒釉陶器	合 肝	0	1	0	1
	胸部	1			1
タイ産 褐釉陶器	蓋	1	2		3
	口縁部		4		4
	頸部		1		1
	肩部	12	39	8	59
	底部	2	1		3
	合 肝	13	46	11	71
銅治闕連	青銅鋌	0	0	1	1
	合 肝	0	0	1	1
炭化した木片	合 肝	2	0	0	2
	合 肝	2	0	0	2



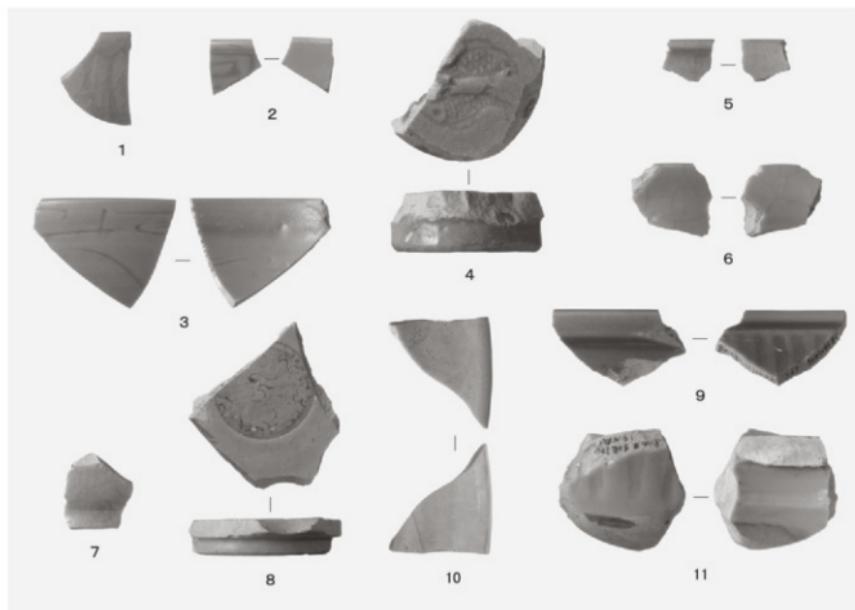
図版33 石敷きSS01出土品① 陶質土器 : 1 ~ 4



図版34 石敷きSS01出土品② 瓦質土器 : 1 ~ 6



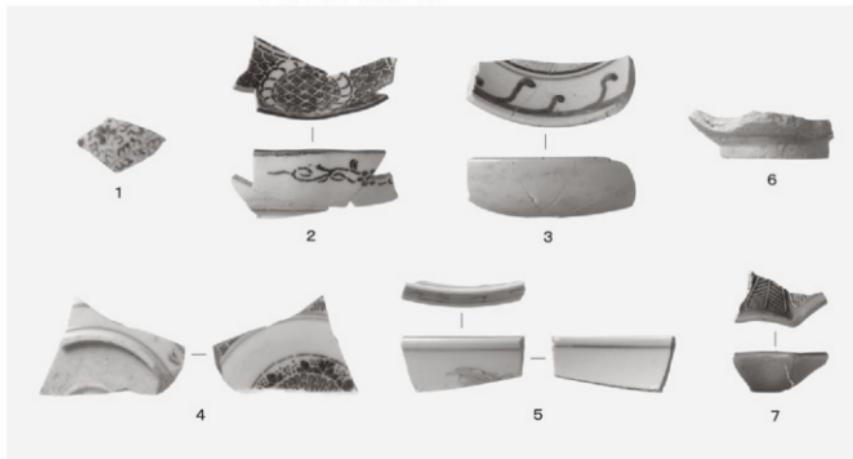
図版35 石敷きSS01出土品③ 瓦類 屋瓦：1～3、埴瓦：4、煉瓦：5



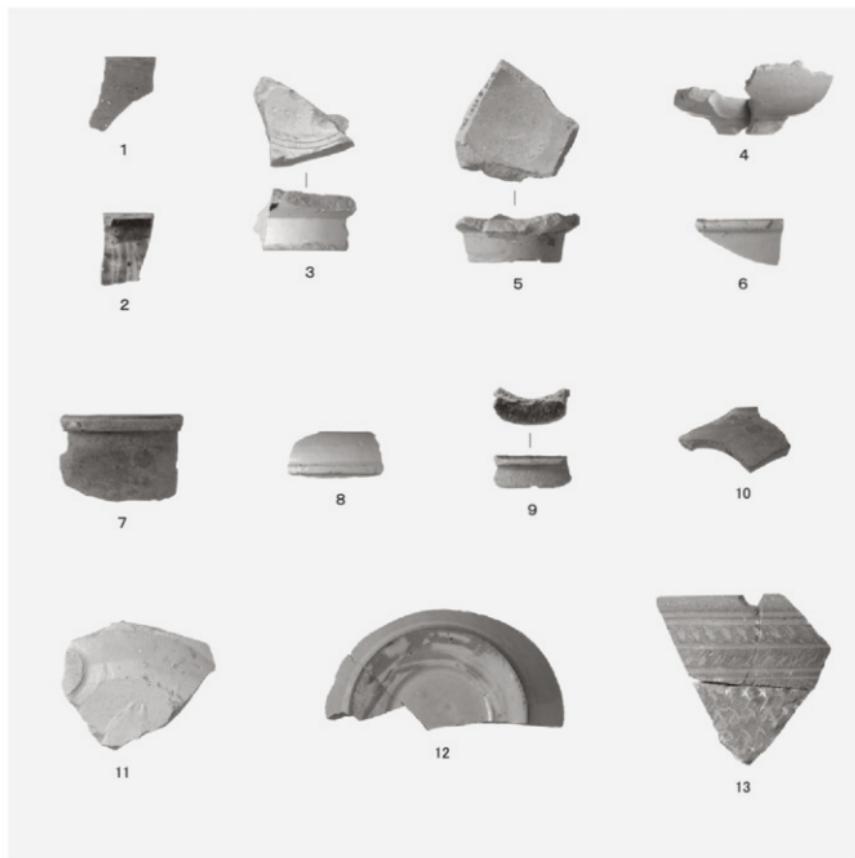
図版36 石敷きSS01出土品④ 青磁：1～11



図版37 石敷きSS01出土品⑤ 青花：1～5、彩釉陶器：6・7、中国産褐釉陶器：8・9、
タイ産土器（半線）：10



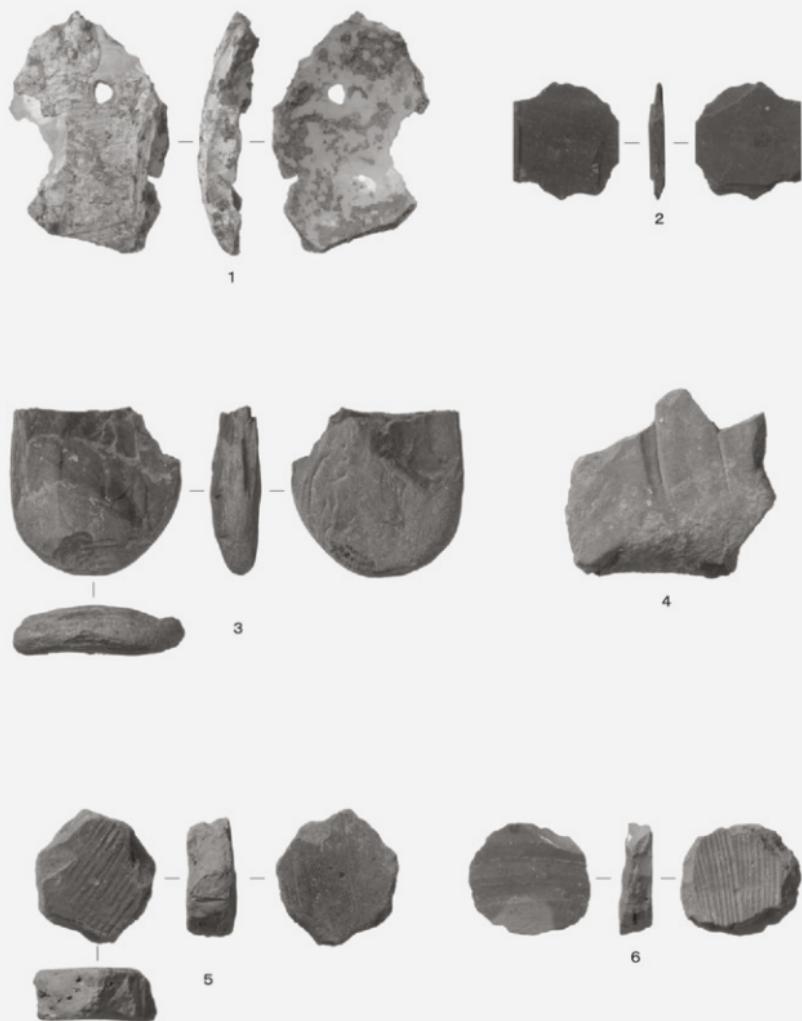
図版38 石敷きSS01出土品⑥ 本土産磁器：1～5、本土産陶器：6・7



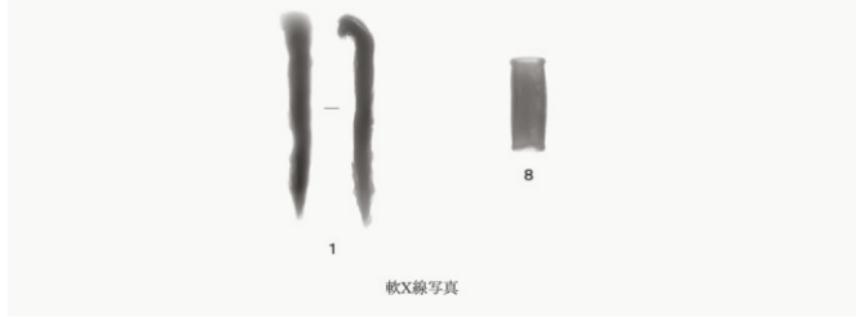
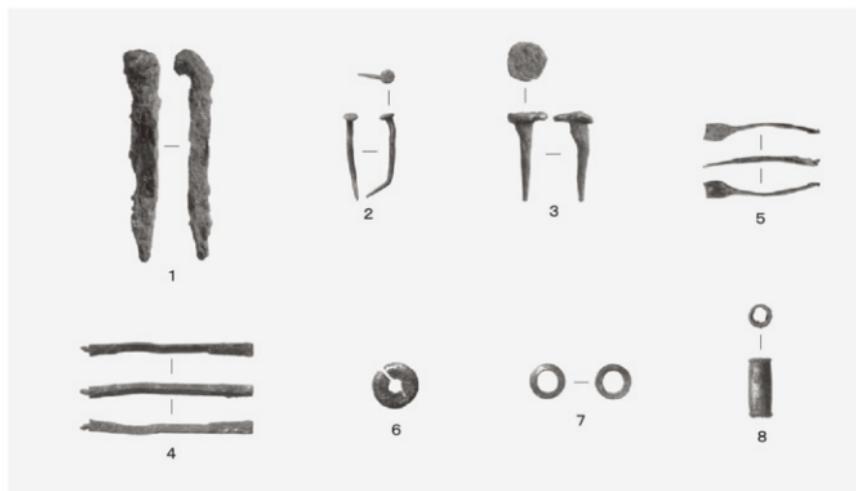
図版39 石敷きSS01出土品⑦ 沖縄産施釉陶器：1～13



図版40 石敷きSS01出土品⑧ 沖縄産無釉陶器：1～3



図版41 石敷きSS01出土品⑨ 貝製品：1、石製品：2～4、円盤状製品：5・6



図版42 石敷きSS01出土品⑩ 金属製品：1～8



図版43 石敷きSS01出土品⑪・⑫ 銭貨：1～12、ガラス製品：13・14

(12) 石敷き SS03-B の出土遺物 (第 53・54 図、第 91 表～第 93 表、図版 44)

石敷き SS03-B から出土した遺物の種類は、第 4 表に呈示したように総計で 147 点 (≈100%) が得られている。

出土遺物の内訳は、土器 3 点 (2.04%)、瓦類 31 点 (21.09%)、青磁 5 点 (3.40%)、白磁 1 点 (0.68%)、中国産褐釉陶器 40 点 (27.21%)、沖縄産施釉陶器 1 点 (0.68%)、タイ産褐釉陶器 6 点 (4.08%)、貝製品 1 点 (0.68%)、石器 3 点 (2.04%)、錢貨 23 点 (15.65%) の 19 種類が確認されている。輸入陶磁器 (タイ産、中国産) の占める割合は、36.05% であった。

当該遺構の時期を示す資料はない。出土遺物の大半は細片化した資料が多く、その中から比較的大きな破片資料や特徴的な資料を図示 (第 54 図) した。

第91表① 石敷きSS03-B 青磁・沖縄産無釉陶器・貝製品・石器・石製品・石材・金属製品出土状況

種類・器種・部位		層序		C-10 SS03-B										合計		
				覆土		(酒茶色土層)		南側試 験表掘 採① ③の		試掘①		試掘②		(コ ラ ル層)		
						第 1 层	第 3 层 a	第 1 层	第 3 层 a	第 1 层	第 3 层 a	第 1 层	第 3 层 a			
青磁	碗	胴部	無文	2								1		3		
		底部	cタイプ 印花文	1										1		
	盤	口縁部	タガ状鉛縫 無文						1					1		
合 計				3	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0		
沖縄産無釉陶器	碗	口縁部		1										1		
合 計				1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
貝製品				1										1		
合 計				1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
石器・石製品	砥石?	凝灰岩						1						1		
	石碑 or 羽目板	破片	細粒砂岩(ニヒ)					1						1		
	石敷き片	破片	細粒砂岩(ニヒ)					1						1		
合 計				0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	3		
石材	細粒砂岩(ニヒ)			8			1		4			2		15		
	石灰岩			1										1		
合 計				9	0	0	1	0	4	0	0	2	0	16		
金属製品	工具類・ 生産用具	丸釘 頭部欠損	中 鉄								1			1		
	調度品などの飾り金具									1				1		
	分類不明	用途不明							1					1		
合 計				0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	3		

注 釘のサイズは、中:1寸半～5寸まで(3.75cm～15.75cm未満)

第91表② 石敷きSS03-B 二次的火熱溶解銭貨

銭名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
開元通寶(唐621年初鋤) or (唐845年初鋤) or (南唐960年初鋤)	1片	0.68	「開」の一字が残存	C-10 SS03-B 試掘②第1層
天祐通寶？(北宋1017年初鋤)	1片	1.57	「通」・「寶」の二字が残存	C-10 SS03-B 覆土
皇宋通寶(北宋1038年初鋤)、 洪武通寶(明1368年初鋤)	2片	3.47	2枚裏面同士付着。 皇宋通寶→「皇」の一字のみが欠落 洪武通寶→「武」・「通」・「寶」の三字が残存	C-10 SS03-B SS03とSS04の畦表採
祥符元寶(北宋1009年初鋤)	1枚	3.13	完形	C-10 SS03-B SS03とSS04の畦表採
元豐通寶(北宋1078年初鋤)	1片	1.88	「元」・「寶」の二字が残存	C-10 SS03-B 試掘②第3層a
元祐通寶(北宋1086年) or 元豐通寶(北宋1078年)	1片	0.20	「元」の一宇が残存	C-10 SS03-B 試掘①第1層
聖宋元寶(北宋1101年初鋤)	1片	0.95	「聖」・「宋」の二字が残存	C-10 SS03-B 覆土
政和通寶 折二錢(北宋1111年)	1片	0.40	「通」の一宇が残存	C-10 SS03-B 試掘①第1層
不明銭貨	1片	0.78	判読不可	C-10 SS03-B 覆土
	3片	3.91	判読不可	
	1片	0.50	「寶」の一宇が残存	
	1片	0.80	「通」の一宇が残存	C-10 SS03-B 試掘②第1層
	1片	0.42	「元」の一宇が残存	C-10 SS03-B 試掘①第1層
	1片	0.44	「寶」の一宇が残存	
	6片	2.25	-	
合計	23			

拓影原本



拓影反転



陰影を陽影に変換



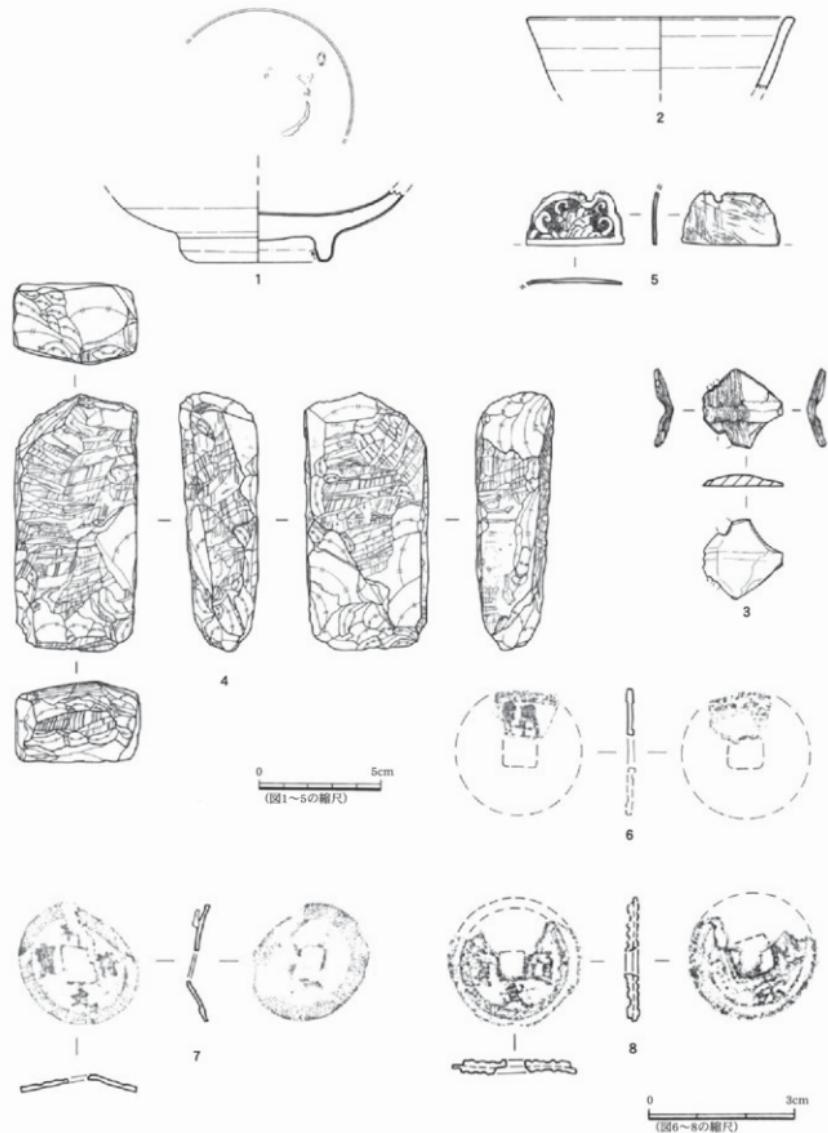
第53図 皇宋通寶の錢形（第54図8）の拓影を陰影から陽影に変換

第92表 石敷きSS03-B 青磁・沖縄産無釉陶器・貝製品・石製品・金属製品・錢貨観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	部位	口径 器高 底径	観察事項等	出土地点 出土層
第54図 図版44 1	青磁	碗	Cタイプ 底部 — — 5.3	器形:無文様の高台とみられる。高台部から開き気味に丸味を持たせて胴部へ移行する。文様:見込みに團線と印花を施す。印花は不鮮明である。素地:淡黄白色の細粒子で、微細な黒色鉱物が多くみられる。劈開面から微細な気泡痕も多く観察できる。釉色:明緑色の透明釉で、内面から外面の高台内側途中まで施釉。貫入:外面に粗い貫入で、内面は細かい貫入がみられる。中国南部の窯。14c終末~15c。	C-10 SS03-B 第2層i (濃茶色 土層)
〃 2	沖縄産無釉陶器	碗	口縁部 11.0 — —	器形:直口口縁碗。口唇部は箒削り後に軽く擦痕を加えて平坦に仕上げる。内面は丁寧な回転擦痕が仕上げている。外面には灰褐色の釉が施釉されている。口唇と内面は露胎。文様:なし。素地:茶紫褐色の細粒子で、細かい石英と石質灰砂粒が僅かに観察できる。稀に粗い茶褐色の物質がみられる。劈開面から微細な気泡痕も僅かに観察できる。釉色:灰緑色の失透釉で、外面にのみ施釉。貫入:なし。	C-10 SS03-B 覆土
〃 3	貝製品		— — —	サザエ科ヤコウガイの殻の外周縁を粗削調整後に加工を施したものであるが、最終的に破損により歪な菱形状の形状となる。製作途中で廃棄された用途不明の製品。研磨は上方の交点部分と上方左側面で主に観察できる。特に上方の右側面に研磨面が多く残る。上方の左側面下寄りに孔を二孔穿っているが、孔が半分欠落する。孔の半欠した割れ面部分にも研磨を加えたようである。左側面にも研磨が観察できるが、研磨が徹底していない。下方の左側面中央にも孔を穿っているが、この孔も半分欠落する。孔の欠落した割れ面にも研磨がみられる。下方右側面は被破損し、割れ面は自然に摩滅したようである。縦:3.2cm、横:3.3cm、厚さ:0.43cm、重量:4.2g。	C-10 SS03-B 覆土
〃 4	石器	砥石	— — —	短冊形の砥石とみられる製品であるが、各面に削り痕が多く観察できる。上部の破損面にも削り痕がみられる。金属製の刃物(刀子、鑿など)を本来、研磨すべき砥石が削られて溝状となる。砥石は辛うじて右側面にのみ観察できる。削り痕が多く観察される事からすると砥石を削って砥石の粉を研磨材などに利用した可能性を考えられるが判然としない。凝灰岩製。縦:10.5cm、横:5.1cm、厚さ:3.22cm、重量:251.6g。	C-10 SS03-B 試掘① 第1層
〃 5	金属製品	工具類 ・金生具 ・用具	青銅製品 — — —	調度品などの飾り金具。底辺と右側の一部を除いて、その他の縁は破損による断面である。文様は繩で底辺の縁と右側の抉れた縁に沿うように毛彫りの細線で区画する。区画された内側には主文となる植物の葉と波瀾文を毛彫りで文様を施す。主文の隙間に円形の魚々子を丁寧に施している。区画線近くの魚々子は半円形にして区画縁と重ならないように施している。上右側面の抉れは魚尾状となるように加工した部分である。裏面には当該製品が廃棄後に付された溝状の太線が多くみられる。現存長(横):40.0mm、現存幅(縦):21.5mm、現存最大厚:0.91mm、現存最小厚:0.62mm、重量:4.4g。	C-10 SS03-B 試掘② 第1層
〃 6		開元通寶	重量 0.68g	開元通寶の「開」の字のみが残存する。二次的な火熱や緑青の鉛融れで面と背が微細なクロード状となる。面の肉郭の幅は、1.84mmを測る。背は面よりも若干、幅広(2.91mm)である。鑄造種類:公鋤鑄。初鋤年:唐621年or845年。南唐960年。素材:銅錢。読み方:对読。状態:破損。書体:真書。 ①1.41mm、 ②1.22mm、 ③1.33mm。	C-10 SS03-B 試掘② 第1層
〃 7		祥符元寶	重量 3.13g	北宋の1009年初鋤造の祥符元寶。錢の変形の要因は、意図的(二次的な製品の原材料として使用する為に鉄鑄などによる細断を試みたが、細断途中で廃棄)に背の孔郭から肉郭の間に外圧(11.71mm幅の鉄鑄などによる打壓で2回程度加えている)がわりに剥離と壅みが発生したことによるものとみられる。鉄鑄などによる打壓痕(幅1.02mm)が面の肉郭部分で確認できる。破壊に使用された鉄鑄などの工具の刃幅は、11.71mm。刃の厚みが1.02mmのものが使用されたようである。肉郭の幅は、面が2.69~3.08mm、背で3.65~3.80mmを測る。緑青は両面でみられ、特に背は緑青により器面が微細なアバタ状となる。	SS03-Bと SS04-Aの 唯より採集
〃 8		洪武通寶	重量 3.47g	「洪武通寶(明、1368年初鋤造)」の裏面に字款が反転した「皇宋通寶(北宋、1038年初鋤造)」が重なって付着する。洪武通寶は、「武」・「通」・「寶」の三つの字款が残存する。反転文字の皇宋通寶は、「皇」の一字のみが欠落する。「皇宋通寶」は錢鋤型の錢形となるものが何らかの理由で廃棄されたのかもしれない。首里城内で模鋤錢(島錢)を鋤造していた事を示す貴重な資料である。現存綫長20.70mm、横長:(洪武通寶:21.97mm、皇宋通寶:25.41mm)、孔のサイズ:洪武通寶4.25mm、皇宋通寶6.95mm、厚さ1.97mm(2個分)。	SS03-Bと SS04-Aの 唯より採集

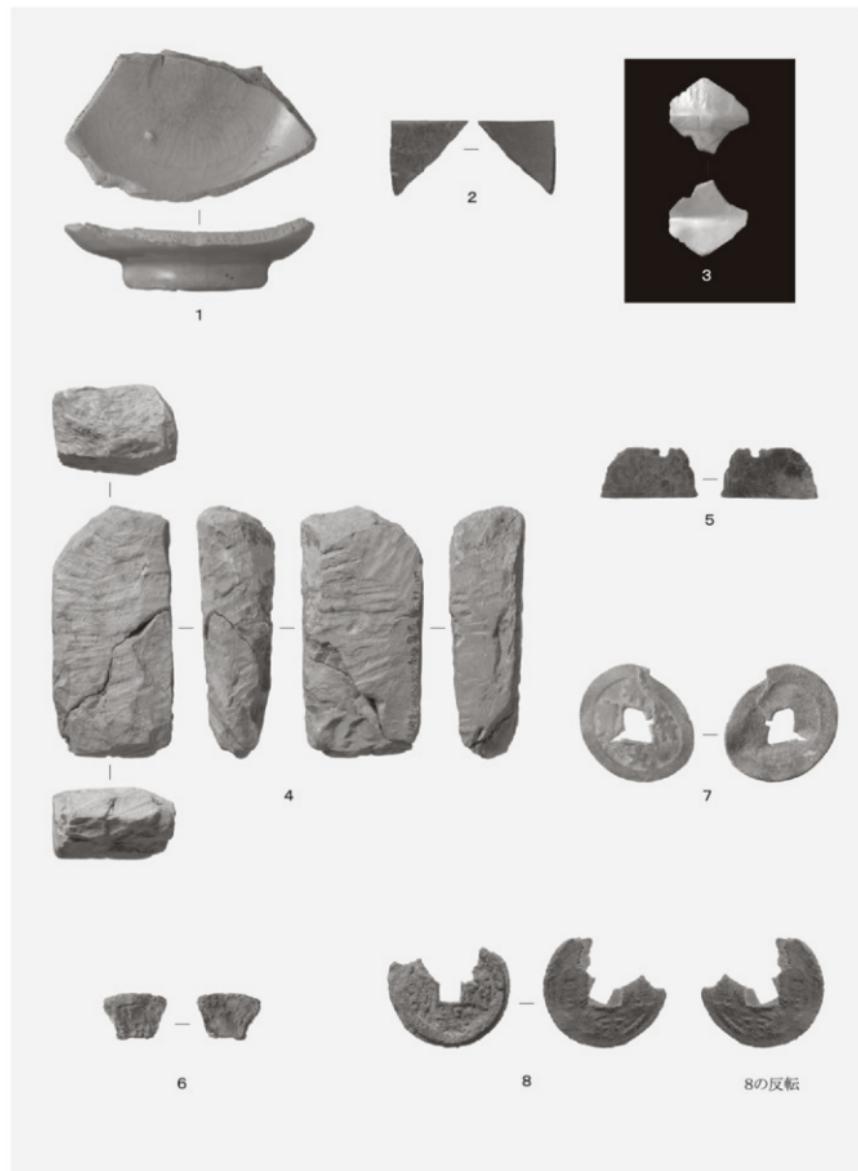
注「-」:計測不可



第54図 石敷きSS03-B出土品 青磁：1、沖縄産無釉陶器：2、貝製品：3、石器：4、金属製品：5、銭貨：6～8

第93表 石敷きSS03-B 出土遺物状況(図版外)

			層序	C-10 SS03-B								合計	
			覆土	試掘①		試掘②		試掘④		(コ ラ ル層 層)	SS03-Bと SS04-Aの堆表 採		
				第1層	第3層a	第1層	第3層a	第1層					
			種類・器種・部位										
土器	不明		胴部			1			2			3	
			合計	0	0	1	0	0	0	2	0	0	
瓦質土器	蓋								1			1	
	不明		口縁部						1			1	
			合計	0	0	0	0	0	2	0	0	0	
屋瓦	高麗系	平瓦	灰色	塗喰無し	1							1	
	大和(古)	丸瓦	灰色								1	1	
		平瓦	灰色	塗喰無し		1				1		2	
		軒平	褐色						1			1	
		丸瓦	赤色	塗喰有り(片面)	5							5	
			灰色	塗喰無し	2							2	
		明朝系		塗喰有り(片面)	1							1	
			平瓦	塗喰有り(片面)	2							2	
			褐色	塗喰無し	2							6	
				塗喰有り(片面)	1							1	
				塗喰有り(片面)	1							1	
			赤色	塗喰無し	1							1	
				塗喰無し	3							3	
			合計	20	1	0	0	0	1	0	6	1	
											0	29	
埴瓦	I類orII類	不明	塗喰無し	角無し							1	1	
	III類	形状不明b		角I							1	1	
			合計	0	0	0	0	0	0	0	2	0	
	白磁	碗	胴部							1		1	
			合計	0	0	0	0	0	1	0	0	0	
	青花	皿	胴部								1	1	
			合計	0	0	0	0	0	0	0	1	0	
	中国産 褐釉陶器	壺	胴部		10				1	2	25	1	
		壺	底部								1	1	
			合計	10	0	0	0	0	1	2	26	1	
タイ産 褐釉陶器	壺	胴部		1					1	4		6	
			合計	1	0	0	0	0	0	1	4	0	
	本土産 磁器	皿	口縁部	近現	1							1	
			合計	1	0	0	0	0	0	0	0	1	
	本土産陶器	甕	胴部	薩摩	2							2	
			合計	2	0	0	0	0	0	0	0	0	
沖縄産 施釉陶器	碗	胴部		1								1	
			合計	1	0	0	0	0	0	0	0	1	
	ガラス製品	瓶	胴部	2								2	
		ビー玉		1								1	
		板ガラス		3								3	
		合計		6	0	0	0	0	0	0	0	6	
近・現代		コンクリート		1								1	
		合計		1	0	0	0	0	0	0	0	1	



図版44 石敷きSS03-B出土品 青磁：1、沖縄産無釉陶器：2、貝製品：3、石器：4、金属製品：5、銭貨：6～8

(13) 石敷き SS02 の出土遺物 (第 55 図、第 94・95 表、図版 46)

石敷き SS02 から出土した遺物の種類は、第 4 表に示したように総計で 89 点 (≈100%) が得られている。出土遺物の内訳は、瓦類 7 点 (7.87%)、青磁 5 点 (5.62%)、白磁 1 点 (1.12%)、中国産褐釉陶器 20 点 (22.47%)、沖縄産施釉陶器 1 点 (1.12%)、タイ産褐釉陶器 9 点 (10.11%) の 11 種類が確認されている。輸入陶器 (タイ産、中国産) の占める割合は、39.33% であった。

当該遺構の時期に伴う遺物として確認されたのは、白磁直口口縁皿 (第 55 図 2) のみであった。

なお、出土遺物の大半は細片化した資料が多く、その中から比較的に大きな破片資料や特徴的な資料を図示 (第 55 図) した。

第94表① 石敷きSS02 出土遺物状況

層序				C-11 SS02			合計		
				北側 縁石内 第2層b	第2層f (東側覆土)	南側 第3層b			
種類・分類・器種・部位									
瓦質土器		蓋				1	1		
		合 計		0	0	1	0		
屋瓦	明朝系	丸瓦	赤色	漆喰有り(片面)		3	3		
		平瓦	赤色	漆喰有り(片面)		1	1		
				漆喰無し		2	2		
		合 計		0	0	6	0		
埴瓦	III類	形状不明a	漆喰無し	角無し		1	1		
		合 計		0	0	1	0		
青磁	碗	口縁部	直口	外面:雷文・型起こし 内面:刻花文・型起こし		1	1		
		脚部	蓮弁	片切彫り		1	1		
	皿			有文		1	1		
		口縁部	外反	外面:無文 内面:有文不明		1	1		
	盤	脚部	外反	外面:無文、内面:蓮弁・丸窓		1	1		
		合 計		0	0	1	4		
白磁	皿	口縁部	直口			1	1		
		合 計		0	0	0	1		
中国産 褐釉陶器	盞		脚部		1	2	8		
		合 計		1	9	2	20		
タイ産 褐釉陶器	盞	口縁部			1		1		
		脚部			3		5		
		合 計		0	3	1	5		
沖縄産 施釉陶器	器種不明		脚部		1		1		
		合 計		1	0	0	0		
石材	溶結凝灰岩(鹿児島県産)					19	19		
	緑色岩					1	1		
	繊粒砂岩(二七)					1	1		
自然石		河原石				1	1		
		合 計		1	0	21	0		
金属製品	工具類・ 生産用具	角釘	先端部欠損 頭部欠損 先端+頭部欠損	サイズ不明 サイズ不明 中	鉄		1		
							1		
							2		
	武具	兜の立物中央飾り			青銅		1		
		据文金物の菊座					1		
		笠軸					1		
	分類不明	用途不明			青銅		4		
							4		
		合 計				0	10		
ガラス製品	瓶		脚部			1	1		
		合 計		0	1	0	1		

注 釘のサイズは、中:1寸半~5寸まで(3.75cm~15.75cm未満)

第94表② 石敷きSS02 二次的火熱溶解錢貨

銭名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
開元通寶(唐621年初鋤) or(唐845年初鋤) or(南唐960年初鋤)	1片	0.64	「開」の一字が残存	C-11 SS02南側縁石内第3層b
熙寧重寶(北宋1071年初鋤) 或宋元寶(南宋1253年)	1片	0.47	「寧」or「宋」の一字が残存	C-11 SS02第2層f(東側覆土)
元豐通寶(北宋1078年初鋤)	1枚	4.50	完形	C-11 SS02南側縁石内3層b
宣和通寶(北宋1119年初鋤)	1片	0.72	「和」の一字が残存	C-11 SS02第2層f(東側覆土)
宣和通寶(北宋1119年初鋤)	1片	0.71	「寶」の一字が残存	C-11 SS02第2層f(東側覆土)
不明銭貨	1片	1.22	「通」の一字が残存	C-11 SS02第2層f(東側覆土)
不明銭貨	1片	0.75	「寶」の一字が残存	C-11 SS02南側縁石内第3層b
	3片	2.03	-	
合計	10			

第95表① 石敷きSS02 青磁・白磁・金属製品観察一覧

単位:cm

捕獲番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称・ 材質	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地点 出土層
第55図 図版45 1	雷文青磁碗	口縁部	16.0 -	器形: 直口口縁碗。文様: 外面の雷文は型で起こされていて反時計回りと時計回りの雷文を施している。裏面: 淡灰白色の微粒子で、晴開面から微細な気泡痕がみられる。釉色: 淡緑色の釉が両面にみられる。質: 軽い。龍泉窯系。15c初頭~中頃。	C-11 SS02 南側縁石 内第3層b
# # 2	直口白磁盤	口縁部	9.7	器形: 直口口縁皿で、抉入高台皿の口縁(京)の内跡土壙SK01出土の白磁抉入高台皿(註1)の5個体の平均口径は9.4cmあり、口径の最小値は9.2cm~9.8cmであった。)とみられる。外表面に幾種類が顕著にみられる。口径内面には寧に仕上げられている。文様:なし。素地:白色の微粒子。釉色:黃白色の釉が内面から外面脚部まで施釉。質: 軽い。緋色:淡緑色の釉が両面にみられる。福建省建甌窑系。15c後半~16c。	C-11 SS02 南側縁石 内第3層b
# # 3	中兜 失立 飾り物	青	-	兜鉢の肩部に固定された立物(三鍼形台中央支柱台に取り付けられた立物中央部にあたる)飾りの破片で、京の内跡土壙SK01から出土した立物が「瑞雲日月星文」(註2)として推定復元されている。当該資料は太陽(日)を現す「日(日輪)」で、大きな円で表現される。円形文の上位と下位が立物中心の棒材である。右の小さな「星」に聚がる。左側の「日」は折れてい。緋色は表面より裏面の方が美しい。銷止めを施された鍊金は、緋色の影響を受けて全て剥落する。残存長(縦): 50.0mm、残存幅(横): 39.6mm、最大厚: 0.83mm、最小厚: 0.54mm、重量: 6.0g。	C-11 SS02 南側縁石 内第3層b
# # 4	据 菊文 金座	銅	-	鍊金は残っていない。緋色部を菊花の弁先となるように加工する。弁先と弁輪は一致する。弁輪は笠で緋色を毛筆で施す。表裏面と緋色がみられ特に裏面の緋色は目立っている。残存長(縦): 17.5mm、残存幅(横): 18.5mm、最大厚: 1.17mm、最小厚: 0.98mm、重量: 1.7g。	C-11 SS02 南側縁石 内第3層b
# # 5	管 鉢	銅	-	鍊金された管鉢。下端の側面觀が、中央部で彎曲して左右の端が上に向いている。孔のサイズは、正面(左側)の孔が4.96~5.12mmを測り、右側の孔は4.88~5.17mmを測った。)と裏面の孔(左側)は5.25~5.46mm、右側は5.02~5.45mmを測る。)のサイズが微妙に異なっていて、裏面の孔が正面よりもぐく開いている。孔の穿孔は両面から穿たれたものとみられる。緋色が裏面及び外周の各側面で部分的に観察できる。残存長(縦): 9.0mm、残存幅(横): 26.0mm、最大厚: 3.69mm、最小厚: 3.22mm、重量: 3.1g。	C-11 SS02 南側縁石 内第3層b

註文献

註1. 金城亀信、上原 静ほか『首里城跡一京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)』-沖縄県教育委員会 1998年3月。

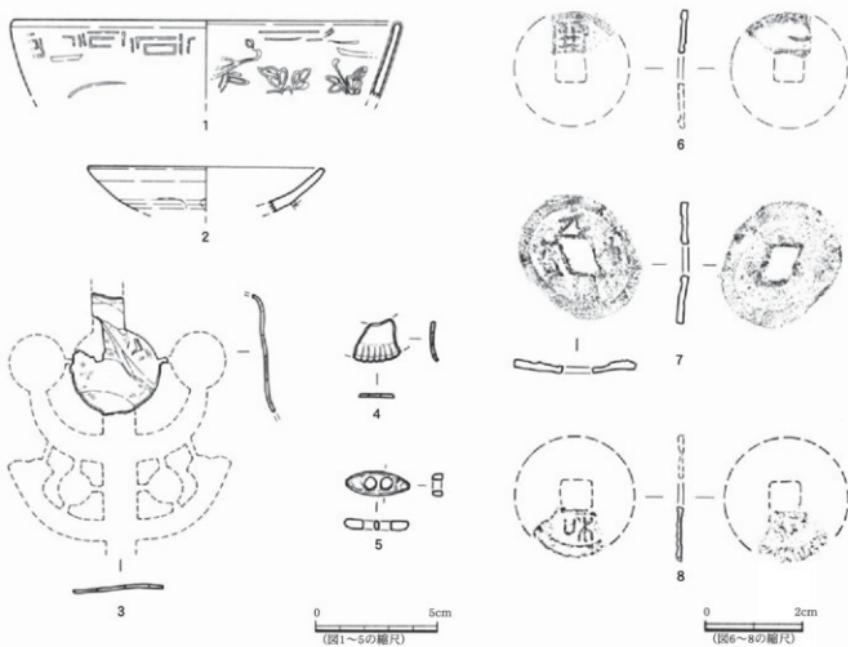
註2. 金城亀信『首里城跡一京の内跡発掘調査報告書(Ⅱ)』-沖縄県立埋蔵文化財センター 2009年3月。

第95表② 石敷きSS02 錢貨観察一覧

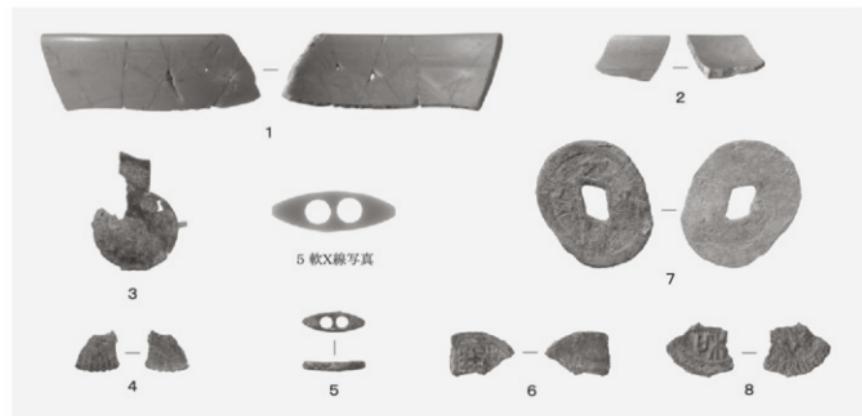
単位:mm/g

捕獲番号 図版番号 遺物番号	銭種 鑄造種類	初鋤年	書体	読み方	状態	肉郭 外径	肉郭 内径	方穿	断面計測部位			重量	観察事項	出土地点 出土層	
									A B	C D	E F	①	②	③	
第55図 図版45 6	開元通寶 模鋳銭	唐845 年 or 唐621 年	銅銭	対 読	破損 真書	-	-	-	1.25	0.86	1.17	0.64	「開」一字のみが残存する。背には月文がみられ、月文の位置関係から「背上月」となる。背の内郭部は無い。二次的な火熱を受けて破断した劈開面が解けてケロイ状となる。緋色も多くみられる。	C-11 SS02 南側縁石 内第3層b	
# # 7	元 通 寶	北宋 1078年	銅銭	回 讀	完 形	行 書	25.81 21.77	21.36 19.37	4.83 7.32	1.53	1.40	1.47	4.50	二次的な火熱を受けて鏡が歪な扁梢円形となる。字款は「元」「豐」「通」「寶」の四字が確認できるが、火熱や緋色の影響を受けて字款が不鮮明である。	C-11 SS02 南側縁石 内第3層b
# # 8	宣 和 通 寶	北宋 1119年	銅銭	対 読	破損 篆書	-	-	-	1.38	0.57	0.84	0.72	1/4弱が残存。字款は「和」の一字が確認できる。二次的な火熱や緋色の影響を受けて器面の保持が悪い。背の内郭が縁に沿うように浅く産んでいる。背は全体的に火熱で微細な皺が多くみられる。	C-11 SS02 第2層f (東側 覆土)	

注「-」:計測不可



第55図 石敷きSS02出土品 青磁：1、白磁：2、金属製品：3～5、銭貨：6～8



図版45 石敷きSS02出土品 青磁：1、白磁：2、金属製品：3～5、銭貨：6～8

(14) 石敷き SS04-A の出土遺物 (第 56 図～第 58 図、第 96 表～第 99 表、図版 46～図版 48)

石敷き SS04-A から出土した遺物の種類は、第 4 表に呈示したように総計で 238 点 (≈100%) が得られている。

出土遺物の内訳は、瓦類 5 点 (2.10%)、青磁 3 点 (1.26%)、中国産褐釉陶器 89 点 (37.39%)、タイ産褐釉陶器 4 点 (1.68%)、銭貨 132 点 (55.46%)、円盤状製品 1 点 (0.42%)、ガラス製品 1 点 (0.42%) の 10 種類が確認されている。輸入陶磁器 (タイ産、中国産) の占める割合は、40.76% であった。

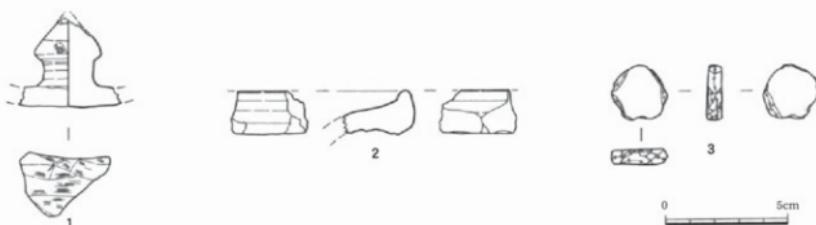
当該期の遺構の時期として確認ができた遺物は、タイ産 (土器・褐釉陶器。第 56 図 1・2) の資料であった。なお、出土遺物の大半は細片化した資料が多く、その中から比較的大きな破片資料や特徴的な資料を図示 (第 56 図) した。

第96表 石敷きSS04-A タイ産土器(半練)・タイ産褐釉陶器・円盤状製品観察一覧

単位:cm

捕団番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	部位	口径 器高 高台径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土土地 出土層
第56図 図版46 1	タイ (半 練) 産 土 器	蓋	撮み	器形: 蓋中央に取り付けられた宝珠形の撮の破片で、撮の先端部が欠落する。器面調整: 側面観で三角形形状となる撮部分は指ナデで調整する。三角形形状の撮下端から蓋甲上面までの撮の根元部分は時計回りの輪状回転擦痕や指ナデを加えている。蓋甲下面は方向の定まらない擦痕を雜に施す。素地: 淡灰白色の細粒子で、粗細な石英を主体にして細かい黒色や茶褐色の飴物を少量含む。色調: 上下の面とも淡橙白色を呈する。焼成: 良好で堅い。15c～16c。	SS04-A 東側 第3層a
〃 2	褐 釉 陶 器	蓋	口縁部	器形: 外反口縁の蓋。口縁端部を上方に突出させている。文様: なし。器面調整: 肥厚帯下端は無釉であり、雜な擦痕を回転擦痕でナデ消すが徹底しない。内面は施釉されているが、袖上からの観察では器面が滑らかである状況からすると丁寧なナデが施されたようである。素地: 淡茶白色の細粒子で、粗細な石英と茶褐色の飴物を少量含む。色調: 黄茶褐色の釉が内面から外面の肥厚帯まで施す。焼成: 堅緻。シーサッチャナライ窯。15c～16c。	C-10 SS04-A 第3層 (ワーチン近 く)
〃 3	円 盤 状 製 品	中国産 褐釉陶 器		中国産褐釉陶器蓋(中国南部の窯。14c～15c)の脇部破片に打削調整を加えて円盤状に加工した製品である。外周縁辺部の打削調整は、主に内面から実施されている。剥離面の縁沿いの摩滅が多くみられることから使用頻度は高かつたようである。外面に淡黄白色の釉が施されている。内面は露胎のままである。素地は淡橙白色の細粒子で、粗い飴物(石英、茶褐色、黒色)を多く含んでいる。縦: 1.2cm 横: 2.3cm 厚さ: 0.6cm 重さ: 3.9g。	C-10 SS04-A 東側 第3層a

注 「-」: 計測不可



第56図 石敷きSS04-A出土品① タイ産土器(半練): 1、タイ産褐釉陶器: 2、円盤状製品: 3

第97表① 石敷きSS04-A 二次の火熱溶解錢貨

銭名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
開元通寶(唐621年初鑄) or (唐845年初鑄) or (南唐960年初鑄)	1片 1片 1片	0.27 0.79 1.58	「開」の一字が残存 「寶」の一字が残存 「開」・「通」の二字が残存	C-10 SS04-A 磚敷き内敷石直下の焼土面
開元通寶(背上升)(唐621年初鑄)	1片	0.96	「開」の一字が残存	
宋通元寶(北宋960年初鑄) or 嘉祐元寶(北宋1056年初鑄)	1片	0.76	「元」の一字が残存	
至道元寶(北宋995年初鑄)	1片	0.58	「道」の一字が残存	C-10 SS04-A 磚敷き内敷石直下の焼土面
景德元寶(北宋1004年初鑄)	1片 1片 1片	1.39 0.60 1.42	「景」・「德」の二字が残存 「景」の一字が残存 「景」・「德」の一字が残存	C-10 SS04-A 磚敷き内敷石直下の焼土面
祥符通寶(北宋1009年初鑄)	1片	0.40	「祥」の一字が残存	
祥符元寶(北宋1009年初鑄) or 祥符通寶(北宋1009年初鑄)	1片	0.56	「符」の一字が残存	
天聖元寶(北宋1023年初鑄)	1片	2.52	「聖」の一字が残存	C-10 SS04-A 磚敷き内敷石直下の焼土面
景祐元寶(北宋1034年初鑄)	1片	0.81	「景」の一字が残存	C-10 SS04-A 磚敷き内敷石直下の焼土面
皇宋通寶(北宋1038年初鑄) + 治平元寶(北宋1064年初鑄)	2片 1片 1片	宋0.89 + 治1.03 1.48 2.69 1.12	皇宋通寶・「宋」の一字が残存 治平元寶・「治」の一字が残存 「皇」・「通」・「寶」の三字が残存 「皇」・「宋」・「通」の三字が残存 「宋」の一字が残存	C-10 SS04-A 磚敷き内敷石直下の焼土面
皇宋通寶(北宋1038年初鑄) or 皇宋元寶(南宋1253年初鑄)	1片	0.87	「皇」・「寶」の二字が残存	
至和元寶(北宋1054年初鑄)	1片	1.24	「和」の一字が残存	C-10 SS04-A 磚敷き内敷石直下の焼土面
嘉祐元寶(北宋1056年初鑄) 治平元寶(北宋1064年初鑄) or 紹聖元寶(北宋1094年初鑄)	1片 1片 1片	0.49 0.42 0.97	「至」の一字が残存 「嘉」の一字が残存 「治」or「紹」の一字が残存	
熙寧元寶(北宋1068年初鑄)	1枚 1片 1片 1片 1片	3.87 0.51 1.36 1.28 0.95	完形 「元」の一字が残存 「元」・「寶」の二字が残存 「熙」・「寶」の二字が残存 「車」の一字が残存	C-10 SS04-A 磚敷き内敷石直下の焼土面
元祐通寶(北宋1086年初鑄)	1片 1片 1片	0.30 0.93 0.65	「祐」の字款の一部が残存 「元」の一字が残存 「元」の一字が残存	
紹聖元寶(北宋1094年初鑄)	1片 1片 1片 1片 1片	1.67 0.99 0.30 0.82 0.48	「紹」・「聖」の二字が残存 「聖」の一字が残存 「紹」の一字が残存 「聖」の一字が残存 「元」の一字が残存	C-10 SS04-A 磚敷き内敷石直下の焼土面
聖宋元寶(北宋1101年初鑄)	1片 1片 1片	0.61 1.16	「宋」の一字が残存 「宋」の一字が残存	C-10 SS04-A 磚敷き内敷石直下の焼土面
政和通寶(北宋1111年初鑄)	1片 1片	0.63 0.60	「政」の一字が残存 「政」の字款のみ残存	
宣和通寶(北宋1119年初鑄)	1片 1片 1片	1.63 1.24 0.69	「和」の一字が残存 「和」・「寶」の二字が残存 「和」の一字が残存	C-10 SS04-A 磚敷き内敷石直下の焼土面
正隆元寶(金1157年初鑄)	1片	3.28	「正」・「寶」の二字が残存	
淳熙元寶(南宋1174年初鑄) or 淳化元寶(北宋990年初鑄) or 淳祐元寶(南宋1241年初鑄)	1片	0.76	「淳」の一字が残存	C-10 SS04-A 磚敷き内敷石直下の焼土面
皇宋元寶(南宋1253年初鑄)	1片	1.70	「皇」・「寶」の二字、 僅かに「元」の一字が残存	C-10 SS04-A 磚敷き内敷石直下の焼土面

第97表② 石敷きSS04-A 二次の火熱溶解錢貨

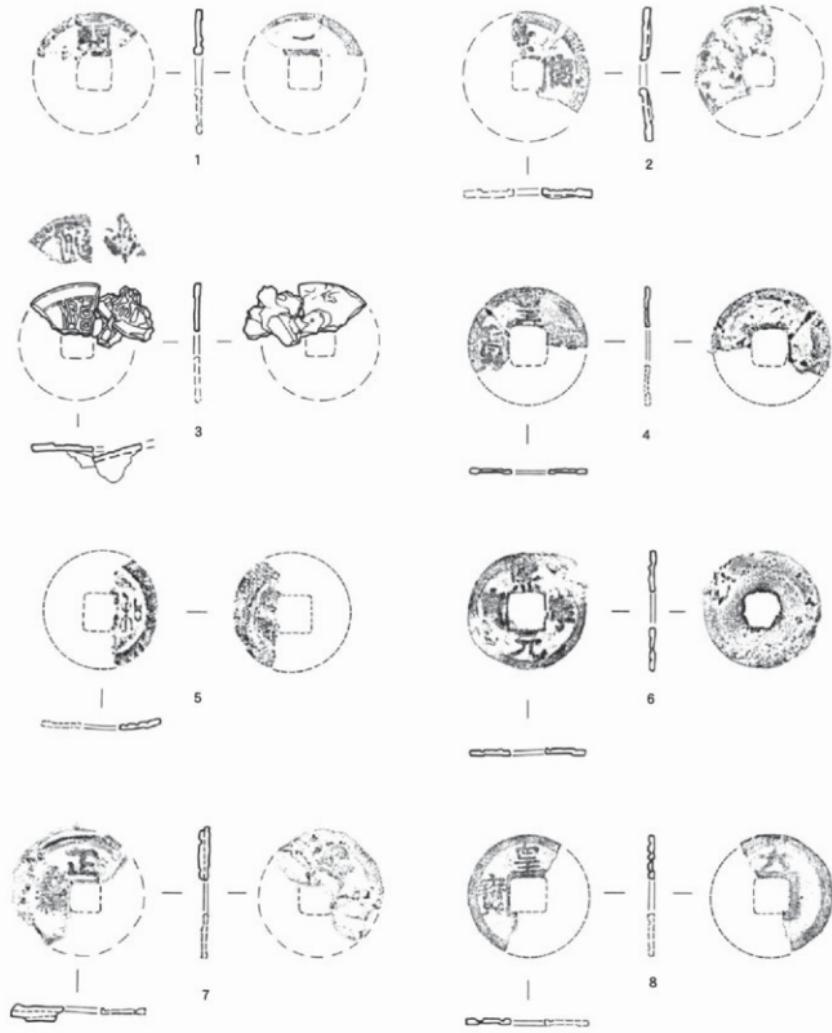
銭名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
至大通寶(元1310年初鋤)	1片	2.24	「大」・「通」の二字、 「寶」の一部も僅かに残存	C-11 SS04-A磚敷き内敷石直下の焼土面
天定通寶(天定1359年初鋤)	1片	5.15	「定」・「通」・「寶」の三字、 「天」の字も半分ほど残存	C-11 SS04-A磚敷き内敷石直下の焼土面
洪武通寶(明1368年初鋤)	1片	0.76	「寶」の一字が残存	C-11 SS04-A磚敷き内敷石直下の焼土面
	1片	2.11	「洪」・「武」・「通」の三字が残存	
	1片	1.76	「武」・「通」の二字が残存	
	1片	2.92	「洪」・「通」・「寶」の三字が残存	
	1片	0.77	「武」の一字が残存	
	1片	1.63	「洪」・「寶」の二字が残存	
洪武通寶(明1368年初鋤) + 淳化元寶(北宋990年初鋤)	1片	0.39	「洪」の一字が残存	C-11 SS04-A磚敷き内敷石直下の焼土面
	2片	3.76	洪武通寶→「洪」・「通」・「寶」 の三字が残存 淳化通寶→「化」の一字が残存	
	2片	3.87	「洪」・「寶」の二字が残存	
永樂通寶(明1408年初鋤)	1片	1.84	「樂」・「通」・「寶」の三字、 「寶」の字も半分ほど残存	C-11 SS04-A磚敷き内敷石直下の焼土面
	1片	1.22	「永」の一字が残存	
	1片	0.70	「樂」の一字が残存	
	1片	0.81	「永」の一字が残存	
	1片	3.35	「永」・「樂」・「通」の三字が残存	
	1片	1.00	「樂」の一字が残存	
永樂通寶(中世末期～近世初頭)	1片	2.22	「樂」・「寶」の二字が残存	C-11 SS04-A磚敷き内敷石直下の焼土面
	1片	0.73	-	
	1片	0.69	-	
無文銭(初鋤年不明)	1片	1.57	「通」・「寶」の二字が残存	C-11 SS04-A磚敷き内敷石直下の焼土面
	1片	1.24	「元」・「寶」の二字が残存	
不明銭貨	1片	1.26	「元」・「寶」の二字が残存	C-11 SS04-A磚敷き内敷石直下の焼土面
	1片	0.69	「元」の一字が残存	
	1片	0.76	「元」の一字が残存	
	1片	0.37	「元」の一字が残存	
	1片	1.40	「○」・「通」の二字が残存	
	1片	1.34	「○」・「寶」の二字が残存	
	1片	2.25	「○」・「通」の二字が残存(付着物あり)	
	1片	1.20	「通」の一字が残存	
	1片	0.57	「通」の一字が残存	
	1片	0.88	「通」の一字が残存	
	1片	0.45	「通」の一字が残存	
	1片	1.61	「通」の一字が残存	
	1片	0.68	「通」の一字が残存	
	1片	0.72	「通」の一字が残存	
	1片	0.45	「通」の一字が残存	
	1片	1.22	「通」の一字が残存	
	1片	1.00	「寶」の一字が残存	
	1片	0.76	「寶」の一字が残存	
	1片	0.83	「寶」の一字が残存	
	1片	0.89	「寶」の一字が残存	
	1片	1.04	「寶」の一字が残存	
	1片	0.69	「寶」の一字が残存	
	1片	1.23	「寶」の一字が残存	
	1片	0.61	「寶」の一字が残存	
	1片	0.68	「寶」の一字が残存	
	1片	0.69	「寶」の一字が残存	
	1片	0.67	「寶」の一字が残存	
	1片	0.37	「寶」の一字が残存	
	1片	1.34	「寶」の字款の一部が残存	
	2片	2.95	判読不可(2枚着付)	
	7片	6.07	-	
	23片+X	27.29	-	
	-	15.38	-	
	1片	0.47	「寶」の一字が残存	C-10 SS04-A第3層(フーチン近く)
	-	1.91	-	C-10 SS04-A第3層(フーチン近く)
合計	132片X	※「X」:片数不明		

第98表① 石敷きSS04-A 錢貨観察一覧

単位:mm/g

挿図番号 国版番号 遺物番号	錢種 鉄造種類	初鑄年	素材	読み方	状態	書体	肉郭外径 肉郭内径			方穿	断面計測部位			重量	観察事項	出土点 出土層
							A B	C D	E F		①	②	③			
第57回 図版47 1	開元通寶 公鋳銭	唐 621年	銅 銭	対 読	破 損	篆 書	—	—	—	—	1.31	0.84	1.22	0.96	1/4強が残存。字款は「開」の一文字のみ残存。面の肉郭の幅は1.66mmを測る。背は肉郭の幅が一定せず1.55~2.73mmと異狀がある。背に浮文の月が確認できることから「背上月」の範疇にある。二次的な火熱を受けている。特に面の一部は火熱の影響でケロイド状となる。面と背では緑青以外に鉄鏽の付着がみられる。	C-10 SS04-A 磚敷内 敷石直下 焼土面
〃2	景德元寶 公鋳銭	北宋 1004 年	銅 銭	回 読	破 損	真 書	—	—	—	—	1.84	1.09	1.20	1.39	1/3強が残存する。残存する字款は「景」、「德」の二字がみられる。「景」の字款が半分近く欠落する。二次的な火熱を受けて破断面や背に溶解・凝固した塊が付着する。特に背は著しく肉郭の位置が確認しにくい。面の肉郭に幅は2.45~2.66mmを測る。表面裏面とも緑青がみられるが、特に背は二次的な火熱や緑青の浸食が著しく、ケロイドや微細なアバタ状となる。	C-10 SS04-A 磚敷内 敷石直下 焼土面
〃3	皇宋通寶 （右） 公鋳銭	北宋 1038 年（右） + 北宋 1064 年（左）	銅 銭	対 読 （右） + 回 読 （左）	破 損	篆 書	—	—	—	—	宋 1.70 + 治 1.88	宋 1.20 + 治 1.64	宋 1.47 + 治 1.35	宋 0.89 + 治 1.03	皇宋寶治と治平元寶の破片が二次的な火熱を受けて溶解して癒着した資料である。2枚とも1/4弱の破片である。右側は皇宋通寶の「宋」の字款がみられる。左側は治平元寶の「治」の字款が残存する。面の肉郭の幅は、左側の治平元寶が2.70mm、右側の皇宋通寶は2.67mmを測った。背の肉郭は、左側が不明であるが3.25~3.99mmと幅広である。右側は肉郭が火熱溶解による齧食箇所のため、不明。面と背には緑青がみられるが、特に背は火熱溶解後に石灰質の砂粒や砂岩（ニービヌフ）の細片などを取り込んで凝固している。	C-10 SS04-A 磚敷内 敷石直下 焼土面
〃4	皇宋通寶 公鋳銭	北宋 1038 年	銅 銭	対 読	破 損	篆 書	—	—	—	8.00	1.03	0.48	0.68	1.48	1/2以上が残存する。残存する字款は「皇」、「通」、「寶」の三字がみられるが、「通」の字款が半分近く欠落する。面の肉郭の幅は1.60~1.95mmを測る。背の肉郭は面よりも幅1.74~3.50mmと幅広である。面は摩滅し字款がやや不明である。表面裏面とも緑青がみられる。	C-10 SS04-A 磚敷内 敷石直下 焼土面
〃5	至和元寶 不明	北宋 1054 年	銅 銭	回 読	破 損	篆 書	—	—	—	—	1.34	0.81	1.13	1.24	1/3近くが残存する。残存する字款は「和」の一文字のみが確認できる。面の肉郭の幅は2.04~2.58mmを測る。背の肉郭は面よりも幅(2.87~4.51mm)であるが鉄錆の跡で肉郭もズレて黒ずむ。面と背に緑青がみられる。	C-10 SS04-A 磚敷内 敷石直下 焼土面
〃6	熙寧元寶 公鋳銭	北宋 1068 年	銅 銭	回 読	完 形	真 書	24.48 24.35	19.81 21.04	7.85 7.52	1.29	0.79	1.14	3.87	完形の銭。二次的な火熱を受けて両面が黒く変色する。面には火熱で溶解して再凝固の際に細かい石英や鉄片などが付着する。面の肉郭の幅は1.33~1.92mmを測る。背の肉郭は面よりも幅(2.15~3.54mm)である。二次的な火熱を受けた影響で緑青の発生が背にのみ限定されている。	C-10 SS04-A 磚敷内 敷石直下 焼土面	
〃7	正隆元寶 公鋳銭	金 1157 年	銅 銭	回 読	破 損	—	—	—	—	2.46	—	—	3.28	1/2強が残存する銭で、別の銭貨が二次的な火熱を受けて重なって付着する。正隆元寶の字款で「正」、「寶」の二字が残存する。別個体の銭は、「寶」の一文字のみが確認できる。両面とも二次的な火熱を受けて銭素材が溶解して完全に癒着している。裏面は特に緑青による浸食が著しく破断面の銭素材が青白色となり空洞化が進行している。両面とも緑青や火熱の影響を受けて面の保持は悪く、ケロイド状やアバタ状になる部分が散見される。表面の正隆元寶は肉郭の幅が1.27mmと狭く、裏面の「寶」は、肉郭の幅が2.61mmと幅広である。	C-10 SS04-A 磚敷内 敷石直下 焼土面	

注 「-」:計測不可



0 5cm

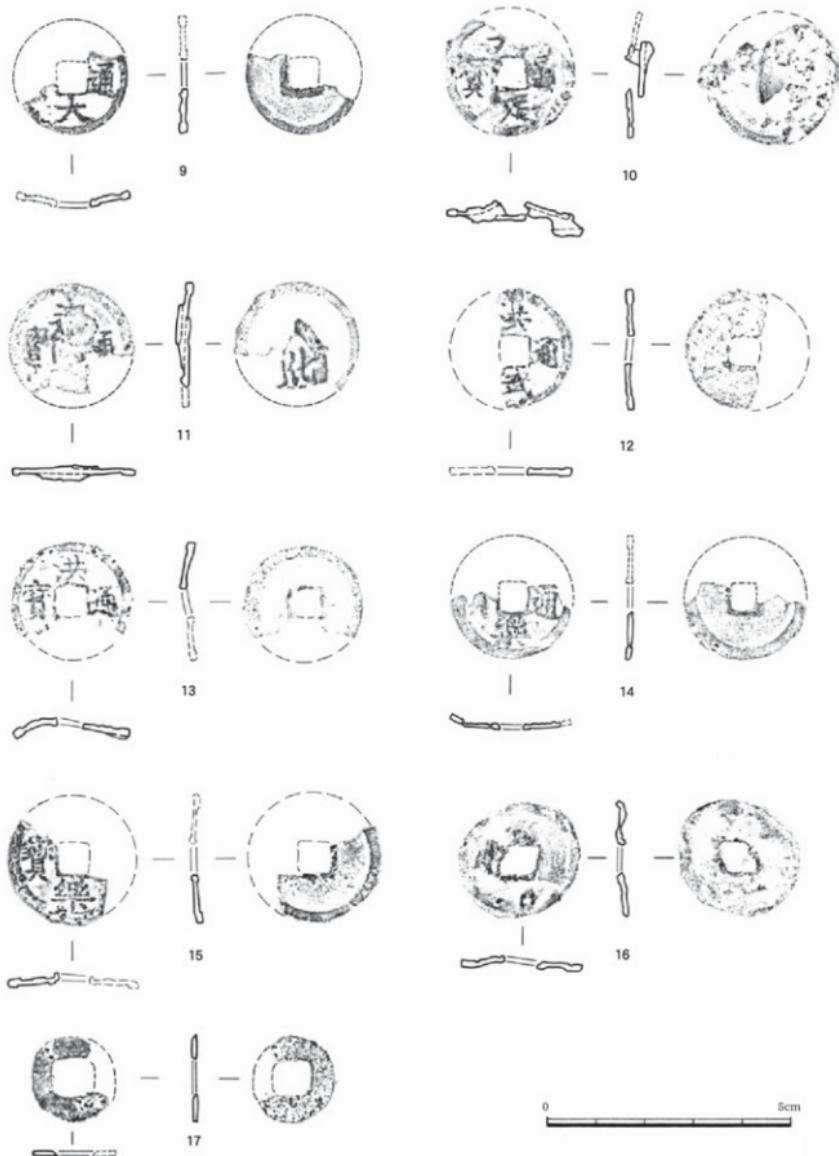
第57図 石敷きSS04-A出土品② 錢貨：1～8

第98表② 石敷きSS04-A 錢貨観察一覧

単位:mm/g

挿図番号 国版番号 遺物番号	銭種 鉄種類	初 鋳 年	材 素 材	読 み 方	状 態 書 体	内郭 外径		方 穿	断面計測部位			重 量	観察事項	出土点 出土層	
						A B	C D		E F	①	②				
第57回 国版47 8	皇宋元寶 公鑄銭	南宋 1253年	鉄銭	回読 破損	—	—	—	—	7.16	0.89	0.65	0.81	1.70	1/2程度残存する。明確に残存する字款は「皇」「寶」の二字であるが、「元」の字款の一部が僅かに確認できる。背に「六」の字款がみられる。面の内郭の幅は1.61～2.14mmを測る。背の内郭は面よりも幅広(1.71～3.09mm)である。面の字款は背よりも鮮明である。緑青は面よりも背で多く観察できる。	C-10 SS04-A 磚敷内 敷石直下 の焼土面
第58回 国版48 9	至大通寶 不明	元 1310年	銅銭	対 読 破損 楷書	—	—	—	—	—	1.87	0.98	1.53	2.24	1/2弱が残存する。明確に残存する字款は「大」「通」の二字であるが、「寶」の字款の一部が僅かに確認できる。面の内郭の幅は1.38～1.80mmを測る。背の内郭は面よりも若干幅広(1.58～2.00mm)である。面の字款は深く鋳造され鮮明である。緑青は背よりも面で多く観察され微細なアバタ状となる。	C-10 SS04-A 磚敷内 敷石直下 の焼土面
〃 10	大定通寶 ○天定通寶 公鑄銭	金 1178年 ・ 天 1359年	銅銭	対 読 破損 楷書	—	—	—	—	—	1.89	—	—	5.15	4/5弱が残存する。明確に残存する字款は「大」「通」「寶」の三字で、「天」の字款が半分程度欠落する。二次的な火熱を受けて背に剥れた銭の細片や破片などが付着する。面も火熱による影響を受け溶解やヨロイとなる部分が多くみられる。面の内郭の幅は1.63～1.78mmを測る。背の内郭は1.48～1.55mmとより幅が狭い。二次的な火熱を受けた際に面は、連構面であった細粒砂岩(ニービスマニ)に付着した状態で焼けた為、細粒砂岩の一部を取り込んでいる。	C-10 SS04-A 磚敷内 敷石直下 の焼土面
〃 11	洪武通寶 +淳化元寶 不明	明 1368年 + 北宋 990年	銅銭	対 読 回 讀 破損 楷書+行書	—	—	—	—	—	1.42	0.48	—	3.76	1/3強が残存。面の字款は「洪」「通」「寶」の三字を配置するが、「洪」の字款の上に他の銭の細片が重なっている。「通」の字款は半少し、「寶」は二次的な火熱を受けて溶解して判読できない。背には、淳化通寶の「化」の字款のみが破片として付着し、字款が鮮明に確認できる。面の内郭の幅は1.65～2.15mmを測る。背は1.51～2.42mmを測った。参考までに淳化通寶の「化」の部分の内郭の幅は2.51～2.83mmであった。背は面よりも器面の保持が良好で緑青の影響は軽微で緑青が確認しにくい。	C-10 SS04-A 磚敷内 敷石直下 の焼土面
〃 12	洪武通寶 公鑄銭	明 1368年	銅銭	対 読 破損 楷書	24.06	19.85	—	5.6	—	1.88	1.10	1.40	2.11	1/2強が残存。字款は「洪」「武」「通」の三字が残存する。面の内郭の幅は1.59～2.52mmを測る。背は1.60～2.15mmを測った。緑青は両面でみられるが、特に背が著しく全面に広がっている。	C-10 SS04-A 磚敷内 敷石直下 の焼土面
〃 13	洪武通寶 公鑄銭	明 1368年	銅銭	対 読 破損 楷書	—	24.46	—	6.79	—	1.71	0.98	1.45	2.92	2/3強が残存。字款は「洪」「通」「寶」の三字が残存する。方穿(四角い穴)と孔都(穴の縁)の三辺が浅く抉れている。鑄造時に原型の錢形の方穿と孔都を意図的に変形させた可能性が高い。面の内郭の幅は1.60～2.21mmを測る。背は1.53～2.59mmを測った。緑青の影響により両面で粗細な猜影れがみられる。特に背の一部に鉄筋が付着する。	C-10 SS04-A 磚敷内 敷石直下 の焼土面
〃 14	永樂通寶 公鑄銭	明 1408年	銅銭	対 読 破損 楷書	—	—	—	5.99	—	1.25	0.62	0.95	1.84	1/2強が残存。面の字款は「樂」「通」「寶」の三字を配置するが、「寶」の字款が半分程度欠損する。面の内郭の幅は1.95～2.26mmを測る。背は1.88～2.82mmを測った。緑青は背よりも面で多くみられる。	C-10 SS04-A 磚敷内 敷石直下 の焼土面

注「-」:計測不可



第58図 石敷きSS04-A出土品③ 銭貨：9～17

第98表③ 石敷きSS04-A 錢貨觀察一覧

単位:mm/g

捕獲番号 図版番号 遺物番号	銭種 铸造種類	初鑄年	素材	認み方 状態	書体	内郭 外径	内郭 内径	方穿	断面計測部位			重量	観察事項	出土地点 出土層
									A B	C D	E F			
第58回 図版48 15	永樂通寶 公誇銭	明 1408年	銅銭	対読 破損	楷書	—	—	—	1.70	1.04	1.49	2.22	1/2施が残存、面の字款は「樂」・「寶」の二字が複数存在する。二次的な火熱を受けて面の一部が溶解し、溶解箇所に緑青が集中する。背は緑青で薄く覆われている。面の内郭の幅は2.34mmを測る。背は1.62~1.74mmを測る。	C-11 SS04-A 磚敷内 敷石直下 の焼土面
〃 16	不明 不明	不明	銅銭	— —	—	26.32 22.98	21.12 21.07	7.66 6.79	1.09	0.57	—	1.57	二次的な火熱を受けて橢円形状に変形した完形の銭。面の字款は「通」・「寶」の二字が確認できるが、肝要な二字が火熱による溶解や摩耗などで判読ができない。背も火熱・溶解や緑青の影響で器面の保持が悪い。	C-11 SS04-A 磚敷内 敷石直下 の焼土面
〃 17	無文銭 模誇銭	不明	銅銭	— 破損	—	17.40	—	—	0.91	—	—	0.73	1/4程度が欠落する無文銭。面・背には内郭は無いが、面に孔郭(幅0.40~0.76mm)が僅かに薄く観察できる。外周縁辺部が二次的な火熱や緑青の影響で部分的に縁辺部が虫食い状態で欠落する。両面とも火熱や緑青の影響を受けて器面がクロイド状や微細なアバタ状となる部分がみられる。	C-11 SS04-A 磚敷内 敷石直下 の焼土面

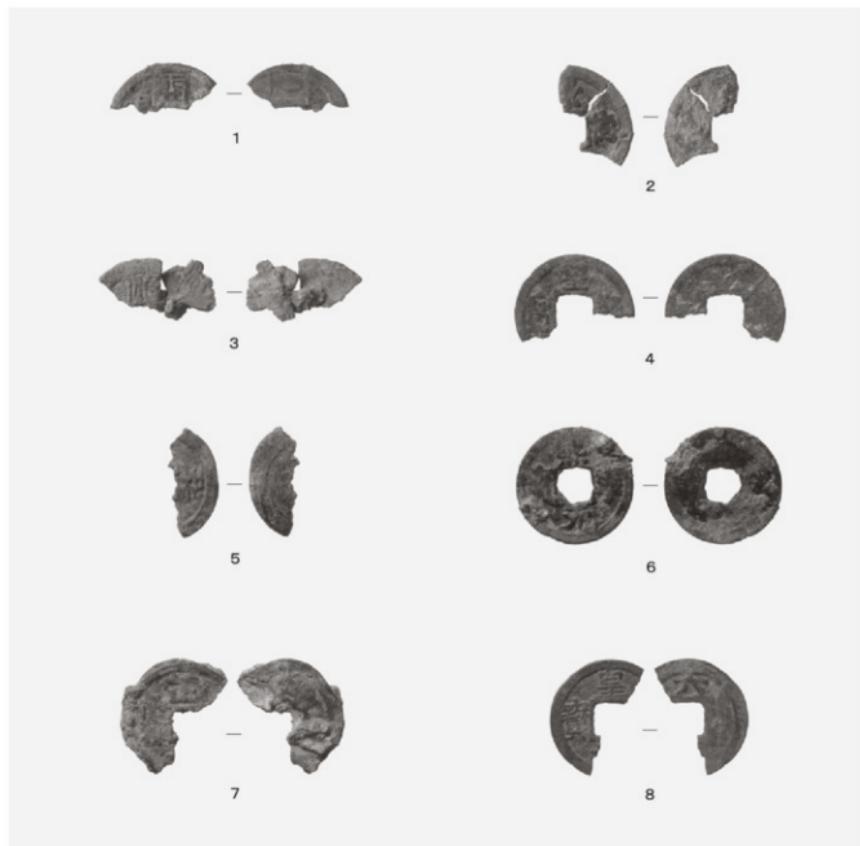
注 「—」:計測不可

第99表 石敷きSS04-A 出土遺物状況

種類・分類・器種・部位	層序						合計	
	C-10 SS04-A							
	磚敷内 敷石直下 の焼土面	第2層f (西側築石内 造構直下)	第2層f (西側築石内 造構直下)	第3層 (フーチン近く)	東側 第3層a	南側 第3層a		
屋瓦	高麗系 明朝系	平瓦 赤色	灰色 無し				3 2	
	合 計	0	0	0	2	0	3 5	
青磁	碗	口縁部 胸部	外反 有文	1			1	
	盤	胸部	無文		1		1	
	合 計	1	0	1	0	1	3 3	
中国産掲軸陶器	壺	口縁部 胸部	方形			1	1	
	合 計	12	1	17	7	51	88	
タイ産土器(半鍊)	蓋	撮み				1	1	
	合 計	0	0	0	0	1	0 1	
タイ産 掲軸陶器	壺	口縁部 胸部			1		1	
	合 計	0	0	0	1	3	4	
石材	細粒砂岩(ニーピ)				1		1	
	合 計	0	0	0	1	0	1	
円盤状製品	中国産掲軸陶器					1	1	
	合 計	0	0	0	0	1	0 1	
金属製品	工具類・ 生産用具	角鉤 頭部 欠損 サイズ 不明	鉄	1			1	
	合 計	1	0	0	0	0	1 1	
ガラス製品	板ガラス				1		1	
	合 計	0	0	0	1	0	1	



図版46 石敷きSS04-A出土品① タイ産土器（半練）：1、タイ産褐釉陶器：2、円盤状製品：3



図版47 石敷きSS04-A出土品② 錢貨1～8



9



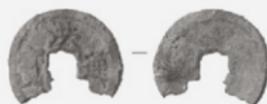
10



11



12



13



14



15



16



17



10
軟X線写真



11
軟X線写真

図版48 石敷きSS04-A出土品③ 銭貨：9～17

(15) 石敷き SS04-B の出土遺物 (第 59 図～第 61 図、第 100 表～第 104 表、図版 49・50)

石敷き SS04-B から出土した遺物の種類は、第 4 表に示したように総計で 412 点 (≈100%) が得られている。出土遺物の内訳は、土器 3 点 (0.73%) 、瓦類 62 点 (15.05%) 、青磁 3 点 (0.73%) 、中国産褐釉陶器 201 点 (48.79%) 、沖縄産施釉陶器 1 点 (0.24%) 、タイ産褐釉陶器 8 点 (1.94%) の 13 種類が確認されている。輸入陶器 (タイ産、中国産) の占める割合は、51.70% であった。

当該遺構の時期に伴う遺物として示すことができた資料は、中国産褐釉陶器 (第 59 図 2・3) とタイ産土器 (同図 4) がある。なお、出土遺物の大半は細片化した資料が多く、その中から比較的大きな破片資料や特徴的な資料を図示 (第 59 図～第 61 図) した。

第100表 石敷きSS04-B 青磁・中国産褐釉陶器・タイ産土器(半練)出土状況

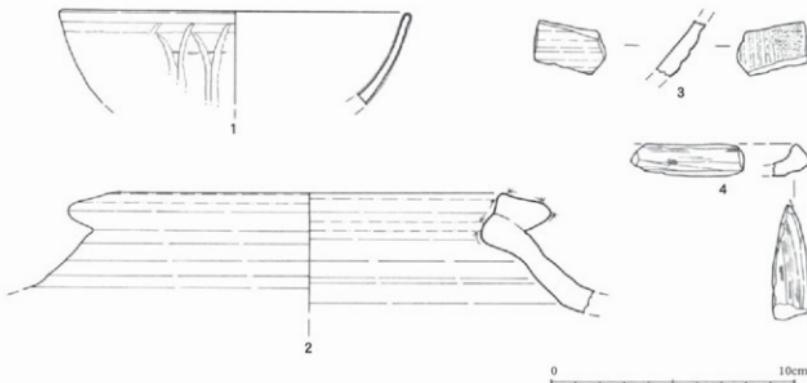
層序				C-10
				SS04-B
				敷石直下 第2層f
青磁	碗	口縁部	直口	1
		胴部	蓮弁文	1
		皿	籠彫り	1
合 計				3
中国産褐釉陶器	壺	胴部		1
		口縁部	方形狀	5
		頸部		1
		胴部		193
		底部		1
合 計				201
タイ産土器(半練)	蓋	蓋端部	VII類	1
合 計				1

第101表 石敷きSS04-B 青磁・中国産褐釉陶器・タイ産土器(半練)観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	部位	口径 器高 底径	観察事項(素地・混入物・色調・釉色等)	出土土地 出土層
第59図 図版49 1	無 錫 青 磁 蓮 弁 文	碗	口縁部 14.4 — —	器形:直口口縁碗。文様:外面に籠彫りで弁先が僅かに開いた蓮弁文を描く。素地:光沢のある淡灰色の微粒子。釉色:明緑色で、貫入はない。龍泉窯系。14c後半~15c前半。	SS04-B 敷石直下 第2層f
〃 2	中國 產 褐 釉 陶 器	蓋	口縁部 19.8 — —	器形:口縁部の縦断面が直な隅丸形状の肥厚口縁とする怒り肩の蓋。内面口縁の肥厚帯部分を浅く凹ませて蓋受けの構を造る。文様:輪縞引きで陽圏線一条を加えて表現か。器面調整:釉上からの観察では両面とも輪縞痕が顕著にみられる。素地:淡灰色~茶紫色の粗粒子で、粗細な石英と茶褐色の物質を少量含む。色調:両面に茶褐色の釉を施すが、口唇部の両端部の釉を搔き取って露胎とする。中国南部の窯。15c~16c。	C-10 SS04-B 敷石直下 第2層f
〃 3	擂 鉢	胴部	— — —	器形:器厚の厚みから判断すると碗形の擂鉢が想定される。文様:内面に横目幅が幅広となる櫛状の工具(幅1.70mm)で縱方向に6条の摺目を施したようであるが、摺目は6条以上の単位が考えられる。器面調整:外面は難な輪縞痕がナデ消されるが徹底していない。内面には回転擦痕がみられる。素地:灰色の粗粒子で、微細な鉱物(石英、黒色)を少量含む。稀に粗い石英がみられる。釉色:外側の胴部に茶褐色の釉を施されている。内面は露胎する。色調:両面とも淡灰白色を帯びる。中国南部の窯。15c~16c。	C-10 SS04-B 敷石直下 第2層f
〃 4	(半 練 土 器) タイ 産 土 器	蓋の縁 VII類	— — —	器形:蓋の縁辺部の縦断面が直な隅丸三角形状の突帯を造る落し蓋。文様:下面の縁沿いで幅広(4.8mm)に窪ませて圓線様に仕上げる。器面調整:上面は丁寧な回転擦痕を施す。下面是難な回転擦痕を加える。蓋縁の突帯部分は刷毛目様の擦痕を施してあるが難である。素地:灰白色の粗粒子で、粗細な鉱物(石英、黒色、茶褐色)を多量に含む。色調:下面が明橙色で、上面が黄白色を帯びる。焼成:良好で堅い。15c~16c。	SS04-B 敷石直下 第2層f

注「—」:計測不可



第59図 石敷きSS04-B出土品① 青磁:1、中国産褐釉陶器:2・3、タイ産土器(半練):4

第102表① 石敷きSS04-B 二次的火熱溶解銭貨

銭名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
開元通寶(唐621年初鑄) or (唐845年初鑄) or (南唐960年初鑄)	1片	1.34	「開」・「寶」の二字が残存	C-10 SS04-B 敷石直上
	1片	0.92	「開」・「通」の二字が残存	
	1片	0.81	「開」・「寶」の二字が残存	
	1片	1.01	「開」の一字が残存	
太平通寶(北宋976年初鑄)	1片	1.14	「平」・「通」の二字が残存	C-10 SS04-B 敷石直上
至道元寶(北宋995年初鑄)	1片	0.79	「至」の一字が残存	C-10 SS04-B 敷石直上
	1片	2.12	「平」・「元」の二字が残存	C-10 SS04-B 敷石直上
咸平元寶(北宋998年初鑄)	1片	0.68	「咸」の一字が残存	C-10 SS04-B 敷石直下第2層f
	1片	0.68	「景」の一字が残存	
景德元寶(北宋1004年初鑄)	1片	0.52	「元」の一字が残存	C-10 SS04-B 敷石直上
	1片	1.09	「祥」の一字が残存	C-10 SS04-B 敷石直上
祥符通寶(北宋1009年初鑄)	1片	1.31	「通」の一字が残存	C-10 SS04-B 敷石直上
	1片	1.31	「元」・「寶」二字が残存	
明道元寶(北宋1032年初鑄)	1片	1.31	「元」・「寶」二字が残存	C-10 SS04-B 敷石直上
景祐元寶(北宋1034年初鑄)	1片	1.10	「景」・「寶」二字が残存	C-10 SS04-B 敷石直下第2層f
景祐元寶?(北宋1034年初鑄)	1片	0.37	「元」の一字が残存	C-10 SS04-B 敷石直下第2層f
皇宋通寶(北宋1038年初鑄)	1片	2.04	「宋」・「通」二字が残存	C-10 SS04-B 敷石直上
嘉祐通寶(北宋1056年初鑄)	1片	1.44	「祐」・「通」二字が残存	C-10 SS04-B 敷石直上
	1片	0.42	「祐」の一字が残存	
熙寧元寶(北宋1068年初鑄)	1片	1.08	「寧」の一字が残存	C-10 SS04-B 敷石直上
	1片	1.38	「熙」・「寧」の二字が残存	
	1片	1.16	「熙」の一字が残存	
	1片	1.15	「熙」・「寧」の二字が残存	
元豐通寶(北宋1078年初鑄)	1片	2.00	「熙」・「寶」の二字以外に、「寧」のウ冠が僅かに残存	C-10 SS04-B 敷石直下第2層f
	1片	1.44	「元」・「豐」の二字が残存	
元豐通寶(北宋1078年初鑄)折二錢	1片	1.50	「元」・「豐」の二字が残存	C-10 SS04-B 敷石直上
	1片	2.00	「豐」・「通」の二字が残存	
元祐通寶(北宋1078年初鑄)	1片	1.54	「元」・「寶」の二字が残存	C-10 SS04-B 敷石直上
	1片	0.87	「通」の一字以外に「寶」の字の一部が僅かに残存	
元祐通寶(北宋1086年初鑄) or 元豐通寶(北宋1078年初鑄)	1片	1.23	「元」・「寶」の二字が残存	C-10 SS04-B 敷石直上
	1片	0.97	「元」の一字が残存	
元豐通寶(北宋1078年初鑄) or 元祐通寶(北宋1086年初鑄) or 元符通寶(北宋1098年初鑄)	1片	2.88	「通」の一字が残存	C-10 SS04-B 敷石直下第2層f
	1片	1.22	「宋」・「元」の二字が残存	
	1片	1.79	「宋」・「元」の二字が残存	
	1片	5.98	折二錢	
聖宋元寶(北宋1101年初鑄)	1片	1.16	「聖」・「宋」の二字が残存	C-10 SS04-B 敷石直下第2層f
	1片	0.86	「政」の一字が残存	
政和通寶(北宋1111年初鑄)	1片	0.99	「通」の一字が残存	C-10 SS04-B 敷石直上
	1片	1.31	「宣」・「寶」の二字が残存	
宣和通寶(北宋1119年初鑄)	1片	1.31	「宣」・「寶」の二字が残存	C-10 SS04-B 敷石直上

第102表② 石敷きSS04-B 二次的火熱溶解銭貨

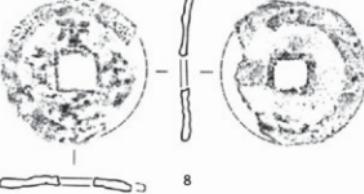
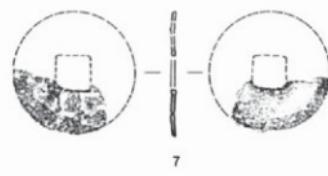
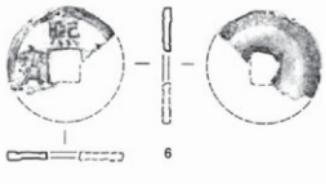
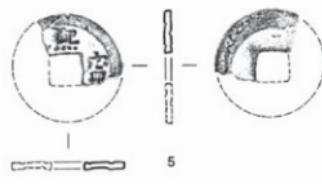
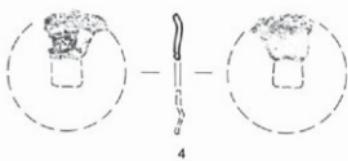
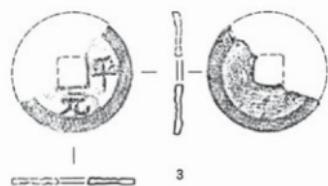
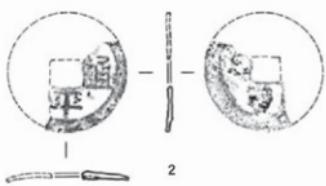
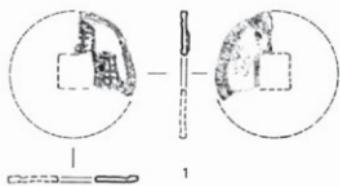
銭名	片数	重量(g)	残存状況	出土層
洪武通寶(明1368年初鑄)	1片	2.83	「武」・「通」・「寶」の三字が残存	C-10 SS04-B 敷石直上
	1片	1.63	「洪」・「通」の二字が残存	
	1片	2.03	「洪」・「通」の二字が残存	
	1片	2.40	「洪」の一文字が残存	
	1片	0.97	「洪」の一文字が残存	
	1片	2.12	「武」の一文字、「通」・「寶」の二字が半分ずつ残存	
	1片	1.54	「武」・「寶」の二字が残存	
	1片	0.76	「洪」の一文字が残存	
	1片	2.85	「洪」・「武」・「寶」の三字が残存	
永樂通寶(明1408年初鑄)	1片	0.92	「通」の一文字が残存	C-10 SS04-B 敷石直上
	1片	0.44	「樂」の一文字が残存	
	1片	0.82	「永」の一文字が残存	
	1片	0.86	「樂」の一文字が残存	
淳化元寶or祥符元寶？ (南北朝頃)	1片	0.97	「元」の一文字が残存	C-10 SS04-B 敷石直下第2層f
元豐通寶(中世末期～近世初頭)	1片	1.54	「元」・「豐」の二字が残存	C-10 SS04-B 敷石直上
	1片	0.74	「元」・「寶」の二字が残存	
	1片	1.36	「元」・「寶」の二字が残存	
	1片	1.47	「○」・「通」の二字が残存	
	1片	1.06	「通」の一文字が残存	
	1片	1.03	「寶」の一文字が残存	
	1片	0.68	「寶」の一文字が残存	
	1片	0.45	「寶」の一文字が残存	
	1片	0.71	「寶」の一文字が残存	
	1片	1.20	「寶」の一文字が残存	
	1片	0.91	「寶」の一文字が残存	
	1片	0.78	「寶」の一文字が残存	
	1片	0.84	判読不可	
	1片	0.66	「元」の一文字が残存	
不明銭貨	1片	0.93	「通」の一文字が残存	C-10 SS04-B 敷石直下第2層f
	1片	0.46	「通」の一文字が残存	
	1片	0.47	「通」の一文字が残存	
	1片	2.89	「通」の一文字が残存(2枚付着錢)	
	1片	0.86	「寶」の一文字が残存	
	1片	0.49	「寶」の一文字が残存	
	1片	0.51	「寶」の一文字が残存	
	1片	0.83	「寶」の一文字が残存	
	1片	1.02	「寶」の一文字が残存	
	1片	0.57	「寶」の一文字が残存	
	16片+X	16.87	-	
	19片+X	16.48	-	
合計	111+X	奈「X」:片數不明		

第103表① 石敷きSS04-B 銭貨観察一覧

単位:mm/g

挿図番号・ 図版番号・ 遺物番号	銭種 鉄造種類	初鑄年	素材	読み方	状態	書体	肉郭外径	肉郭内径	方穿	断面計測部位			重量	観察事項	出土点 出土層	
										A B	C D	E F				
第60回 図版50 1	開元通寶 不明	唐621年 唐845年 南唐 960年	銅錢	対読	破損	真書	—	—	—	1.36	0.69	1.35	0.92	1/3弱が残存する。面の字款は深く鋤られ、「開」「通」の二字が確認できるが、「開」の字款が半分以上破損する。面の肉郭は背よりも鮮明であり、面の肉郭の幅は1.23～2.07mmを測る。背の肉郭は2.25mmと幅広である。背の一部に緑青による跡膨れがみられる。	C-10 SS04-B 敷石直上	
〃 2	太平通寶 公鉄錢	北宋 976年	銅錢	対読	破損	—	—	—	—	1.11	0.42	0.78	1.14	1/3強が残存する。面の字款は深く鋤られ、「平」「通」の二字が確認できるが、錢本体の厚みは0.57mmと薄い。面の肉郭の幅は、2.15～2.65mmを測る。背の肉郭は2.73～3.15mmと面よりも幅広である。背の一部に緑青による地金への浸食がみられる。	C-10 SS04-B 敷石直上	
〃 3	咸平元寶 公鉄錢	北宋 998年	銅錢	回読	破損	真書	—	—	—	1.36	0.60	1.14	2.12	1/2弱が残存する。面の字款は深く鋤られ、「平」「元」の二字が確認できるが、錢本体の厚みは0.68～0.72mmと薄い。面の肉郭の幅は2.23～3.06mmを測り、背の肉郭は2.33～3.07mmを測った。	C-10 SS04-B 敷石直上	
〃 4	咸平元寶 公鉄錢	北宋 998年	銅錢	回読	破損	真書	—	—	—	1.27	0.66	1.07	0.68	1/4弱が残存する。面の字款は「咸」の一字のみで字款が摩滅して判読しにくい。面の肉郭の幅は2.90mmを測り、背の肉郭は不鮮明で錢本体部分との境目が観察しにくいで3.24mmを測った。両面とも緑青がみられ微細なアバタ状となる。孔郭と外周縁辺部で部分的に緑青により微細な浸食がみられ青白色を帯びている。	C-10 SS04-B 敷石直下 第2層f	
〃 5	熙寧元寶 不明	北宋 1068年	銅錢	回読	破損	真書	—	—	—	1.43	0.89	1.36	1.38	1/2弱が残存する。面の字款は「熙」「寧」の二字が確認できる。面の肉郭の幅は2.06～2.54mmを測る。背の肉郭は面より幅広で2.62～3.49mmを測った。背の肉郭の一部には緑青が磨擦の剥離した状態で観察される。	C-10 SS04-B 敷石直上	
〃 6	熙寧元寶 公鉄錢	北宋 1068年	銅錢	回読	破損	真書	—	—	—	7.19 6.56	1.59	1.12	1.39	2.00	1/2弱が残存する。面の字款は「熙」「寧」の二字以外に「寧」の字款の冠が僅かに確認できる。面の肉郭の幅は1.52～2.04mmを測る。背の肉郭は面より幅広で3.01～3.66mmを測った。外周縁辺部は部分的に緑青の浸食により銭縁の剥離や微細な跡膨れがみられる。	C-10 SS04-B 敷石直下 第2層f
〃 7	元祐通寶 模鉄錢	北宋 1086年	銅錢	回読	破損	行書	—	—	—	0.92	0.57	—	0.87	1/3程度が残存する。面の字款は「通」の一字以外に「寶」の字款の一部が僅かに確認できる。面の肉郭の幅は3.32mmを測る。背の肉郭は緑青の浸食による影響が強く計測ができない。面や背は緑青が著しく器面の保持が悪く、外周縁辺部(銭の縁)の一部が微弱に欠落する。	C-10 SS04-B 敷石直上	
〃 8	聖宋元寶 不明	北宋 1101年	銅錢	回読	破損	行書	29.54	22.13	7.17 6.52	1.22	1.07	—	5.98	聖宋元寶の折二錢とみられるが、二次的な火熱を受けて面の字款が溶解してケロイド状となる。肉郭の幅は面が3.04～3.33mm、背で3.95～4.09mmを測る。背も二次的な火熱を受けてケロイド状となる。	C-10 SS04-B 敷石直上	

注「—」:計測不可



0 5cm

第60図 石敷きSS04-B出土品② 銭貨：1～8

第103表② 石敷きSS04-B 銭貨観察一覧

単位:mm/g

押印番号 図版番号 遺物番号	銭種 鉄種類	初鋳年	素材	読み方	状態	書体	肉郭外径	肉郭内径	方穿 断面計測部位			重量	観察事項	出土点 出土層			
									A B	C D	E F						
第61図 図版50 9	聖宋元寶 公鑄銅錢	北宋 1101年	銅銭	回読	破損	篆書	—	—	—	—	1.27	0.63	1.16	1.79	1/2弱が残存する。面の字款は深く鏽られ、「宋」・「元」の二字が鮮明に確認できる。銭本体の字款がある部分は厚みが1.16mmと薄い。面の肉郭の幅は1.56~1.75mmを測る。 背の肉郭は1.81~2.06mmと面よりも若干幅広である。二次的な火熱を受けて面の一部がケロイド状となる。破壊した部分に緑青による微細な空洞が発生している。緑青は面・背でみられるが、特に背に集中する。	C-10 SS04-B 敷石直上	
〃 10	聖宋元寶 公鑄銅錢	北宋 1101年	銅銭	回読	破損	行書	—	—	—	—	1.22	0.46	1.05	1.16	聖宋元寶の小平銭。1/3弱が残存する。面の字款は深く鏽られ、「宋」・「宋」の二字が鮮明に確認できる。面の肉郭の幅は2.63~2.75mmを測る。背の肉郭は2.97~3.02mmと面よりも若干幅広である。緑青は面・背でみられる器面が微弱なアシカ状となる。特に背には鉄分の付着もみられる。	C-10 SS04-B 敷石直下 第2層f	
〃 11	宣和通寶 不明	北宋 1119年	銅銭	対読	破損	篆書	—	—	—	—	6.20	1.52	0.82	1.22	1.31	1/3弱が残存する。面の字款は「宣」・「寶」の二字が確認できる。面の肉郭の幅は1.62~2.02mmを測る。背の肉郭は1.07~2.49mmを測る。二次的な火熱を受けて部分的に溶解した状態で凝固する。緑青は面・背でみられる。	C-10 SS04-B 敷石直上
〃 12	洪武通寶 公鑄銅錢	明 1368年	銅銭	対読	破損	楷書	22.06	—	18.80	—	4.82	1.51	0.79	1.39	2.85	洪武通寶の小平銭。1/4弱が欠落する。二次的な火熱を受けて楕円形状に変形して割れている。面の字款は「洪」・「武」・「寶」の三字が確認できる。面の肉郭の幅は1.83mmを測る。背の肉郭は0.21mmを測る。二次的な火熱を受けて部分的に溶解による再凝固や緑青の浸食が著しい。	C-10 SS04-B 敷石直下 第2層f
〃 13	洪武通寶 公鑄銅錢	明 1368年	銅銭	対読	破損	楷書	—	—	—	—	1.90	0.91	1.51	2.12	1/2弱が残存する。面の字款は「武」・「通」・「寶」の三字が確認できるが、「通」・「寶」の二字は半矢字。面の肉郭の幅は1.44~1.64mmを測る。背の肉郭は1.36~1.75mmを測る。二次的な火熱を受けて面の字款や孔郭が溶解による再凝固がみられる。背も緑青の浸食が著しく微弱なアシカ状となる。孔郭の穴は溶解した銅素材により部分的に塞がっている。	C-10 SS04-B 敷石直上	
〃 14	洪武通寶 公鑄銅錢	明 1368年	銅銭	対読	破損	楷書	—	—	—	—	1.44	0.67	1.17	0.97	1/4弱が残存する。面の字款は「洪」の一文字のみ残存する。背の上には「浙(背上升)」と薄く鏽されている事から背文字から鑄造地は、浙江省杭州で鑄造された洪武通寶と判断できるが背の肉郭が不鮮明であることから模倣銭の可能性もある。面の肉郭の幅は1.40~1.88mmを測る。背の肉郭は不鮮明であった為、計測を保留した。二次的な火熱を受けて面上に砂粒などを取込んでいる。面は緑青の影響で白色の粉が付着した状態である。背も緑青が全体的に広がっている。	C-10 SS04-B 敷石直上	
〃 15	淳化元寶 祥符元寶 ? or 模鑄銅錢	南北朝 項	銅銭	対読	破損	草書	—	—	—	—	1.14	0.69	0.87	0.80	1/4弱が残存する。字款は「元」の一文字のみ確認できる。面の肉郭の幅は3.51mmと幅広であるが、背の肉郭が馴染んでいてないことがら模倣銭(鳥銭)として判断できる。二次的な火熱の影響を強く受けた為、面全体が起伏のあるケロイド状となる。背は火熱の影響が微弱であるがケロイド状となる。両面とも緑青がみられる。	C-10 SS04-B 敷石直下 第2層f	
〃 16	元豐通寶 模鑄銅錢	中世末 期~世初頭	銅銭	回読	破損	篆書	—	—	—	—	1.51	0.91	1.25	1.54	1/2弱が残存する。字款は「元」と「豐」の二字のみ確認できる。面の肉郭の幅は2.56~3.09mmで、背が2.36~3.16mmを測る。緑青による面や背の一部で器面の剥落や破断面の一節では緑青による浸食で地金素材が失われて青白色となる。	C-10 SS04-B 敷石直上	

注 「-」:計測不可



第61図 石敷きSS04-B出土品③ 銭貨：9～16

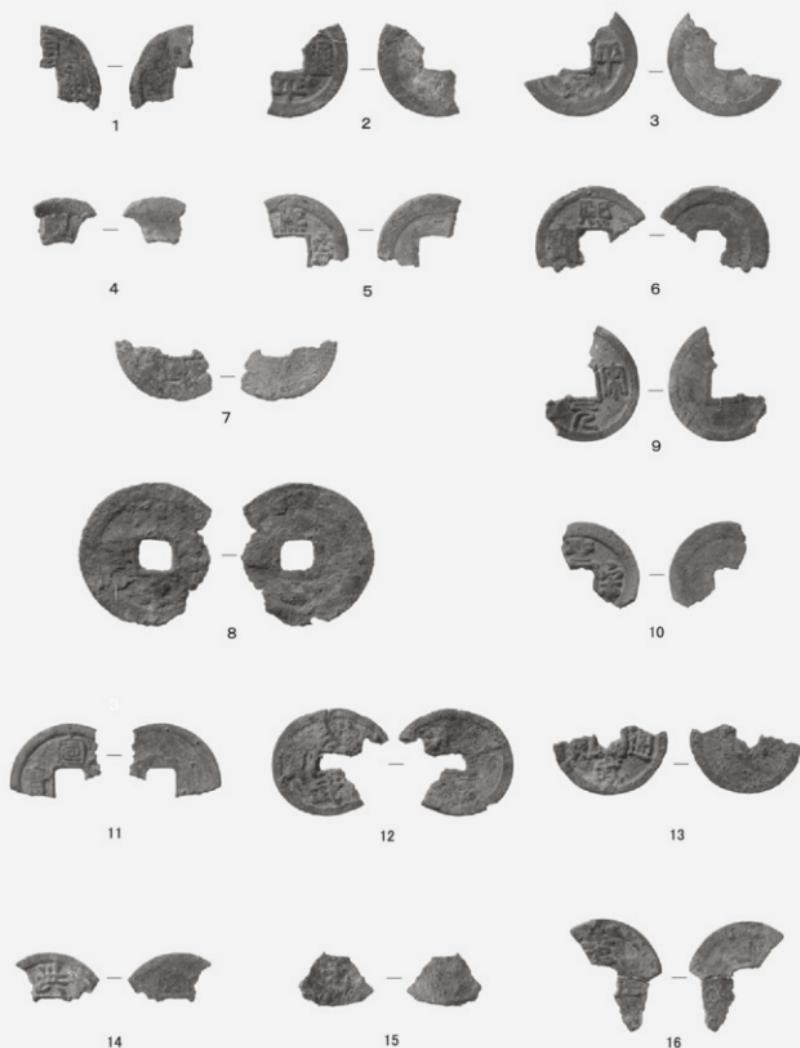
第104表 石敷きSS04-B 出土遺物状況(図版外)

土器	器種不明	種類・器種・部位	層序		C-10 SS04-B 散石直下第2層	
			胸部			
			3			
合 計					3	
屋瓦	高麗系	平瓦	灰色	漆喰無し	1	
		平瓦	灰色	漆喰無し	1	
		丸瓦	灰色	漆喰有り(片面)	1	
		平瓦	灰色	漆喰有り(両面)	1	
	明朝系	丸瓦	灰色	漆喰有り(片面)	4	
		丸瓦	赤色	漆喰有り(片面)	2	
		平瓦	灰色	漆喰有り(片面)	8	
		平瓦	褐色	漆喰無し	1	
	明朝系	平瓦	灰色	漆喰有り(片面)	3	
		平瓦	灰色	漆喰無し	7	
		平瓦	褐色	漆喰有り(片面)	1	
		平瓦	赤色	漆喰有り(片面)	1	
合 計					12	
合 計					56	
埴瓦	Ⅲ類	形状不明a	赤色		3	
		形状不明b	灰色		1	
	Ⅳ類	赤色	漆喰無し	角無し	1	
		-	赤色		1	
合 計					6	
タイ産褐釉陶器	甕	胸部			8	
合 計					8	
本土産磁器	碗	胸部	近現		1	
合 計					1	
本土産陶器	甕	胸部			1	
合 計					1	
沖縄産施釉陶器	瓶	口縁部			1	
合 計					1	
石製品		石弾			1	
合 計					1	
石材		細粒砂岩(ニーピ)			5	
自然石		河原石			1	
合 計					6	
金属製品	工具類・ 生産用具	角釘	完形	大	鉄	
				中	鉄	
			先端部欠損	中	鉄	
			先端+頭部欠損	小	鉄	
	武器		先端+頭部欠損	中	鉄	
			砲弾片		鉄	
	分類不明		用途不明		青銅	
合 計					13	

注 釘のサイズは、大：5寸半以上(15.75cm以上)、中：1寸半～5寸まで(3.75cm～15.75cm未満)、小：1寸まで(3.75cm未満)



図版49 石敷きSS04-B出土品① 青磁：1、中国産褐釉陶器：2・3、タイ産土器（半縫）：4



図版50 石敷きSS04-B出土品②・③ 錢貨：1～16

報告書抄録

ふりがな	しゅりじょうあと							
書名	首里城跡							
副書名	京の内跡発掘調査報告書（V） 平成6年度調査の遺物編（2）							
卷次	一							
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第73集							
編著者名	金城亜信・瑞慶寛尚美・伊藤恵美利							
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7 TEL 098-835-8751・8752							
発行年月日	2014年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	発掘面積 m ²	調査原因	
収録遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	○°'N	○°'E			
しゅりじょうあと 首里城跡	沖縄県那覇市 首里城跡 ・金城町1丁目	那覇市 47201	—	26° 12'	127° 43'	1994. 11. 21	2,000	
				31.32683"	18.24229"			
				26° 12'	127° 43'	1995. 3. 28	国営首里城公園整備事業	
				32.15599"	18.93019"			
				26° 12'	127° 43'			
				32.35347"	20.97267"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		
			区画石積み、埴敷きなど			特記事項		
			中国産（青磁・白磁・青花、褐釉陶器等）、タイ産（土器、炻器、褐釉陶器）、金属製品（鏡の小札・鉗・鎖帷子・釘・銭貨等）、ガラス製品（小玉）、中世陶器など。			京の内跡から1450年の火災により焼失した倉庫跡が発掘された。この倉庫より陶磁器類を主体とする一括資料が得られた。陶磁器類の整理・分類の結果、推定で1,162個体を数えた。これらの出土品の中から平成12年6月27日付で「沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器518点附一、金鳳製品一括附一、ガラス玉一括」が考古資料の部で国の重要文化財に指定された（沖縄県文化財調査報告書第132集平成10年3月刊行）。平成21年3月刊行の報告書には、平成6年度調査で検出された遺構のみを報告した。平成23年度は平成6年度調査で検出された遺構を6時期に分類した中で、第1期（14世紀前半～14世紀後半）から第3期（15世紀中頃）に伴う出土品を報告した。平成25年度は、第IV期（15世紀後半～16世紀初頭）の出土品について報告する。石敷きSS03-Bから「皇宋通寶」の鋳造の際に使用した鉄形（原本：字款が裏返っている）が初めて確認された。この鉄形の発見により首里城内で「皇宋通寶」の複製錢を鋳造したこと示す貴重な資料が得られた。		
要約	昭和61年度に首里城公園計画区内約18haの内、首里城内郭の約4haが国営公園区域として整備することが閣議決定された。復元整備に伴う遺構確認調査は、昭和63年度から内閣府 沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所との委託を沖縄県教育委員会が受けて、南殿・北殿・御庭地区などの遺構確認調査を実施し、平成4年度に首里城正殿・南殿・北殿などが復元整備され一部が開園した。未整備地区であった「京の内」地区の復元整備が課題となり、整備に必要な基礎資料を得る目的で平成6年度から平成9年度までの四ヵ年間に亘って発掘調査を実施した。その内、報告・報告（平成6年度調査の全ての遺構について平成22年度に報告を行った。平成23年度は、平成6年度調査で遺構を6時期に分類した中で、第1期（14世紀前半～14世紀後半）から第3期（15世紀中頃）までの出土遺物（造成層や擾乱層を含む）を報告する。							

沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第73集

首里城跡

—京の内跡発掘調査報告書（V）—
平成6年度調査の遺物編（2）

発行年 平成26（2014）年3月31日

発行 沖縄県立埋蔵文化財センター

編集 沖縄県立埋蔵文化財センター 調査班
〒903-0125

沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7
TEL 098（835）8751・8752

印刷 有限会社 ふたば印刷
〒901-0153
沖縄県那覇市宇栄原3-15-6
TEL 098（858）2211
